

茶の湯のコミュニケーション  
— 言語よりも非言語

The Communication of Chanoyu :  
Non-verbal More Than Verbal

宝塚大学大学院  
メディア造形研究科  
造形・デザイン専攻  
伝統藝術研究領域  
博士課程（後期）

鎌田 かをり

2017年1月7日



## 目次

### 序章

- 序-1 問題提起：研究に至った経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 序-2 論文構成及び研究のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

### 第1章 文化の定義と分類

- 1-1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 1-2 文化人類学の芽生えータイラーとボアズ・・・・・・・・・・・・ 5
- 1-3 伝統的文化論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 1-4 グローバリゼーションとグローカリゼーション・・・・・・・・ 9
- 1-5 日本語としての「文化」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 1-6 T.S. エリオットとレイモンド・ウィリアムズ・・・・・・・・ 12
- 1-7 日本における文化論と茶の湯・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 1-8 文化の分類と茶の湯の位置付け・・・・・・・・・・・・・・ 18
- 1-9 日本における茶の始まり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
- 1-10 世界における茶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 1-11 文化に関わる飲み物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 1-12 茶の湯の独自性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
- 1-13 むすび・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

### 第2章 コミュニケーションの定義と現状

- 2-1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
- 2-2 先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
- 2-3 茶の湯のコミュニケーションの定義・・・・・・・・・・・・ 30
- 2-4 コミュニケーションは人間必須の文化・・・・・・・・・・・・ 32
- 2-5 コミュニケーションの実状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
- 2-6 世論調査の結果と茶の湯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
- 2-7 むすび・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

### 第3章 言語と非言語

- 3-1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 3-2 言語の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 3-3 文化と言語の密接性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
- 3-4 非言語メッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
- 3-5 ハイ・コンテクスト文化とロー・コンテクスト文化・・・・ 54

3-6 話すことを重んじる文化	56
3-7 話すことを重んじない文化	60
3-8 ハイ・コンテクスト文化を育む人間関係	63
3-9 むすび	65

#### 第4章 日本語の特徴

4-1 はじめに	68
4-2 省略	68
4-3 緩和表現	79
4-4 外国の影響	86
4-5 むすび	96

#### 第5章 戦争を背景としての茶席におけるコミュニケーション — 非言語の重要性

5-1 はじめに	100
5-2 東山文化と茶の湯	100
5-3 安土桃山という時代	102
5-4 茶の発展の背景	104
5-5 戦争と茶席	112
5-6 心の平和	115
5-7 戦争を背景とする非言語コミュニケーション	120
5-8 むすび	132

#### 第6章 季節と茶事の流れに沿っての茶席におけるコミュニケーション

##### — 非言語の重要性

6-1 はじめに	135
6-2 茶の湯の非言語	135
6-3 五感に着目して	141
6-4 茶事の流れに沿って	145
6-5 非言語コミュニケーションの極致 — 茶事の始まりと終わり	154
6-6 むすび	158

#### 第7章 「心」とコミュニケーション成立の要因

7-1 はじめに	162
7-2 心の一つかね — 茶人の究極の目標	162
7-3 コミュニケーションを成功に導く要因 — 複数の局面の把握	172
7-4 コミュニケーションを成功に導く要因 — 作意	181
7-5 むすび	205

第8章 共生の世界	
8-1 はじめに	210
8-2 自然との共生	210
8-3 道具との共生	214
8-4 人と人との共生	215
8-5 文化の再考察	218
8-6 ことばと心	220
8-7 全人類・全世界における共生	222
8-8 感応道交	222
8-9 むすび	224
終章	227
謝辞	
参考文献	231
資料	244
平成26年度「国語に対する世論調査」の結果の概要	
平成25年度「国語に対する世論調査」の結果の概要	
平成24年度「国語に対する世論調査」の結果の概要	
平成23年度「国語に対する世論調査」の結果の概要	



# 序 章

## 序-1 問題提起 — 研究に至った経緯

筆者は大学時代、英文学科にてイギリス文学を専攻していた。『ジェーン・エア』の作家シャーロット・ブロンテや、『ダーバーヴィルズ家のテス』のトマス・ハーディー等を学んでいたが、自分の中に不思議な傾向が生まれていることに気づいた。西欧について勉強しながら、逆に国内に目が向いていったのである。茶の湯を習い始めたのもこの時期であるし、歌舞伎を鑑賞し始め、また友人の多くが海外旅行を楽しんでいる一方で、筆者は大学時代海外へは1度も行かず、逆に国内旅行を積極的に行った。西欧について学びながら、むしろ日本に目が向いたことは我ながら興味深い。将来は、日本と海外の両方に関わる仕事がしたい、両方のよさが理解できる人間になりたいと、漠然と考えていた。「和服が似合い、英語が流暢に話せる女性」が筆者の理想像である。

そして現在筆者は、日本人への英語教育と外国人への日本語教育に携わっており、よって言葉・言語というものに極めて大きい関心を抱いている。学生時代から始めた茶の湯の稽古は現在も継続しており、その奥深さに深く感動し続けてきた。外国語教育は仕事であり、一方茶の湯はあくまでも趣味の領域で、両者は筆者にとって全く別のものであった。換言すれば、二者の間の共通性など考えたこともなかった。しかし実は、接点があるのではないかと数年前から思い始めたのである。両者にはコミュニケーションという共通点がある。英語の授業でも日本語の授業でも、筆者が教師として常に目標にしていることは何か。相手とのコミュニケーションが図れる、そのような英語能力・日本語能力を学習者に少しでも身に付けてもらうことである。茶の湯はどうであろう。亭主と客との——客同士の間にももちろんある——コミュニケーションが、正に茶の湯の世界ではないだろうか。

茶の湯をコミュニケーションと捉えると、そのコミュニケーションを作り上げている要素は何か。ここにまた言語、さらに言語を超えたものが関わってくる。言語ももちろん含まれるが、言語よりもむしろ非言語が大事なのではないかと筆者は考え、非言語を通じてどのように、またどのようなコミュニケーションが、茶の湯において作り上げられているのかを明らかにしたいと思うに至った。

筆者は外国語の1教師であり、よって本論文にも言語学・比較文化という、筆者が仕事の上で本来関わっている、また大きい関心を寄せている学問分野が関係している。純粋な茶の湯の文献に加えて、これらの学問分野の文献も参考としている。話すことを重んじる文化と重んじない文化を考察するために、西欧と日本の文学等の比較を試み、日本語の特徴を考える上で英語との比較を行っているが、比較することによって、日本文化・日本語が一層明確に浮かび上がってくるからである。日本の代表的な伝統文化とされる茶の湯を、言語学（もともと西欧起源の学問である）、比較文化、英語という海外の視点も含めて考察することは、変わった方法論だとの指摘があるかもしれない。しかし論点が明確化されるならば、こうした研究方法も特別奇異な試みでもないと考えられる。

また茶の湯自体が、もともと海外から入ってきた文化である。植物としての茶も、喫茶・茶点での仕方も、中国という外国から入ってきた。また茶道具は平安・鎌倉・室町時代には中国・韓国から、安土桃山時代には南方や南欧から輸入されている。さらに西欧人——



キリスト教宣教師——による茶の湯についての記述は極めて重要な資料となっている。外国からの恩恵を抜きに茶の湯を語ることは、むしろ不可能であると言ってよい。

そもそも茶の湯は日本の文化、東洋の文化、といった狭い範囲に限られ、留まり、凝り固まってしまふような存在ではない。異国の文化を取り入れつつ発展し、また海外に普及もしている。本研究は、そのような茶の湯におけるコミュニケーションについて、言語の観点から考察に挑むものである。

## 序-2 論文構成及び研究のねらい

第1章ではまず、茶の湯と言語の両方の基盤にある、文化について考える。文化の定義と分類、そして文化における茶の湯の位置付けを行いたい。第2章ではコミュニケーションについて述べる。茶の湯におけるコミュニケーションの定義を試み、日本人が日本語をどう捉えているかを探るべく、「国語に関する世論調査」を調べてみる。第3章では言語と非言語について、文化比較も踏まえながら考察する。第4章では日本語の特徴を、英語との比較も含めながら探る。第5章では、茶の湯におけるコミュニケーションを、戦国時代という歴史的背景の中で考える。第6章では、季節と茶事の流れに沿って、茶の湯のコミュニケーションを見てみる。そして第7章では、茶人が目標とする「心」の問題、そしてコミュニケーションを成功させる要因は何かを考えたい。さらに第8章では茶の湯のコミュニケーションが築き上げる世界について述べ、終章のまとめへと繋げる。参考文献は最後に一括し、資料、日本人による著作等、また外国人による著作に分類して記載した。さらに第2章の資料である世論調査を付記している。以上の構成を以て本論文を進める。

文献の扱いについては原文を尊重し、引用文にルビが付してある場合にはそのまま残している。数字については「一生」、「四規」、「三大御茶頭」のようにそれ自体で単語となっているものには漢数字を使ったが、本論文が横書きのため、数字は原則としてアラビア数字を用いている。よって縦書き文献の漢数字からの引用の際、アラビア数字に換えてある箇所がある。参考文献の注釈に関しては、同じ章の、かつ同じ項（例えば1-2は第1章第2項と呼ぶものとする）の中で同じ文献を挙げた場合、著者と書名、引用ページのみを記し、出版の場所・出版社・出版年は省略した。日本人の研究者等の氏名には原則として「氏」を付しているが、1950年以前の著作の場合は省略している箇所がある。

本研究のねらいは次の通りである。茶の湯と言語、ひいては茶の湯と日本語に共通する部分があることを探求しつつ、茶の湯のコミュニケーションがどのように行われているか、コミュニケーションを行う上で、茶人が常に目標とするものは何か、コミュニケーション成立の要因は何か、その結果築き上げられるものは何かを明らかにすることである。

なお本論文は、コミュニケーションの送り手である亭主の側に焦点を当てている。もちろん、受け手である客にとってのコミュニケーションに着眼するという方法もある。また客同士の間でのコミュニケーションも存在する。しかし本研究は、主客間のコミュニケーションを扱い、亭主の側に論点を当てて進めるものとする。

# 第1章 文化の定義と分類

## 1-1 はじめに

茶の湯は日本文化の代表である、言語は文化である、等の言い方がよくなされるが、そもそも文化とは何であろう。本章では、文化人類学発祥の地であるイギリス、そしてその後世界的に大きい影響を与えたアメリカにおける文化論を、特に言語と茶の湯に引き付けて考える。さらに日本における文化論を踏まえつつ文化の定義、文化の分類、及びその分類の中での、また日本文化の中での茶の湯の位置付けを試みる。

次に初期の茶、すなわち書院台子茶以前の茶の歴史を概観する。さらにコーヒー等との比較も含め、世界の中での日本の茶の湯について、論文の導入部として考察する。

## 1-2 文化人類学の芽生え — タイラーとボアズ

文化とは何か。あまりにも大きい問題である。文化人類学萌芽期の定義をまず見てみる。「人類学の父」と呼ばれるイギリスのエドワード・タイラーは文化を「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習および人間が社会の一員として獲得したすべての能力と習慣を含むあの複合的全体<sup>1)</sup>」と定義した。後の文化観に大きい影響を与えた非常に有名な定義だが、タイラーは文化を特定の領域ではなく人間の行為全体に当てはめており、また文化を生活様式一般として解釈している。目に見える「物」から人間の内面に關心を移すという視点もタイラーから始まった<sup>2)</sup>。

タイラーはまた“survivals (サヴァイヴァルズ)”の論を述べ、これは過程・慣習・意見等、前社会から次の社会へ継がれていくものを指し、前社会にあった時とは異なっているが、前の文化の証拠であり、例として残るものだと定義付けている<sup>3)</sup>。当然と言えば当然のことだが、文化を考える上で踏まえるべき重要点である。タイラーは諺・迷信・前兆・占い・手相・まじない・魔術・占星術等、オカルト科学を含む分野までも、多数の例を挙げてサヴァイヴァルズについて語っている<sup>4)</sup>。400年以上も経っているにも拘わらず、千利休の茶の精神は現代にも受け継がれていると言えよう。変わった部分もちろんある。茶事と茶会のあり方や茶人間の関係——利休の時代は武家社会だったが、今は違う等——も変わってきている。茶の湯は400年以上もの歴史の中で、様々なサヴァイヴァルズを生み出してきたと言えるであろう。

一方「アメリカ人類学の父」と呼ばれるフランツ・ボアズは、「文化とは精神的・肉体的反応と活動を併せた総体であり、集合的にも個人的にも自然環境と関連した、ある社会集団を構成する個人のふるまいを特徴づけるものと定義されるであろう。そしてこの、ある社会集団の文化は他の集団、集団全体またはその集団の個人に対してのものである<sup>5)</sup>。」と述べている。ここには「対してのもの」という表現からわかるように、他との比較、すなわち相対的視点が表れており、現在も論じられる「文化相対主義」の基礎を築いた<sup>6)</sup>。ボアズは「原始社会の人と文明化された人の考え方に根本的な違いはない<sup>7)</sup>。」と説き、どの人間の精神生活にも似たような傾向があり、すべての人間が同じ基本的性質を持つという

立場に立って、文化は「無数の相互作用要因がもたらす結果である<sup>8</sup>。」と述べている。

またボアズは言語に優劣はないという見解に立って「民族・言語と文化<sup>9</sup>」という一章を記している。一方タイラーも、文化的に高い国にも低い国にも言語には根本的な類似性があるという見方から「情緒的言語と模倣的言語<sup>10</sup>」という一章を設けている。

タイラーとボアズの考え方には相違が見られるが、共に人間の内面、精神的側面から文化を捉えている。また両者とも言語についての章を設けており、文化人類学萌芽期から既に人間と言語、文化と言語との深い結び付きに関心が寄せられていたことに注目したい<sup>11</sup>。言語学者、田中克彦氏も、アメリカの言語学が文化人類学と「双子のきょうだいのように手に手をたずさえて形成されてきた<sup>12</sup>。」と述べている。研究対象となったごく初期の頃から、言語と文化の密接さが論ぜられており、筆者もこのことを常に頭に置いて本研究を進めるものとする。

### 【注】

<sup>1</sup> Edward. B. Tylor, *The Origins of Culture*, Part 1 of “Primitive Culture” (New York, Evanston, London: Harper Torchbooks. The Cloister Library. Harper & Row, Publishers, 1958), p.1.

(Originally published in New York, J.P. Putnam’s Sons, 1871) を桑山敬己氏が、「人類学のキーコンセプト 文化」山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ 20 のモデル』(東京: 弘文堂、2005年)、p.209. で翻訳している。原文は次の通りである。

“CULTURE or Civilization, taken in its wide ethnographic sense, is that complex whole which includes knowledge, belief, art, morals, law, custom, and any other capabilities and habits acquired by man as a member of society.” ここで タイラーは“culture (文化)”と “civilization (文明)”をひとまとまりに「文化」と捉えている。

<sup>2</sup> 桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」、p.209.

<sup>3</sup> Edward. B. Tylor, *The Origins of Culture*, Part 1 of “Primitive Culture”, p.16.

<sup>4</sup> 同上、pp.70-159. に亘って “survivals”について述べている。

<sup>5</sup> Franz Boas, *The Mind of Primitive Man* (New York, Boston, Chicago, Dallas, Atlanta, San Francisco: The Macmillan Company, 1911), p.159. 筆者訳。原文は次の通りである。

“Culture may be defined as the totality of the mental and physical reactions and activities that characterize the behavior of the individuals composing a social group collectively and individually in relation to their natural environment, to other groups, to members of the group itself and of each individual to himself.”

<sup>6</sup> 桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」、p.212.

<sup>7</sup> Franz Boas, *The Mind of Primitive Man*, “Preface”, p.v. 筆者訳。原文は次の通りである。

“There is no fundamental difference in the ways of thinking of primitive and civilized man.”

<sup>8</sup> 同上、p.195. 筆者訳。原文は次の通りである。”Culture is rather the result of innumerable interacting factors....”

<sup>9</sup> 原作では “Race・Language and Culture” である。

<sup>10</sup> 原作では “Emotional and Imitative Language” である。

<sup>11</sup>エドワード・ホールは、ボアズは言語と文化の関係を述べた第一人者だと言っている。エドワード・ホール『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行 訳（東京：みすず書房、1970年第1刷、1989年第22刷）、p.130.

<sup>12</sup>田中克彦『言語学とは何か』（東京：岩波書店、1993年第1刷、1994年第3刷）、p.11.

### 1-3 伝統的文化観

イギリスのタイラーとアメリカのボアズが文化論の本格的出発のきっかけとなった人物だが、その後世界的に強い影響力を有していたのはアメリカにおける文化論である。ボアズの後、その門下が1920年代から1940年代にかけて確立した伝統的文化論を次に掲げる。文化を考える上で現代でも十分に重要性を持ち、6点あるが、次の通りである。

1. 文化は学習される。
2. 文化は共有される。
3. 文化は理念と実践の双方からなる。
4. 文化は統合される。
5. 文化は適応の手段である。
6. 文化は変化する<sup>1)</sup>。

1については、文化とは学習を通じて後天的に身に付いていく、獲得されるということの意味する。2は、同じ文化圏の人は多くを共有しているということだ。類似した思考を行い、類似した行動をするという、文化の性質を指している。3は、各文化には、法律に代表されるその文化のきまり、すなわち約束事・規則等が必ず存在するが、そうした規範と人々の実際の行為・行動とは一致する訳ではないと述べている。理想と現実異なる場合もあり、両方から成り立っているのが文化だということである。

4については、文化は種々の、また多様な要素から成るが、それらが関連し合って全体を作っている、個が全を作り上げているということである。5は環境に適応するためには、生物として生き延びるためには、自然環境への適応が必須条件であり、文化がその適応の手段として働いているということである。6では発明・革新・伝播という3点が文化の変化として挙げられる。文化は変容するものである。

茶の湯を考える上でも上述の6点は生きてくる。1について。生まれながらに茶の湯を身に付けている人はおらず、稽古と茶事の経験を積んで、後天的に茶人としての心と姿を学ぶ。2については、茶の湯は亭主と客、もてなす側ともてなされる側がおり、参加する人々の間で茶の湯は共有される。本研究でコミュニケーションを扱うにあたり、この共有という点は特に重要である。

3に関しては、このような点前をしたい、点前はこうあるべきだ、このような茶事を行いたい、このような茶事が望ましいという理想・規範が一方にあり、しかし現実の点前や

茶事は必ずしも理想・規範とは一致しない。そこにまた茶の湯の奥深さがある。その奥深さ故に面白みも湧き、もっと極めたい、もっと知りたいという意欲が生まれ、この意欲が茶人を支え、高める原動力になっているとも言える。

4については、茶の湯は正に総合芸術である。庭園・茶室・掛け軸・茶道具という、いわば芸術品の鑑賞を含み、華道・香道とも関わり、懐石料理・菓子・茶という食文化も多分に重きを成し、礼儀作法・和の精神といった振る舞い、心の持ちようまで、あらゆる要素が統合されて、一つの体系が成り立っている。

5の適応の手段については注を要する。自然環境に適応する、生物として生き延びるための茶の湯という言い方は適切ではない。しかし日常性から特別性への適応、またはその逆という意味で、茶の湯には適応の性質がある。千利休の弟子である南坊宗啓が師匠の言葉等をまとめたとされる『南方録』を見ると、「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、佛にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく<sup>2</sup>」とある。ここで語られている内容は、別に特別なことでもない、ごく普通の日常生活である。千利休による茶の奥義とされる「利休七則」にも次のようにある。

茶は服のよきように点て  
炭は湯の沸くように置き  
花は野にあるように  
夏は涼しく冬は暖かに  
刻限は早めに  
降らずとも雨の用意  
相客に心せよ<sup>3</sup>

この七則は茶の湯のみならず、日常生活の心得そのものである。

「日常茶飯事」という表現の中に「茶」の文字が入っていることからわかるが、茶は日本人の日常生活の代表のようなものである。このことは言葉にも多々表れている。日本語には「茶」の入った表現が非常に多い。見え透いた、他愛のないものを「茶番」と表し、「茶番劇」と言えば簡単で滑稽な劇のことである。「へそが茶を沸かす」とは、おかしくてたまらないこと、ばかばかしくてしょうがないことを指す。家族が集って団欒を楽しむ部屋を、現在はリビング、リビングルーム、または居間と言うが、ひと頃前までは「茶の間」と呼ぶのが一般的であった。気の置けない、付き合い易い友人を「茶飲み友だち」と言う。「番茶も出花」という興味深い句もある。固い葉で作った葉茶である番茶、しかしその番茶でも出花は香が高く美味しいということから、容姿が整っていない娘でも若い頃はかわいらしいとの意である。「茶目っ気」と言うといたずら気分を指し、簡単にできる行動を「お茶の子さいさい」と表現する。話の最中の小さい邪魔・妨害を「ちゃちゃ(茶々)」と言い、「話にちゃちゃを入れる」といった使い方をする。その場だけを何となくごまかして根本的な解決を怠ることを、「お茶をにごす」という言い方をする。

特別なことではなく、ごく普通の行動や事物の中に、このように「茶」という言葉が多

く使われているのは、それだけ「茶」というものが日本人の日常生活に深く入っていることの表れである。また「茶」という言葉を含む表現が、必ずしもいい意味ばかりではないことに気づく。しかし、よくない意味合いをも含んでいることが、却って「茶」がわれわれに身近な、親しみある存在なのだという証しでもあると言える。

「日常茶飯事」で言う茶は、茶の湯で扱う抹茶ではなく煎茶・番茶等、生活の中で常時口にする茶を指しているが、抹茶を扱う茶の湯についても、適応の観点から述べることができる。茶の湯の持つ高度な芸術性が、ごく普通の生活の営みに適応している。また逆に、茶の湯においては「ケ」の世界を「ハレ」の世界に適応させることができる、とも言える。茶事や茶会は念入りに計画された行事、すなわち特別なことであるが、そこで行われる「食べる」、「飲む」の行為は日常生活の延長である。茶の湯の点前についても、「日常生活における必要と同じ必要に応じて、その所作を最も手順よく整えたものであるから、それはそのまま、日常生活に応用できるものである<sup>4</sup>。」との哲学者・評論家、谷川徹三氏の意見に、筆者も心から賛同する。お辞儀、「お先に」等の挨拶、手をつけて襖を開ける、畳の部屋には躡って入る等の礼儀も、茶席のみならず、そのまま日々の生活の中に応用できる。茶の湯ほど日常生活に密着し、かつ日常の動きを体系化した文化も珍しいと言ってよいかもしれない。茶の湯は決して日常から遊離した、雲の上の文化ではないのである。

6も茶の湯に十分当てはまる。これについては後に別の章で詳述するが、長い歴史の中で茶の湯は大きく変わってきた。そして現在も変化を続けている。発明・革新・伝播こそが茶の湯の歴史であるとも言える。以上に述べてきたように、伝統的文化観は茶の湯にも深く通じるものである。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ20のモデル』（東京：弘文堂、2005年）、pp.213-215.
- <sup>2</sup> 『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定）、p.3.『南方録』の内容について信憑性が問われているが、それでもなお名著とされている。
- <sup>3</sup> 千宗室・千玄室 監修『裏千家茶道』（京都：財団法人今日庵、2004年第1刷、2008年第3刷）、pp.26-27.
- <sup>4</sup> 谷川徹三『茶の美学』（京都：淡交社、1977年）、p.18.

#### 1-4 グローバリゼーションとグローカリゼーション

前述の伝統的文化観はその後変容を遂げるが<sup>1</sup>、現代にも十分通じるものがあると筆者は考える。そして文化論は、1990年代より急激にグローバリゼーションへと進んでいく。人・物質・資本・情報が地球規模で急速に流れており、日本が、アメリカが、中国が等と境界化された国、個別の文化を論じることが疑問視されてくる。ディアスポラ等の人々も

注目を浴びるようになった。もともとギリシャ語の「離散」を意味するディアスポラは、自分は日本人だ、フランス人だ等の国民意識が明確でなく、この国ですっと暮らしたい、この国が自分の落ち着き場所だといった観念もなく、常に流動している。ある国にしばらく滞在し、別の国に移り、また別の国に渡り、あるいは戻り、そうした過程を繰り返し、地球規模で移動するディアスポラの出現は、グローバリゼーションの動きの一つであると解釈できる。文化人類学者、戴エイカ氏はディアスポラのアイデンティティーは「変化と差異をとおして絶えず自己を再生産しつづける<sup>2)</sup>」ところにあると説き、また彼らの大規模な移動は「静的で固定した国民的な『文化』という概念をゆさぶる<sup>3)</sup>。」とも述べている。

ディアスポラのみならず、様々な種類の人が生み出されている<sup>4)</sup>。コスモポリタンは世界主義者・世界人の意であるが、多くの国に住んだり旅行したりすることにより、一地方(国家)的感情・偏見・愛着などに囚われない、世界的視野と行動力を備えた人々を指す。デラシネは根無し草の意であり、故郷や祖国を喪失した人である。マージナルマンと呼ばれる人もいる。境界人・周辺人を意味し、民族・地域・階層・文化等について、いずれの集団にも完全には属しておらず、異なる複数の集団の境界にいる人々を指す。

このような人々の多様化は、当然のことながら言語とも深く関わってくる。1 言語のみを習得している人、すなわち母語のみが使える人をモノリンガルと言う。2 種類の言語を使いこなせる人をバイリンガル、3 種類をトライリンガルまたはトリリンガル、多言語を習得している人をマルチリンガルと呼び、複数の言語に精通していることはよいことである。しかしセミリンガルと呼ばれる、2 言語使用の環境にしながら、母語と第2言語のいずれにおいても年齢に応じたレベルに達していない人もいるのである<sup>5)</sup>。いずれの言語も半端に終わっており、正しく使いこなせないのだ。国際的な広い視野を持つこと、1 国のみに固執せず他国も理解しようとする姿勢はよいことだが、国際化がセミリンガルのような問題を孕んでいることも、看過できない。なお、「セミ」は半分を意味し、よってセミリンガルという言葉は否定的だという意見から、近年はセミリンガルに替わってダブル・リミテッドという用語が使われるようになったが、呼称が変わっただけで、抱えている問題は同じである。人々の多様化は言語の多様化にも深く繋がっていることがわかる。

また、グローバリゼーションが盛んに叫ばれる一方で、地域性・個別性も無視できないと論じられ、地域性・地方化を意味するローカリゼーションとグローバリゼーションとを併せて、グローカリゼーションという用語も使われている。イギリスの文芸批評家であり哲学者でもあるテリー・イーグルトンは、大文字で始まる“Culture”と小文字で始まる“culture”を挙げ、前者は普遍性・超越性・合意とメジャー性を備え反政治性であるのに対し、後者は個別性・エスニック性・マイノリティー性を表わし、政治闘争を推進する批判性を帯びていると述べている<sup>6)</sup>。グローバリゼーションが“Culture”に、ローカリゼーションが“culture”に当たると解釈される。地球規模に対して各地域、全体に対しての個別、文化はこの両方から捉えるべきである。

茶の湯においても、日本伝統文化とされる一方で、今や世界中に支部を持ち、海外からの国賓や政府高官が家元のもてなしで茶の接待を受けた報道は、実に頻繁になされている。海外での茶の様々な催し物は、一帯に評判がよいようである。地球規模と評すると言葉が



大きい、茶の湯は国際的に評価されている文化であるとは言ってもよいであろう。

### 【注】

- <sup>1</sup> 桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ 20 のモデル』（東京：弘文堂、2005 年）、pp.215-216. でポストモダニズムが伝統的文化論に対して批判を行ったことを指摘している。日本近代文学研究家、小森陽一氏は「まえがき」小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵頭裕己・松浦寿輝 編集『モダンとポストモダン』岩波講座 文学 12（東京：岩波書店、2003 年）、pp.9-10. において、「コンピューター・ネットワークによるグローバリゼーションによってポストモダンの条件は完成する。」と述べている。
- <sup>2</sup> 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』（東京：明石書店、1999 年）、p.118.
- <sup>3</sup> 同上、p.3.
- <sup>4</sup> コスモポリタン・デラシネ・マージナルマンの各用語は松村明 編『大辞林 第3版』（東京：三省堂、1988 年初版、2006 年第1刷）、それぞれ p.914、p.1,739、p.2,374. に拠る。
- <sup>5</sup> セミリンガルについての説明は林大 編集代表『日本語教育ハンドブック』日本語教育学会編（東京：大修館書店、1990 年初版、1993 年第3版）、p.176. に拠る。本章は野元菊雄氏の編である。
- <sup>6</sup> テリー・イーグルトン『文化とは何か』大橋洋一 訳（東京：松柏社、1998 年）、p.344.

## 1-5 日本語としての「文化」

ここでは日本語における「文化」という語の起源を探る。文化人類学者、石田英一郎氏は、大量に西欧語が輸入された明治時代に、ドイツ語の“Kultur”の訳語として「文化」の2字が当てられたと述べている<sup>1</sup>。ドイツでは17世紀末、耕作を意味するラテン語の“colere”、“cultus”、“cultura”から“Kultur”の語を借用し、精神的教養の意として使用していた。日本では19世紀末から20世紀初頭、すなわち日本が近代国家に生まれ変わる明治維新の時期に、この“Kultur”の日本語訳として、「文明開化」を意味する「文化」という語を当てたと石田氏は推察している。

一方中国でも「文化」という語は用いられている。元の王逢の詩に「文化余り有レバ戒事略ス」とあり、ここでの「文化」は武に対する文、すなわち武事に対しての文教教化を意味しているが、中国の古典においても、さほど用いられていないことが指摘されている<sup>2</sup>。よって日本における「文化」という用語は、明治の語である「文明開化」がドイツ語と結びついて作られた新しい単語ではないかという、石田氏の説に筆者も同意する者である。

その後第1次世界大戦後の大正時代の後半に、「文化人」、「文化住宅」、「文化生活」等、「文化」という語が様々な熟語の中に使われるようになり、文化人類学者、桑山敬己氏は近代的で洗練されたものを指すのにこの言葉が使われたと述べている<sup>3</sup>。確かに、あか抜けた、磨かれた、粹な、洒落た、俗な言い方をするならハイカラなものといった意味合い

が感じられる。

【注】

<sup>1</sup>石田英一郎『文化人類学入門』（東京：講談社、1976年第1刷、1988年第12刷）、p.40.

以下この段落中の説明も、同書、pp.40-41. に基づく。

<sup>2</sup>同上、p.44.

<sup>3</sup>桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ 20 のモデル』（東京：弘文堂、2005年）、pp.208-209. 石田英一郎『文化人類学入門』、p.39. も参照。

## 1-6 T. S. エリオットとレイモンド・ウィリアムズ

以上、文化論の流れを茶の湯とも関連付けて概観してきた。西欧のこうした先行研究を踏まえた上で筆者が注目するのは、アメリカからイギリスに帰化した詩人・文芸評論家の T. S. エリオットの文化論、及びイギリスの社会批評家であり英文学者でもあるレイモンド・ウィリアムズによる文化の分類である。

T. S. エリオットは、「『文化』というのはそのきわめて局限された意味、つまり、何でも綺麗で毒にならないもの、政治から分離され得るもの、例えば言語、文学、地方芸術、地方習慣のごときものを指す<sup>1</sup>。」という、その危険性を説いている。文化はこのような狭い意味では済まされない。政治から分離されるどころか政治もまた文化に大きく関わっていることを述べ、文化という用語の意味合いの広さを表わすべく、次のような記述をしている。「ダービーの競馬、ヘンレーの素人端艇競漕、カウズのヨット競漕、8月12日の狩猟解禁日、蹴球優勝戦、針さし遊戯板、投槍板、ウェンズリデルのチーズ、湯煮したキャベツの区切り法、赤甜菜の根の酢づけ料理、19世紀式ゴシック寺院、エルガーの音楽<sup>2</sup>。」この興味深い寄せ集めは、あらゆる行事・事物を含んだ、いわば総合的表現である。端的に述べれば、何でも入っているとと言える。エリオットはこれらがすべて文化に含まれるとした上で、文化とは、ある国民の生き方全体“a whole way of life<sup>3</sup>”であると述べている。「誕生から墓場まで、朝から夜中まで、いな、われわれの睡眠の最中をも含めた一つの生き方と見るべき面がたしかにある<sup>4</sup>。」と説いている。エリオットによれば、ある国民の生き方すべてがその国民の文化なのである。アメリカの文化人類学者、エドワード・ホールも指摘するように、「人間は文化というメディアを通してしか意味ある行為も相互作用もできない<sup>5</sup>。」のだ。人間であれば必ず文化はついてまわるものであり、文化は人間の特権である。文化を大切にしないことは、人間生活を蔑ろにするものであると筆者は考える。

レイモンド・ウィリアムズは“culture”という言葉の意味の変遷を厳密に辿るところから始め、多義に亘る文化の諸相を的確に整理している。ウィリアムズによると、「文化」を意味する“culture”という語は、もともと植物の育成・耕作・栽培・手入れの意の“cultivation”に由来しており、そこから派生して、人間の訓練・涵養の過程を意味するよ

うになったという<sup>6</sup>。日本語の「文化」がドイツ語“Kultur”の日本語訳であり、この“Kultur”は耕作を意味するラテン語の“colere”、“cultus”、“cultura”に起源を発するとその前述の説明と共通している。「文化」の根本に耕作する、育てる、養うという発想がある。そしてウィリアムズは文化を次の三つに分類している。

1. 教養としての文化。普遍的価値の観点から見た人間完成へ導く文化。理想、規範である文化。
2. 文化財としての文化。文化を様々な思想や経験の記録として捉える。
3. 社会生活のあり方としての文化。共同体の生活様式全体を指す<sup>7</sup>。

後にウィリアムズはこの3点の他に、「一つの社会全体における知的発展の一般的状態<sup>8</sup>」という項目を加えており、彼の文化論も変わってきていることがわかるが、新たな項目は1の延長上にあり、1をより広義に定義したと考えられる。また社会全体に焦点を当てていることから、3とも関わっている。

筆者はT. S. エリオットの曰く、きれいで毒にならないもののみを文化と指すのは間違いであり、きれいごとだけでは済まされないとの考えに賛同する。政治から分離され得る言語・文学・地方芸術・地方習慣等のみを文化とすることをエリオットは批判しているが、このことは茶の湯にも当てはまると言えよう。後の章で詳述するが、織田信長・豊臣秀吉という時代の為政者が、茶の湯の発展に大きく関わっているからである。正に文化と政治が結び付いている。為政者は茶を利用して力を伸ばし、茶の場において権力を示し、それが茶の湯のコミュニケーションの重要な一端であったことを後述する。決してきれいごとだけでは済まされない。武士を懐柔する、他者を抑える、天下を取る、そこに茶の湯は大いに利用されていた。きれいなものも、その逆も、両方を含む、それが文化であるとの見解に筆者は立つ者である。またウィリアムズの三つの分類に共感を覚える。

#### 【注】

<sup>1</sup>T. S. エリオット「文化の定義のための覚書」深瀬基寛 訳『エリオット全集5—文化論』（東京：中央公論社、1960年）、p.335.

<sup>2</sup>同上、p.253.

<sup>3</sup>同上、p.252.

<sup>4</sup>同上、p.252.

<sup>5</sup>エドワード・ホール『かくれた次元』日高敏隆・佐藤信行 訳（東京：みすず書房、1970年第1刷、1989年第22刷）、p.259.

<sup>6</sup>レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会 1780~1950』若松繁信・長谷川光昭 訳（京都：ミネルヴァ書房、1976年）、p.4.

<sup>7</sup>レイモンド・ウィリアムズ『長い革命』若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭 訳（京都：ミネルヴァ書房、1983年）、p.43.

<sup>8</sup>レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会 1780~1950』、p.4.

## 1-7 日本における文化論と茶の湯

文化人類学は西欧で始まった学問であり、日本もその影響・教えを受けていることは当然であるが、日本人学者による文化の定義を見てみる。桑山敬己氏は「民族の生活様式 a people's way of life...単に高尚な営みだけでなく、特定の民族に見られる価値観や世界観および実際の行動など、ありとあらゆる特徴を示す包括的な概念<sup>1)</sup>」と述べている。「ある集団のメンバーによって幾世代にもわたって獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間—空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成<sup>2)</sup>」という、コミュニケーション学者、岡部朗一氏による定義もある。言語学者、鈴木孝夫氏は文化を「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型（構図）のことである<sup>3)</sup>。」と述べている。英語学者、小島義郎氏は「学習によって伝承される民族特有の思考・生活様式<sup>4)</sup>」が文化であると言っている。また言語学者・日本語教育研究家、牧野成一氏は次のように述べている。「文化とは、複数の人間からなる集団によって長い間社会的に伝承され変化、発展してきた言語と非言語のルールの総体で、それをどのようにタスクのために使うかの様式である<sup>5)</sup>。」言語学者の視点より、言語・非言語という観点から文化を見た、このような定義もあることがわかる。文化を捉えるに当たり、各定義の根底には同じものが流れており、またこれまでに見てきた西欧の考え方とも共通している。筆者の言葉では、文化を「ある集団に特有の生き方の様式」と捉える。また上記の諸学者の説の中で牧野氏の述べる「言語と非言語のルールの総体」は、茶席の流れ、ひいては茶の湯のコミュニケーションに当てはまる表現であると考えられる。

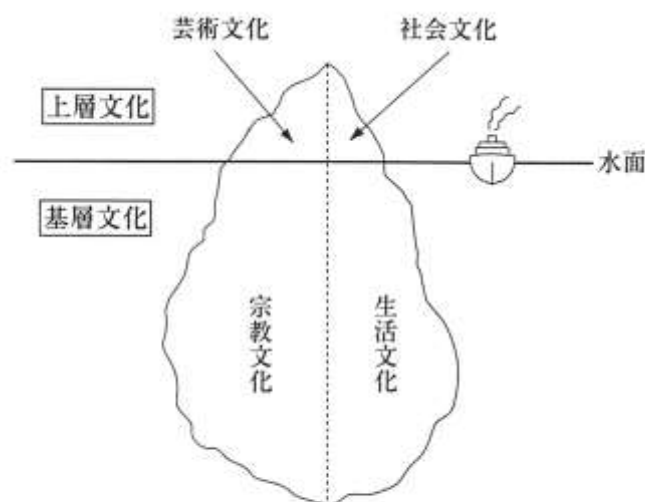
こうした定義を踏まえた上での文化の分類を試みたい。比較文化学者、またコミュニケーション学者でもある田崎勝也氏が文化を三つに分類している。それは①高等文化、②伝統文化、そして③生活様式としての文化である<sup>6)</sup>。レイモンド・ウィリアムズの分類とは多少異なる。氏は次のように述べている。

①の高等文化は芸術や科学技術などの精神面および物理面で生活を豊かにする人間の知恵を意味します。②の伝統文化は、歌舞伎や能など、現代の生活ではあまり触れることがなくなった知恵や技能の中でも、ある特定の集団のアイデンティティとして、後世へ受け継がれていくものを指します。そして③の生活様式としての文化は、異文化コミュニケーションでたびたび問題として持ち上がる、我々が特に興味を持つ内容です。それは、ある集団の成員（メンバー）がもつ価値観・思考様式、また、感情傾向等のような内的な精神活動を指します<sup>7)</sup>。

ウィリアムズの項目1が人間の精神の向上を採り上げているのに対し、田崎氏の①は精神面・物理面の両方を語っており、また精神の向上と言うよりも、人間の知恵がもたらす生活の内容の向上を指している。ウィリアムズの2と②は類似する部分が多いが、田崎

氏の②は、より過去の遺産といった含みを持つ。「後世へ受け継がれていくもの」と述べているが、①の高等文化にも③の生活様式としての文化にも、後世へ受け継がれていくものは多々ある。ただ①と③の文化では、消滅するものもあり、また前の時代のものが批判や改良を経て変化した継承となる場合もあるのに対して、伝統文化では、歌舞伎での立ち振る舞いや茶の湯での点前の仕方等、ある一定の型がそのまま、すなわち変化せず「後世へ受け継がれる」という意味であろう。エドワード・タイラーの説く「サヴァイヴァルズ」に通じるものである。両者の②と③は同様の定義であると理解される。

野村美術館学芸部長、谷晃氏は日本文化を対象とし、文化について、ウィリアムズまた田崎氏と共通項を持ちながらも、また違った説明の仕方をしている。氏は文化を、よく目につく表側の部分と、あまり目立たない裏側の部分とに分類できると指摘し、前者を上層文化、後者を基層文化と呼んでいる。基層文化は目立たないながら上層文化の基礎となっている。よって、上層に対する単なる反意語の下層文化ではなく、基層文化という用語を用いていると解釈される。さらに上層文化は芸術文化・社会文化に、基層文化は宗教文化・生活文化に分けられ、図に示す通りである。目立つ上層文化は文化全体の氷山の一角に過ぎず、下にはその数倍もの基層文化が隠れていると谷氏は語る<sup>8</sup>。



文化概念図

谷氏の文化論はこれまでに筆者が挙げてきた先行研究と重なる部分を多分に有しているが、さらに日本文化の分類を具体的に行っている。上層文化である芸術文化と社会文化、基層文化である宗教文化と生活文化の中に、次のように具体的要素を挙げている。

芸術文化：絵画・彫刻・建築・工芸・芸能・映画・演劇・舞踊・文学・音楽等

社会文化：政治・経済・教育・スポーツ・武道等

宗教文化：思想・様式・習慣等

生活文化：衣・食・住・遊興・行動等<sup>9</sup>

さらに芸術文化は6項目に分類される。

美術：絵画・彫刻・建築・工芸等

身体芸術：演劇・舞踊等

芸能：茶の湯・立花・能・文楽・歌謡・ショー等

音楽：声明・雅楽・琴・尺八等

文学：物語（小説）・詩・和歌・連歌・俳句等

その他：映画・アニメ・漫画・レーザー光・フォノグラフ等<sup>10</sup>

この中の芸能は伝統芸能と大衆芸能に大別される。

伝統芸能（traditional art）

能・狂言・日本舞踊・歌舞伎・文楽・茶の湯・立花・香道・神楽等

大衆芸能（public entertainment）

落語・万歳（漫才）・歌謡・サーカス・ショー等<sup>11</sup>

日本語では同じ「芸能」だが、英訳に注目すると、伝統芸能の方は“art”、大衆芸能は“entertainment”という別々の用語を用いていることは興味深い。前者は芸術性が高いが、後者は芸術性よりもむしろ人を楽しませる余興・娯楽の意味合いが強いためと解釈される。茶の湯が芸術性という強みを持っていることが、この芸能分類の英訳にも表れている<sup>12</sup>。茶の湯は五感を通して、確かに人を楽しませてくれる。しかしまた精神を鍛える、内面を磨くという重要な側面を考えると、“entertainment”という表現では済まされないであろう。

伝統芸能には狭義と広義がある。

狭義の伝統芸能：

茶の湯・立花・香道等

広義の伝統芸能：

狭義の伝統芸能に含まれるものの他に、能・狂言・日本舞踊・歌舞伎・文楽・神楽等<sup>13</sup>

以上の分類に基づくと、茶の湯は上層文化の中の芸術文化、さらに芸術文化の中の芸能、その芸能の中の伝統芸能に、広義においても狭義においても属することになる。谷氏の分類は非常に詳細で明確である。しかし筆者は、茶の湯が属する「伝統芸能」は「伝統芸術」と評した方が相応かと考える。英訳で“entertainment”ではなく“art”を用いていることから、そう言えるのではないか。茶人を指して芸能人とは言わないであろう。また「芸術文化」6項目の最後は映画・アニメ等を含む「その他」であるが、これは具体的には現代芸能を指すと解せる。しかし「芸能」という項目は既に据えているので「その他」という用語を用いたと推察され、つくづく分類の困難さが感じられる。

日本文化史及び茶道研究家、熊倉功夫氏は芸能を4種類に分類している。それは舞台芸能・民俗芸能・巷間芸能(大道芸等)・室内芸能であり、「第4の室内芸能こそ、日本人の生活と芸術をつなぐ重要な接点であり、その代表が茶の湯といけばなということになる<sup>14</sup>。」と述べている。しかしながら茶事を考えると、庭の風情を楽しみながら露地を歩くことに始まり、茶事の途中でも中立ちとって、客は茶室から庭に出る。茶事が終わった後も再び外へ出て露地を歩いて去る。こうした屋外での過程も茶事の重要な部分であることを思うと、必ずしも室内芸能とは言い切れないと筆者は考える。また野点のように、終始屋外で行う茶の湯もある。

### 【注】

- <sup>1</sup> 桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ20のモデル』(東京:弘文堂、2005年)、pp.209-210.
- <sup>2</sup> 石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション [改訂版]』古田暁 監修(東京:有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷)、p.42. 本章は岡部氏による。
- <sup>3</sup> 鈴木孝夫『ことばと文化』(東京:岩波書店、1973年第1刷、1988年第26刷)、p.i.
- <sup>4</sup> 小島義郎『日本語の意味 英語の意味』(東京:南雲堂、1988年第1刷、1994年第6刷)、p.68.
- <sup>5</sup> 牧野成一「文化能力はどうやって測るか」第9回 OPI (Oral Proficiency Interview) 国際シンポジウム基調講演より、2013年11月2日、於香港中文大学。
- <sup>6</sup> コミュニケーション学者、石井敏氏もまた文化はこの3点であるという前提の下に著作の論を進めており、文化をこの三つの分類から捉えることは妥当である。石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(東京:有斐閣、1997年初版第1刷、2000年初版第4刷)、p.2. で文化3点を述べている。本章は石井氏による。
- <sup>7</sup> 田崎勝也「異文化コミュニケーション」岡野雅雄 編『わかりやすいコミュニケーション学 改訂版』(東京:三和書籍、2004年初版、2008年改訂版)、p.58.
- <sup>8</sup> 谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』(京都:淡交社、2005年)、p.34. 図も本ページに記載。
- <sup>9</sup> 同上、p.35.
- <sup>10</sup> 同上、pp.39-40.  
なお、「伝統芸術」という用語を使うこともある。「伝統芸術」の表記を用いて倉澤行洋氏は次のように定義している。「国家・民族その他なんらかの集団において、ある共通の特性を具えた芸術行為が相当期間継続して行なわれるとき、その行為、およびそれによって作られたものを伝統芸術という。」「国際伝統芸術研究第1号」(宝塚:国際伝統芸術研究会発行、2012年)、p.2.
- <sup>11</sup> 谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』、p.41.
- <sup>12</sup> Soshitsu Sen XV, Grand Master Urasenke School of Tea supervised, *Urasenke CHANOYU Handbook One* (Kyoto: Urasenke Foundation, 1980 (1<sup>st</sup> ed.), 1993 (4<sup>th</sup> ed.)), p.9. で、茶を芸術

の領域にまで高めたのは珠光だと説明しており、正に「芸術」を表わす“a fine art”という英語を当てている。

<sup>13</sup> 谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』、pp.41-42.

<sup>14</sup> 熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年）、p.22.

## 1-8 文化の分類と茶の湯の位置付け

以上の西欧における、また日本における先行研究を踏まえて、筆者は文化を次のように分類する。

1. 高等文化 — 精神・物理両面で人間と生活を豊かにする知恵としての文化
2. 伝統文化 — 伝統芸術としての文化
3. 生活文化 — 共同体の思考・生活様式全体としての文化

田崎勝也氏の論にほぼ則っているが、谷晃氏、またレイモンド・ウィリアムズを始めとする西欧の学者の説も加味した上での分類である。谷氏は六つの芸術文化という大きい捉え方をしており、伝統的なものだけでなく現代の芸術も含めているが、筆者は伝統芸術を伝統文化という一つの項目とし、現代の芸術は項目1に含めるものとする。また筆者は高等文化を「...人間と生活を豊かにする...」とし、「...人間の生活を豊かにする...」ではない。心を豊かにし、心を磨く、人間性を高める文化、また科学や技術の進歩といった知恵に満ちた生活をもたらす文化として高等文化を捉える。

この3点の文化は、明確に線を引いたように分けられるものでもなく、そうすることはむしろ不可能であろう。歌舞伎等のすぐれた伝統芸術に接して感動する、心豊かになる、啓発されるということは、よくあることである。これは精神面で人間を豊かにすることであり、高等文化に繋がる。よって高等文化と伝統文化は関連していると言える。また人間は生活していく上で、色々な物を使用し、必要とする。科学技術等の知恵が加わり、より便利な効率よい物が作り出され、使われるようになる。そうした新しい物が生活の仕方、すなわち生活様式に直接影響を与える訳であるから、「科学技術等の知恵」に関する高等文化は、「生活様式」を含む生活文化と密接であると言えよう。さらに、歌舞伎や文楽には庶民の生活を題材にした作品も多く、「世話物」と呼ばれる演目は正にそれであり、生け花における花を活けるという行為、書道における字を書くという行為は、いわば生活の延長であり、よって伝統文化と生活文化との関連性が浮かび上がってくる。上記3点の文化は明確に分類されるどころか、むしろ相互作用し、密接に関連している。

茶の湯は長い伝統を誇る芸術であり、2の伝統文化の中に位置付けられよう。しかし他の2項目、すなわち高等文化・生活文化とも深く関わっている。美しい点前や道具を鑑賞し、落ち着いた雰囲気の中で心癒され、すなわち茶の湯は精神面で人を豊かにしてくれる。よって高等文化に繋がる。茶の湯は生活文化でもある。伝統的文化論を述べる際にも引用



したが、『南方録』にある「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、佛にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、花をたて香をたく<sup>1)</sup>」は正に人間生活である。また茶の湯の中でなされる様々な所作、使われる道具は、すべて日常生活の延長線上にあると言えよう。由緒ある大変高価な茶道具を指して、「日常生活の延長線上」などと言うと批判を蒙るかもしれないが、茶に使われる器物の多くは、一般的な台所用品を、より美的にした物、茶の湯の場に相応しく改良した物と言えるのではないか。後述するが、ごく一般的な日用品を茶道具に取り入れた例も多々ある。

宗教哲学者・民芸運動創始者、柳宗悦氏による「真の茶人達は物を生活に取り入れて使いこなした。見ることから用いることへさらに道を深めた。生活で美を味わったことこそ、茶道の絶大な功德である<sup>2)</sup>。」という評に筆者も同意する者であり、茶の湯においては芸術の中に生活がある。生活上の所作が茶の湯の中に生き、そこに美を生み出している。生活と芸術が見事に一体化している。生活と芸術を同時に体験できる文化という見方もできよう。茶の湯は伝統文化に属するが、高等文化と生活文化とも多分に関わっている。3種類の文化の要素すべてを含み、茶の湯はそれだけ広い文化であるとも言える。そしてもちろん、深い文化でもある。茶の湯をテーマに扱うにあたり、初期の茶の歴史を次に見てみる。

#### 【注】

<sup>1)</sup>『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定）、p.3.

<sup>2)</sup>柳宗悦『茶と美』（東京：講談社、2000年）、p.142.

<sup>3)</sup>熊倉功夫氏も『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年）、p.226. において、「生活と芸術を一体と捉える日本」と述べている。

### 1-9 日本における茶の始まり

喫茶の風習がいつから始まったのか定かではない。しかし「茶者南方之嘉木也<sup>1)</sup>」で始まる茶祖、陸羽による最古の茶書『茶経』の成立が760年頃と推定されているので、唐の時代には中国では慣習として茶を飲んでいただと考えられる。ただしこの時代の茶は現代の抹茶とは違い、団茶——餅茶とも言う——と呼ばれるもので、茶葉を蒸して乾燥させ、臼でついて固めた団子のようなものである。喫する際には団茶を火で炙り、火が十分に通ったところで粉末にして煮て、そして飲む<sup>2)</sup>。この時期に中国に渡った遣唐使や中国から渡日した僧侶によって、日本に喫茶が伝えられた。唐時代は日本の奈良時代を含み、我が国でも喫茶が行われていた。奈良時代の聖武天皇の時世（729年）に、天皇が100名もの僧侶を召して経文を転読させ、さらに僧に茶を供する行茶という儀式が行われたと言われている<sup>3)</sup>。茶がわが国の確かな正史に初めて記されたのは平安時代の815（弘仁6）年、嵯峨天皇の時代の『日本後紀』においてであることを熊倉功夫氏が指摘している<sup>4)</sup>。

植物としての茶の日本への移植も平安時代である。天台宗開祖の最澄、及び中国で 30

年もの留学経験を積んだ僧侶、永忠が共に 805 年に帰国し、その際に唐より持ち帰った茶の種子を比叡山の麓、現在の滋賀県坂本に植えたのが日本における植物としての茶の始まりであると言われているが、確証はない<sup>5</sup>。しかし DNA 鑑定等の調査により、茶はやはり中国からもたらされた植物であり、もともと日本に自生していた植物ではない<sup>6</sup>。

平安時代末、中国の宋に当たる時代の茶は、従来の団茶とは異なり、茶葉を乾燥させて粉末にして湯を注ぎ、かき混ぜるという手順で行い、現在の抹茶の点て方に通じるものであることがわかる。その後日本は平安時代から鎌倉時代に移るが、中国より臨済宗を伝えた栄西が、この茶の製法・飲み方を日本に伝えたとされる<sup>7</sup>。本家の中国ではこの点て方・飲み方は長続きせず明の時代には消滅し、急須に茶葉をいれて湯を注ぐ、現在の煎茶のあり方に移行していったのだが、意外にも日本では粉末の茶に湯を入れてかき混ぜる点て方がその後も続けられたのである<sup>8</sup>。

鎌倉幕府 3 代将軍、源実朝が二日酔いの際、栄西が将軍に茶を差し上げ、二日酔いが治ったため、茶には薬としての効用があると認められた。栄西は茶がからだによいことを『喫茶養生記』として記し、実朝に献上したことは、茶の分野では有名である。その上巻の冒頭で「茶也、末代養生之仙薬、人倫延齡之妙術也<sup>9</sup>」と述べられている。茶は末世における養生の仙薬であると言っている。「仙薬」には不老不死の薬という意と、驚くほどよく効く薬という二つの意があるが、それほどずば抜けた効用があることを説き、さらに人の寿命を延ばす力もあると述べている。冒頭のみならず『喫茶養生記』において、栄西はひたすら茶の持つ薬としての効用を記しており、嗜好品としては考えていない<sup>10</sup>。現在でも抹茶は 1 杯、2 杯とは数えず 1 服、2 服と言うのは、茶が薬と見做されていたことの表れであろう。「服」は頓服薬、服用する等、薬に関する用語の中に、現在でも使われている。『喫茶養生記』により、薬用としての茶を理解することができる。

鎌倉時代から南北朝時代になると、遊芸・遊興・遊びとしての茶が興る。産地が違い、従って品質が異なる茶を用意し、どの茶なのかを飲み当てる闘茶が行われる。これは賭博であり、金銀はもとより刀剣・馬・装飾品・高価な布等、法外な金や品を賭ける大余興で、佐々木道誉に代表される、贅沢な婆佐羅大名によるものであった<sup>11</sup>。

室町時代に入ると礼法としての茶も行われるようになり、建仁寺の「四頭の茶会」に現在もその例を留めている。寺院での礼法としての茶は、室町初期の成立と考えられる『喫茶往来』の中に記述を見ることができる。『喫茶往来』は茶会についての往来すなわち往復書簡を集めたものであるが<sup>12</sup>、その中に次のような説明がある。「罐子（かんす）をちやがまお

いて湯をわか練し、廻りに飲み物ならべてふきん巾をかぶせている。集つた人々がその座につらなつ

てから、亭主の息男が茶菓をたてまつり、梅桃の若冠が建盞をしゅじんさわりなくゆきわたるよう

にし、左手に湯瓶をむすこ提げ、右に茶筌をわが方によせて、上位から末座に至るまでの人々に茶をたてまつる<sup>13</sup>。」このように建仁寺茶礼に似た茶法が記されていることから、室町時代

にはかような茶が行われていたと考えられる。菓子を賞味し茶筥で茶を点てる等、現在の茶の湯のあり方に通じている。

以上、書院台子茶が成立した室町時代より以前の、初期の頃の茶の歴史を振り返ると、薬用としての茶、遊興としての茶、礼法としての茶の3種類があったと言えよう。

【注】

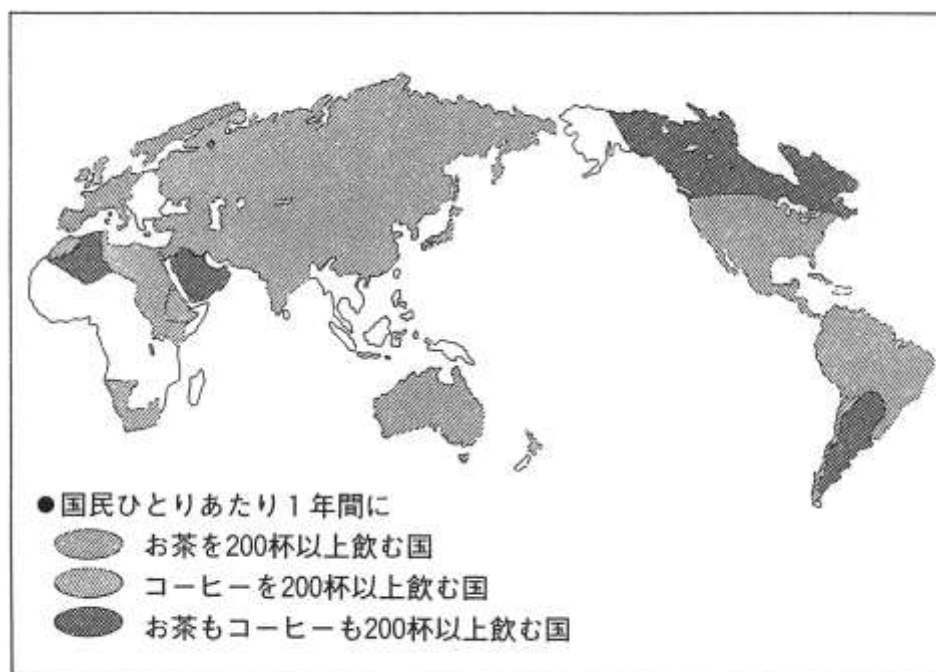
- 1 『茶経』千宗室 編『茶道古典全集』第1巻所収（京都：淡交社、）1957年初版、1967年500部限定、p.91。「者」の漢字は「日」の上に「、」があるが、変換不可能のためこのように表記する。
- 2 熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』教育社歴史新書<日本史>81（東京：教育社、1977年第1刷、1991年新装第7刷）、p.186. 参照。
- 3 この行事についての記録は、この奈良時代ではなく平安時代に入ってからのものであるため、史実としての確証はない。神津朝夫『茶の湯の歴史』角川選書455（東京：角川文庫、2009年初版）、p.50. 参照。
- 4 熊倉功夫『茶の湯の歴史—千利休まで』朝日選書404（東京：朝日新聞社、1990年第1刷、1991年第3刷）、p.31.
- 5 神津朝夫『茶の湯の歴史』角川選書455（東京：角川書店、2009年）、pp.45-47. 参照。
- 6 同上、pp.30-31.
- 7 熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』、p.32. 神津朝夫氏は『茶の湯の歴史』、p.65. において、栄西の『喫茶養生記』には「茶筥」の記述はなく、茶を入れた匙で攪拌したと読み取れる、と指摘している。
- 8 神津朝夫『茶の湯の歴史』、pp.27-28.
- 9 『喫茶養生記』千宗室 編『茶道古典全集』第2巻所収（京都：淡交社、1962年初版、1967年500部限定）、p.4. 本書では短い線が末と代の間、養と生・仙と薬・人と倫・延と齡、及び妙と術の間に入っているが、本稿では省略した。
- 10 熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』、pp.33-34. 参照。
- 11 熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』、pp.41-45. 及び神津朝夫『茶の湯の歴史』、pp.78-84. 参照。
- 12 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷。原本は1977年日本放送出版協会より刊行）、p.21. 参照。
- 13 『喫茶往来』千宗室 編『茶道古典全集』第2巻所収（京都：淡交社、1962年初版、1967年500部限定）、pp.177-178. ルビ・括弧は本書にある。

## 1-10 世界における茶

ここでは、前述の一般的な文化論とはまた別の、飲み物に関する文化という視点から、茶文化を考察する。歴史学者、守屋毅氏が興味深い世界地図を紹介している。国民一人当たりが1年間に茶を200杯以上飲む国、コーヒーを200杯以上飲む国、両方共に200杯以上飲む国の3種類から世界の国々を分類している。

次に挙げる地図は、前任者である文化人類学者・民族学者、石毛直道氏作成のものをさらに単純化した地図だが、「ご覧のように、世界の国々にのほとんどが、お茶とコーヒーのどちらかに区分されてしまうのです。まるで、お茶とコーヒーが、世界を二分しているようではありませんか<sup>2</sup>。」という批評の通りである。世界の国々を分類する方法は多々ある。人種によって分ける、宗教によって、言語によって、気候によって等々であり、そのような分類による世界地図は、よく目にするところである。しかし茶とコーヒーという観点から世界の国々を分類する、このような分類法もあるのかと筆者は驚いた。

### お茶とコーヒーの文明圏<sup>1</sup>



またその結果がこのように、きれいに二分されており、世界の国々が茶の国かコーヒーの国か、いずれかに入る——両方共よく飲用する国もある——という事実にも改めて驚いた。嗜好品の飲み物にはアルコール類も含まれる。またアルコール類を除いても、ココア・ジュース・ソーダ等多々ある。しかしその中でも、茶とコーヒーがこのように世界を二分している事実を見ると、守屋氏の指摘する通り、「まさしくお茶とコーヒーは、世界を代表する飲みものなのです<sup>3</sup>。」ということ認めざるを得ない。

この茶とコーヒーの分類結果は各国の国民の好みにも依るが、水との関係も考えられる。カルシウム・マグネシウム等のミネラル分(無機塩類)が多量に溶けている自然水を硬水、

あまり溶けていない自然水を軟水と言う<sup>4</sup>。WHO（世界保健機関）の基準に拠ると、水1000ml中にミネラル分が120mg以上であれば硬水、それ未満は軟水と区分されるそうだが<sup>5</sup>、前者はコーヒーに、後者は茶に向くとされている。アメリカやブラジル・コロンビア等の中南米、フランス等の西ヨーロッパは硬水、日本・中国・ロシア・イギリス等は軟水であり、確かに地図のコーヒー・茶の区分と一致している。

もちろん、ここで言う「茶」は筆者が本研究で採り上げている茶の湯の抹茶ではなく、緑茶・紅茶を指している。茶には様々な種類があり、またその分類法も複数あるが、その一つに、紅茶と緑茶に分けるという考え方がある。植物としての茶は同じであるが、製法が異なる。ここに歴史が関わり、「紅茶の分布する地域は、緑茶の普及する地域とくらべると、はるかに、あたらしい<お茶の国><sup>6</sup>」であり、古い「お茶の国」すなわち緑茶の中心は中国、新しい「お茶の国」すなわち紅茶の中心はイギリスである。中国は日本が茶を取り入れた、いわば日本の茶の源となった国であり、イギリスも茶の国だとはよく言われるところである。西欧の国の中で、初めて茶が伝わったのはオランダであるが、その後イギリスが中心となった<sup>7</sup>。

#### 【注】

<sup>1</sup> 守屋毅『喫茶の文明史』（京都：淡交社、1992年）、p.13.

<sup>2</sup> 同上、p.12.

<sup>3</sup> 同上、p.12.

<sup>4</sup> 藤田紘一郎『癒す水・飲む水—世界の水と病気—』（東京：日本放送出版協会、1996年第1刷）、p.12. 参照。藤田氏は免疫学者。専門は寄生虫学・感染免疫学・熱帯医学。

<sup>5</sup> WHOの基準についてはGoogle検索より。藤田紘一郎氏は『知られざる水の「超」能力 新しい「科学的」水の飲み方入門』講談社+α新書325-1B（東京：講談社、2006年第1刷）、p.56.にて日本の分類ではさらに詳しく、硬水と軟水の間に中硬水という種類もあることを記している。

<sup>6</sup> 守屋毅『喫茶の文明史』、p.14.

<sup>7</sup> 角山栄『茶の世界史』（東京：中央公論社、1980年初版、2001年第26版）、p.19.にて、イギリスへの輸入の前に、東洋貿易を掌握していたオランダにおいて飲茶の風習が始まったことを述べている。オランダ史の中で飲茶の初見は1637年1月2日付の、オランダ東インド会社の総督からバタビアの商館長宛ての手紙においてである。

#### 1-11 文化に関わる飲み物

茶の歴史を振り返り、また世界における茶を見てきた上で、筆者が抱く素朴な疑問は、そもそもなぜわれわれ人間は茶を飲むのかということである。ここでまたもや文化という観点が浮かび上がってくる。守屋毅氏は述べている。「お茶が、生命にかかわる飲みものというよりは、人びとの気分や精神や雰囲気や価値観、つまり文化にかかわる性格の飲みも

のであるということだけは、確認しておいてよいようにおもいます。...『なぜ私たちは、お茶を飲むのでしょうか』という設問には、さしあたり『人間は文化をもった生きものだから...』とこたえることができます<sup>1</sup>。」確かに、動物は茶を飲まない。例えば人間の側から餌の1種類のように与えたとして、それを特に嫌がらず飲んでしまう、拒まず体内に入れるという動物は、いるかもしれない。しかし動物が自分の側から積極的に茶を飲む、しかも空腹を満たすために、すなわち生きるために飲むのではなく、嗜好品として楽しんで飲む等、まずないことである。筆者は言語を使うということが人間である証しであると後述するが、同様に、嗜好品を楽しむ、茶を飲むということが、他の動物と人間を分ける目安になる、という言い方ができよう。この点でも文化としての茶の意味は大きい。

また興味深いことは、嗜好品の飲み物を見ると、普及地域とそのルーツが必ずしも一致していないことである。西欧における嗜好品としての代表的な飲み物は何かと考えると、茶（緑茶や抹茶ではなく紅茶）、コーヒー、それに加えてチョコレート（飲み物としてのチョコレートであり、ココアのこと）ということになるが、この三つはいずれもヨーロッパ以外の国からヨーロッパにもたらされた。茶は中国、そして輸入相手として日本から伝わり、コーヒーはアラビアから、チョコレートはメキシコから伝えられている<sup>2</sup>。西欧の人々の生活に深く浸透している、いわば西欧文化の一端とも言えるこれらの飲み物が、いずれも海外にルーツを持つ、異郷の飲み物であったことは興味深い。

日本における茶も然りである。前述のように、植物としての茶も、喫茶の習慣も点て方も、日本の国にもともとあった訳ではなく、中国から入ってきた。しかし茶の湯は現在は中国文化ではなく、代表的な日本伝統文化となっている。他国から入ってきたものが、その国にとっての大きい、深い文化になっているという興味深い現象が、洋の東西で起こっているのである。

#### 【注】

<sup>1</sup> 守屋毅『喫茶の文明史』（京都：淡交社、1992年）、p.17. 下線は筆者による。

<sup>2</sup> 同上、p.179.

### 1-12 茶の湯の独自性

海外の紅茶と日本の茶の湯の茶には、共通性が数点見られる。紅茶の中心となったイギリスでは、チャールズ2世（在位1660-1685）の妻キャサリン、メアリー2世（在位1689-1694）、クイーン・アン（在位1702-1714）、皆茶好きであったと伝えられる。貴族・上流階級層は王室ライフスタイルを模倣し、東洋趣味から中国産磁器の茶道具一式——ティー・ポット、茶壺、茶碗、砂糖入れ、ミルク入れ——を持ち、茶を楽しむことがステイタス・シンボルとなっていたという<sup>1</sup>。日本の状況と、多少通じる部分がある。織田信長・豊臣秀吉は名物狩りを行い、名器の茶道具を集めていた。この件については後の章で詳述するが、茶の湯のコミュニケーションと深く関わっている。名器を求めていたことは、為

政者のみならず、茶を行うこの安土桃山時代の武士たちも同様であり、戦争等で手柄があれば、褒美が茶道具である場合も多かった。

イギリスでは「茶を客の目の前で淹れることがエチケット<sup>2)</sup>」であったことも、日本の茶の湯と共通する部分がある。亭主は客の目の前で点前をする。点前の始まりは道具清めから始まり、茶入れ・茶杓・茶筌・茶碗と次々清めていくが、既に十分きれいにしているこれらの器物を、また改めて客の前で清める。「あなたのために」の意味合いがある訳だが、客の目の前で茶器を清め茶を点ずるというもてなし方は、「客の目の前で淹れる」17～18世紀イギリスにおける茶のあり方と、多少通じるものがある。

茶に薬としての効用があることは西欧社会でも認識されており、為政者への茶の献上が西欧でも起こっている。フランスでは、最も早く茶を愛好した高位の人物はルイ14世であり、1665年医師たちが消化の助けになると処方している<sup>3)</sup>。前述したように、日本において、栄西が茶を以て源実朝の二日酔いを治し、良薬としての茶について記した『喫茶養生記』を献上した状況とよく似ている。

アルゼンチンのマテ茶は回し飲みであり、日本の濃茶の喫し方も然りである<sup>4)</sup>。日本と海外の茶のあり方には、意外と似ている部分があることがわかる。しかしながら、これらの類似はごく表面的なことだと筆者は考えるのである。

海外における茶のあり方と、日本の茶と、両者の間には大きい隔たりがあると言えるであろう。安土桃山時代の名だたる武士、特に為政者たちにとっての名茶器の収集は、イギリスの王室や上流階級の人々にとっての茶器のような「ステイタス・シンボル」などには留まらず、後の章で述べるが「天下を取る」ことにも繋がる、政治上の重要な意味を有している。客の前で行う点前のあり方と、点前中の各所作に込められた意味合いは、イギリスにおける「茶を客の目の前で淹れることがエチケット<sup>5)</sup>」という説明では到底済まされない。アルゼンチンのように茶の回し飲みを行う国も存在することはわかるが、日本の濃茶においては、そこに参加する人の間に宿る思い、心入れが非常に深く、西欧でのあり方と同等であるとはとても言い難い。また茶会・茶事を催す亭主の心遣い、それを受け入れる客の姿勢、主客が行うコミュニケーションとそこに築き上げられるもの等を考えると、日本の茶の湯はやはり独特である。

「茶には760年頃に書かれた陸羽の『茶経』から、日本の『茶の湯』を中心とする芸能文化、さらに茶碗、茶器などの美術工芸品から茶の入れ方、飲み方、マナーにいたるまで、長い歴史的伝統文化の輝きがある。これに対してチョコレートやコーヒーにはこうした文化の背景がない<sup>6)</sup>。」という評もある。しかし筆者は決して茶の湯礼賛や崇拜を行いたいのではない。前述のように、文化には美しい面とそうではない面の両方があり、茶の湯も確かにその両面を呈しているからである。またコーヒー文化、チョコレート文化、西欧における紅茶文化も、探っていけば、それぞれの伝統を有しているに違いない。

世界の嗜好品の中での独自性と共に、日本の茶の湯にはまた、日本人の器用さ・巧妙さも、感じ取られよう。外国起源のものを上手に自分の国に取り込んでいる。そしていつの間にか、高度なレベルの日本文化に立派に作り上げている。熊倉功夫氏は「何か日本的というべき“鑄型”があって、どんな種類の文化が外国から流れこんできても、その“鑄型”

に入ってしまうと、あとは大変従来の文化となじみやすい型に変えられて出てくる。そんな仕掛けが日本の文化の構造のなかにあるような気がする。」と述べているが、茶の湯も然りではないか。また日本語も、中国や西欧という他国の要素を巧妙に取り込んでいることを後述する。茶の湯と日本語には共通性が見られるようである。

#### 【注】

- <sup>1</sup>角山栄『茶の世界史』（東京：中央公論社、1980年初版、2001年第26版）、pp.41-42. 参照。
- <sup>2</sup>財団法人日本ホテル教育センター編『世界・お茶の日本』（東京：プラザ出版、2007年）、p. 21.
- <sup>3</sup>同上、p. 269.
- <sup>4</sup>同上、p. 269.
- <sup>5</sup>同上、p. 21.
- <sup>6</sup>角山栄『茶の世界史』、p.37.
- <sup>7</sup>熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』教育社歴史新書<日本史>81（東京：教育社、1977年第1刷、1991年新装第7刷）、p.14.

### 1-13 むすび

文化論は19世紀末イギリスのタイラー、20世紀初頭アメリカのボアズに始まるが、両者共言語を採り上げており、言語と文化の結び付きには、文化人類学萌芽期から既に関心が寄せられていたことがわかる。諸学者の説を踏まえ、筆者は文化を「ある集団に特有の生き方の様式」と考える。また文化を次のように3分類する。

1. 高等文化 — 精神・物理両面で人間と生活を豊かにする知恵としての文化
2. 伝統文化 — 伝統芸術としての文化
3. 生活文化 — 共同体の思考・生活様式全体としての文化

ただしこの3点の文化は、線を引いたように明確に分類することはできず、相互作用し、互いに密接に関連したものである。茶の湯はこの中の伝統文化に位置付けられよう。しかし高等文化・生活文化とも深く関わっている。また、より詳しく日本文化の中での位置付けを考えると、茶の湯は上層文化と基層文化に分けた場合の上層文化、その中の芸術文化、さらに芸術文化の中の芸能、その芸能の中の伝統芸能に属するという分類法があるが、筆者としては茶の湯を伝統芸能ではなく、伝統芸術として位置付けたい。

歴史を振り返ると、喫茶がいつから始まったのか明らかではないが、中国では唐の時代には喫茶が慣習としてあったと考えられる。団茶に始まり、遣唐使によって奈良時代に日本に伝わった。植物としての茶は、確証はできないが、平安時代に最澄、及び永忠が唐よ



り種子を持ち帰って植えたのが始まりだという説がある。誰が輸入を行ったかは明らかでないにしても、日本にもともとあった植物ではなく、中国から伝わったことだけは確かである。その後、宋で抹茶を点てることが始まり、日本でも行われるようになった。本家の中国ではこの点て方・飲み方は長続きせず、急須に茶葉を入れて湯を注ぐ、現在の煎茶のあり方に移行していったのだが、日本では抹茶がその後も続けられた。

鎌倉時代に入ると、栄西の『喫茶養生記』に見られる薬としての茶、鎌倉から南北朝時代には佐々木道誉に代表される、賭博を含む遊びとしての茶、そして室町時代初期には礼法としての茶、これは建仁寺の「四頭の茶会」に現在もその例を留めているが、初期の頃、すなわち書院台子茶以前の茶としては、以上の3種類があったと言えよう。

世界の中での茶に目を向けると、世界のすべての国が茶の国とコーヒーの国——両方共よく飲用する国もある——に分類され、茶とコーヒーは世界を代表する飲み物であることが改めてわかる。

茶もコーヒーも文化に関わる飲み物である。他の動物は嗜好品としてこれらを喫することはない。茶を飲むことは人間である証拠なのである。茶、コーヒー、そしてチョコレートがヨーロッパの代表的な飲み物だが、ルーツはすべて海外である。日本における茶も然りだ。植物としての茶も、喫茶の習慣も、抹茶を点てるというやり方も、もともと中国という外国から入ってきた。他国から入ってきたものが、その国にとっての大きい、深い文化になっているという興味深い現象が、洋の東西で起こっている。

海外の紅茶の伝統と日本の茶の湯の間には、何点かの類似点が見られる。しかしながら、例えば名茶器の重要度は、日本においては西欧のそれとは比較にならないくらい大きい。安土桃山時代の名だたる武士、特に為政者たちにとっての名茶器の収集は、イギリスの王室や上流階級の人々にとっての茶器のような「ステイタス・シンボル」などには留まらず、後述するが「天下を取る」ことにも繋がる、政治上の重要な意味を有している。イギリスでも客の目前で茶を淹れることがよしとされていたという。しかし日本の茶の湯における、客の前で行う点前のあり方と、その点前の各所作に込められた意味合いは、イギリスにおける、「客の目の前でのもてなしがエチケット」という表現では済まされない。アルゼンチンのように茶の回し飲みを行う国も存在することはわかるが、日本の濃茶においては、そこに参加する人の間に宿る思い・心入れを考えると、西欧でのあり方と同等であるとはとても言い難い。また茶会・茶事を催す亭主の心遣い、それを受け入れる客の姿勢、主客が行うコミュニケーションとそこに築き上げられるもの等を考慮すると、日本の茶の湯はやはり独特である。しかし筆者は決して茶の湯礼賛や崇拜を述べたいのではない。前述のように、文化には美しい面とそうではない面の両方があり、茶の湯も確かにその両面を呈しているからである。

茶の湯にはまた、日本人の器用さ・巧妙さも、感じ取られよう。外国起源のものを上手に自分の国に取り込んでいる。そしていつの間にか、高度なレベルの日本文化に立派に作り上げている。茶の湯はその好例と言えよう。日本語もまた、中国や西欧という他国の要素を巧みに取り込んでいることを後述するが、茶の湯と日本語には共通性が見られるようである。

## 第2章 コミュニケーションの定義と現状

## 2-1 はじめに

本章では、まずコミュニケーションに関する先行研究を追う。茶の湯とコミュニケーションは深く関わっていることがわかるが、茶の湯におけるコミュニケーションの定義付けを試みる。次に、コミュニケーションの現状を探るべく、文化庁実施の「国語に関する世論調査」を平成23年度から26年度までの4年度分調べてみる。調査には多数の質問項目があるが、本論文に関わる次の項目を特に採り上げて考える。それは、社会全体の言葉や言葉の使い方について、人とのコミュニケーションについて、日本語能力の低下、そして情報交換手段の多様化、以上である。現代の日本人が日本語、そして日本語を使つてのコミュニケーションをどう捉えているかが、ある程度浮かび上がってくる。そのことが、茶の湯におけるコミュニケーションを考える上で、示唆的なものとなる。

## 2-2 先行研究

コミュニケーションとは何か。その定義は様々である。アメリカのコミュニケーション学者ポーターとサモバーは、「コミュニケーションは、他者の行動や他者の行動の余波に対して、何らかの反応を示した時に常に起こるもの」とし、ある行動に何らかの意味付けが起こっている、それをコミュニケーションと定義している。

同じくアメリカのコミュニケーション学者ウッドは、「コミュニケーションは、シンボルを介した人間のインタラクションの中で、意味が造られ反映される動的で系統的なプロセスである」と述べている。

一方、アメリカの心理学者マツモトは、コミュニケーションとは「人々の間で、知識、アイデア、考え、概念や感情のやりとりをすること」とであると定義づけている<sup>1</sup>。

またアメリカの社会学者クーリーは「コミュニケーションとは、人間関係が成立し、発展するためのメカニズムを意味する。それは、精神のすべてのシンボルを空間的に搬送し、あるいは時間的にこれを保存する手段でもある」と定義しており、アメリカのコミュニケーション学者ホヴランドは「送り手としての個人が、受け手としての他者の行動を変容させるために、刺激（通常は言語的シンボル）を伝達する過程である」と説明している。またハワイのイーストウェスト・センターにてイーストウェスト・コミュニケーション・インスティテュートの理事を務めるアメリカ人シュラムは、「コミュニケーションという言葉は『共に』を意味するラテン語の“*communis*”に由来し、私たちの間に共通性を成立させる、つまり情報、思想、あるいは態度を共有しようとする試みである」と述べている<sup>2</sup>。語源について茶道研究家、黒川五郎氏は「コミュニケーションの語源はラテン語の“*communicare*”『共有する』の意<sup>3</sup>から来ている」と述べている。

以上の定義を踏まえた上で茶の湯に目を向けると、「ある行動に何らかの意味付け」があることは、茶の湯にも通じる。茶の湯での所作にはそれぞれに、そしてすべてに、何らかの意味がある。無駄な所作は一つもない。「インタラクション」、「人々の間でのやりと

り」も正に茶の湯において見られる、否、茶の湯の真髓である。参加した人々の相互作用が茶の湯の流れの中で常時・随所に働いている。人間関係の成立と発展をもたらし、参加者の間に共通意識を生み出すこともまた、茶の湯に十分通じる。茶の湯は正にコミュニケーションそのものである。

#### 【注】

<sup>1</sup>末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』（東京：松柏社、2011年）、pp.14-15 で以上のポーターとサマーバー、ウッド、マツモトの定義を紹介し、説明を加えている。本章は末田氏による。

<sup>2</sup>原岡一馬『人間とコミュニケーション』（京都：ナカニシヤ出版、1990年）、p.31 でクーリー、ホヴランド、そしてシュラムの定義を挙げ、説明している。

<sup>3</sup>黒川五郎『新しい茶道のすすめ』（東京：現代書林、2009年）、p.270.

### 2-3 茶の湯のコミュニケーションの定義

コミュニケーションについて非常に様々な定義があることがわかるが、コミュニケーション学者、末田清子氏は、こうした定義の違いはコミュニケーションを見る視点の違いからくるものだと指摘し、その視点とは機械論的視点・心理学的視点・シンボリック相互作用論的視点・システム論的視点の4点であると述べている。それらの説明を次に挙げる。

第1は、機械論的視点である。機械論的視点は、コミュニケーションを物理学的にとらえ、機械が情報を伝達する効率に焦点を当てた機械論的モデルから見ている。第2は心理学的視点である。心理学的視点は、私たちが外から受ける刺激を選別して取り入れるフィルターに焦点を当てた心理学的モデルから見ている。第3は、シンボリック相互作用論的視点である。シンボリック相互作用論的視点は、コミュニケーションの当事者間にある言葉や行為というシンボルが、どのように創造され、意味づけされ、共有されるかに焦点を当てたシンボリック相互作用論的モデルから見ている。第4は、システム論的視点である。システム論的視点は、コミュニケーションを行っている二者を一つの単位とみなし、その単位で見たときにコミュニケーションがどのような仕組みで動いているかに焦点を当てたシステム論的モデルから見ている<sup>1</sup>。

この4点を踏まえた上で末田氏はコミュニケーションを、「シンボルを創造しそのシンボルを介して意味を共有するプロセスである<sup>2</sup>」と定義している。筆者もこの定義に大いに賛同する。シンボルの定義自体がまた必要となってくる。「何かを表わすしるし、行為の目的で、そのシンボルを使う文化の担い手たちの間で認められているという美德がある<sup>3</sup>」、それをシンボルと捉える。すなわちシンボルとは、「ある情報を与えるしるしのことであり、

言葉、行為、物などが含まれる<sup>4)</sup>のである。茶の湯においては、交わされる「言葉」、なされる「行為」、茶に関わる道具等の「物」が「シンボル」に当たる。上の四つの視点の中の、「シンボリック相互作用論的視点」が正に茶の湯であると言える。またシンボルの定義の中に「文化の担い手」という表現が用いられており、文化を抜きに茶は語れない。

具体的に茶に焦点を当てて、社会学者、大屋幸恵氏が述べている。「他者に対する自己の『おもい』がいかに伝えられるか。また客は、道具のしつらえや亭主の『よそおい』など人やモノすべてを含むくその茶席を構成する諸要素から亭主の『おもい』を読み取り、解釈しようとする。このように、茶席とはコミュニケーションのあらゆる手段を用いた相互作用のプロセスとして理解できるのである<sup>5)</sup>。」的を射た表現であり、茶の湯は正にコミュニケーションであることを的確に説明している。

以上を踏まえ、「茶の湯におけるコミュニケーション」を筆者は次のように定義する。

**茶の湯のコミュニケーションとは、言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセスである**

末田氏は定義の中で「シンボル」という用語を使い、そのシンボルとは「言葉、行為、物」とであると説明している。「行為」は茶の湯においては「所作」と呼んだ方が相応しいので、筆者はこちらの用語を使った。またシンボルの中の「物」はあまりにも大きい言葉で漠然としている。茶の湯においては道具が中心となるが、単に「道具」と言うと、茶に使う器物すなわち茶道具のみに限定されているように聞こえる。しかし筆者が指す範囲はそれだけではない。庭や茶室、活けられる花、もてなされる茶・菓子・料理等、茶の湯に関するあらゆる物理的な「物」を含むため、「道具等」という用語を使っている。

また末田氏のコミュニケーションの定義中の「意味」についてであるが、この用語も大きく漠然としている。客を歓待する意、その茶席のテーマ、その時の季節感、これらすべてが「意味」である。亭主はこれらを考え、客に伝えようとする。客は心映えを以てこれらを受け入れる、この過程が茶の湯におけるコミュニケーションであると筆者は考える。正に「共有するプロセス」である。「共有する」はもちろん、主客間での共有である。茶の湯では客同士のコミュニケーションももちろん行われるが、筆者は本研究においては、主客間に焦点を当てる。そして亭主の側に重きを置いて論ずる。

「言葉・所作・道具等」の中の言葉、すなわち口にされる、または書かれている実際という言葉、広い意味での「言語」よりも、所作や道具等の「非言語」が、茶の湯ではより重要ではないかとの見解に筆者は立つ者である。亭主は歓待の意、茶席のテーマ、季節感を所作や道具等のしつらえといった非言語要素によって表し、客はそれを受け入れ応える、このプロセスが、言語を介した場合よりも遥かに多く、また深い伝え合いとなる、それが茶の湯のコミュニケーションではないかと推察するのである。言語を上回る非言語の力があると思われる。

## 【注】

<sup>1</sup>末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』（東京：松柏社、2011年）、pp.15-16. 本章は末田氏による。

<sup>2</sup>同上、p.16.

<sup>3</sup>T. O’Sullivan, J. Hartley, D. Saunders, M. Montgomery, & J. Fiske, *Key concepts in communication and cultural studies* (2<sup>nd</sup> ed.). (London: Routledge. 1994), p.312. 筆者訳。

<sup>4</sup>末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』、p.16. 本章は末田氏による。

<sup>5</sup>大屋幸恵「現代茶道修練者の意識 その社会学的考察」熊倉功夫・田中秀隆 編『茶道文化論』、茶道学体系第1巻（京都：淡交社、1999年）、p.242.

## 2-4 コミュニケーションは人間必須の文化

エドワード・ホールは、“Culture is communication and communication is culture. (文化はコミュニケーションであり、コミュニケーションは文化である<sup>1</sup>。)”と述べ、これが彼の文化の定義であり、同時にコミュニケーションの定義であるとも言える。文化イコール、コミュニケーションなのだ。文化とコミュニケーションが切り離せないものであることを、明確に示している。ホールはまた「人間を人間たらしめているもの——どこで生まれようと、人間としてのアイデンティティーのあかしとなるもの——、それは人間の文化、言い換えれば、コミュニケーション構造全体なのである<sup>2</sup>。」とも述べている。コミュニケーションは人間であることの証しとなるものなのである。

“We cannot *not* communicate<sup>3</sup>. (私たちはコミュニケーションせずにはいられない。)”のである。確かにそうである。常に言葉を発し、何らかの行動をしている。それを受けた相手は意味を踏まえ、反応する。初めの送り手は受け手の反応をさらに意味付けし、...とコミュニケーションは止まることなく続いていく。人間にコミュニケーションは必須であり、休むことなく繰り返される行為である。

茶の湯においても、亭主と客との間に数限りないコミュニケーションが行われる。コミュニケーションの連続が、茶席である。そしてコミュニケーションが成功する場合もあれば失敗もあり、そこにまた茶の湯の奥深さと難しさがあると言える。

## 【注】

<sup>1</sup>Edward. T. Hall, *The Silent Language*. (New York, NY: Doubleday, 1959)、p.169.

<sup>2</sup>エドワード・ホール『文化を超えて』岩田慶治・谷泰 訳（東京：TBSブリタニカ、1993年）、p.57.

<sup>3</sup>P. Watzlawick, J. H. Beavin, & D. D. Jackson, *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. (New York, NY: W. W. Norton & Company, Inc. 1967), pp.48-49.

## 2-5 コミュニケーションの現状

### 2-5-1-1 平成 26 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 — 世論調査概観

茶の湯においてではないのだが、一般の日本社会におけるコミュニケーションの現状を、まず探ってみたい。茶の湯にも通じる部分が見られるからである。筆者が採り上げたのは文化庁が毎年行っている世論調査であるが、本論文執筆中に入手できる範囲内で最新の調査は、「平成 26 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」である。この調査について、文化庁が定める調査目的・方法等は次の通りである<sup>1</sup>。

調査目的：文化庁が平成 7 年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査対象：全国 16 歳以上の男女

調査時期：平成 27 年 1 月~2 月

調査方法：一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施

回収結果：調査対象総数 3,493 人  
有効回収数（率）1,942 人（55.6%）

この調査は、結果の概要だけでも A4 版の用紙 21 ページにも亘る膨大なもので、国語への国民の意識を実に多角的に捉えている。調査項目は以下の 6 項目である。

1. 社会や家庭における言葉遣いについて
2. 外国人に対する日本語教育について
3. 手書き文字の字形と印刷文字の字形について
4. 言い方の使用頻度について
5. 新しい複合語、省略後について
6. 慣用句等の意味・言い方について

#### 【注】

<sup>1</sup>文化庁による「平成 26 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」に基づく。世論調査そのものは、必要箇所を資料として論文末に記載する。

### 2-5-1-2 平成 26 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

#### — 社会や家庭における言葉遣いについて

「今の国語は乱れていると思うか。」の問に対して 73.2%が「乱れていると思う」と回答

している。過去の調査結果と比較すると減少傾向にはあるが、それでも7割以上という数値は極めて高いと言わねばならない。乱れていない国語を使う人と、乱れた国語を使う人との間では、コミュニケーションの成立も難しくなると筆者は捉える。この度の調査では、どういう点で乱れているか、乱れをもたらす要因は何か、までは採り上げていないが、コミュニケーションに直接関わる問題であると考えられよう。

## 2-5-2 平成25年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

### 一 社会全体の言葉や言葉の使い方について

平成25年度の調査を見てみると、調査項目は以下の7項目である<sup>1)</sup>。

1. 社会全体の言葉や言葉の使い方について
2. 人とのコミュニケーションについて
3. 読書について
4. 敬語について
5. 漢字を用いた語と外来語の意味・使い分けについて
6. 「～る」「～する」形の動詞について
7. 慣用句等の言い方について

平成25年度の調査項目の中で筆者が注目したいのは、1番初めにある「社会全体の言葉や言葉の使い方について」である。この項目の中の、さらに細かい項目の一つである「言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心は、どうなっていると思うか。」について、全体では「以前よりも高くなっていると思う」が22.8%、「以前よりも低くなっている」が48.2%と高い数値でほぼ5割である。「以前よりも低くなっている」を年代別に見ると、16~19歳が35.4%、20代が38.0%に対して30代では51.0%と急激に増え、以降40代52.9%、50代52.6%、60代52.4%と、この4世代がほぼ同じであり、70歳以上になると42.0%と急減している。30代から60代の中高年が5割台で高いことがわかる。すなわち社会の中心で活躍する世代の関心が低い。自分の国の言語への関心が低いとは、ゆゆしき問題である。関心が低いとは無頓着で、大事にしていないということである。

一方16~19歳では逆に「以前よりも関心が高くなっていると思う」が34.1%で、世代別では1番高い。若い世代のこの高数値は嬉しいことである。この世代は学校教育から受ける影響が非常に大きいと考えられる。学校の国語教育で言葉を学び、国の文学に触れ、洗練された日本語に多く接していることが、関心の高さに繋がっているのではないか。

次に「言葉や言葉の使い方に対する関心」に大きく関わると思われる「言葉や言葉の使い方への影響」を見る。この影響が大きいと国民が思っているものとして「テレビ・ラジオ」が55.7%という、全体の5割台半ばを占めており、「学校」が27.2%、「家庭」が26.5%と2割台後半である。「学校」・「家庭」による影響は、「テレビ・ラジオ」より著しく低い。



いわゆるメディアの影響が大であることがわかる。「テレビ・ラジオ」は視聴者が一方的に受け手となるものであり、送り手と受け手との相互作用ではない。また受け手の一人一人に向かってテレビ・ラジオが語りかけている訳ではない。それに対して「学校」・「家庭」は相互作用の場であり、1対1の応対である。相互の関係がより関わるのはこちらの方だ。人間同士のコミュニケーションの要素がより強いのは「学校」・「家庭」であるが、これらの影響が「テレビ・ラジオ」の約半分に過ぎないという結果に、筆者は寂しさを感じる。

「言葉や言葉の使い方に関する社会全体の知識や能力は、どうなっていると思うか。」に対して「以前よりも高くなっていると思う」が13.7%、「以前よりも低くなっていると思う」が57.3%で後者が前者より断然高く、憂うべき結果である。「低くなっている」を年代別に見ると20代62.0%、30代60.7%、40代63.5%とほぼ同じだが、50代では66.7%とやや高い。60代になると60%を切り58.0%、70代では44.7%とあり、60代・70代の高年齢の世代では急に低くなっている。すなわち他の世代に比べると、国語の知識・能力は低くなっていると思っていない。16~19歳ではこの項目は42.7%と1番低く、次の世代である20代が62.0%であるから、20ポイントも差があることがわかる。逆に「以前よりも高くなっていると思う」が16~19歳では他のどの世代よりも高く、26.8%である。

この項目での16~19歳の高ポイントは、以前に述べた国語への関心において、やはり16~19歳が高ポイントだったという結果と一致している。関心が高ければ、それについて学ぼう、知ろうという意欲も高まって学ぶことになり、よって知識や能力も高くなるということであろうか。関心と能力には相関関係があるようだ。よって関心が低ければ、当然知識・能力も低下することになる。無関心なので知識・能力も劣る、知識・能力が劣っているので関心が持てない、と悪循環を生み出すことになる。16~19歳という若い世代の、この度の結果は嬉しいことではあるが、社会の中心である20代~50代の6割以上が国語能力の低下を感じていることは、看過できない。この国語能力の低下については、平成23年度の調査においても扱われた項目だが、この年度においても悪しき結果を呈している。

## 【注】

<sup>1</sup>文化庁による「平成25年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」に基づく。世論調査そのものは、必要箇所を資料として論文末に記載する。

### 2-5-3 平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

#### — 人とのコミュニケーションについて

次に、平成24年度の世論調査を見てみる<sup>1</sup>。調査項目は以下の10項目である。

1. 人とのコミュニケーションについて
2. 外来語や外国語などのカタカナ語の使用について

3. 国語に関わる知識や能力についての課題
4. 文字の手書きについて
5. 手紙の作法について
6. 言葉の意味や使い方がわからないときにどうするか
7. 同訓の漢字の使い方について
8. 五つの言い方の認知と使用
9. 言葉の意味
10. 慣用句の言い方

筆者はこの中の項目 1「人とのコミュニケーションについて」をここで採り上げる。10もの調査項目がある中で、これが1番初めに置かれているという事実に、文化庁すなわち国も、コミュニケーションを重く見ているという推察も働く。「人とのコミュニケーションについて」に関する質問事項は次の五つである。

1. 誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、ないか。
2. 誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか。
3. 人とのコミュニケーションにおいて、難しいと感じること。
4. 人とのコミュニケーションにおいて、重視すること。
5. 誰かと話をするとき、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか。

問1の「誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、ないか。」について、6割台半ばが「ある」と回答している。この調査はもちろん、外国人との間の外国語でのコミュニケーションではなく、日本人同士の国語でのコミュニケーションを扱っている訳だが、同国人同士であるにも関わらず、66.5%もの人が、食い違いがあると答えている。特に16~19歳では81.1%であり、若い世代ではかなり高いことがわかる。言葉を使つての、すなわち言語コミュニケーションにおいて、コミュニケーションできていない例が、実に多いことがわかる。

この問1に付随した次の質問がある。「相手の言いたいことを理解できなかった理由」は何か。これについて、「相手の話し方に問題がある(17.7%)」との回答よりも、「自分の聞き方に問題がある(29.3%)」との回答が10%以上も多い。「話し上手は聞き上手」という諺を改めて認識させられる。発信者である相手ではなく、受け取る側の自分に問題があると感じている人が多いことがわかる。16~19歳38.3%・20代39.7%・30代35.3%・40代25.7%・50代21.6%、60歳以上は多少上がって28.2%という結果であるが、概して若い世代ほど数値が高い。問1の2問から、言葉を使つての、いわゆる言語コミュニケーションも難しいものであることがよくわかる。言葉を使ったからといって、相手の言うことを正確に受け取っているとは限らない。

問2の「誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか。」については、6割以上の方が「ある」と回答している。63.4%であり、かなり高い数値である。大幅な差ではないが、16~19歳(68.9%)・20代(70.3%)・30代(71.1%)の若い世代が、40代(66.7%)・50代(68.7%)・60歳以上(56.6%)の世代よりも多い。60歳以上では他の世代より10%以上も下回っている。すなわち60歳以上は他の世代に比べれば、相手にうまく伝わっていると考えている。若い世代の方が、自分から相手へのコミュニケーションが成立していないと感じていることがわかる。

この問2に関して次の質問がある。「自分の言いたいことが伝わらなかった理由」は何か。「相手の聞き方に問題がある(8.6%)」との回答よりも「自分の話し方に問題がある(55.0%)」の回答の方が圧倒的に多く、半数以上を占めている。年代別に見ると16~19歳が80.4%と著しく高く、20代(67.5%)・30代(68.6%)・40代(57.8%)・50代(55.9%)と年代が高くなるにつれてほぼ低下傾向にあり、60歳以上では43.1%と急激に低くなっている。若い世代ほど、自分の話し方の不適切さを意識していることがわかる。この原因は何か。携帯電話やスマートフォン等の普及により、文字を打つ、すなわち書いて伝えることは常時行っているが、音声を通して直接言葉に出して伝える、相手に直接話すということを、しなくなってきているからであろうか。こう簡単に結論付けるのは危険だが、原因の一端となる可能性はある<sup>2</sup>。

小説家、大江健三郎氏が述べている。「現にいま、きわめて多数の何も言葉をしゃべらない若い人がいるわけですから、失語症みたいな。ゲームだけやっていたり、文章を表現するよりは機械で表現したりしている人たちがいるんですから<sup>3</sup>。」氏は「多数のしゃべらない人」に危険性を感じている。巷の人を見ても、携帯電話やスマートフォン等を操作しながら歩いている人、バスや地下鉄等を待っている人が実に多い。上を向いて人と話すよりも、下を向いて機械に向かっている。上記の調査結果の原因をここにだけ向けることは短絡的だが、少なくともコミュニケーションのあり方が変わってきたと言うことはできる。

「自分の言いたいことが伝わらなかった理由」は何かという質問に対して、「相手の聞き方に問題がある」との回答はわずか8.6%であり、「自分の話し方に問題がある」の回答が55.0%と遥かに高い数値であったことは前述の通りだが、「相手の聞き方に問題がある」を年齢別に詳しく見てみると、また考えさせられる。16~19歳が2.0%・20代4.1%・30代6.8%・40代4.6%・50代5.9%と、概して年代が高くなるにつれて数値も高くなっているが、微々たる推移ではある。ところが60歳以上では13.6%であり、一つ前の50代の倍以上で、急に高くなっている。聞き手がしっかりと聞いていないと判断している60歳以上が多いということだ。現在の機械中心ではなく、人と人々が直接コミュニケーションを図ることに慣れていない世代からの、「下手な聞き手」への警告であるとも受け止められる。

世論調査の問3は「コミュニケーションにおいて、難しいと感じること」は何か、に対して、4割の人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答している。正確には40.5%である。次に高いのは「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」で、34.4%である。人間関係の構築とは、相手を傷つけないように、波風が立たないように、平和に、仲良くということであり、そうしながらも自分の言いたいことは伝え、相手

の言いたいことも理解する、これが難しいということである。

人間関係を大切にしようとするならば、伝えたいことも伝えずに我慢せざるを得ないこともある、とも解釈できる。自分と相手との関係を平和に保つということである。国語学者、また英語学者でもある外山滋比古氏が、「当りさわりのない言葉」というタイトルの章の中で、次のように述べている。「いまかりに、コミュニケーションを目的としないで、人間関係の確立、維持のために行われる言語活動をアルファ・コードと呼び、情報、意志などの伝達を主眼とする言語をベータ・コードと呼ぶならば、われわれの日常生活の大部分はアルファ・コードによって営まれていることを知るであろう<sup>4</sup>。」正に世論調査の結果と合致した日本人のふるまい、日本社会のあり方を言い当てている。さらに氏は次のようにも言っている。「ベータ・コードが、相手との距離にかまわず、『スピードをスピードと呼ぶ』（ずけずけあからさまに言う）ことを建前としているのに対して、アルファ・コードは相手の心を傷つけないように、言葉を選びながら話すのである<sup>5</sup>。」例に挙げている諺は英語の“call a spade a spade”に由来するが、ここにはものの言い方についての西欧と日本との相違も表れている。相手との人間関係を大切に、最優先するのが日本人の姿勢ということか。しかしこの調査結果から推し量られる、人間関係を平和に保ちたいがために、言いたいことも言わないで終わっているというコミュニケーションのあり方には、疑問が残る。

問4は問3をそのまま受けたものである。「人とのコミュニケーションにおいて、重視すること」は何かという質問に対して、6割台半ばの人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答している。年齢別に見ると16~19歳が62.2%・20代72.6%・30代71.5%・40代69.1%・50代65.0%・60歳以上60.6%である。20代から40代が、他の世代に比べて高い。また、同じ問4の中で、人間関係よりも「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」の方を重視するとの回答は15.0%であり、「人間関係」の4分の1にも満たない。年齢別に見ると60歳以上が18.2%と高いが、他の世代はすべて12%台・13%台にあり、差も微々たるものである。国民の意識では、コミュニケーションにおいて、論理性を通すことよりも、人間関係の重視の方が重んじられていることがわかる。

最後の質問である問5は「誰かと話をするとき、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか」に対して、「話したり聞いたりするときの態度が悪い(32.3%)」、「話が理解されず会話がかみ合わない(32.2%)」、「相手ばかり話している(31.0%)」が30%以上で数値が高い。

以上はコミュニケーションに関する、平成24年度の調査に基づく概要説明であるが、さらに、平成23年度の調査にも目を向けてみたい。

#### 【注】

<sup>1</sup>文化庁による「平成24年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」に基づく。世論調査そのものは、必要箇所を資料として論文末に記載する。

<sup>2</sup>劇作家・演出家・漫画原作者・非言語コミュニケーション研究者、竹内一郎氏も「ネットのコミュニケーションが増えたために、フェイス・ツー・フェイスのコミュニケーション

ンが減った」と述べ、コミュニケーションの質が変わっていること、特に非言語コミュニケーションの割合の減少を指摘している。竹内一郎『なぜ私たちは他人の目を気にしてしまうのか』（東京：三笠書房、2014年第1刷）、p.58.

<sup>3</sup>河合隼雄『日本人の心』の中の河合氏と大江氏との対談「生と死の境界、そして文学 vs 大江健三郎」（東京：潮出版社、2001年）、p.191より。

<sup>4</sup>外山滋比古『日本語の個性』（東京：中央公論社、1976年初版、1998年第30版）、p.126.

<sup>5</sup>同上、p.127.

## 2-5-4-1 平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 — 日本語能力の低下

平成23年度の世論調査を見てみると、調査項目は以下の10項目である<sup>1</sup>。

1. 言葉の使い方について
2. 日本人の日本語能力について
3. 多様化する情報交換手段の日常生活への影響について
4. 人とのコミュニケーションについて
5. 句読点等の使い方について
6. 異字同訓の漢字の使い分けについて
7. ふだんの言い方について
8. 印刷文字と手書き文字の字形の違いについて
9. 言葉の意味
10. 慣用句等の認識と使用

筆者がこの中で採り上げたいのは項目2「日本人の日本語能力の低下」と項目3「多様化する情報交換手段の日常生活への影響について」である。まず項目2であるが、平成25年度に扱われ、平成24年度には見られなかった「日本人の日本語能力の低下」という項目が、この平成23年度では扱われている。「日本人の日本語能力が低下しているという意見について、どう思うか。」という質問に対して、「低下していると思う。」と考える人が、「読む力」、「書く力」、「話す力」、「聞く力」のすべてにおいて、極めて多数である。「読む力」78.4%、「書く力」87.0%、「話す力」69.9%、「聞く力」62.1%と、低下を認める数値が高い。憂うべき結果である。平成13年度（2001）、すなわち10年前と比較すると、「読む力」の低下意識は10年前68.8%であったのに対してこの度の平成23年度では78.4%で約10%も増えている。「話す力」は10年前の59.2%に対し、本調査では69.9%で、これも約10%増えている。「聞く力」は10年前の57.0%に対して本調査では62.1%で5%の増である。「書く力」は10年前88.1%で、この度は87.0%であり、この「書く力」だけが10年前の低下意識よりもわずかに1.1%減っているが、微々たる数値であり、低下意識自体は87.0%もあるのだから、大きい問題であることに変わりはない。

この世論調査はあくまでも意識調査であるから、原因を細かく掘り下げるところまでは行っていない。しかしながら、平成 24 年度の調査で明らかになったコミュニケーションの不成立、換言すればコミュニケーションの下手さが、この日本語能力すなわち国語力の低下と、関連があることは容易に考えられる。また平成 24 年度の調査において、自分を話し下手・聞き下手と捉える意識が、特に若い世代で高いことが確認されたが、これも日本語能力低下の表れと解釈することは可能である。

【注】

<sup>1</sup>文化庁による「平成 23 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」に基づく。世論調査そのものは、必要箇所を資料として論文末に記載する。

2-5-4-2 平成 23 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 — 情報交換手段の多様化

次に採り上げる項目は「多様化する情報交換手段の日常生活への影響について」である。携帯電話や電子メール等の普及によって、情報交換手段が多様化しているが、そのことが日常生活にどのように影響を与えているか、意見を尋ねたものである。12 の選択肢がある。

		【平成 13 年度】
1. 漢字を正確に書く力が衰えた。	66.5%	41.3%
2. 手紙やはがきは余り利用しないようになった。	57.2%	41.6%
3. 手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった。	42.0%	31.9%
4. 口頭で言えば済むことでも、メールを使うようになった。	29.5%	17.2%
5. 携帯メールの着信が気になって度々確認するようになった。	22.2%	16.5%
6. 直接人と会って話すことが面倒くさく感じるようになった。	18.6%	11.3%
7. 大した用もないのに携帯電話を掛けるようになった。	18.1%	17.3%
8. 電車の中など公共の場所でも、 自分だけの世界を作れるようになった。	16.6%	6.7%
9. 友人と常に携帯電話で連絡を取り合わないでは いられないようになった。	7.9%	7.5%
10. メールだと悪筆であることも関係ないので、 まめに発信するようになった。	7.9%	6.7%
11. 漢字を多く使うようになった。	4.3%	4.3%
12. 特に思い当たることはない。	7.7%	21.4%

この中で筆者が注目したのは、言語の口頭・音声コミュニケーション<sup>1</sup>と関わる項目 4 と項目 6 である。項目 4 はコミュニケーションを行うに当たって、話すということをしなくなってきたことを表す。項目 6 も然りである。この 4 番と 6 番は、平成 24 年度調査で挙

がっていた項目、「その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていた」、及びこの逆の「自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかった」、いわゆるコミュニケーションの不成立・失敗と関わっているのではないか。平成 24 年度調査について述べた際にも、筆者はこの、コミュニケーションの不成立と新情報交換手段の相関関係を指摘した。コミュニケーションの不成立の原因が、イコール新情報交換手段の普及であるとは結論し得ないが、両者の関連性は深い。また項目 8 は、否定的に見れば「自分の殻に閉じこもる」とも言える。「相手に直に接して」、「面と向かって」、「共有の場」の逆の状況を指しており、ひいては「人とのふれあい」、「人と人との和」に反するものである。

上に挙げた 3 項目の結果を、平成 13 年度すなわち 10 年前の調査と比較してみると、4 番では、平成 13 年度が 17.2%であったのに対して、平成 23 年度では 29.5%であり、12%以上増えている。実際に話すというコミュニケーションが、こんなにも減ってきたということか。6 番では、10 年前が 11.3%であったのに対して、この度は 18.6%で、7%以上の増である。話すコミュニケーションを避ける傾向が、かようにも増えていることがわかる。8 番は平成 13 年度では 6.7%であったが、平成 23 年度では 16.6%にも上り、約 10%もの増である。大勢の人の中にいても、一人の世界を作りたがり、そのことをよしとする考え方がこのように増加してきていることが確認される。

さらに 1 番最後の項目を見てみる。「情報交換手段の多様化が、日常生活にどのような影響を与えているか。」というもとの問に対して、「特に思い当たることはない。」の回答が、10 年前には 21.4%もいたのに対して、最新データでは 7.7%である。約 13%減っている。12 もある項目の中で、数値が減っている項目はこれのみである。「思い当たることがある。」と考える人が増えているということになる。「思い当たること」が上の項目の数値の増加に繋がっており、情報交換手段の多様化が、日常生活に大きく影響していると認識している人が、増しているということになる。

携帯電話、スマートフォン、電子メール、パーソナル・コンピューター等の普及は、効率のよさ、便利さといったメリットも多々もたらしている。それは事実である。しかしこうした調査結果を見ると、相手と直接会って相手の顔を見て実際に話をし合う、いわゆる口頭の、音声を通じてのコミュニケーションにおいて、これでよいのかという疑問の余地は大きい。

#### 【注】

<sup>1</sup>単に「言語コミュニケーション」と言うと、文字を書き、読むことによるコミュニケーションも含むので、ここではこのように「口頭・音声コミュニケーション」という言い方をしている。

## 2-6 世論調査の結果と茶の湯

遡る形で平成 26 年度・25 年度・24 年度、及び 23 年度の『国語に関する世論調査』の

結果の概要」を調べることにより、国民の多くが今の国語は乱れていると思っており、日本人の国語への関心、そして知識・能力が低くなっていると感じていることがわかった。また言語を使つてのコミュニケーションでさえも、適切に成立していない、すなわち自分の言いたいことが相手に伝わっていなかったり、逆に相手の言いたいことを自分が受け入れていない例が、実に多いことがわかった。その理由として、自分の側が話し下手・聞き下手であるとの両方の認識共、高いものであることも見えてきた。その裏には日本語能力の低下という理由もある。また、携帯電話、スマートフォン、電子メール、パーソナル・コンピューター等、情報交換手段が非常に多様であることが、日常生活に大きく影響している、との認識が高まっていることもわかった。さらに、この情報交換手段の多様化が、口頭のコミュニケーションにとってマイナスの要因でもあることも、読み取ることができる。言語を用いてでさえ、このような難しい現状である。

送り手は話して伝え、受け手はそれを聞いてコミュニケーションを図る。あるいは送り手は書いて伝え、受け手はそれを読んでコミュニケーションを図る。話す・聞く・書く・読むという四つの言語技能が、正にコミュニケーションを成立させている訳であるが、この4技能自体が低下し、また近代的情報手段もマイナスに働くことがあるということであれば、言語に代わるものの介在が問われるのであろうか。「言語」を繰る能力である4技能に代わるコミュニケーション手段が、問題になるのであろうか。茶の湯においてはそれがどうなっているのか。言語を介さなくても、主客間のコミュニケーションが成立するのであろうか。そうであるなら、成立を可能ならしめている要素は何か。非言語要素の重さを考えることに、意味があるのではないか。茶の湯ではそれがどうなっているのか。

言語を用いてのコミュニケーションでさえ難しいことが世論調査から浮かび上がってきた訳だが、ましてや非言語でのコミュニケーションが茶の湯においては成り立つのか否か。あるいは、言語ではなく非言語であるが故の特別の意味が、茶の湯にはあるのであろうか。世論調査を直接茶の湯に結び付けることには飛躍があるとしても、この調査は茶の湯における言語・非言語を考える上で、示唆的なデータであると言える。次章では言語と非言語について述べるが、それを踏まえた上で、本章での世論調査からいよいよ疑問視されるコミュニケーションの問題を、茶の湯において考察したい。

本世論調査は国語を対象としている訳だが、国語すなわち日本語と茶の湯には共通性が多い。その意味でも、国語についての日本人の意識を知ることが、茶の湯に働く日本人の意識・思い・心を知ることにも繋がると思われる。

## 2-7 むすび

コミュニケーションについては、実に様々な学者が様々な定義を行っているが、これらを踏まえた上で、筆者は茶の湯におけるコミュニケーションを次のように定義する。



茶の湯のコミュニケーションとは、言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセスである

コミュニケーションの現状を探るべく、平成 26・25・24・23 年度の「国語に関する世論調査」を見てみる。平成 25 年度では、言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心が低下している、と国民は捉えている。これに関わる「言葉や言葉の使い方への影響」が大きいものとして、学校・家庭よりもテレビ・ラジオが挙げられている。実際に人と人とが向き合って話すやり方よりも、テレビ・ラジオという一方的な作用が重きを成している。また、言葉や言葉の使い方に関する社会全体の知識や能力が低下している、と捉えている。日本語への関心と日本語の知識・能力の間には、相関関係があるようだ。

平成 24 年度では、人とのコミュニケーションがうまくいっていないと思う、と国民は捉えている。「誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていた」、「誰かに話をしていて、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかった」の両方においてである。そして、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」よりも「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」が難しいと考えている人が多い。

平成 23 年度では、日本語能力の低下を意識する解答数値が高い。また携帯電話、スマートフォン、電子メール、パーソナル・コンピューター等の多様化する情報交換手段が、日常生活に大きく影響していると認識している人が増加している。

以上の調査結果を筆者の論に関連付けて捉えると、言語を使ってすらコミュニケーションは的確に成立しておらず、多数の日本国民が、正確なコミュニケーションよりもむしろ人間関係の大切さを考えていることが見えてきた。茶の湯においてはどうなのであろう。言語に代わる手段が茶の湯のコミュニケーションではあり得るのか。言語を介さなくても、主客間のコミュニケーションが成立するのであろうか。国語に関する国民の意識調査を踏まえて、茶の湯のコミュニケーションの考察に臨みたい。

なお、本文に関する、実際の平成 26 年度・25 年度・24 年度及び 23 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」の必要箇所を、資料として論文末に掲載しているが、各表題の下にある破線の四角内にある\*印付きページ番号、例えば (P.3\*) は、報告書すなわち世論調査そのもののページ番号を指しており、本論文のページ番号ではない。

## 第3章 言語と非言語

### 3-1 はじめに

本章では言語と非言語を扱う。言語の定義に始まり、言語と文化の密接性を国内外の説から捉える。次に非言語コミュニケーションの要素を、茶の湯に照らし合わせて見てみる。

さらに、言語をあまり使わないハイ・コンテクスト文化と、逆に多く使うロー・コンテクスト文化の提示を行う。後者は話すことを重んじる文化の国であり、文学・弁証法等の歴史にその例を探る。前者、すなわちハイ・コンテクスト文化の日本は、話すことを重んじない文化の国であり、格言・諺・文学にもその例が多く表れている。文学を例に挙げているのは、文学は「文化に関する生のデータ<sup>1</sup>」であり、文化理解のために、その国の文学を探ることは効果的かと思われるからである。そして最後に、ハイ・コンテクスト文化を育む深い、密な人間関係について考察する。西欧との比較を行っているが、そのことによって、話すことを重んじない日本文化がより明確になるからである。

#### 【注】

<sup>1</sup>エドワード・ホール『文化を超えて』岩田慶治・谷泰 訳（東京：TBS ブリタニカ、1993年）、p.130.

### 3-2 言語の定義

言語とは何か。『広辞苑 第6版』では次のように定義されている。「①人間が音声または文字を用いて事態（思想・感情・意志など）を伝達するために用いる記号体系。また、それを用いる行為。ことば。→ごんご。②ある特定の集団が用いる、音声または文字による事態の伝達手段。個別言語。日本語・英語の類<sup>1</sup>。」本論文で、まず問題にするのは①の方であり、さらに具体的にはこの国、日本の言語、すなわち日本語を論じるという意味で②が関わってくる。次章では日本語そのものについて詳しく考察する。

『世界大百科事典』第9巻の「言語」の項には次の解説が見られる。「人間同士の意思伝達の手段で、その実質は音を用いた記号体系である。〈ことば〉ということもあるが、〈ことば〉が単語や発話を意味する場合がある（例、〈このことば〉〈彼のことば〉）ので、上記のものをさす場合は、〈言語〉を用いた方が正確である。また、人間以外のある種の動物の〈言語〉をうんぬんすることも可能ではあるが、その言語能力と、内部構造の複雑さおよびそれとうらはらの高度な体系性などの点で、人間の言語は動物のそれに対して質的なちがいを有している<sup>2</sup>。」言語を体系として捉え、動物とは全く異なる意思伝達手段であると述べている。言語学者、松村一登氏は言語を「私たちが、考え・感情・意思などを表現するために用いる記号の体系である<sup>3</sup>。」と一般的で平易な定義を行っている。同じく言語学者、町田健氏は言語を「意味を音声によって伝達する手段である<sup>4</sup>。」としている。話し言葉の他に書き言葉もあるため、「音声」に限ることはないのではないかと筆者は考える。

海外の学者による定義付けを見てみると、19世紀ドイツの言語学者フンボルトは「言語

は思考を形成していく <sup>オルガン</sup> 器官である。…知的活動と言語はもともと一体なのであり、相互に切り離すことのできないものである<sup>5</sup>。」と述べている。また「言語は精神であり、精神は言語である。<sup>6</sup>」とも説いている。思考も精神も人間の根本を成し、人間と切り離せない。それらが言語と密接であるということは、言語こそ人間の根本を成すものであり、人間にとって必須の存在であるということになる。ロシアの言語学者バフチンは「言語とは絶えざる生成の過程である。それは、語り手、聴き手の言葉による社会的な相互作用 [コミュニケーション] という形をとって実現される過程である<sup>7</sup>。」と、人対人の観点から言語を定義付けている。私たちが何かを考える際には必ず言語を使っており、言語なしに考えることは不可能であろう。また思考するということは正に人間ならではの行いであり、よって言語を有することが人間である証しなのである。上の定義の中にもある通り、動物の言語を問題にすることもあるが、人間のそれとは比較にならない。

例えばミツバチのダンスの研究がある。ミツバチは腰を振ってダンスを行うが、太陽との角度と腰を振る時間によって、えさ等がどの方角に、またそこからどのくらいの距離の所にあるのかを仲間に伝えるという。意味もなく単に腰を振っている訳では決してなく、蜜や花粉・水源地・新しい巣の予定地をも知らせることに驚く<sup>8</sup>。ドイツの動物行動学者カール・フォン・フリッシュは、その著作『ミツバチの不思議』に三つの章を設けているが、第3章は「ミツバチのことば」であり、正に言語扱いの題名である。情報を伝えるという点では、このダンスは確かに人間の言語に相当するかもしれない。しかしミツバチのダンスに時制はない。今えさ等があることを伝えるだけであって、昨日も同じ場所にあった、明日もきっとある、等と伝達することはできないのだ。

鳥の観察もある<sup>9</sup>。鳥は大きい鳴き声で盛んに鳴き、翼を激しく羽ばたかせることにより、自分たちに危害を加えるもの、すなわち敵が近づいていることを仲間に知らせるといふ。この行動は確かにメッセージ伝達であり、人間の言語に当たるかもしれない。しかし人間と違って相談はできない。敵が来ることを伝えるのみであり、敵が来る、だから早く逃げようと話し合う、あるいはみんなで団結して敵に立ち向かおう、戦おうと決める、等の行為には繋がらないのである。

お互いのコミュニケーションを図る動物の例はさらにあり、インドに住むある種の猿は、主として危険を知らせる6種類から9種類の異なる叫び声を有し、聞いた仲間の猿たちは、叫び声の種類によって逃げ方や警戒の仕方をそれぞれ変えているという。オオカミや犬も、異なった吠え声を持ち、それぞれ違った情報を交換していることがわかる<sup>10</sup>。しかしせいぜい数種類であり限られている。人間のように無限の情報がやりとりされる訳ではない。

複雑さ、体系の高度さから言って、人間の言語は動物のそれとは全く次元を異にしていることがわかる。町田健氏も語っている。「ある動物が人間と呼ばれるためには、言語を使用しているか、あるいは言語を使用できる能力を備えたものでなければならないのです<sup>11</sup>。」氏は次のようにも述べている。「人間は言語を使う動物です。そして、人間以外に言語を使う動物はいません。ですから、言語こそが人間の本質を形成するものだと言うことができます<sup>12</sup>。」文化についての章の中で、茶は文化に関わる飲み物である、すなわち嗜好

品を飲むのは人間だけであり、他の動物には見られないことであると述べたが、言語も然りである。茶を喫することと同様に、言語を使うことは人間であることの証しである。茶と言語の間には共通性が見られる。

また日本語教育者、田中望氏は「言葉には人間関係を作る働きがある<sup>13</sup>。」と述べており、確かにそうである。一人で生きている人間はおらず、私たちは常に他者と共にあり、ある人間関係の中で生活している。言語はその関係を築く土台、人間関係を根底から支える基盤である。また人間関係を作る働きがあると共に、壊す働きもあることを、筆者は付け加えたい。言語とはそれだけ恐い力をも持ち得る。茶の湯もまた人間関係の上に成り立ち、人と人との和が常に問われる文化である。茶の湯と言語には共通性が見られる。明治期から昭和期まで長らく文壇で活躍した谷崎潤一郎は、言語について次のように言っている。

「言語は思想を伝達する機関であると同時に、思想に一つの形態を与える、纏まりをつける、と云う働きを持っております<sup>14</sup>。」文学者からのこのような言語観もある。人間は言語を使って考える。そして行動する。以上に述べてきたことを踏まえ、筆者は言語を「人間による、音声または文字を用いて意思と情報を伝達する手段」と定義する。「意思」には心情・感情といった「心」が含まれ、よって意志ではなく、より広い意味合いを持つ意思と表記するが、後に茶の湯を語るに当たって「心」の問題は非常に重要となってくる。

「言語」と共に「言葉」という用語もある。両者を同じように使っている例は多々あるが、本論文では原則として「言葉」は個々の単語を、「言語」は単語・文・文法範疇をも含めた、より広い体系を指すものとする。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 新村出 編『広辞苑 第6版』（東京：岩波書店、1955年第1版第1刷。2008年第6版第1刷）、p.898.
- <sup>2</sup> 加藤周一 編集長『世界大百科事典』第9巻（東京：平凡社、1988年初版、2007年改訂新版）、p.56.
- <sup>3</sup> 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学』（東京：東京大学出版会、1993年初版、1994年第3版）、p.2. 本章は松村氏による。氏は『ことば』とは」から始めて引用にある定義を行っているが、ここでの「ことば」は「言語」と取ってよい。
- <sup>4</sup> 町田健・靱山洋介『よくわかる言語学入門』日本語教師トレーニングマニュアル③（東京：バベル・プレス、1995年初版第1刷、2000年初版第7刷）、p.2.
- <sup>5</sup> ウィルヘルム・フンボルト『言語と精神』亀山健吉 訳（東京：法政大学出版局、1984年）、p.85.
- <sup>6</sup> ウィルヘルム・フンボルト、「人間言語の多様性と人間の精神的発達に対して及ぼすその影響について（1836）」を、言語学者、池上嘉彦氏が『記号論への招待』（東京：岩波書店、1984年第1刷、1999年第33刷）、p.34. で引用している。
- <sup>7</sup> ミハイル・バフチン『言語と文化の記号論』ミハイル・バフチン著作集④ 北岡誠司 訳（東京：新時代社、1980年第1版、1990年第1版第4刷）、p.216.
- <sup>8</sup> カール・フォン・フリッシュ『ミツバチの不思議』〔第2版〕伊藤智夫 訳（東京：法政

大学出版局、1953年初版第1刷、1986年第2版第1刷、2005年改装版第1刷) 参照。  
三つの章の第1章は「ミツバチの色感覚」、第2章「ミツバチの化学感覚」、第3章が  
「ミツバチのこぼば」で、この第3章においてダンスについて説明している。

9 田中春美・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時弘『言語学入門』(東京：  
大修館書店、1975年初版、1999年第33版)、p.7. 本章は田中春美氏による。鳥の鳴き  
声による伝達について言及している。

10 同上、p.7. 猿・オオカミ・犬の叫び声・吠え方について述べている。

11 町田健・靱山洋介『よくわかる言語学入門』、p.2.

12 町田健『日本語の正体』(東京：研究社、2008年初版)、p.2.

13 田中望『外国人に日本語を教える本』(東京：明日香出版社、1988年)、p.43.

14 谷崎潤一郎『文章読本』、『谷崎潤一郎集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・  
川端康成 監修『日本文学全集』第12巻所収(東京：河出書房、1966年。初出は1936  
年、中央公論社。)、p.338. 太字は谷崎による。

### 3-3 文化と言語の密接性

文化と言語が極めて密接であることをここで述べたい。ポーランド出身のイギリス人文化人類学者マリノフスキーは、“context of situation” (環境の脈絡<sup>1)</sup>) ということ述べている。例えば日本人は挨拶としてお辞儀をするが、英語圏ではそのような習慣がない<sup>2</sup>。英語圏の人がお辞儀をするのは、国王陛下のようなとても位の高い人の前に罷り出た時であるとか、重大な事柄において完全敗北を認めたといった重々しい雰囲気の場合であり、挨拶としてではない。「お辞儀をする」に当たる“bow”または“make a bow”という英語はあるが、日本語の「お辞儀をする」と英語の“bow”または“make a bow”は全く異なった意味合いを持っているのである。このように文化と言語の結び付きで意味が与えられることを、マリノフスキーは「環境の脈絡」と呼んでいる。背後の文化を理解していなければ、言葉の意味も正しく捉えられないのである。言語と文化は切り離せない。筆者もこの論に心より賛同するものである。よって茶の湯という文化が、その国の言語すなわち日本語のあり方と深く通じているのではないかと筆者は捉えている。

また共にアメリカの文化人類学者・言語学者であるサピアとその弟子であるウォーフは、言語がその文化の形成に大きく影響するという「サピア・ウォーフの仮説」を立てた。ウォーフは論拠として、イヌイット民族の使う「雪」に関する言葉を挙げている。イヌイットはカナダ北部の氷雪地帯に住む先住民族で、エスキモー最大の民族である。降る雪・積もる雪・氷のように固まった雪・融けた水気の多い雪・風に吹かれて舞う雪、すべて英語では“snow”という同じ単語を使う。日本語でも然りである。「雪」の前に色々な形容・説明の表現を入れているが、「雪」自体は同じ単語である。しかしイヌイットの言語では、これらはそれぞれ別の単語となっている<sup>3</sup>。逆に「雪」自体を意味する、すなわち「雪」という単語は存在しない<sup>4</sup>。日本語で雪を表わすのにどのような単語があるだろうか。時に

注目すると初雪・根雪、降る度合いから見た大雪・小雪・吹雪、また雪質・雪自体の種類から言えば粉雪・ぼたん雪、文学的な細雪という言葉もある。筆者が思い当たるのはこの程度であるが、まだあるであろう。しかし単語数として非常に多いとは言えない。一方イヌイットの言語では、雪を表わすのに 50 もの言葉があることが知られている<sup>5</sup>。これは取りも直さず、雪というものがイヌイットの生活、広くはイヌイット文化に深く関わっていることの表れである。

アラビア語では「らくだ」を表わすのに、数十に及ぶ細かい名称があるという<sup>6</sup>。国語学者、金田一春彦氏は、日本には「雨」に関する語彙が多いことを述べ、他の学者も指摘しているところである。「日本語には自然を表す語彙が大変多いと言えますが、これは日本の自然が変化に富んでいることと、もう一つ日本人が自然に親しんで強い関心をもってきたことを意味します。自然を表す語彙のなかでことに目立つのが雨に関する語彙で、たとえば『春雨』『五月雨』『夕立』『時雨』『菜種梅雨』『キツネの嫁入り（日照り雨のこと）』、最近はまだ、『集中豪雨』とか『秋雨前線』とかいうのもある。これは日本が雨のよく降る国だからということによります<sup>7</sup>。」確かに、「五月雨を あつめて早し 最上川」<sup>8</sup>（松尾芭蕉）、「花の色は 移りにけりな いたづらに わが身よにふる ながめ（長雨、眺め）せしまに」<sup>9</sup>（小野小町）のように和歌にも雨を詠んだものは多く、日本人と雨との深い関わりは文学の中にも容易に例を見ることができる。

以上の雪・らくだ・雨のように単語数が多い例とは逆に、ある単語数が非常に少ないという例もある。ネイティブ・アメリカンのホープ族の言語には、空中を飛行するものを指す単語は二つしかないという<sup>10</sup>。鳥と鳥以外のすべてである。よってホープ語では、飛ぶ昆虫も飛行機も、鳥ではないということで、同じ単語で呼んでいる。置かれている環境が言葉と密接であるのは当然だ、との意見はもつともである。すなわちイヌイットは雪と密接な環境の中にいるので、雪を表す言葉が多くまた複雑であり、アラビアではらくだが生活環境の中でお馴染みの存在なので、らくだを意味する単語が多く、日本と雨との関係も然りだとの解釈は、いかにも妥当である。ホープ族は生活上、空を飛ぶものに重きを置いていないので単語が少ないのだ、という説明も容易に理解できる。

しかし注目すべきことは、「サピア・ウォーフの仮説」は単語だけに留まらず、文法範疇にまでも及んでいることである。サピアとウォーフはこのホープ族の言語の文法をも研究し、次のように述べている。「話題となる出来事が現在起こっていることでも過去に起こったことでも、〈事実〉として確認されている限りは、同じ語形で表してすまされる<sup>11</sup>。」すなわち英語、また日本語のように現在形と過去形という時制の使い分けをしないのである<sup>12</sup>。この背後にはホープ族の宇宙観・宇宙像が過分に働いている。「時間というものを一つのなめらかに流れる連続体として捉え、そこでは宇宙のすべてのものが等しい速度で未来から現在を通して過去に向って進むとか、あるいはその方向を逆にして、観察者が継続する流れに運ばれて絶えず過去から未来の方へ向って進んで行くというような一般的概念、ないしは直観—こういったものは、ホープ族にはないのである<sup>13</sup>。」とウォーフは述べている。よって彼等の言語には、一般的な意味での「時間」であるとか、過去・現在・未来、

また持続・継続を表す単語や文法的形態、構文や表現もないという。時間を「なめらかな流れ」として捉えるわれわれは現在と過去を区別し、それぞれ異なった語形を使う訳だが、そうは捉えないホーピ族は、使い分けをする必要もないのである。ウォーフはホーピ語を「無時間的な言語<sup>14</sup>」と呼ぶことができる、と述べている。筆者は文化を「ある集団に特有の生き方の様式」と捉えたが、生き方の根本にあるものは考え方であり、ある地域の人々の時間の捉え方、宇宙観とは取りも直さず考え方、よって文化であると言えよう。述語の時制、すなわち文法にまでも文化は影響を及ぼしているのである。

またバンクーバー島のヌートカ族の言語では、すべての単語が動詞のようであるという<sup>15</sup>。「家」という単語は英語でも日本語でも名詞であるが、ヌートカ語では「家が生じる」、「家する」という言い方をする。すなわち動詞扱いである。語尾変化によって、長らく存在する家・一時的な家・未来の家・かつて家であったもの等の事柄を表す<sup>16</sup>。日本語を母語とするわれわれから見ると、非常に変わった文法であると言わざるを得ない。英語とも全く異なっている。ヌートカ族の言語の根底には、「あらゆる種類のできごとに対して、たった一つの種類の語をもつといういわば一元論的な自然観<sup>17</sup>」が働いているのである。自然観とは自然についての考え方・捉え方であり、すなわち文化であると言える。この例からも、文化は単語のみならず、文法にまでも深く影響していることがわかる。

「環境の脈絡」、「サピア・ウォーフの仮説」より、文化と言語の密接性を、イギリス・アメリカの観点から見えてきた。ここで日本人学者の論に目を向けると、精神科医・精神分析家、土居健郎氏は次のように言っている。「ある国民の特性はその国語に習熟することによってのみ学ぶことができよう。国語はその国の魂に内在するすべてを含んでおり、それ故にそれぞれの国にとって最上の投影法なのである<sup>18</sup>。」「その国の魂」とは抽象的な表現ではあるが、その国の国民の内面性・考え方・感じ方と換言できる。その国の言語がどのようなものであるかを知ることにより、その文化が理解できるということである。よって日本語の言語としての特徴を探ることによって、日本文化である茶の湯もまたどのような文化であるのかがわかってくと筆者は考える。

英文学者、中島文雄氏も述べている。「各言語の発達には、その言語を用いる民族の文化が影響しており、その言語の表現形式が文化遺産であり、それを話す人びとの発想法に影響しているということは十分に考えられる<sup>19</sup>。」「サピア・ウォーフの仮説」と通じるが、この言語だからこうした発想をする、そしてこの文化が生まれ、というように、言語と文化は表裏一体と言っても過言ではないくらい、切り離せないものであると考えられる。

そしてここで、「言語」の反意語のようでありながら、意思・情報を伝達するという、実は「言語」と同じ役割を担っている「非言語」に目を向けたい。コミュニケーションの要素を表として、言語メッセージと非言語メッセージに分けて次に挙げる。茶の湯においては後者の方が重きを成しているのではないか、というのが筆者の見解である。

## 【注】

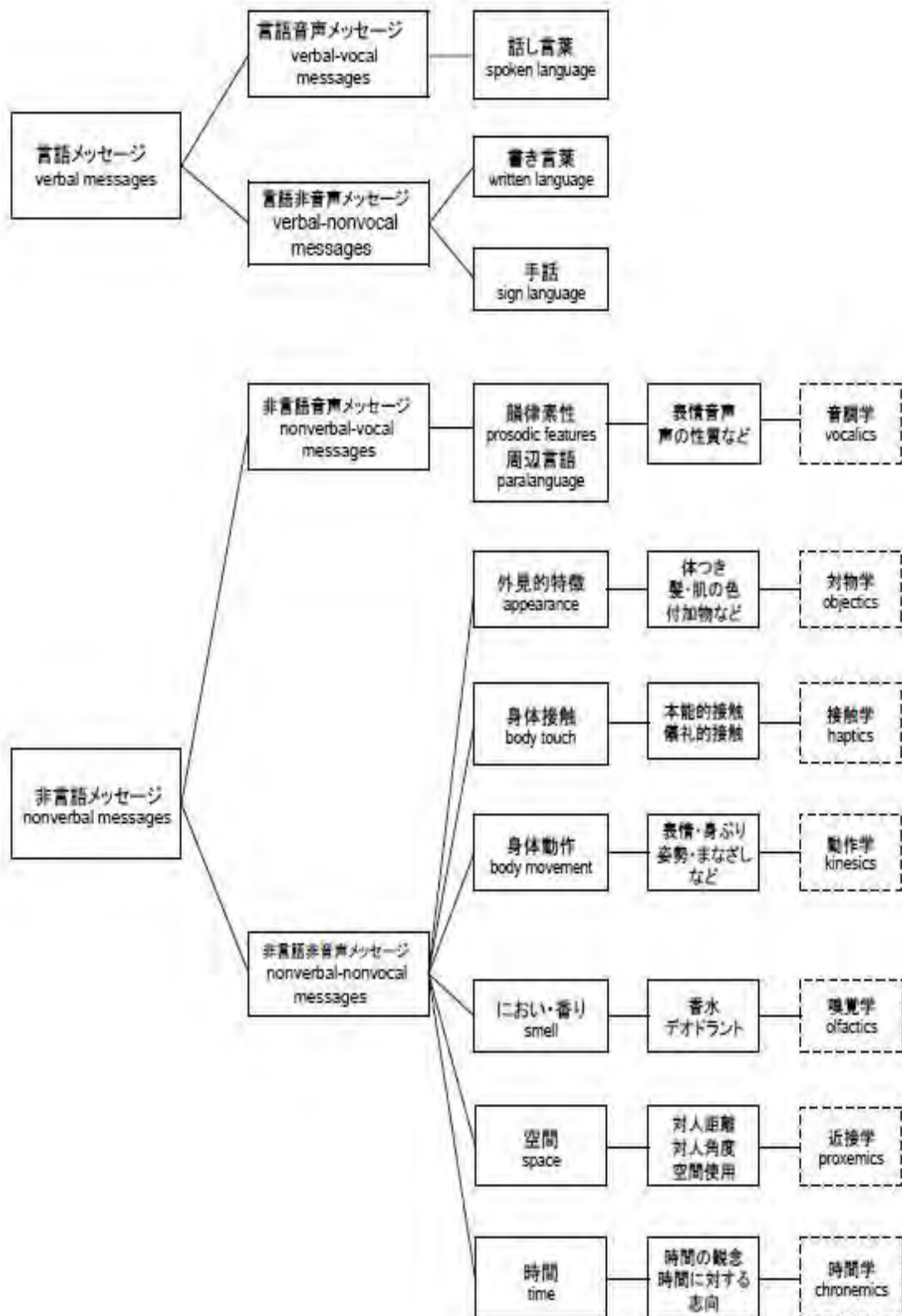
<sup>1</sup> “context of situation” という用語は Bronislaw Malinowski, “The Problem of Meaning in Primitive Languages,” *The Meaning of Meaning*, (Ogden, C.K. & Richards, I.A., 1923)



Supplement I, p. 306.より。

- 2 以下の説明は、小島義郎『日本語の意味 英語の意味』（東京：南雲堂、1988 年第 1 刷、1994 年第 6 刷）、pp.73-74.参照。
- 3 B. L. ウォーフ「科学と言語学」『言語・思考・現実』池上嘉彦 訳（東京：講談社、1993 年第 1 刷、1994 年第 4 刷）、pp.159-160. また、イヌイットの「雪」に関する言葉の多様性については、本論文第 1 章で採り上げたボアズも既に述べている。Franz Boas, *The Mind of Primitive Man*, p.211.
- 4 小島義郎『日本語の意味 英語の意味』、p.75.
- 5 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔『異文化コミュニケーションハンドブック』（東京：有斐閣、1997 年初版第 1 刷、2000 年初版第 4 刷）、p.55. 本章は岡部朗一氏による。
- 6 小島義郎『日本語の意味 英語の意味』、p.76. また同上、石井敏、他『異文化コミュニケーションハンドブック』p.55. にて、現代アラビア語・古代アラビア語の両方において、「らくだ」を表す単語が非常に多いことを指摘している。本章は岡部朗一氏による。
- 7 金田一春彦『日本語の特質』（東京：日本放送出版協会、1991 年第 1 刷、1992 年第 2 刷）、pp.125-127. で日本語の「雨」について述べている。引用は p.125. より。
- 8 『奥の細道』、『古典詩歌集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『日本文学全集』第 6 巻所収（東京：河出書房、1966 年）、p.340.
- 9 『古今和歌集』小沢正夫 校注・訳『日本古典全集』第 7 巻所収（東京：小学館、1971 年初版、1985 年第 17 版）、p.97. ルビは本書にある。括弧は筆者による。
- 10 B. L. ウォーフ「科学と言語学」『言語・思考・現実』、p.159.
- 11 池上嘉彦「学術文庫版へのまえがき」B. L. ウォーフ『言語・思考・現実』、p.4.
- 12 日本語では「現在形」という用語を使うことに注を要する。同じ動詞の形を取りながら「私は毎日 8 時に起きる。」「私は明日 8 時に起きる。」のように、現在も未来も表すことができるからである。よって「起きる」の形は現在形と言うよりも、「起きた」という過去形に対して非過去形と呼ぶ方が適切である。
- 13 B. L. ウォーフ「アメリカ・インディアンの宇宙像」『言語・思考・現実』、p.13. 太字はウォーフによる。
- 14 B. L. ウォーフ「科学と言語学」『言語・思考・現実』、同上、p.160.
- 15 同上、p.158.
- 16 同上、p.159.
- 17 同上、pp.158-159.
- 18 土居健郎『甘えの構造』（東京：弘文堂、1971 年初版第 1 刷、1988 年第 2 版第 20 刷）、pp.6-7.
- 19 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987 年 5 月第 1 刷、1987 年 7 月第 3 刷）、p.1.

3-4 非言語メッセージ  
コミュニケーションの要素<sup>1</sup>



前ページの図表について述べる。言語コミュニケーション (verbal communication) に対して非言語コミュニケーション (nonverbal communication) とは、言語以外のもの (ノンバーバル行動) によるコミュニケーション、すなわち音声による言葉や、文字を用いずに行うコミュニケーションのことである。この表において、言語メッセージの中の「話し言葉」は送り手が話し、受け手が聞くという要素であり、「書き言葉」は送り手が書き、受け手が読む・見るという要素である。茶の湯にも、もちろん当てはまる。亭主と客、また客同士が話をするという行為、軸を読むという行為は共に言語メッセージである。

非言語メッセージの中にも、茶の湯に関連する事項は多々ある。「身体動作」は所作であり、茶の湯では様々な所作がなされる。「におい・香り」は嗅ぐという動作であり、焚かれる香の香り、もてなされる茶や懐石料理の香りに通じる。「空間」からくる近接、これも茶室の広さや、主客また客同士の距離を考えると、茶の湯と関連がある。「時間」についても、茶事に焦点を当てれば、暁の茶事・朝茶事・正午の茶事・夕ざりの茶事・夜咄<sup>よばなし</sup>の茶事がある。一日のうちのいつ行うか、時間が問題となる。季節もまた時間の範疇に入る。夜咄の茶事は極寒の時期に、朝茶事は夏に行われる。季節は道具組にも深く関わる。さらに、いつお辞儀をするか、いつ道具を返すか等、タイミングという意味での時間も茶の湯では重要である。このように、この「コミュニケーションの要素」は茶の湯を語る際にも意義ある図表である。また、この図表にはないが、茶の湯で使われる道具、茶室のしつらえといった、いわゆる「物」もまた非言語メッセージとして茶の湯では重きを成している。身体動作である「所作」、そして茶の中で使われる様々な「物」という非言語メッセージにより、茶の湯のコミュニケーションが成立するというのが筆者の論である。

この図表から、コミュニケーションにおいては言語メッセージと共に非言語もまた重要であり、さらに、言語よりも多くの要素を非言語が有していることがわかる。コミュニケーション学者レイ・L・バードウィステルの研究に拠ると、人間の生活の中で伝えられる情報すなわちメッセージのうち、35%は言語によって、残り 65%は話しぶり・動作・ジェスチャー・相手との間の取り方等、非言語的な手段によって伝達される<sup>2</sup>。また心理学者アルバート・マレービアンは、対人態度の表現における全メッセージのうちで、7%が言語、38%が音声の特徴、55%が顔の表情によると述べており、音声の特徴と顔の表情を合計すると、メッセージの 93%は非言語を通してである<sup>3</sup>。驚くべきことに、言葉でない言葉が、実際の言葉以上に意思や感情を伝達していることになる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』(東京:松伯社、2011年)、p.20。本章は末田氏によるが、この表は井上久美『トータルコミュニケーションをめざして』(東京:成美堂、1995年)、p.9。及び橋本満弘「非言語コミュニケーションの概念と特徴」橋本満弘・石井敏 編著『コミュニケーション論入門』(東京:桐原書店、1997年)、pp.183-191。を参照して作成された。「嗅覚学」は末田氏による試訳。

<sup>2</sup> Ray Birdwhistell, *Kinesics and Context*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1970.

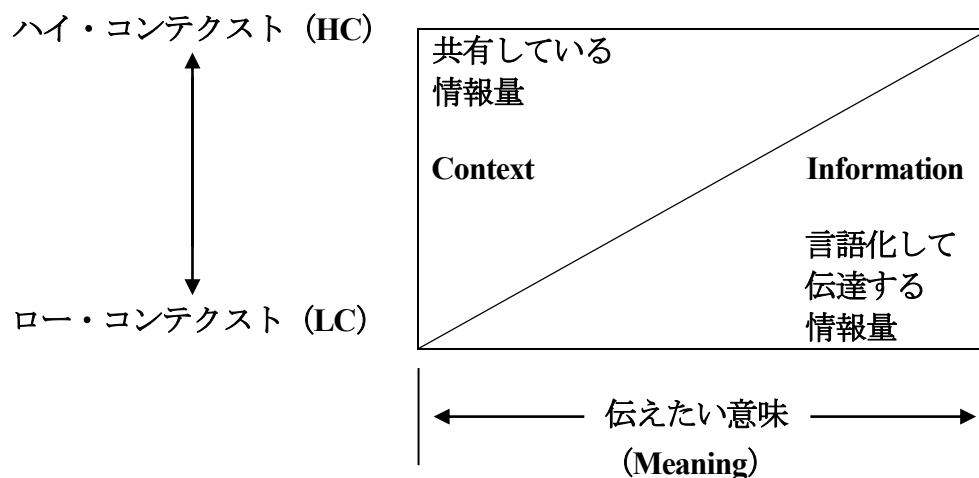
pp.157-158.

<sup>3</sup>アルバート・マレービアン『非言語コミュニケーション』西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫 訳（東京：聖文社、1986年初版第1刷）、p.98.

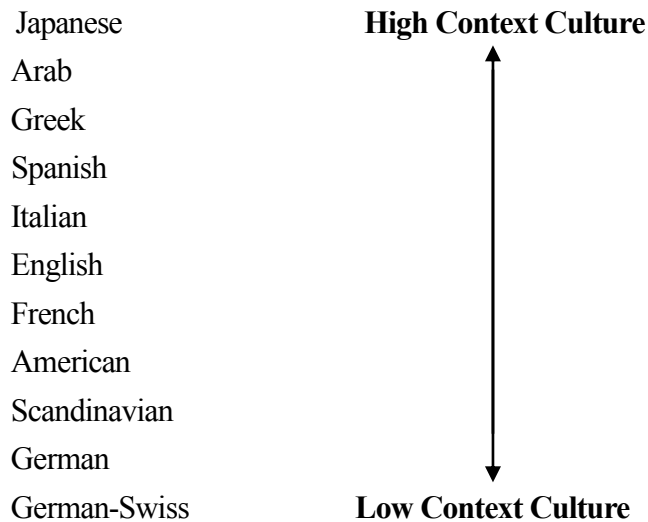
### 3-5 ハイ・コンテキスト文化とロー・コンテキスト文化

言語・非言語を用いる度合いは文化圏によって違い、ひいてはコミュニケーションのあり方も異なってくる。前にも名を挙げた文化人類学者、エドワード・ホールはコンテキストという用語を用いている。コンテキストとは「できごとを取り巻く情報であり、そのできごとの意味と密接に結びついているものである<sup>1</sup>。」できごとを取り巻く情報とは、コミュニケーションが行われる物理的・社会的・心理的・時間的な環境のすべてを指し、端的に言えば、言語化されない諸々の環境や状況、言わなくても両者が既に認識している事柄のことである<sup>2</sup>。ホールは、コンテキストの度合いが、その文化のコミュニケーションのあり方を特徴付けるとしている。コンテキストが多い、すなわちコミュニケーションに関わる当事者が共有する情報が多ければ、言語の使用は少なくなる。できごとを取り巻く情報を既に共有しているので、言わなくても相手が察するのである。言葉に出さなくても通じるのである。逆にコンテキストが少ない、すなわち当事者同士が有する情報が少なければ、言語は多く使われる。口に出して言わなければ通じないのである。コミュニケーション学では前者をハイ・コンテキスト、後者をロー・コンテキストと呼ぶ。次の図はそれを示し、その後に「コンテキストの国および文化指標」の図を提示する。

### ハイ・コンテキスト文化とロー・コンテキスト文化<sup>3</sup>



## コンテキストの国および文化指標<sup>4</sup>



この指標は絶対的なものではなく、あくまでも参考であり、同じ文化に属する人々の間でも個人差がある。しかしコミュニケーションというものが国により、換言すれば文化により、どのように行われているのかを考える際、注目すべき指標と見てよい。

この指標に拠ると、ロー・コンテキスト文化であるアメリカ・スカンディナヴィア諸国・ドイツ・ドイツ語圏のスイスは、言語に大きく依存している、すなわち言葉をよく使う国であることがわかる。一方日本・アラブ諸国・ギリシャ等ハイ・コンテキスト文化では、しかも日本は第1位に位置している訳だが、言語に依存しない、すなわち言葉をあまり用いない国であることが示唆されている。

日本の成人が1日に会話をする時間は平均3時間31分であるのに対して、アメリカの成人は6時間43分であり、日本人の約2倍である<sup>5</sup>。もちろんデータの細かい数値は実施ごとに変化するであろうが、日米を比較すると、日本人はあまり話さないということになる。

日本人とアメリカ人の中流階級における生後3~4ヶ月の幼児と母親との関係を調べた研究から、日本の母親は話すよりも、なだめ、寝付かせるのに対して、アメリカの母親は幼児におしゃべりをして、幼児も楽しそうに発声することが報告されている。この報告に対して牧野成一氏は次の解釈を加えている。「日本の母親は非言語による伝達（ノンバーバル・コミュニケーション）に重点を置いているのに対し、アメリカの母親は言語による伝達（バーバル・コミュニケーション）に重点を置いているということになります<sup>6</sup>。」いかにももともとであり、よく話す文化か、話さない文化か、どちらの文化の人間になるのかは、育児の仕方が大きいウェイトを占める幼児期から、かなり決まっているようである。

### 【注】

<sup>1</sup> E. T. Hall, & M. R. Hall, *Understanding cultural differences*. Yarmouth, ME: Intercultural Press,

- 1990より、末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』（東京：松柏社、2011年）、p.130. にて末田氏が引用している。
- <sup>2</sup>石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔・江草忠敬『異文化コミュニケーション・ハンドブック』（東京：有斐閣、1997年初版第1刷、2000年初版第4刷）、p.235. 参照。
- <sup>3</sup>E.T. Hall, *Beyond culture*. New York, NY: Doubleday, 1976, p.102. を基に上記『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』 p.131. にて末田氏が作成。
- <sup>4</sup>R. E. Porter, & L. A. Samovar, An introduction to intercultural communication. In L. A. Samovar & R. E. Porter (Eds.) *Intercultural communication: A reader* (8<sup>th</sup> ed.), (pp. 5-12). Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1997, p.24. Figure 3. 末田氏も『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』 p.132. にこの図を記載しており、「この指標はあくまでも目安であって、固定的なものではない。」と注を付している。
- <sup>5</sup>Satoshi Ishii and Donald Klopf, “A Comparison of Communication Activities of Japanese and American Adults.” (『英語展望』 53号、1976年)、pp.22-26.に基づき、石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション』 古田暁 監修（東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷）、p.90. にてこのように述べている。本章は石井氏による。
- <sup>6</sup>牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』NAFL 選書 12（東京：アルク、1996年）、p.20. 母親と幼児の研究は William Caudill & Helen Weinstein, “Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America”, *Psychiatry* 32, pp.12- 43. (Included in Lebra & Lebra, 1986, pp. 201-246.) に基づく。

### 3-6 話すことを重んじる文化

「初めに言葉ありき」は新約聖書にある表現だ。「初めに<sup>ことば</sup>言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった<sup>1</sup>。」ここで言う<sup>ことば</sup>「言」は神を指している。創世は神の言葉——ロゴス——から始まり、言葉はすなわち神のことである。世界の根源として神が存在することを意味している。ここで言う「ことば」は人間が話す、聞く、あるいは書く、読むといった意での言葉を指している訳ではない。しかしながら、世界最古の文学と言われる聖書に、しかもその新約聖書中の、マタイ・マルコ・ルカと共に四大福音書の一つとなっている「ヨハネによる福音書」の冒頭に、「ことば」がいわばキーワードとして記されていることは、注目に値する。西欧社会における言葉の重要性の一端が表れていると受け取られる。

やはり聖書の中の、イエスが荒野で悪魔の誘惑に遭った際に語る有名な台詞にも、「言」が登場する。40日40夜断食をし、空腹になったイエスに対して悪魔は、あなたが神の子

であるなら、そこにある石をパンに変えてみるようにと言う。その悪魔に向かってイエスは述べる。「人はパンだけで生きるものではなく、<sup>い</sup>神の口から出る一つ一つの<sup>かみ くち で</sup>言<sup>ことば い</sup>で生きるものである<sup>2</sup>。」この箇所でも「ことば」がキーワードとなっており、神と直接結び付いている。言葉の重要性は、西欧社会の根本にあると言ってよい。

聖書のみならず、後の文学にも、言葉が大きい問題となっている作品は多々見られる。言葉が出ない、すなわち話さないことの不幸が扱われている例として、シェークスピアの「偉大なる悲劇」の一つである『リア王』を挙げる。高齢となったリア王が国の領地を分割し、3人の娘に譲ることを決める。3人のうち誰が父を最も愛しているかを尋ねるのが、劇の冒頭である。長女のゴネリルと次女のリーガンは言葉巧みに父への愛を語る。しかし末娘のコーディーリアは口をつぐんでしまう。本作品中でも特に有名な台詞であり、“nothing” が繰り返されている。

Cordelia: Nothing, my lord.

Lear: Nothing?

Cordelia: Nothing.

Lear: Nothing will come of nothing: speak again<sup>3</sup>.

シェークスピア学者、小田島雄志氏の訳では次のようになっている。

コーディーリア 言うことはなにも。

リア なにもない！

コーディーリア なにも。

リア なにもないところになにも出てきはせぬ、  
言いなおすがいい。（第1幕第1場）<sup>4</sup>

話すようにと請われてもコーディーリアは「何も言うことはない。」と答えている。上の引用の最後で、父リアが何も無いところからは何も生まれないのだから、もう1度話すようにと促しても、その後もほとんど彼女は語らない。実はコーディーリアはリアが1番可愛がっていた娘なのだが、この態度にリアは立腹し、彼女を勘当してしまう。その後、上の二人の娘は父を裏切り死に至らしめ、逆にコーディーリアは最後まで父を愛し父に添い、二人ながら死を迎えるという、文字通り壮大な悲劇に至る。この作品においても、話さないということが大損となり、大変な不幸に繋がっている。裏返して言うならば、話す、語るということがよしとされる、西欧の考え方を表している。

もちろんシェークスピアの作品は、このように単純な解釈で終わらせることはできない。言葉巧みでリアにはいい娘だと思われた長女と次女は実は悪人であり、言葉足らずでよくないと思われた末娘こそ善人であったという逆説的テーマを呈している訳であるが、筆者は言葉が多いか少ないかに焦点を当てて、本作品を採り上げた。

話さないと却って損をする、不幸を招くという例は童話にも見られる。例えばアンデルセン童話『人魚姫』である。船の難破に遭い、溺死しそうになった王子様を人魚姫が助ける。姫は王子に恋をし、自分を人間の姿にしてほしいと魔法使いに頼む。魔法使いはこの頼みを聞き入れるが、姫は言葉を失わなければならない、すなわち話せなくなるという条件、また王子と結ばれなければ命ははかなくなるという二つの条件をつける。姫は人魚ではなく人間の娘の姿を得るが、話せないが故に、自分が王子の命の恩人であることを伝えることができない。また、自分が王子を愛しているという重大事をも告げられない。そのうちに別の女性が現れ、王子と結婚することになる。魔法使いの定めた条件に沿えなかった人魚姫は、水の泡となって消えていくという悲しい物語である。姫は王子のみならず、自らの命をも失ってしまう。言葉を発しない、話さないということが大変な不幸を招いたという見方ができる。

文学に例を見てきたが、言葉を重んじる西欧のあり方は、歴史にも深く表れている。中島文雄氏は、欧米とは違って日本は「ことばによって何でも表現しようとする意欲が弱い<sup>5)</sup>。」と評し、語りについての古代ギリシャに遡る欧米と、日本の違いを述べている。

古代ギリシャにおいては弁証法が発達し、論理的な思考や雄弁術が練磨された。この風はローマ時代から中世を経て今日に及んでいる。中世の学芸の中心は文法・修辞学・論理学であり、カトリック教会も大学もラテン語を用い、国際的な性格をもっていた。また英国は議会政治を発達させた国であるが、これには弁論が大きな役割を果たしてきた。演説によって人を説得しなければならないからである。アメリカも民主主義の国で弁論の重要なことはもちろん、個人主義の発達した国であり、多民族国家であるから、自己主張するのに言葉を大いに用いる。彼らは自分の気持ちは口に出して言わなければ相手に分からないと思っている。

これに反して日本は、ほとんど同一民族・同一文化・同一言語の国で、敗戦直後アメリカ軍に占領された数年間を除き、民族として外国人に接触することも少なく、極東の島国の閉ざされた社会で暮らしてきた。意思の疎通に多弁を必要とせず、...自己主張をするよりも、人との和を大切にする。恩情主義<sup>6)</sup>の行きわたった社会で自己主張を必要とせず、またそうすることは身分社会の秩序をみだすものとして嫌がられた。戦後この風は大分変わってきたが、日本語はまだ、議論をする言葉として洗練を受けていない<sup>7)</sup>。

欧米が弁論を重んじることを、逆に日本ではそうでないことを、時代を遡って捉えており、話す文化と話さない文化の背後には、長い歴史が脈々と横たわっていることがわかる。西欧では言葉によって人を説得し、よく議論し、話すことによって自分の意を伝える。一方日本では、言葉での説得よりもむしろ人との和を重んじ、議論・口論はあまり好まない



のではないか。

また訓練の違いもあろう。「ショウ・アンド・テル」という、皆の前で何か物を見せて、それを話題に話をするというスピーチが、アメリカでは幼稚園から行われている。日本でも人気のあるスヌーピーが登場する、アメリカのチャールズ・シュルツによるチャーリー・ブラウンのコミックスにも、このショウ・アンド・テルを題材にした漫画は多々ある。登場人物のチャーリーやルーシーは小学生であるから、小学校でもこのような、人前でのスピーチが行われていることがわかる。

一方日本では、かような幼少からスピーチの訓練を行うという話はあまり聞かない。言語社会心理学者・政治文化論者である芳賀綏氏が、福沢諭吉の奨励したパブリック・スピーキングについて言及している<sup>8</sup>。福沢は1874（明治7）年、『学問のすゝめ』の1編「演説の法を勧むるの説」の中で、「...学問の道に於いて談話演説の大切なるは既に明白にして、今日これを実に行ふ者なきは何ぞや。」と力説している。しかしこの力説も、「その後日本社会に定着したとはとても言えない<sup>9</sup>。」との芳賀氏の指摘通りである。日米だけを比較してみても、このような訓練の相違、教育のあり方は、当然その国の国民の「話す」姿勢に影響すると考えられる。言葉によって自分の意を伝え、相手を説得し、頻繁に議論するという伝統がない上に、話す訓練も受けていない。かような状況故に、人前で話すことを恥ずかしがる日本人が多くなることになる。

アメリカの大統領選挙では、選挙前に必ずディベート——日本語では「テレビ討論会」と訳されている——があり、候補者が一つ所に集まって自分の政治観を語り、互いに言い合い、これがテレビを通して全国に実況中継される。このディベートを見聞して、国民は誰に投票するかを決める。投票の1番の鍵となるのは、このディベートだと言われている。日本では、選挙の形態が異なることにも因るだろうが、このようなことは行われぬ。候補者がテレビに現われて政治観を語るというプログラムは、昨今目にするようになった。しかしこれもいわゆるスピーチであり、一人の候補者がテレビの視聴者に向かって一方的に語るなのであって、候補者同士が同じ場に登場して言い合いをする訳ではない。このように選挙の例一つを取っても、ハイ・コンテクストかロー・コンテクストか、語らない文化か語る文化かの相違を明確に見ることができる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 「ヨハネによる福音書」第1章第1-3節、『聖書』（小形7ポイント活字口語聖書）

日本聖書協会（東京：三省堂、1955年）、「新約聖書」p.135. ルビは本書にある。

<sup>2</sup> 「マタイによる福音書」第4章第4節、『聖書』同上、「新約聖書」p.4. ルビは本書にある。

<sup>3</sup> William Shakespeare, *King Lear*. Act I, Scene I, 89-92. In *Shakespeare Complete Works*.

W.J.Craig ed. Oxford: Oxford University Press, 1978. First published in 1906, p.909.

<sup>4</sup> ウィリアム・シェークスピア『リア王』小田島雄志 訳『シェークスピア全集』、白水Uブックス 28（東京：白水社、1983年第1刷、1997年第14刷）、p.13.

<sup>5</sup> 中島文雄『英語の時代に生きて』（東京：研究社、1989年）、p.176.

<sup>6</sup> 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷）、

p.2. 温情主義ではなく恩情主義と記している。

<sup>7</sup>同上、p.2.

<sup>8</sup>以下福沢諭吉についての叙述は芳賀綏『日本人の表現心理』（東京：中央公論社、1979年）、p.20.

<sup>9</sup>同上、p.20.

### 3-7 話すことを重んじない文化

話すことを重んじる西欧に対して、日本は重んじない文化であると言えよう。話さないことに価値があるという見方は、格言等にも表れている。「巧言令色少なし仁」は孔子の『論語』の中にあり日本起源ではないが、日本社会でも極めて馴染み深い。口先だけで巧妙なことを言う、お世辞を言う人には徳はないという意であり、話すことを否定的に捉えている。「腹芸」という言葉もあり、演劇において役者が台詞やしぐさを使わずに、その人物の心の中、感情を表す意で、芸術の領域までも沈黙は幅を利かせていることがわかる。「腹芸」は演劇から離れた意味も有す。度胸があつて、その場の状況を見て上手に取り計らうという意であり、これもまた肯定的な含みで使われている。

谷崎潤一郎は、日本人の国民性はおしゃべりではないことだと言っており<sup>1</sup>、さらに次の言もある。「古来支那や西洋には雄弁を以て聞えた偉人がありますが、日本の歴史にはまず見当らない。その反対に、我等は昔から雄弁の人を軽蔑する風があつた<sup>2</sup>。」この評に簡単に賛同することは危険だが、話さないことを肯定的に見るという日本的な、ある側面は表している。「口は禍の門」という諺もあり、何かの言動がもとで人とのトラブルがあつた時に、よく使われる。類似した諺には、「言わぬが花」、「禍は口から」、「舌は禍の根」等もある。「病は口より入り禍は口より出ず」、また動物を用いての「蛙は口から吞まれる」、「雉も鳴かば撃たれまい」といった諺も、話すことが招くトラブルを言っている。「もの言えば くちびる寒し 秋の風」という芭蕉の座右の銘もある。本章の初めの方で「言葉には人間関係を作る働きがある<sup>3</sup>。」という引用を挙げたが、この逆である「言葉には人間関係を壊す働き、危険性もある。」もまた真実なのである。

文学の中にも、言葉そのものが多大な問題となり、作品のテーマにまでも通じる例は見られる。例えば江戸文学の代表作の一つである、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』である。

主人公の里見<sup>よしさね</sup>義実には伏姫という美しい娘と、愛犬である八房<sup>やつふさ</sup>がいる。物語のごく初めの場面だが、敵の安西景連に完全包囲され、もう落城かと思われた時、里見は八房に言う。

「敵将安西景連<sup>あんざいかげつら</sup>を、啖殺<sup>くひころ</sup>さばわが城中の、士卒の必死を救ふに至らん。…しからば職<sup>つかさ</sup>を

授<sup>さづけ</sup>けんか、或は領地<sup>ある</sup>を宛<sup>あて</sup>おこなは行<sup>のぞま</sup>んか。官職<sup>む</sup>領地<sup>こ</sup>も望<sup>ふせひめ</sup>しからずば、わが女壻<sup>むすめ</sup>にして伏姫を、

めあは

妻 せんか 4。」すなわち景連の首を取って来たら娘をお前の嫁としてよい、とのことである。果たして八房は本当に敵将の首をくわえて帰り、危機は脱したものの、里見は姫を八房にやらなければならない。その後、姫は自害し、お守りとも言うべき八つの水晶の数珠が飛び散り、後にそれぞれが八犬士となり様々な戦争が起こり...と壮大なドラマに繋がっていく。この壮絶にして雄大な話の展開は、もとはと言えば里見の一言に端を発する。

目次でも「戯言<sup>けげん</sup>」と記されている通り、戯れの一言、落城寸前の諦めを含めた冗談めかしの言葉が、すべてを引き起こしているのである。

文庫本でも全 10 巻に亘る大作をこのように単純に評することは危険であり、それは筆者の意図ではない。ただ里見の側からだけ見れば、つい口にした言葉が、愛娘を犬畜生にくれてやらねばならないという不幸を生んでしまったのである。さらにその後、自分の妻は娘を案じて思い病となり、娘は結局死んでしまい、と辛苦が続く。里見の運命のみを見るならば、正に「口は禍の門」となっている。言葉が多過ぎた。俗な言い方をすれば、喋り過ぎたのである。

逆に、言葉が少ないことがよい結果を生んだ例として、森鷗外の「最後の一句」が挙げられよう。処刑されることになった父の命と引き換えに自分たち子どもを殺してくれ、と弱冠 16 歳のいちは、奉行に願書を差し出す。取り調べの場においても奉行の佐佐に対して、いちが必要最小限のことしか言わない。そして最後のやりとりは、次のようになっている。

「そんならいま一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前たちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか」

「よろしゅうございます」と、おなじような、冷かな調子で答えたが、すこし間を置いて、なにか心に浮かんだらしく、「お上のことには間違はございませんまいから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打に逢ったような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなった目が、いちの面に注がれた<sup>6</sup>。

さらに次のような叙述がある。「心のなかには、あわれな孝行娘の影も残らず、人に教唆<sup>きょうさ</sup>せられた、おろかな子供の影も残らず、ただ氷のように冷かに、刃のように鋭い、いちの最後の詞の最後の一句が反響しているのである<sup>7</sup>。」

言葉が全くない、すなわち無言という訳ではないが、ただ一句、少ない言葉が却って人の心に響き、人の心を打ったのである。国文学者、吉田精一氏も解説の中で述べているように、いちのこの短い一言の中に、鷗外は「献身の中に潜む反抗<sup>8</sup>」、「権威と法に対する不信<sup>9</sup>」を表白しているのである。短い一句が何と大きい力を発揮していることか。

山のようにある日本文学作品の中から、ただ 2 編を採り上げて大きいことを言うのは危険である。しかし先に挙げた『リア王』や『人魚姫』とは逆に、日本はあまり語らないことをよしとし、多く話すことを重んじない文化を持っている。その例が文学にも表れてい

ることは指摘できよう。

言葉が全くない、すなわち沈黙についてはどうであろう。コミュニケーション学者、ディーン・バーンランドが日本人のコミュニケーションの特徴として「あからさまでないこと」と共に「沈黙」を挙げている<sup>10</sup>。沈黙の捉え方も文化によって異なる。調査に拠ると、沈黙に関するアメリカ人の解釈は悲しみ、後悔、困惑などすべて否定的であり、オーストラリア人の解釈もアメリカ人と似ている。しかし日本人の場合は、沈黙を肯定と否定の間とする解釈が多数を占めるという結果が得られている<sup>11</sup>。日本では沈黙を単に悪しきものとは捉えず、よしとしている傾向もあることがわかる。

この沈黙は、却って言葉を活かすものだといった見解もある。スイスの医師・著述家マックス・ピカートは、沈黙と言葉は表裏一体だと述べた上で、次のように語っている。「沈黙は言葉なくしても存在し得る。しかし沈黙なくして言葉は存在し得ない。もしも言葉に沈黙の背景がなければ言葉は深さを失ってしまうであろう<sup>12</sup>。」沈黙があればこそ言葉が生まれる、言葉の存在が可能だと述べている。そしてさらに1歩進めて筆者が言いたいことは、言葉がないことが却って多くを伝えるのではないかということである。非言語が言語を上回ることがある。「コミュニケーションなきコミュニケーション<sup>13</sup>」である。物と所作という、言葉ならざるものを通して、送り手の意図を受け手に伝える。この例が如実に見られるのが茶の湯ではないか、と筆者は考える者である。そしてまた茶の湯における沈黙、むしろ無言と言った方が適切であるが、これについては後述するものとする。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 谷崎潤一郎『文章読本』、『谷崎潤一郎集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『日本文学全集』第12巻所収（東京：河出書房、1966年、初出は中央公論社、1936年）、p.354.
- <sup>2</sup> 同上、p.354. 太字は谷崎による。
- <sup>3</sup> 田中望『外国人に日本語を教える本』（東京：明日香出版社、1988年）、p.43.
- <sup>4</sup> 曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第1巻、小池藤五郎 校訂（東京：岩波書店、1990年第1刷）、p.151. ルビは本書にある。「或は」のルビ「ある」はママ、「あるい」ではない。
- <sup>5</sup> 同上、p.v. ルビは本書にある。
- <sup>6</sup> 森鷗外「最後の一句」『森鷗外集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『日本文学全集』第7巻所収（東京：河出書房、1967年初版）、p.145.
- <sup>7</sup> 同上、p.145. ルビは本書にある。
- <sup>8</sup> 同上、吉田精一「解説」、p.394.
- <sup>9</sup> 同上、「解説」、p.394.
- <sup>10</sup> ディーン・バーンランド『日本人の表現構造』西山千・佐野雅子 訳（東京：サイマル出版社、1979年初版、1994年第11版）、p.99.
- <sup>11</sup> Milton Wayne, “The Meaning of Silence in Conversations in Three Cultures.” *Patterns of Communication in and out of Japan.* Ed. ICU Communication Student Group. (Tokyo: ICU Department, 1974) に基づき石井氏が説明している。石井敏・岡部朗一・久米昭元

『異文化コミュニケーション [改訂版]』古田暁 監修（東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷）、p.99. 参照。本章は石井氏による。ミルトン・ウェインはコミュニケーション学者である。

<sup>12</sup> マックス・ピカート『沈黙の世界』佐野利勝 訳（東京：みすず書房、1974年）、p.23. 土居健郎氏も『表と裏』（東京：弘文堂、1985年初版第1刷）、pp.22-23. においてピカートの論を引き、言葉と沈黙は表と裏のように、物事の二面性の認識を表していると述べている。

<sup>13</sup> 芳賀綏『日本人の表現心理』（東京：中央公論社、1979年）、p.23.

### 3-8 ハイ・コンテクスト文化を育む人間関係

定義に立ち返ると、ハイ・コンテクスト文化とは、コミュニケーションに関わる人同士が共有する情報が多く、言語の使用が少ない文化のことである。かような文化を育むためには、人間関係が密であること、深いものであることが必要とされる。よってハイ・コンテクスト文化とは、「人と人との密接にかかわり合っている文化<sup>1)</sup>」であるとも言える。相手を正しく理解すること、相手の考え・思いを斟酌すること、そのような姿勢と能力が問われることになる。エドワード・ホールは日本を、「儀式張らない、温かく、親密で、友好的、かつ人との深いかかわり合いを大切にす高コンテクスト<sup>2)</sup>」の国であると述べている。ハイ・コンテクスト文化第1位である日本への評である。逆の言い方をすれば、ハイ・コンテクスト文化においては、人との関係が密であるが故に、言葉に出さなくても通じるのである。すなわちコミュニケーションが成り立つ。何かを伝えるのに、多くの言辭を要しなくて済むということになる<sup>3)</sup>。一方ロー・コンテクスト文化では人間関係が粗く、希薄であるために、それを埋めるべく言葉が多くなる。すなわちよく話すことになる。

このハイ・コンテクスト文化の国では、そうなるまでに、すなわちハイ・コンテクストになるプログラミングを行うまでには時を要するが、でき上がってしまえばコミュニケーションは効果的で充足しており、時間がかからない<sup>4)</sup>。深い人間関係を育むにはそれだけ長い時間が必要とされるが、ひと度成立すれば、友好的な関係がその後長く持続されることになる。筆者はアメリカ留学中、初対面の次の2回目に会った時に、もう“friend”と気軽に呼ばれ、他者にもそのように紹介されることに戸惑ったが、これもハイ・コンテクストかロー・コンテクストかの文化の違いからくるものと考えられる。アメリカ人を見ていると、概して短時間で「友だち」となり、その後の関係も比較的淡泊である。日本なら、まだ2度しか会っていない人を簡単に友人扱いするであろうか。人にも依り、場合にも依るであろうが、アメリカに比べれば遥かに少ないに違いない。牧野成一氏も日米の比較から次のように述べている。「日本のパーティーの重要な機能が親交をさらに深めることにあるのに対して、アメリカでは新しい友だちを増やすことにあるようです。その証拠に、アメリカではホストの全然知らない人が来てしまうことがよくあり、それをホストは嫌とは思わず、むしろ歓迎します<sup>5)</sup>。」日本がいわば深まりの人間関係を望むのに対して、アメリ

力は広がり的人际关系をよしとする。前者は狭く、しかし深い関係であるが、後者は広く浅い関係であるとも言える。

エドワード・ホールはまた、次のようにも述べている。「コンテクスト度の高いコミュニケーションは、芸術としても扱われることが多い。そうしたコミュニケーションには、人々を結び付け、結束させる作用があり、寿命が長く、あまり変化しない<sup>6</sup>。」この論は、茶の湯を考える上で極めて示唆的である、否、示唆的どころか茶の湯そのものを表していると言ってよい。茶の湯は正に「芸術」である。そして人と人との繋がり、共生といった観念が、芸術である茶の湯の根本に働いており、ホールの指摘する通りである。芸術性の極めて高い茶の湯の中に、筆者はハイ・コンテクスト文化を育む人との和、人と人との繋がり的重要性を如実に見るのである。

言語をあまり要しないということは、逆に非言語がむしろ重要なコミュニケーション手段となってくることを示唆する。各場面において交わされる言葉よりも、非言語メッセージの方が大きい役割を發揮することがある<sup>7</sup>。非言語内で働く「察し」はコミュニケーションの上で特に重要かと思われる。コミュニケーション学者、石井敏氏が述べているように、「ハイ・コンテクスト文化を代表する日本では言語の価値が低く、レトリックや説得法の研究は発達しない。代わりに、人間関係や対人コミュニケーションでは細かい形式や礼儀作法が重視され、その場の全体的雰囲気から情報を読み取る『察し』の能力が要求される。ロー・コンテクスト文化の欧米では言語の価値は一般的に高く、言語の効果的な使い方、すなわちレトリックが伝統的に発達する。このようなロー・コンテクスト文化は粗い社会構造や人間関係と共存する傾向がある<sup>8</sup>。」交わされる言葉が多いか少ないか、言葉ならぬ「察し」が重要か否かは、人間関係の親密さと深く関わっている。

ハイ・コンテクスト文化は「察しの文化」とも言えるかもしれない<sup>9</sup>。察する、すなわち言語化することなしに相手を思いやり、相手の考え・思いを酌み取るのである。そしてそこから密な人間関係、相手と共にあること、共生の観念が生まれてくる。

「察し」は茶の湯にも不可欠な亭主の姿勢である。亭主は茶席に不備がないか、客が困ってはいないか、心地よく楽しんでくれているだろうか、痒い所に手が届くが如く、言葉で聞かなくても察することが必要である。客もまた、亭主に協力的に、そのために自分は今何をしたらよいのか、どうあるべきかを、聞かなくても察する。「察し」が茶席に常に働いていることが望まれる。ここにも日本語と茶の湯との共通性が見られる。

そして再三繰り返している「人間関係の親密さ」についてであるが、これはコミュニケーションについて述べた第2章における「国語に関する世論調査」の結果と合致する部分があると解せる。調査により、「コミュニケーションにおいて、難しいと感じること」、「コミュニケーションにおいて重視すること」の両方の項目で、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」よりも「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の回答の方が多くことがわかった。人間関係の円滑さ、人と人との和が重んじられており、これも正に茶の湯の根本を成す思想・姿勢である。日本語と茶の湯には相通じる部分が多い。

## 【注】

- <sup>1</sup> エドワード・ホール『新装版 文化を超えて』岩田慶治・谷泰 訳（東京：TBS ブリタニカ、1993年）、p.95.
- <sup>2</sup> 同上、p.81.
- <sup>3</sup> 同上、p.131. 参照。
- <sup>4</sup> 同上、p.118.
- <sup>5</sup> 牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』NAFL 選書 12（東京：アルク、1996年）、p.15.
- <sup>6</sup> エドワード・ホール『新装版 文化を超えて』、p.118.
- <sup>7</sup> 原岡一馬『人間とコミュニケーション』（京都：ナカニシヤ出版、1990年）、p.192. において同様のことを述べている。原岡氏はコミュニケーション学者である。
- <sup>8</sup> 石井敏・岡部郎一・久米昭元『異文化コミュニケーション [改訂版]』古田暁 監修、有斐閣選書（東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷）、p.90. 本章は石井氏による。
- <sup>9</sup> 牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』NAFL 選書 12、p.164. において「察しの文化」という表現を用いている。「日本のように言語によるコミュニケーションへの依存度が相対的に低く、其の分、非言語への依存度が高い、いわゆる『察しの文化』」と述べている。「察し」は非言語の重要性を表していると受け取られる。

## 3-9 むすび

本章は言語と非言語を扱っているが、種々の説を踏まえ、筆者は言語を「人間による、音声または文字を用いて意思と情報を伝達する手段」と定義する。言語を使用していることが人間である証しであり、人間と他の動物を分ける決定的な指標となる。茶を喫する、すなわち文化の所産である嗜好品を飲むのは人間だけであり、他の動物には見られないことであると前述したが、言語の使用も然りであり、人間である証拠という点において、茶と言語は共通性を有する。

文化と言語が極めて密接な関係にあることは、イギリス・アメリカ・日本のそれぞれで述べられていることを見ても明らかである。特にアメリカの「サピア・ウォーフの仮説」、すなわち言語がその文化の形成に大きく影響するという説に筆者は賛同する。雪が生活に深く関わるイヌイト民族は雪を表す単語を 50 も有し、らくだが生活に重要なアラビアの言語にはらくだに関する単語が多く、自然に親しんできた日本の言語には自然に関する語彙、特に雨に関わる単語が多い。さらにこのような単語のみならず、文法範疇にまでも文化は影響を及ぼしており、例えば時というものを連続した流れとして捉えないネイティブ・アメリカンのホープ族の言語には時制は存在しない。またバンクーバーのヌートカ族の言語では、すべての単語が動詞の様相を呈し、語尾変化によって諸事物の様々な状態を表す。こうした言語の使い方の根底には、自然や宇宙の捉え方や考え方、すなわち文化が

ある。言語と文化はかくも深い繋がりを持っているのである。よって、その国の言語のあり方を知ることにより、文化もまた理解できると考えられる。

言語の反意語のようでありながら、意思・情報を伝達するという、いわば「言語」と同じ役割を担っている「非言語」に目を向けると、コミュニケーション学において非言語メッセージとして位置付けられる身体動作、匂い・香り、空間、時間といった要素があり、これらは茶とも深く関係している。さらに茶の湯で使われる道具、茶室のしつらえといった「物」もまた非言語メッセージとして茶の湯では重要である。「コミュニケーションの要素」の図表にも記載されている「身体動作」である茶席の「所作」、そして茶の中で使われる様々な「物」という非言語メッセージが作用して、茶の湯のコミュニケーションをもたらすというのが筆者の論である。言語メッセージよりも非言語メッセージの方が遥かに多いことが図表からわかるが、後の章で述べるように、このことが如実に表れているのが茶の湯であると筆者は考える。

次にハイ・コンテクスト文化とロー・コンテクスト文化を採り上げた。前者は言語の使用が少ない文化、後者は逆に多い文化であり、前者の代表的な国が日本、後者は西欧諸国である。1日の会話量、育児の仕方にも両者の違いは表れている。ロー・コンテクスト文化の西欧では話すことを重んじており、それは文学にも表れ、また古代ギリシャの弁証法の発達、その後ローマ・中世を経た長い歴史を有し、今日の選挙のあり方にもその例は見られる。一方日本は弁証法・議論といった訓練を受けておらず、話すことを重んじない、むしろ話さないことをよしとする趣がある。このことは格言・諺・文学にも多々表れている。沈黙についても、西欧は否定的に捉えるのに対して、日本ではそうでもない。

ハイ・コンテクスト文化は深い、蜜な人間関係の上に育まれるものである。言葉に出さなくても「察する」こと、この「察し」が非常に重要となってくる。言語化することなしに相手を思いやり、相手の考え・思いを察し、酌み取る姿勢が問われる。人との和を重んじ、人と共にある、共生する、そのことがハイ・コンテクスト文化を可能ならしめる。これは茶の湯にも深く通じる姿勢であると考えられる。

「人間関係の親密さ」への言及が多いが、これは第2章における「国語に関する世論調査」の結果と合致している。調査に拠り、「コミュニケーションにおいて、難しいと感じること」、「コミュニケーションにおいて重視すること」の両項目で、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」よりも「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の回答の方が多かった。人間関係の円滑さ、人との和が重んじられており、これも正に茶の湯の思想・姿勢である。日本語と茶の湯には共通性が多いことを指摘したい。

本章は、言語と文化の密接性、両者がかくも深く関わっている、結び付いていることを述べてきた章である。よって日本の言語である日本語を探ることにより、日本の文化である茶の湯が鮮明に浮かび上がってくると考えられる。このことを踏まえて、次章では日本語の特徴について考える。茶の湯と言語、また茶の湯と日本語の共通性は本章でも既に挙げられているが、次章においてさらに考察を深めたい。



## 第4章 日本語の特徴

## 4-1 はじめに

筆者は本研究を進める中で、茶の湯と日本語との共通性を発見した。本章はそれに関わるが、後に茶の湯のコミュニケーションを語る上で必要な、日本語の特徴について考察する。まず省略について述べる。日本語には省略が多いとよく言われるが、主題の省略・述語の省略・人の省略すなわち人が表れない表現という観点から考える。古典、また現代作品という文学を例に挙げている。日本語の特徴に迫るに当たり、英語との比較も含める。もちろん現代の話し言葉も扱っている。言葉の省略、すなわち話さない、言葉が少ないということは、余韻という効果をもたらす。

省略の次に、日本語の特徴として緩和表現を挙げる。あからさまを避けることについて、曖昧さといった言語要素から、ジャパニーズ・スマイルという非言語要素をも扱い、西欧との比較を交えて考察する。省略と緩和表現は共に、前章で述べたハイ・コンテキスト文化が背景にあり、人と人との和、人間関係が深く関わっていると受け取られる。省略・緩和表現のいずれにも西欧との比較を含めるが、両者を比較することにより、なお一層日本語がどのような言語であるかが浮かび上がってくるからである。

最後に、日本語における外国の影響について、文字・翻訳の観点から考察する。省略・緩和表現・外国の影響のいずれにも、茶の湯と通じるものがある。

## 4-2 省略

### 4-2-1 主題の省略<sup>1</sup>

話すことを重んじない、むしろ話さないことをよしとする、そのような概念は、日本語の特徴にも表れている。日本語には省略が多い。例えば、一人称「私」を言わないことが多い。外山滋比古氏が例を挙げているが、「『まわりの人たちの幸福を願っています』という文は、かくれた主語『わたくしは』が『願っています』という動詞と結びついている。それはほとんど自明であるから『わたくしは』は風化するか、雲隠れするか、してしまいうことができる<sup>2</sup>。」のである。会話文において自分について何か言う時に、文ごとに「私は」をつけることはまずない。つけると却って不自然に聞こえてしまうのが日本語である。

ユング研究家・心理療法家、河合隼雄氏が「日本語の主語とは」という章で述べている。「『ぞうさん』という歌があります。その2番で『ぞうさん ぞうさん だれが すきなの』と訊くと、ぞうさんの子どもが『あのね かあさんが すきなよ』と言います。あの『あのね かあさんが すきなよ』というのは、英語になったらどうなると思いますか。『イエス・アイ・ラブ・マイ・マミー』とかいって、だれが主語か言わなければならないのですよ。『かあさんが すきなよ』といったら『かあさん』が主語みたいに感じませんか。あのときに『私は...』とかなんとかひとつも言わないのですね。『かあさんを』とも言わないでしょう。英語的表現をすると『私は母を愛します』という。ところが、『かあさんが

すきだ』と言っているときは、言っている子どもはもうそのなかに入って、消えているぐらいの感じなのです。そういう言い方のできるのが日本語だと思います<sup>3</sup>。」

英語と比較すると、より明白になるが、この童謡においても「私は」は省略されている。「ぞうさん ぞうさん だれが すきな」の問いかけにおいても、「『あなたは』だれが すきな」とは言っていない。「あなたは」は省略されている。歌詞における会話の相手、ひいてはこの歌の聴き手も当然了解しているものとして、「私は」や「あなたは」を明示しないのである。河合氏は「そのなかに入って」という言い方をしており、先に挙げた「風化するか、雲隠れする」と同義である。子どもの象に問いかけている人と、その象、また歌の聴き手とが極めて密になっている。一体化している。前章で述べたように、日本語では言葉に表すよりも、言葉少なに相手を思いやる、深く密な人間関係、人との和がコミュニケーションにおいて重要になってくる。「そのなかに入って<sup>4</sup>」は正にこの、ハイ・コンテクスト文化ならでは、人との和を指している。

童謡ばかりではない。純文学の中にもかような例は多々見ることができる。中島文雄氏は川端康成の『雪国』の冒頭を例に挙げている。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。  
信号所に汽車が止まった。」

これは三つの文から成っている。それぞれ「た」という完了の助動詞の終止形で終わっているから、独立の文とみられる。第一の文から見えていくと、これには主語がない。日本語には主語がないと言われるが、まさにそういう文である。トンネルを抜けたのは汽車であろうが、それは表出されていない。意味上は当然汽車が考えられるが、状況からそれと分かるものは表出しないのが日本語の特徴である。またトンネルを抜けると汽車は雪国に入っていたというところが、ただ「雪国であった」とある。ここにも主語はないが、意味は明瞭である。次の文の「夜の底が」、最後の文の「汽車が」は主語のようにとれるが、英語の主語とはちがう<sup>5</sup>。...とにかくこれらの文は英語の表現法と非常にちがう。E. G. Seidensticker 訳の *Snow Country* では、汽車を主語にして次のようになっている。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

この英文からみても明らかなように、英語の文は題目としての主語と、それについて陳述をする述語とから成り、命題文の構造をとるのが基本形式である。そして主語は動作主、述語はその動作を表し、他動詞ならばそのあとに動作を受ける被動者がくるという「動作主—動作—被動者」なる構造をもつ。上の英文を直訳的に日本語にもどすと、「汽車は長いトンネルを出て雪国へ入った。地面は夜空のもと白く横たわっていた。汽車は信号所で止まった。」となる。原文と比較すると、もとの和文には一つも「は」は用いられていない<sup>6</sup>。

英訳では三つの文とも“The train”、“The earth”、“The train”と必ず主題が明示されている。

サイデンステッカーの名訳により川端康成はノーベル文学賞を受賞した、と受賞当時評されたが、文の構造から見ても、原文と英訳文ではかなり異なっていることがわかる<sup>7</sup>。引用の最後にある直訳的日本語「汽車は長いトンネルを出て雪国へ入った。地面は夜空のもとと白く横たわっていた。汽車は信号所で止まった。」の各文は非常に明快でわかり易い。主題が明示されているからである。英訳も実に理解し易い。しかし原文の描く世界よりも薄く感じられるのではなかろうか。深みがない。主題が省略されていることによって、ある種の深み、そしてそこから美しさが作り出されているのではないか。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 文中の「～は」の部分の指しているが、動作主としての主語が「～」に入ることもあり、目的語のこともあり、その文が採り上げている話題・命題を表すとして「主題」という用語を使っている。「～については」、「～について言えば」の意である。
- <sup>2</sup> 外山滋比古『日本語の素顔』（東京：中央公論社、1981年初版、1995年第4版）、p.18.
- <sup>3</sup> 大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』（東京：岩波書店、1996年第1刷、1999年第7刷）、pp.46-47.この箇所は河合氏によるもので、本書第1部、第2部は「児童文学ファンタジー大賞創設記念第2回文化セミナー・日本語と日本人の心」（1995年11月26日、小樽市民会館）の記録を書籍にしたものである。引用箇所は第1部による。下線は筆者による。
- <sup>4</sup> 河合氏は「なか」と仮名表記しているが、筆者は以降「中」と漢字表記するものとする。
- <sup>5</sup> ここで中島氏が「英語の主語とはちがう」と述べているのは、英語の主語はあくまでも動作の動作主を指すからである。「汽車」が動作主ではなく、汽車を動かしている「人」が動作主となる。
- <sup>6</sup> 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷）、pp.3-4. 下線は筆者による。
- <sup>7</sup> 日本文学作家、リービ英雄氏は『我的日本語』筑摩選書0006（東京：筑摩書房、2010年初版第1刷）、p.31.にて、川端康成はサイデンステッカーの名訳というフィルターを通してノーベル賞を受賞したと述べている。また川端自身が受賞の決まった直後、報道陣に向かって「半分ぐらい翻訳者の功績でしょう。」と語ったという。大久保喬樹『川端康成一美しい日本の私』、ミネルヴァ日本評伝選（東京：ミネルヴァ書房、2004年初版第1刷）、p.215.にある『実録 川端康成』より。

#### 4-2-2 述語の省略

上述の「まわりの人たちの幸福を願っています」と「ぞうさん」は話し言葉での、『雪国』では書き言葉での、主題に当たる「私は」が省略されている例であるが、日本語では主題ばかりでなく述語の省略も多い。古典に既にその例があり、『枕草子』を見てみると、有名な冒頭は次のようになっている。

「春はあけぼの。やうやうしろくなり行く山ぎはすこしあかりて、  
むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」

書き出しの「春はあけぼの」は和歌に見られる名詞止めになっており、...表出されない意味要素を多分に含んでいる。これを英語で **Spring is dawn** としたのでは意味をなさない。「春は」は英語でいう主語ではない。...「春は」を副詞句にしてしまうと、あとは「あけぼの」だけになってしまうが、これには述語として「いとをかし」のようなことばが含意されているものと解される！。

述語が省略されている。「いとをかし」は書かれていない、言語化されてはいないが、書き手と読み手の間の暗黙の了解として、確かに「ある」のだ。河合隼雄氏が前述していた「その中に入って」、同調して、の意味合いが再び甦ってくる。「いとをかし」まで書き込んでしまうと、くどくなる。また体言止め(名詞止め)を用いる和歌の美しさも生きてこない。Ivan Morris による *The Pillow Book of Sei Shonagon* の英訳が挙げられている。

In spring it is the dawn that is most beautiful. As the light creeps over the hills,  
their outlines are dyed a faint red and wisps of purplish cloud trail over them.

直訳してみると「春でもっとも美しいのはあけぼのである。光が山の上にしるびよると、その輪郭がすこし赤く染められ、紫がかった雲のいく筋かが山のうえにたなびく」とでもなるうか。Morris は冒頭の英訳について注をつけて、原文の逐語訳は ‘As for spring the dawn’ であるが、‘is the most beautiful time of the day’ という述語があると解さなくてはならないと言っている。英語は主語と述語からなる構造をとり、前出の名詞を *their/ them* などの代名詞でうけて指示をはっきりさせるから分かりやすい。

内容の理解が目的であれば、主語・述語とも明記されている英語の方がむしろわかり易い。非常に明快な、しかも平易な英文となっている。日本語では主語のみならず、述語も省略される。しかし読み手には理解されている。言葉はないが、書き手の言いたいことは伝わっており、すなわちコミュニケーションが成り立っているのである。また先の『雪国』と同様に英訳、またその直訳の日本語は理解し易いが、原文にある深み、余韻というものはあまり表れない。省略することにより、却って鑑賞上のプラス効果を生み出している。

古典や現代文学ばかりではない。現在の日本人の話し言葉にも、省略は実に多い。日本語教育学者、佐々木瑞枝氏は、省略することが却って日本語らしいと述べている。佐々木氏は英語での学会発表の依頼を受けるがそれを断るとい例を挙げ、『でも先生、私、英語ですとおかしいんじゃないですか、だってみんな日本語で話しています』と言うよりは、『どうも先生、英語ではちょっと...』と言って、そのあと何も言わないと、...先生が『あ、そうですか』と(笑)。それですむんですね。『英語ではちょっと...』それこそまさに日本的なもので、その後、実際に言いたい断りの部分は相手が察してくれるのを待つ<sup>3</sup>。「ちょっと」の後まで言うよりも、省略した方が逆に効果的になっている。

言葉の省略について、牧野成一氏は次のように説明している。‘[E]llipsis can take place for psychological reasons<sup>4</sup>. (心理的理由のため省略が起こり得る。)’ 最後まで述べない、すなわち省略することによって、逆にそこに意味を持たせ、話者の心理を表すことになるのではないか。牧野氏は、苦手な食べ物を出された時「それはちょっと...。」とのみ言って、その後の「食べられません」を省略し、訃報を聞いた際「それはどうも...。」とだけ言って「悲しいことですね」を省略する例を挙げている。食べられないと明言することは料理を用意してくれた相手に失礼であり、上記の省略表現を使った方が、相手に与える印象はよくなる。また訃報に接して「悲しいことですね」と明確に言うよりも、言わない方が却って弔意を表すことになる<sup>5</sup>。

しかしこうした省略は、相手の察しによって初めて生きてくる。各状況における文末の「...。」がそれぞれ何なのか、どういう意味を含んでいるのか、聞き手の側は推量しなければならない。それを抜きにコミュニケーションは成り立たない。「察しが良い」、「察しが悪い」という表現があり、日本社会の中で、察しは何と重要な地位を占めていることであろう<sup>6</sup>。「察し」については前章でも指摘したが、ハイ・コンテクスト文化において要求される重要な働きであり、蜜な人間関係を育むのに不可欠な要素である。佐々木瑞枝氏は「関係体」という用語を挙げている。日本人は関係体の中で生きており、日本社会の中に生き続けている「人間関係」を配慮した表現が重要であり、「察し用法」によって対話相手を気遣いながら話を進めるのである<sup>7</sup>。「関係体」は河合氏の述べる「その中に入って」に当たると言えるであろう。省略の背後にあるもの、省略してもコミュニケーションを可能ならしめているものは、人と人との繋がり、平和な人間関係、人との和というハイ・コンテクスト文化の特徴であり、正に茶の湯の世界である。人との和があればこそ、言葉が少ない、否、言葉がなくても意が伝わる、コミュニケートできるのである。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷）、pp.17-18.
- <sup>2</sup> 同上、p.18.
- <sup>3</sup> 佐々木瑞枝「比較基準としての言語の問題」濱口恵俊 編『日本文化は異質か』（東京：日本放送出版協会、1996年第1刷、1998年第3刷）、p.96.
- <sup>4</sup> Seiichi Makino and Michio Tsutsui, *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times, 1989, p.26.
- <sup>5</sup> 省略については拙文にても述べている。鎌田かをり「日本人の謙虚さという仮面」、北海道大学留学生センター一年報第5号（札幌：北海道大学、1996年）、pp.138-139.
- <sup>6</sup> 佐々木瑞枝「比較基準としての言語の問題」濱口恵俊 編『日本文化は異質か』、p.96. において、同様のことを述べている。
- <sup>7</sup> 同上、pp.97-98. 参照。

#### 4-2-3 人が表れない表現

「お茶が入りました。」日常生活でもよく耳にするが、何と美しい表現だろうと金田一春彦氏が感嘆している。氏の担当学生のレポートの中にあつたもので、この「レポートを読んだ時の感銘は忘れられない!。」と氏は述べている。もちろん、茶が勝手に入るはずはなく、多くの場合、この文を言っている当の本人が茶を入れたのだ。しかし「私はお茶を入れました。どうぞ召し上がれ。」とは言わず、動作主すなわち主語を敢えて控えて、「入れました」という他動詞ではなく「入りました」という自動詞を使っているところに、筆者は日本語の特質、ひいては日本文化を感じる。奥ゆかしさがある。文の後に余韻が漂う。金田一氏が美しい表現だと感じたのも、この奥ゆかしさと余韻がある故かと解釈される。

英語ならば、茶を入れた本人を明確に示して“I made tea.”となるところである。“Tea was made.”などと受身の形は決して使わず、また受身は日本語の自動詞・他動詞とは異なった次元の言い回しである。

「お茶が入ったのが自然現象のように一雨が降って来たとか、小鳥が庭に来た、とかいうのと同じように述べるのである?。」ごく自然に、人は介入せず自然にそうなったかのように聞こえる。同様の例として、「お風呂がわきました。」「御飯が出来ました。」を金田一氏は挙げているが、いずれにおいても事を行った「人」は全く表に表れない。表現上、隠れた存在となっている。

幸せな将来が決まった際によく聞く表現は「結婚することになりました。」である。この場合も「私は」はあまり言わない。単に「結婚する...」から始める場合が多い。また「結婚することにしました。」という表現は滅多に聞かない。もちろん、自然に結婚話が降って湧いた訳ではなく、当人たちが決めた、すなわち「結婚することにしました」が事実なのだが、そうは表現しないのが日本語なのである。「...しました」と意志を表す表現ではなく、「...になりました」と事態がそうなった、人が介入したというよりも状況が結果を招いたという言い方をする。ここにもまた奥ゆかしさ、遠慮した姿勢が窺われる。

国語学者・日本語教育研究家、森田良行氏は「このたび職員一同の懇親会を開くことにいたしました。」と「...懇親会を開くことになりました。」の例を挙げ、「する」と「なる」を説明している<sup>3</sup>。前者では、話し手が聞き手を自己と対立する相手、すなわち「わたし対あなた」の関係として捉えており、こちらは懇親会を執り行うことに決めたと伝達する客観的表現だとしている。一方後者の「...になりました」の文は、話し手が聞き手と一体化した「われわれの立場」に立っており、懇親会を開くことになったのだと受け止める、相手側の視点に転移した文だと述べている。そして「する」と「なる」との関係は『私』対『われわれ』の関係<sup>4</sup>であると結んでいる。このことは、筆者が前に挙げた河合隼雄氏の「その中に入って」、また佐々木瑞枝氏の説く「関係体」に通じるものである。相手と一体化する、共生の概念がある。

これらの「お茶が入りました。」や「結婚することになりました。」の例は、前述の「ぞうさん」や種々の文学作品に見られた主題の省略とは異なる。「人が表れない表現」と言った方が適切である。動作主である「私は」を敢えて出さず、他動詞ではなく自動詞を使う。

人ではなく事柄・事態を全面に出す。こうすることによって、一種の奥ゆかしさを醸し出している。人を表さない、ここにも言葉が少ないという日本語の特徴が表れている。また少ないということが、不足・不十分というマイナス効果ではなく、奥ゆかしさ・美しさ・余韻というプラスの効果をもたらしている。ないこと、不完全であることがむしろよしとされる、茶の湯における「わび」に通じるものがあると筆者は考える。

#### 【注】

<sup>1</sup> 金田一春彦『日本語 新版（下）』（東京：岩波書店、1988年第1刷、1994年第18刷）、p.296.

<sup>2</sup> 同上、p.276.

<sup>3</sup> 森田良行『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』（東京：創拓社、1995年）、pp.114-115.

<sup>4</sup> 同上、p.115.

#### 4-2-4 余韻

先の項でも筆者は「余韻」という言葉を何度か使ったが、話さない、語らない、言葉が少ないという特徴は、「余韻」というものを生み出す。この余韻も日本人の好むところであり、文学等にもよく見られる。童話『鶴の恩返し』を例に挙げる。毘にかかった鶴を若者が助ける。娘の姿となった鶴が若者の妻となり、恩返しに自分の体から羽を抜いて見事な布を織る。夫は織っているところを見てはいけないという約束を破って鶴の姿を見てしまい、女は最後の布を夫に渡して去っていく。この物語は昔話『鶴女房』から発生して、後に木下順二が1948年に『夕鶴』と題して戯曲を発表してから特に有名になり、戯曲は山本安英の「ぶどうの会」で1949年の初日を皮切りに数多く上演された<sup>1</sup>。その後、木下の戯曲を基に團伊玖磨が1951年に同名のオペラとしても書いており、日本人なら誰もが知っている物語と言ってよい。ここで筆者が注目したいのは、作品の結末である。子どもを対象とした昔話は様々な形で書かれているが、木下順二の『夕鶴』の最後の場面を見てみる。

つう さよなら...さよなら...

与ひょう つう、おい待て、待てちゅうに。おらも行くだ。おい、つう...つう...

つう だめよ、だめよ、あたしはもう人間の姿をしていることができないの。またもとの空へ、たった一人で帰って行かなきゃならないのよ。...さよなら...元気でね...さよなら...本当にさようなら... (消える)

—略—

——しんとした間——

子供の一人（突然空を指す）あ、鶴だ、鶴だ、鶴が飛んでる。



惣ど や、鶴…  
運ず おお…  
子供たち 鶴だ、鶴だ、鶴が飛んでる。(繰り返しつつ、鶴を追って駆けて去る)  
運ず おい与ひょう、見や、鶴だ…  
惣ど よたよたと飛んで行きよる…

——間——

—略—

与ひょう つう…つう… (鶴を追うように、一、二歩ふらふらと。——布をしっかりと掴んだまま立ちつくす)

惣どもそれに引きこまれるように、[ 与ひょう・惣ど・運ずの ]三人の眼が遠い空の一点に集まる。

微かに流れてくるわらべ唄——

——幕—— 2

2 反の布を織るために大量の羽を自分の体から抜いて、かろうじて飛べるだけの羽を残し、弱々しく「よたよたと」飛んでいく鶴、愛する人と引き裂かれた例えようもない悲しみ、また男は布をしっかりと掴みながらも「ふらふらと」鶴を見送るというこの結末は、何とも感動的である。そして多くの日本人は、この結末をごく自然に受け入れているだろう。ところが西欧の学者、また学者でなくても筆者が接したアメリカ人の反応は日本人とは異なっている。この話は途中で終わっている、すなわち未完だと言うのである。口承文芸・ドイツ文学研究家、小澤俊夫氏も述べている。「この終り方は、ヨーロッパ人にはたいへん理解しにくい。わたしは多くの研究者から、『あの話は終っていないのではないか』ときかれる。『女房がつるになって飛び去ったのに、夫はそれを追っていないのか。日本の夫はなにをしてるんだ』というわけである<sup>3)</sup>。西欧人がこの物語の夫であったならば、鶴の妻を説得し、すなわち語り、連れ戻すのであろう。しかし日本昔話では夫は何もせず、何も話さない。ここにも話すことを重んじる文化に対して、重んじない文化の国である日本が表れていよう。またナレーターによる「その後」を語る説明が入っている訳でもない。そして夫もナレーターも何も語らずして話が終わっていることを、観劇した客も、戯曲として読んだ読者も、日本人はごく自然に受け入れると思われる。

語らないところにむしろよさを感じる。余韻を持たせる。余韻を帯びた終わり方に一種の美を感じる。先が述べられていないだけでなく、このラストシーンでの女の気持ち、男の気持ちにしても、戯曲『夕鶴』では書かれていない。木下順二のこの作品が昔話を土台にしていることは前述したが、昔話は昔語りとも呼ばれる。書かれたのではなく、もともとは語られていた、いわゆる口承文芸である。昔話『鶴女房』は全国の至る所に残っているが、山形県の資料を扱っての次のような説明がある。「夫はこのときどういう気持ちで

いたのか、山形のこの話の語り手は語っていない。いや、山形の語り手ばかりでなく、『つる女房』の語り手はどこでもこのときの夫の気持ちを語らないものらしい<sup>4</sup>。」言葉が少ないこと、語らないこと、日本文化の特徴をここにも見ることができ、それが却って「余韻」という大きい感動を生み出す結果となっているのである。

小澤氏は次のように結んでいる。「妻が意外にも自分の毛をむしって高価な布を織ってくれていたことへの夫の熱い感謝の気持ちとか、その妻がつるであるということへの驚きとか、助けたつるの恩返しだったのかという驚きとか、あつというまに飛び去られてしまうことへのさびしさのことは、なにも説明しないほうがよいのだろう。夫のこの複雑な心境と去る女房の心境は、むしろことばにしないで、余韻としてひびかせたほうが感動が大きいのであろう<sup>5</sup>。」日本文学に見られる余韻、言葉を出さないことによる美について、上と同様の、次のような評もある。「寡黙の美を生み出す...いちいち言わないほうが奥が深く、芸術的効果も高まる。この省略の世界が余白の効用を生み、そこに（言葉が）在るより無いほうがいいという逆説の論理を生み出す<sup>6</sup>。」余韻は美しさなのである。言葉がないことが余韻を生み出し、そこに美をもたらす。後述するが、実際の言葉よりも、言葉ではない所作・道具といった非言語が重きを成す茶の湯においても、非言語であるが故の余韻がもたらされることがある。言葉が少ないことは否定的な結果ではなく、余韻を醸し出し感動をもたらすという、むしろ肯定的な意味合いを含む。ここにもまた「わび」の思想に通じるものがある。

#### 【注】

<sup>1</sup>山本安英の主演により、1949年10月27日の初日以来1986年まで37年間で1037回演じられ、同じ俳優が一つの役をこのように数多く演じたとして日本の演劇史上に金字塔を打ち立てた。1990年森光子氏『放浪記』に抜かれるまで、ロングラン上演回数トップであった。

<sup>2</sup>木下順二「夕鶴」『夕鶴・彦一ばなし』木下順二戯曲選Ⅱ（東京：岩波書店、1982年第1刷、1998年第3刷）、pp.64-67. [ ]括弧は筆者による。

<sup>3</sup>小澤俊夫『昔話のコスモロジー』（東京：講談社、1994年）、p.135.

<sup>4</sup>同上、p.135.

<sup>5</sup>同上、p.135.下線は筆者による。

<sup>6</sup>森田良行『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』（東京：創拓社、1995年）、p.15.

#### 4-2-5 和歌の発達

話さないこと、言葉が少ないことをよしとする日本は、詩歌において独特の文学を育んだ。我が国の文学において極めて大きい重要度を占めている詩歌の発達は、言葉の少なさを抜きには語れない。わずか三十一文字に思いのすべてを込める短歌がある。俳句となると五七五の17文字でさらに少なく、限られた字数の中に広い世界、深い心を詠む。『伊勢

物語』や『大和物語』のような、いわゆる歌物語は文学のジャンル分けとしては散文に属するだろうが、和歌が中心となっている。このような歌物語が発達し洗練されて、『源氏物語』のような名作が生まれたことも、発端は歌の進歩から、もとを正せば、言葉が少ないことをよしとする文化が背景となっただけではないか。言語よりも非言語が重きを成すハイ・コンテクスト文化の原理に結び付いている。

中島文雄氏が述べている。「日本語は和歌や俳句に優れた作品があるのに、長詩らしいものはない。ところが英語には何千行から一万行をこす長詩がいくつもある<sup>1</sup>。」確かにそうである。サー・フィリップ・シドニーの『アストロフェルとステラ』然り、ジョン・ミルトンの『失樂園』然りで英文学は大作の詩を有する。中島氏は英語学者なのでイギリス詩の例を挙げているが、英文学も含めて、そもそも西洋文学の祖先であるギリシャ・ローマ文学にはエピック、すなわち大作の叙事詩の伝統がある。ギリシャには、西洋文学としては世界最古の詩と言われるホメーロスの『イーリアス』、『オデュッセイア』があり、紀元前200年頃の作とされる。ローマにはヴェリギリウスの『アエネイド』があり、作者の没年紀元前19年の作で、未完ではあるが一大作品とされている。3作共トロイ戦争を題材にしており、大作の詩である。『イーリアス』は15,600余行、『オデュッセイア』は12,100余行もあり、日本語訳にしても、例えば河出書房の『世界文学全集』第1巻『イーリアス』は1969年初版で、当時の小さい字体——縦横とも2ミリ程度——1ページが1行31文字×29行で上下2段にまたがっているにも拘わらず、316ページにも亘っている<sup>2</sup>。文字通り大作である。しかし散文ではなく、詩なのである。このように長い詩は日本文学には見られないであろう。

このような西洋文学を見ると対照的とも言える事実だが、日本文学には大作はない代わりに、短い詩が非常に優れている。外山滋比古氏は、日本人がさらり・あっさり・淡泊であることに美学的含蓄を持つことを指摘した上で、次のように述べている。「そういう淡泊好みの通人たちが考えだした詩型が和歌であり俳句であって、短いことでは世界に類がすくない。ことに大昔から確立している和歌の形式は、日本人の感性、言語、思考を決定するほどの力をもってきたように思われる<sup>3</sup>。」感性・言語・思考とは正に文化であり、よって和歌は文化形成にも繋がっていることになる。和歌、すなわち限られた字数による詩は、言葉が少ないことから育まれた文学であり、筆者が先般述べた主題・述語の省略、人が表れない表現といった要素が働いていることがまた、文学の質を高めることに寄与している。

芭蕉の俳句により、言葉の少ないことがいかに感動をもたらすかの例を見てみる。

#### 古池や蛙飛び込む水の音

と詠んだとき、芭蕉の目には古池と水に飛び込む蛙とが見え、耳にはその水の音が聞こえたに過ぎない。それをただ三つ並べることによって、一つの芸術空間を生み出す。まさに日本語ならではの芸当だ。これも話者（芭蕉）が、外界の場面から話材を見つけ、自己との関係でそれらを受動的に受け止める、日本語の日本語らしい表現行為と言える。「主語は?」「述語は?」といった、こと

がらを対象としてとらえる客観的な叙述ではない。だからこそ人の心に響く名句となったのであろう。

俳句は最も言葉を制限した省略の文学である。<sup>4</sup>

文学にとって文字は正に命であるが、文字が多いか少ないかによって、各作品の生み出す世界が変わってくる。「省略の文学」とは何と意味深く、的を射た表現であろう。少ない言葉が却って美を、趣を、醸し出している。前述のような「寡黙の美<sup>5</sup>」という評もある。長い表現でないが故に、短い中に俳人の意を込めているが故に、省略が働いているが故に育まれる感動の世界である<sup>6</sup>。

#### 【注】

<sup>1</sup> 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷）、p.13.

<sup>2</sup> ホメーロス『イーリアス』『オデュッセイア』呉茂一 訳『世界文学全集』第1巻所収（東京：河出書房、1969年）。

<sup>3</sup> 外山滋比古『日本語の個性』（東京：中央公論社、1976年初版、1998年第30版）、p.131.

<sup>4</sup> 森田良行『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』（東京：創拓社、1995年）、p.14.

<sup>5</sup> 同上、p.15.

<sup>6</sup> 竹内一郎氏は、この俳句の「古池や」の終わりに適度な間があり、芭蕉とこの句の読み手が交流し、感動を共有することを指摘している。竹内一郎『人は見た目が9割』（東京：講談社、2005年10月20日発行、2005年11月20日第5刷）、p.132. 参照。送り手と受け手が一つになることであり、茶の湯のコミュニケーションにも深く通じる概念であると考えられる。

#### 4-2-6 省略と茶の湯

茶の湯における書院台子茶からわび茶への変遷もまた、正に省略の美と言えるであろう。すなわち大広間に立派な台子を据え、高価な唐物の道具を使う茶席から、極めて小さい茶室で、生活に使う道具を茶器として用い、床の荘り物も点前所作も茶道具も、次第に数を減らしていった。茶の湯の歴史にも省略が大きく働いている。後の章で詳述するが、茶の湯のコミュニケーションでは言語よりも非言語が遥かに重きを成している。話さない、換言するならば言葉の省略は、茶の湯にも十分見られることである。話さないが故に、それに代わって非言語コミュニケーションである所作や物体が却って余韻をもたらし、深い趣に繋がることも多い。言葉の省略は、足りない、不十分だ、ないのでよくないというマイナス効果ではなく、より感動的なプラス効果を生み出すのである。欠けていること、不足が却ってよいことであるというこの思想は、後述の「わび」にも通じる。日本語の特徴で

ある省略は、茶の湯のコミュニケーションにも共通するものである。

話すことを重んじないこと、言葉が少ないことを特徴とし、それをよしとする日本文化のありようを見てきたが、その根本にあるものは、人と人との和である。これがあればこそ、言葉が少なくても伝わる、ひいては口に出さなくても通じる、すなわち非言語コミュニケーションが可能となるのである。また逆に言葉を使わずに意図を伝える、そうした経験を繰り返すことにより人との和が育まれる。ロー・コンテクスト文化が粗い社会構造や人間関係と共存する傾向があるのに対して<sup>1</sup>、日本のようなハイ・コンテクスト文化では、粗くない、すなわち密な社会構造と人間関係が形成される。人と人との和、平穏な人間関係、それは正に茶の湯の理想的な世界である。

筆者は第1章において、茶という嗜好品を喫するのは人間だけであり、他の動物には見られないことであると述べた。また第3章において、言語使用の有無が他の動物と人間とを分ける指標となり、言語を使うことが人間である証しなのだと述べた。このように、茶と言語には共通性があることを前述した。そこで言う「言語」とは言語一般を指す。そして本章において筆者は、世界の言語<sup>2</sup>の一つである「日本語」、その日本語と茶の湯の間にも共通性があることを指摘したい。

#### 【注】

<sup>1</sup> 石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション[改訂版]』古田暁 監修（東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷）、p.90. 本章は石井氏による。

<sup>2</sup> 世界に言語が幾つあるか、諸説が挙がっている。鈴木孝夫氏は、『閉された言語・日本語の世界』（東京：新潮社、1975年発行、1993年第34刷）、p.112. にて、世界の言語は約3,500であると言っている。金田一春彦氏は『日本語 新版（上）』（東京：岩波書店、1988年第1刷、1994年第20刷）、p.3. において5,000ぐらい、リービ英雄氏は『我的日本語』筑摩選書0006（東京：筑摩書房、2010年初版第1刷）、p.14. にて6,700と述べている。また田中春美・樋口時弘・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・下宮忠雄『言語学演習』（東京：大修館書店、1982年初版、1998年第12刷）、p.26. では、世界の言語総数は約2,800であり、最小限4,200、最大限5,600とする説があることを述べている。また同ページにおいて、このように数が異なるのは、言語と見るか方言と見るか、その基準が学者によって違うためであると説明している。

### 4-3 緩和表現

#### 4-3-1 あからさまを避ける

明確に述べるということをしなない、いわゆる緩和表現もまた日本語の特徴であり、人と人との和を築くための言語上の工夫であると解釈できる。われわれは断定的な言い方、あからさまな言い方を避けているのではないか。評論家、森本哲郎氏が述べている。「日本人

はあからさまな言葉をきらう。あからさまとは、はっきりということだが、はっきりとものをいうのは下品なのである。上品とは『奥ゆかしい』ことであり...<sup>1)</sup>。あからさまを回避する日本語の特徴が示唆され、そうすることが、プラス評価である奥ゆかしさ、ひいては美しさに繋がると述べている。筆者も日本語はそのような言語ではないかと解釈する。

一方、筆者が在米中によく耳にしたのは“absolutely”、“definitely”、“exactly”という副詞である。「絶対に」、「間違いなく」、「いかにも」という意味であるが、日本人の耳には非常に強い表現として響く。小さい講演会の中でアメリカ人学生に、これらの副詞がアメリカ文化の一端を表しているとすれば、日本文化は“culture of maybe”ですネと言うと、彼らは爆笑し、断定表現のアメリカと緩和表現の日本、そのような違いを垣間見たように思った<sup>2)</sup>。日本人は直接的に言わないように教育されているのではないか<sup>3)</sup>。

“culture of maybe”の私たちは、「...でしょう」、「...かもしれません」、「...と思います」といった緩和表現、少しぼかした表現をむしろ好んで使う。鈴木孝夫氏が、日本人の論文には「であろう」、「といってもよいのではないかと思われる」、「と見てもよい」が連発され、これらの表現は英訳不可能だとアメリカ人学者が言った例を挙げている<sup>4)</sup>。「あからさま」を好む文化と好まない文化の違いが表れている。具体性・論理性が問われる学術的な論文においてでさえも、断言を避けて上に挙げたような、中島文雄氏曰く「緩衝的な表現を用いる<sup>5)</sup>」との指摘も見られる。鈴木氏・中島氏という日本語研究・英語研究のそれぞれの権威からのこのような指摘は、逆に欧米では緩和表現をあまり使わないということを示唆している。在米中、筆者の日本語のクラスにいたアメリカ人学生の一人が、日本映画を見ていると、字幕スーパーに実に頻繁に“I think ....”が表れる、日本人はどうしてあんなに“I think ....”をよく使うのかと不思議がっていた。これももつともな指摘であり、あなたはどうかご自由だが私はこう思う、私の言うことが正しいかどうかわからないが、一応自分としてはこう思うという控えめな“I think ....”は、日本人の「あからさま」を避ける表現であると受け取られる。

こうした緩和表現の裏にも、相手との関係を重視する日本人の考え方が表れている。「関係体」に重きを置いているのではないか。同様のことを日米の比較から述べた次のような評もある。「日本文化には、過度な言語化に対して強く抵抗し、その穴埋めとして沈黙やあまりあからさまでない表現を尊ぶ傾向があるようだ。...日本人は言語による自己表現を制限し、その文化を表わすのに『遠慮をする』『用心深い』『つかみどころがない』『黙りがち』などの形容詞があてはまるとしたら、一方アメリカ人は言語によって自己表出をする際束縛されず、『おしゃべり』『率直で』『自己主張をする』という文化的特色を表わす形容詞があてはまるであろう。一方の社会が『抑制された自己』を好ましいとすれば、他方は『抑制されない自己』をよしとする。一方が『短縮』を奨励すれば、他方は『拡張』を奨励する<sup>6)</sup>。」という評もある。アメリカ文化と比較すると一層、日本人のコミュニケーションにおける「あからさまでないこと」が浮かび上がってくる。もちろん、このような二項対立で結論付けられる単純な問題ではない。それは危険なことである。しかし前述したように“absolutely”、“definitely”、“exactly”が非常に強い表現として響くのは、「過度な言語化に対して強く抵抗」する傾向があるからであろう。日本語の中に、あからさまでない

表現を尊ぶという特徴があることは否めない。そしてその背後には、人との衝突を避け、平和な関係を保とうとする考え方が働いている。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 森本哲郎『日本語 表と裏』（東京：新潮社、1995年）、p.23.
- <sup>2</sup> 緩和表現については拙文にても述べている。鎌田かをり「日本人の謙虚さという仮面」北海道大学留学生センター年報第5号（札幌：北海道大学、1996年）、pp.136-137.
- <sup>3</sup> 江副隆秀『日本語を外国人に教える日本語の本』（東京：創拓社、1987年）、p.145.
- <sup>4</sup> 鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』（東京：新潮社、1975年発行、1993年第34版）、p.27.
- <sup>5</sup> 中島文雄『日本語の構造』（東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷）、p.39.
- <sup>6</sup> ディーン・バーンランド『日本人の表現構造』西山千・佐野雅子 訳（東京：サイマル出版社、1979年初版、1994年第11版）、p.99-100. 下線は筆者による。

#### 4-3-2 曖昧さ

この「あからさまでないこと」という考え方は「曖昧さ」にも表れている。イエスカノ一かの二項対立、単に二つに分ける二元論ではなく、われわれはその二つの間に曖昧なものを残そうとする傾向がある<sup>1</sup>。また、その曖昧さに美徳を感じているのではなかろうか<sup>2</sup>。先に挙げた森本哲郎氏の「あからさま」についての引用は、さらに曖昧さの論に発展している。「日本人はあからさまな言葉をきらう。あからさまとは、はっきりということだが、はっきりとものをいうのは下品なのである。上品とは『奥ゆかしい』ことであり、『奥ゆかしい』とは、奥に行かまほし、すなわち、奥のほうに何かあるので、そこへ行ってみたいという気持ちを起こさせることである。つまり、あいまいな表現こそ、奥ゆかしいということになる。こうして、日本語はあいまい性を徳とするようになった。日本語には厳密な定義というものがほとんどないといってもいいほどである<sup>3</sup>。」日本語に「厳密な定義というものがほとんどない。」とは危険な言い方だが、明言しないこと、ぼかして言おうとすること、曖昧さをよしとする、美徳と考える、ひいては美を感じることは大いにある。

どのような分野でも構わないが、日本におけるアンケートを見ていつも気づくことは、選択肢の中に必ず「どちらとも言えない」という項目があることである。本論文の第2章においてコミュニケーションについて述べた際に、文化庁の世論調査を挙げたが、そこでも「どちらとも言えない」という項目は実に頻繁に目にした。筆者が経験したアメリカのアンケートには、これに合致する表現は見られない。5段階評価の場合、項目は“strongly agree”、“agree”、“partially agree”、“disagree”、“strongly disagree”である。中間にある“partially agree”は「部分的に賛成する」といった意味で、「どちらとも言えない」と同義であるとは言いかねる。「どちらとも言えない」の表現には、ことを明確にせず、白か黒かではなく

中間の要素を残し、すなわち曖昧さが感じられる。

曖昧さは、ごく日常的な生活の中にも見られることである。例えば料理の作り方について注意して見てみると、いわゆる曖昧な表現が多々あることに気がつく。粉をこねるのに「耳たぶくらいの柔らかさに」と言う。揚げ物をするのに「きつね色になるまで揚げる」と言う。卵白等を泡立てる際、「角が立つまで」と表す。温度を述べるのに「ひと肌くらいの温かさ」と表現し、玉ねぎ等を炒める時、「透明になるまで」と言う。英語で書かれた料理の本にこのような表現はまず見られない。何度の温度で何分間、といった具体的な書き方がなされている。確かに日本語の表現は曖昧である。「耳たぶくらいの柔らかさ」と言っても、人によってそれぞれ違うではないか、「ひと肌」も同様に体温は個人個人で異なる、と英語話者は不思議がって言い、もっともなことである。どのような色を「きつね色」と呼ぶのか、「角」はどの程度の硬さを指すのか、「透明」とはどのくらい透き通った様を言うのか、人によって異なり、非常に曖昧な表現だと言わざるを得ない。

曖昧さについては大江健三郎氏も述べている。大江氏のノーベル賞受賞記念講演の題名が、「あいまいな日本の私」であったことは広く知られているが、氏は別の作品の中でも曖昧さについて述べている。「日本語の作家として初めてノーベル賞を受けた川端康成（1899-1972）は、ストックホルムで『美しい日本の私』という受賞講演をしました。それはじつに美しいものです。同時に、まことにあいまいなものだともいわねばなりません。しかもその美しさが日本的であるように、そのあいまいさも確かに日本的だと思います<sup>4</sup>。」明確に述べないこと、あからさまを避けることと、曖昧さは十分通じている。そして曖昧さは日本的であり、また美であると述べている。特に茶の湯を頭に置くと、筆者もこの意見に大いに賛同する。曖昧さ、それは緩和表現・緩和的行為と通じるものであるが、緩和には美しさが感じられよう。

国語学者、大野晋氏も言っている。「日本人は強い行動をきらう。なるべく薄衣うすぎぬを着せて、霞かすみがかかるように動く方が上品で優雅だと思ひ馴れています。それは確かに一つのすぐれた文化です<sup>5</sup>。」大野氏はこの後、レポート・論文等の知的判断が問われる書き物においては「霞主義<sup>6</sup>」はよくないと述べているが、強い行動を嫌い、薄衣のような、霞のかかったような言動が上品で優雅だとの指摘には、曖昧さが美を持つものであることが表れていよう。

#### 【注】

<sup>1</sup> 黒川紀章「江戸文化と現代」『日本文化を探る』（東京：講談社、1985年）、p.54. において同様のことを述べている。

<sup>2</sup> 森本哲郎『日本語 表と裏』（東京：新潮社、1995年）、p. 63. 参照。

<sup>3</sup> 同上、p. 23.

<sup>4</sup> 大江健三郎「回路を閉じた日本人でなく」『あいまいな日本の私』（東京：岩波書店、1995年1月第1刷、1995年5月第5刷）、p.187. 大江氏はここでは、川端の講演がど



うして曖昧なのかは述べていない。しかし「個人としての自己の責任をぼかし」ていると川端を批判したことが、近代日本文学・比較文学研究者、大久保喬樹氏により指摘されている。大久保喬樹『川端康成一美しい日本の私』、ミネルヴァ日本評伝選（東京：ミネルヴァ書房、2004年初版第1刷）、p. 5. また大久保氏は川端作品が、何かとりとめがなく読み方によってカメレオンのように変化するとも述べている（同上、p.6.）。これらの点が曖昧さの表れなのかもしれない。筆者も『美しい日本の私』に接して、道元・明恵・良寛の3僧の和歌に始まり、『源氏物語』や西行に言及し、芥川龍之介をも扱い、さらにこれら文学に加えて日本の焼き物や茶の湯も語り、日本文化の壮大な紹介・宣伝と読むことができると感じた。しかし、そこに流れる自然との合一や滅びの美といった、日本文化のテーマをことさら述べているとも解釈でき、またテーマの陰に川端自身を重ね合わせ、実は自己を語っているとも受け取られ、同上、p.2. で大久保氏も同様のことを述べているが、様々な読み方が可能であると解した。かような読み方の多様性を曖昧さと言うこともできよう。そして文章全体に流れる美しさは、さすがに川端文学を深く感じさせるものである。

<sup>5</sup>大野晋『日本語練習帳』（東京：岩波書店、1999年1月第1刷、1999年7月第20刷）、p. 59. ルビは大野氏による。

<sup>6</sup>同上、p. 59.

#### 4-3-3 ジャパニーズ・スマイル

日本人の不可解な笑い、いわゆるジャパニーズ・スマイルについても曖昧さが見られる。「ジャパニーズ・スマイルという言葉がある。日本人は、よく訳のわからない笑いをすると言われる。外国人はうす気味悪く思い、これについて悪口を言うが、それは日本人の気質を知らないからである。（改行）日本人は昔からよい、悪いという判断を直接にはつきりと言うことを避ける。相手の立場を考えて、その人を傷つけることを恐れるからである！」

このジャパニーズ・スマイルは、文化紹介も兼ねた大学生向けの英語の教科書にも採り上げられている。各国の挨拶の仕方——握手をする、お辞儀をする、抱擁する等——を紹介している件で、“Special note（特別の注意）”として次のように述べている。“In Japan, a smile can have different meanings. It usually means that the person is happy, or that the person thinks something is funny. But it can also mean that the person is embarrassed.”日本では笑いは（西欧とは）異なった意味を持ち得る。通常は嬉しい時、何かおかしい（面白い）時に笑うが、日本では恥ずかしい時にも笑うと述べている。どうして嬉しくもおかしくもない時に笑うのか、外国人は不気味だ、気持ち悪いと感じるそうである。恥ずかしさ、照れ隠しの気持ちから笑いが出るということなのだが、外国人には不可解であり、「訳のわからない笑い」と受け取られてしまう。この笑いにも曖昧さが含まれている。ばつの悪さ、きまり悪さを「何となく」隠して笑う。笑いは言葉ではなく非言語行為である。ジャパニーズ・スマイルは、非言語行為にさえも日本人の曖昧さが表れていることを示している。

しかし、ばつの悪さ、きまり悪さは上に説明されているような、恥ずかしさにだけ起因するものではないと筆者は考える。引用の最後にあるように、よい、悪いと明確に言うことを避け、相手を傷つけないようにとの配慮を持つ、この点をむしろ指摘したい。相手が明らかに間違っている、また相手と自分の意見が異なる場合でも、あからさまにそうは言わず、ジャパニーズ・スマイルを行い、すなわち少し笑って「おっしゃることはよくわかりますが...。」と切り出すことが多い。相手と自分の考えの相違を、いわば曖昧に笑って受けている。衝突を避けるための笑い、相手との関係を平和に保つための緩和行為であると考えられる。ひいてはコミュニケーションの円滑さを図るための緩和行為となっている。

#### 【注】

<sup>1</sup> 吉田弥寿夫 編『Japanese for Today』（東京：学習研究社、1973年）、p.212. 本書は外国人のための日本語の教科書であり、よって分かれ書きでルビが振ってあるが、ここでは分かれ書きはせずルビは略した。また一部仮名を漢字表記とした。

<sup>2</sup> Susan Stempleski, James R. Morgan, Nancy Douglas, *World Link*, Book 1, Second Edition, Boston, MA, Heinle Cengage Learning, 2005, 2001. p.19.

#### 4-3-4 利休ねずみ

「利休ねずみ」という色がある。千利休の好みに由来すると言われ、利休本人が色を指示した訳ではないが後世の人が名づけ、江戸時代より風流で高尚な色という意味合いで使われていたらしい<sup>1</sup>。北原白秋の詩集『畑の祭』の中にある「城ヶ島の雨」という詩にも、「利休ねずみ」が次のように詠われている。

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、  
利休鼠の雨がふる。  
雨は真珠か、夜明けの霧か、  
それともわたしの忍び泣き？

江戸前期の茶人、久保長闇堂による茶史茶説書『長闇堂記』には、次のような記述がある。

秀吉公御師匠にめされしより、世の中皆宗易かゝりの茶湯とはなれる物也、  
宗易華美をにくまれしゆへか、わひのいましめのための狂歌よみひろめ畢、  
（襟） （墨 染）（布子）  
えりかへてすみそめぬのこ色のわた  
（足袋）（扇）  
帯たひあふきあたらしくせよ

(小大豆) (海老) (脛)

振舞はこまめの汁にえびなます

亭主給仕をすれはすむ也

(木綿)

それよりして、世にねすみ色とてもてはやせり、又、あやおりのもめん、ねすみ色、とろめんとて唐よりおゝくわたれり<sup>3</sup>

利休は秀吉お抱えの天下一の宗匠であり、よって茶の湯が利休風になってきたことがまず述べられている。そして利休は華美を憎んだからか、わびを戒める意味でここに挙げる狂歌を詠み広めたことが記されている。茶事における服装も料理も、清潔感を持つと共に質素で地味であるようにと諭している。利休の好んだ色ということで、茶人ばかりでなく世間でも、この「利休ねずみ」がもてはやされたとあり、利休の影響力の強さが窺われる。

「利休ねずみ」は慣用色名、すなわち一般の人々が使う色の名前の中に、また日本工業規格 (JIS) で定める物体色の色名の中に確かに存在し、『色名事典』にも記載されている。

4. アメリカの画家、アルバート・マンセルが考案した、マンセル色相環という、色相・明度・彩度の3点から色を客観的に表す方法、色の仕組みを系統的に表す1方法において「2.5G 5/1」と表記される色が「利休ねずみ」である<sup>5</sup>。「利休は、茶葉の連想から、色名では緑みのあることを形容するので、この色名も緑みの鼠色を指す<sup>6</sup>。」との説明にもある通り、同系色の灰色・鼠色・グレイ・薄墨色とよく似ていながらも、これらにはない緑色が「利休ねずみ」には微かに入っている。事実、上記のマンセル色相環の表記における「G」は“green”を指している。「利休ねずみ」は緑を薄く含んだ灰色とでも言うべきか、いずれにせよ地味な色である。

当時の能楽師が人目を引き付ける絢爛たる衣装をまとっていた時代、また後述するが金色という色に代表される安土桃山時代、狩野派の華やかな屏風絵、豪華な聚楽第が注目されていたのと同じ時代に、利休ねずみに顕著に表れている地味さ、目立たなさを利休は大切にしていた<sup>7</sup>。ねずみ色とは正に曖昧な色である。白でもなく、また黒でもない。明確な色に対して緩和された色彩であるとも言える。

北原白秋の詩自体にも緩和表現が感じられる。城ヶ島の磯に雨が降っていることを詠み、その雨は真珠か、夜明けの霧か、「わたし」の忍び泣きか、どれであろうかと正に曖昧な詠じ方である。しかしこの曖昧さは一種の美を醸し出していると筆者は鑑賞する。不明確でよくない、わかりづらいというマイナス効果ではなく、むしろプラス効果を生み出している。また、その曖昧さが、「利休ねずみの雨」という表現と、いかにもよく合っており、見事な言葉の選択であると筆者は解釈する。この詩を読んで、白秋が曖昧な表現を用いて何となくごまかしているとは、誰も思わない。余韻が漂い、そこに美が醸し出されている。

『宗湛日記』は安土桃山期の博多の豪商、神屋宗湛による茶会記であるが、その中に「黒ハ古キコゝロ也<sup>8</sup>」とあり、利休の言葉とされている。ここで言っている「黒」は利休がよきものとして評価し、好んでいた黒楽茶碗の黒である。これこそ「利休ねずみ」の色ではないかという説もある<sup>9</sup>。「利休ねずみ」は前述のように、色彩関係の文献の中で明示され、確かに存在が認められている色である。しかしこれは、色彩学という学問分野も発達した現代の捉え方であり、利休が好んだとされる色と同色であるとは限らないと、筆者は

考える。もし黒楽茶碗の色が「利休ねずみ」であるとすると、『色名事典』その他の文献で提示されている色よりは濃い。しかしながら黒楽の黒は漆黒の黒、カラスの濡れ羽色といった、いわゆる真っ黒ではない。やはり中間色・曖昧な色・緩和された色なのではないか。白・黒のような明確な色彩ではない。この中間性・曖昧さに利休はよさを、美しさを、奥ゆかしさを、感じていたのか。緩和の美意識が「利休ねずみ」に表れている。

筆者は曖昧さを含む日本語の緩和表現に美があることを指摘したが、この黒楽茶碗の美も、万人が認めているところであろう。楽家初代、長次郎の作品だけを取っても、重要文化財に指定されている「大黒」・「東陽坊」を始め、「北野」・「まこも」・「俊寛」等、枚挙にいとまがない。「利休ねずみ」が、現代の慣用色名の指す緑がかかった灰色であろうと、黒楽茶碗の色であろうと、いずれにしても、中間色・緩和色である。緩和された色を好む利休、その利休が大成した茶の湯、そのように考え合わせると、茶の湯にも緩和の要素が働いていることが推察できる。日本語に見られる言葉の省略と共に緩和表現もまた、茶の湯と通じる部分が大いにあるのではないか。

#### 【注】

- <sup>1</sup> この説明は福田邦夫『新版 色の名前 507』（東京：主婦の友社、2012年）、p.256.、及び村井康彦『千利休追跡』角川選書 195（東京：角川書店、1990年初版）、p.7. に基づく。村井氏は「ねずみ」をかな表記しており、筆者もそれに準じる。漢字表記にすると動物の意味合いが強く感じられるからである。しかし慣用色名及び日本工業規格（JIS）では「利休鼠」と漢字表記されている。清野恒介・島森功『色名事典』（東京：新紀元社、2005年初版）、p.241. 参照。
- <sup>2</sup> 北原白秋『北原白秋詩集』（下）安藤元雄 編（東京：岩波書店、2007年第1刷）、p.130. 経済学者・色彩研究家、福田邦夫氏も『新版 色の名前 507』、p.256. にて「文明開化以降の白秋などが、この色名をさらに高尚にした文化人であったといえそうだ。」と述べている。
- <sup>3</sup> 『長闇堂記』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年 500部限定）、pp.356-357. 括弧は本書にある。
- <sup>4</sup> 福田邦夫『新版 色の名前 507』、p.256. 及び清野恒介・島森功『色名事典』、p.241. 参照。
- <sup>5</sup> 「2.5G」は色相を表す。「G」はグリーンである。グリーンの両隣に黄色と青があり、黄色が「0」で青を「10」とすると、「利休ねずみ」は「2.5」、すなわち青よりも黄色にかなり近いグリーンを含んでいることを示している。「5/1」の「5」は明度を表す。「0」が暗く、「10」が明るい。明るさという観点より「0」から「10」までの間に各色を位置づけた場合、「利休ねずみ」は「5」、すなわち明るさとしては中くらいである。「5/1」の「1」は彩度を表す。白・黒・グレイ等の無彩色、すなわち色が無いものを「0」とし、鮮やかさが増すほど数値が増えるのが彩度であり、「0」の他に「1」から「14」まである。「利休ねずみ」は「1」であるから、ほとんど鮮やかさが無い。無彩色である「グレイ」に限りなく近い色である。以上のことから、「利休ねずみ」はグレイに非常に近く、明るさは中くらいで、青よりも黄色に近いグリーンを含んだ色ということになる。福田

邦夫『新版 色の名前 507』、p.7. 及び大井義雄・川崎秀昭『カラーコーディネーター入門 色彩』、監修：財団法人日本色彩研究所（東京：日本色研事業株式会社、1996年）、p.14. 参照。

<sup>6</sup> 福田邦夫『新版 色の名前 507』、p.256.

<sup>7</sup> 筆者はここで、時代の華やかさに対しての利休の地味さ・質素さを指摘しているが、倉澤行洋氏は、時代そのものが対極の美を呈していたことを『増補 対極 桃山の美』（京都：淡交社、1983年初版、1992年増補初版）、p.2. において次のように述べている。

「桃山城には、華麗・豪華に対する素朴・簡素、花爛漫の春に対する『雪間の草の春』、『花紅葉』に対する『浦のとまや』のような、相反する極の趣が並存していたのである。（改行）このような、反対の極の趣が並存は、桃山時代には、桃山城においてだけではなく、文化のあらゆる面において、いたるところ見られた。」また筆者は利休の地味さ・質素さだけを強調している訳ではない。権力への憧れ・出世欲といった、地味に対する、いわゆる華やかさな面が、利休の中にもあったのではないかと考える。

<sup>8</sup> 『宗湛日記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.176. 『宗湛日記』は『松屋茶会記』及び『天王寺屋茶会記』と並んで三大茶会記の一つに数えられ、日本茶道史上の最も貴重な文献、また安土桃山時代研究の根本史料の一つとして高く評価されている。この説明は同上、p.394. 芳賀幸四郎氏による。

<sup>9</sup> 村井康彦氏は『千利休追跡』、p.8. において、「利休ねずみ」は利休型の黒茶碗の色であり、「利休の理想とした茶の湯の世界を象徴する色」と述べている。

#### 4-3-5 緩和表現と茶の湯

「利休ねずみ」のみならず茶の湯自体もまた、ある意味で緩和表現の文化なのではなかろうか。後述するが、茶事のテーマや季節感を、亭主は茶席のしつらえ・道具・点前といった非言語要素を通じて客に伝えようとする。客の側に心映え・鑑識眼がなければうっかり見逃してしまいそうな、ささやかな工夫もある。仰々しくこうですよ、こういう意味を表していますといった、いわゆるあからさまなやり方ではなく、いわば緩和された演出と言えよう。歴史学者・茶道研究家、桑田忠親氏も、茶の湯は「万事つつましやかに、控えめに所作する！」と述べており、藪内家第5代宗匠、藪内紹智による江戸時代の茶道指南書『源流茶話』にも「さひたるハよし、さはしたるハあしゝ<sup>2</sup>」とある。わざとらしさを避け、行為が自然に、自ずから湧き出ることをよしとしている。亭主の意図があからさまではなく、さりげなく客に伝わるのが望ましい。亭主と客はもちろん話をする。言語を使う。しかし茶席のテーマや季節感、様々な所作に込められた意味といった、いわゆる重要部分は、言語よりもむしろ非言語を通じて伝えられるのではあるまいか。

現代の桑田氏、江戸時代の藪内紹智と時代を遡るが、さらに前の時代、室町時代の珠光も「御尋之事」の冒頭で「所作ハ自然と目に立候ハぬ様に有べし<sup>3</sup>」と述べている。これ

は足利義政中心の東山文化における書院台子茶、すなわち唐物趣味の、荘り物の多い、賑々しい一大行事としての茶に対しての論しと受け取られる。哲学者・芸術学者、倉澤行洋氏も珠光のこの言葉を「万事大仰であることを斥けて<sup>4</sup>」おり、同時代またはそれ以前の茶と珠光の茶は違っていることを指摘している。自然さ、さりげなさが重んじられるのが茶の湯である。わざとらしくではなく、仰々しくではなく、すなわちあからさまでなく、逆に控えめに、さりげなく、換言するならば緩和された行為・緩和された演出を以てもてなすのが茶の湯なのではあるまいか。そしてそのさりげない、自然な、あからさまでない演出や所作を通して、亭主は意図を客に伝えようとする。コミュニケーションを図ろうとする。心映えのある客ならば、その緩和された亭主の工夫を読み取ろうとする。コミュニケーションを受け取ろうとする。茶の湯のコミュニケーションに緩和表現が大きく働くことになる。省略のみならず緩和表現にも、日本語と茶の湯の共通性が表れているのではないか。また両者共、そこに美が働いていることにも類似性がある。

緩和表現を特徴とする言語の背景にあるものは、相手を傷つけないように、平和にという人間関係に重きを置く考え方である。これも正に茶の湯の世界である。亭主は客が心地よいように、楽しんでくれるように、不備がないようにと常に気を配り、和やかな雰囲気を作り上げようとする。客もそれに協力する。人と人との和を重んじ、穏やかな中で一緒に、共にといった姿勢が問われる。日本語の緩和表現と茶の湯の背後には、同じ思想が働いている。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版）、p.395.
- <sup>2</sup> 『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.429.
- <sup>3</sup> 「御尋之事」『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.472。「御尋之事」は珠光が茶のありようを説いたもので、「心の文」と同様に、弟子の古市播磨法師に宛てた伝書とされている。古市播磨は『山上宗二記』にて「古市播州ハ珠光一ノ弟子也、<sup>ふるいち〔播磨〕</sup> 數奇者<sup>（すきしや）</sup>、名人ナリ、其數三十色計所持ス」と説明されている。『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.96. 括弧は本書にある。
- <sup>4</sup> 倉澤行洋『珠光：茶道形成期の精神』（京都：淡交社、2012年初版）、p.132.

## 4-4 外国の影響

### 4-4-1 文字

ここでは、日本語における外国の影響について考察する。これも本章のテーマである「日

本語の特徴」であり、外国の影響を理解することによって、より広く「日本文化の特徴」も浮かび上がってくる。そして日本語と茶の湯との共通点も見えてくる。

まず文字について述べる。日本は中国より漢字を取り入れた。その漢字をいつから日本人が日本語のために用いるようになったのか、正確にはわかっていない。しかし「5世紀ごろのものとして漢字を記した銅鏡や鉄剣などの考古学的遺物があり、それは漢文を記したというよりは、やはり日本語として読まれるべきものであったかと思われる<sup>1)</sup>」5世紀には漢字が使われていたのだ。しかしそれだけでは留まらず、日本人は漢字から仮名文字を発明した<sup>2)</sup>。

5世紀以降、公式の場では漢字が使われ続けていたが、私的な場においては、日用の便宜を図ろうとできるだけ簡単に、早く書こうという姿勢から草体がいられ、9世紀中葉までに仮名文字が発生することになる。中国の本を読む際の、また経典注釈の必要性から生まれたカタカナは、もとの漢字の一部を取っている。平安時代には僧侶や学者のような知識階級の男性が公的な漢文を読む時に、送り仮名やふりがなとして使っていた。一方ひらがなは、草書を一段と進めた形で、もとの漢字全体を崩して作られている。平安時代から主に女性が多く使い、私的な書き物には男性も用いていた。幾つかの例を次に挙げる<sup>3)</sup>。

利	利
り	利
り	り

加	加
カ	か
カ	か

於	於
オ	於
オ	お

<sup>4)</sup>世界の言語の大部分は、表音文字か表意文字か、どちらか1種類の文字のみを使っている。表音文字にはローマ字（いわゆる英語等のアルファベット）・仮名・ハングル・タイ文字・アラビア文字等があり、表意文字には漢字がある。表音文字によって表記される言語としては、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語・マレー語・タイ語・アラビア語等、世界の言語の大多数であり、一方、表意文字によって表記される言語は中国語である。

これらに比して日本語は、表音文字である仮名と、表意文字である漢字の2種類の文字によって表される世にも珍しい表記となっている。この「漢字仮名交じり」表記は「世界の他の言語の表記法とは非常に異なったところがある<sup>5)</sup>」のである。日本語において用いられている文字の大半は漢字と仮名であるが、他にも実際に使用されている文字を考えると、金田一春彦氏が述べるように、「漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・アラビア数字という多数の違った体系のものを使っている言語は、日本語が世界で唯一<sup>6)</sup>」であり、文字の面では日本語は世界でも稀な言語だと言える。「世界一難しい日本の文字<sup>7)</sup>」という評もあるほどである。

そして注目すべきことは、日本語に使われている文字体系はどれも、日本で作り出され

た訳ではなく外国から入ってきたのであり、またひらがな・カタカナは中国という、やはり外国から伝わった漢字を基に、日本で作られたものだということである。ただ単に取り入れたのではなく、独特の文字に作り替え、一方漢字は漢字で使用し続け、結局は日本独自の表記法を生み出した。その漢字についても、1950年代に中国は従来の漢字を簡略化した「簡体字」という字体を制定したが、だからといって日本もそれに従った訳ではない<sup>8</sup>。日本の漢字もちろん、その後変容を多々重ねてきた。しかし少なくとも、簡体字への切り替えではなかったことは明らかである。簡体字に対して、以前の複雑な方の字体を「繁体字」と呼ぶが、日本はこの繁体字を基に変容の歴史を連ねてきた。漢字を中国に学び、中国から取り入れながらも、日本独自の漢字を作ってきたのである。

数字については漢数字・アラビア数字、またローマ数字も用いられており、いずれも外国起源である。ローマ字も日本人の考案ではなく、外国人である宣教師によって作られたものだ。宣教師はキリスト教の教義をローマ字を使って日本語に翻訳し、布教を行った<sup>9</sup>。以上に見てきたように、日本語の文字は皆、外国起源なのである。

アメリカ人であり、西洋出身者として初めての日本文学作家であるリービ英雄氏が、日本語で小説を書き始めた時、様々な文字が混じり合っていることに非常に魅力を感じたと述べている。著作中の『混じり文』の美しさ」と称する章の中で、次のように語っている。「日本語には漢字があり、平仮名があり、片仮名があり、現代ではローマ字もある。ぼくの文章には、中国の簡体字も入る。いわゆる『混じり文』だ。(改行) ぼくは『混じり文』に惹かれて、書いたのだと思う。(改行) 最初は、無意識だった。無意識のうちに、美しいと思って書いた。書きたいと思って、書いた<sup>10</sup>。」「混ざっていること」は日本語だからこそ可能なのであり、そこに美しさがあると言っている。文字体系における美しい、独特の日本文化の例を見る。筆者は省略・緩和表現に美があることを指摘したが、日本語の文字についても然りだという見方がある。

また「違った語族の言語を受け入れたことは、一方で日本語を豊かにし<sup>11</sup>」という評もあり、ここでは文字も含めた言語一般、すなわち単語も音韻も含めての言語を指しているが、外国の影響があればこそ、日本語は豊かになった。文字に見られる種類の豊富さ、上記の表現を使うなら「美しさ」は、外国の影響を抜きには不可能であった。

## 【注】

<sup>1</sup> 林大 編集代表『日本語教育ハンドブック』（東京：大修館書店、1990年初版、1993年第3版）、p.278. 引用の他にも、文字に関する歴史的説明は本文献の本ページに拠る。

<sup>2</sup> ひらがな・カタカナ以前に、8世紀初頭の『古事記』及び8世紀後葉の『万葉集』に見られる万葉仮名と呼ばれる文字がある。これは文字の意味とは無関係に、日本語の音を単に漢字で置き換えたものだ。よってひらがな・カタカナとは性質が全く異なるため、本稿で述べる「仮名文字」には含まない。

<sup>3</sup> 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智『漢字 1000 Plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol.1（東京：凡人社、1993年初版第1刷、2005年改訂版第1刷）、p.16. 「ひらがなになった漢字」、p.30. 「カタカナになった漢字」より。説明も本書に基づく。



- 4 富田隆行・眞田和子『新 表記』教師用日本語教育ハンドブック②、著作権者 国際交流基金（東京：凡人社、1994年第1版第1刷）、p.2. 参照。
- 5 同上、p.2.
- 6 金田一春彦『日本語 新版（上）』（東京：岩波書店、1988年第1刷、1994年第20刷）、p.3.
- 7 井上史雄『日本語は生き残れるか——経済言語学の視点から』（東京：PHP 研究所、2001年第1版第1刷）、p.176.
- 8 簡体字・繁体字の説明は小川芳男・林大、他編集『日本語教育事典』、日本語教育学会編（東京：大修館書店、1982年初版、1993年縮刷版第8刷）、p.473. 武部良明氏の解説に基づく。
- 9 富田隆行・眞田和子『新 表記』教師用日本語教育ハンドブック②、著作権者 国際交流基金（東京：凡人社、1994年第1版第1刷）、p.92 参照。
- 10 リービ英雄『我的日本語』筑摩選書 0006（東京：筑摩書房、2010年初版第1刷）、pp.18-19.
- 11 古田東朔・山口明穂・鈴木英夫『新国語概説』（東京：くろしお出版、1980年第1刷、1994年第17刷）、p.148. 本章は古田氏による。

#### 4-4-2 翻訳

日本人が西欧に初めて接するのは 16 世紀、すなわち安土桃山時代であり、ポルトガル人・スペイン人の来日を見る。日本人が西欧の言語に初めて触れたのも当然この時であり、言語としてはポルトガル語・スペイン語・ラテン語であった<sup>1</sup>。来日した外国人にはキリスト教宣教師が多く、前述のローマ字が考案されたのはこの時期である。

時代が下って江戸時代に入ると、蘭学者と呼ばれるオランダ語に明るい日本人学者が現れる。オランダとの交流が盛んになり、この学者たちは積極的にオランダ語を学習して、オランダの科学を取り入れるようになった。安土桃山期には見られなかった、と言うよりそれ以前のどの時代にもなかった、日本語史上初めての、西洋語翻訳の方法が考えられるようになった。そして翻訳の過程で数多くの訳語としての日本語が新生され、それらが次々と近代日本語の中に取り入れられていったという。ここに外国から日本語への、具体的な強い影響を見ることができる。「オランダ語の翻訳とはただ横を縦に置き換えるという操作の問題ではない。コトバとコトバの置換の前に、まず何よりも、日本人は近代西欧科学（精神）の史的背景やその性格を理解して、新しく日本語を創作しなければならなかったのである<sup>2</sup>。」このような信条に基づき、実際に杉田玄白や前野良沢らによる『解体新書』（1774年）という、原語がオランダ語である書物の日本語訳が世に出された。

そしてさらに日本語が画期的に変った明治という時代を迎える。日本が近代国家として生まれ変わるのは1868年、明治維新によってである。260余年に亘る江戸時代が終わり、近代国家・中央集権国家を目指して、明治維新は政治のみならず、社会・経済・文化の変革をも含む「トータル・レボリューション（全般的革命）<sup>3</sup>」であった、と日本語学・日本語

学史研究家、飯田晴巳氏は述べている。廃藩置県が行われ、江戸幕藩体制は一掃される。士農工商といった封建的身分制度がなくなり、四民平等の名の下に自由が謳われる。こうした中で「日本の近代化は日本語の近代化であった<sup>4</sup>。」のであり、言語の重要性が強調された訳だが、飯田氏は日本語の近代化について次の4点から語っている。1点目は東京語を国語としたこと、2点目は四民平等により身分・階級・職業・性別による言葉遣いの違いが崩され整理されていったこと、3点目に国語国字改良により書き言葉が大幅に変化したこと、そして4点目は西洋語が日本語に強い影響を与え、変化をもたらしたことである<sup>5</sup>。筆者はこの中の第4点目を採り上げる。

西洋語が日本語に影響を与える動きは、明治に入って突然始まった訳ではなく、幕末から既に見られていた。「幕末のあの争乱の時期にも、1ヶ月間に長崎の港に入ってきた注文の洋書数は、7,648冊というたいへんな数にのぼるのです<sup>6</sup>。」そして明治に入ると、その洋書の翻訳が激増する。「明治維新前後の三、四十年の間に、日本社会は、政府も民間も合せて、膨大な西洋の文献を日本語に訳した。それは量において膨大であったばかりではなく、また領域においても網羅的に広汎であった。…これほど短期間に、これほど多くの重要な文献を、訳者の文化にとっては未知の概念をも含めて、およそ正確に訳し了せたことは、実におどろくべき、ほとんど奇蹟に近い偉業である<sup>7</sup>。」日本語の近代化を目指す翻訳者たちの情熱、能力の高さに感服せざるを得ない。言語は文化であり、自分たちの文化を自分たちで作るのだという、否、前述の「日本の近代化は日本語の近代化であった。」との表現に則るならば、自分たちの国を自分たちで作るのだという、大きい運動の一環が翻訳事業だったのではないか、と筆者は考える。

翻訳の中でも、まず憲法の翻訳が日本語の近代化に大きく関与している。1889（明治22）年、近代日本初の大日本帝国憲法が公布された。この憲法はドイツ語がまず土台にあって、それを翻訳しており、第1章は次のようになっている。

## 第1章 天皇

第1条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第2条 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ継承ス

第3条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第4条 天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ拠リ此ヲ行フ

第5条 天皇ハ帝国議会ノ協賛ヲ以テ立法権ヲ行フ

第6条 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス<sup>8</sup>

翻訳論及び比較文化論研究者の柳父章氏は、この憲法は異常な日本文・悪文であり、すべての文が「ハ」で始まるのは非常に不自然なことで、翻訳語の影響が大であることをまず指摘している<sup>9</sup>。さらに、「明治憲法の、この『～ハ』で始まる文体は、これ以降の日本の文体に対して決定的な影響を与えた<sup>10</sup>。」と述べている。事実1890年代以降、「～は」という形が主語の表現として、法律文のみならず、小学校の教科書や参考書、すなわち教育の場でも使われるようになり、さらに文学界の言文一致運動へと発展することになる<sup>11</sup>。

しかしながら「～は」の「～」に入る言葉は、主語と言うよりは主題と称すべきで、その文が採り上げている話題・命題であり、本章の初めで述べたように、省略されることが多い。特に動作主の主語については西洋語では必ず記すが、日本語では違う。ここに挙げた憲法は法律文という、いわば特殊な文書で、プロの文学者が著す文学作品でもなければ、一般のわれわれが書く書き物でもない。しかしプロの文学者も一般のわれわれも、「～は」の羅列は書かず、また話すこともない。省略することが多い。柳父氏は『主語』は翻訳でつくられた<sup>12</sup>と述べているが、日本は「～は」を独自の用法に作り替えたのだ。

一人称の「自分」、三人称の「彼」、「彼女」といった人称代名詞も、必ず主語を置く西洋語の翻訳から発した言葉であり、言文一致運動に貢献した田山花袋(1871-1930)の時代から、小説家の間で盛んに使われるようになった。谷崎潤一郎も次のように述べている。「当時私は、今でも多くの青年たちがさうであるやうに、努めて西洋文臭い国文を書くことを理想としてをりました<sup>13</sup>。」極めて日本的な世界を描く作家だと評される谷崎でさえも、西洋文に憧れ、その特徴を取り入れていたのだ。文学界の日本語においてもまた、外国の

影響は大であったことが改めてわかる。しかし谷崎は1920(大正9)年に発表した「<sup>こうじん</sup>鮫人」という自分の小説を例に挙げ、作品の中で西洋文の影響による代名詞を使いながらも、それがいかに下手であったかを、10数年後になってから反省口調で述べている<sup>14</sup>。

確かに人称代名詞は現代の日本語でもあまり使わない。一人称の「自分」は省略されることが多く、「彼」、「彼女」については三人称を指す言葉としてよりも、「恋人」の意味で使うことの方が遙かに多い。西洋語の影響を受けながらも、その後そのまま普及した訳ではないことがわかる。日本語として馴染まない表現は定着しない。引用の谷崎の文も「理想としてをりました。」と過去形になっている。西洋語の盲目的な受入れではなかったのだ。

外山滋比古氏の挙げる次のような例もある。「『何が彼女をそうさせたか』(改行)というのは、昭和のはじめに人々をおどろかせたタイトルであった。なぜ、驚天動地の印象を与えたのかというと、欧文脈をそのまま出したからである。どうしてむき出しの欧文脈と感じられたのかといえば、『何が』という無生物が『そうさせたか』という動詞の主語に立っているためである<sup>15</sup>。」無生物主語は英語でもよく見られるが、日本語では不自然である。前述の「する」と「なる」の違い、他動詞「する」ではなく自動詞「なる」を使う日本語の特徴が、ここにも表れており、西洋語の直訳は日本語として生きてこないということを、この例は如実に示している。

外山氏は続けて述べる。「人間の運命のようなものは、何かがどうこうするという性質のことではない。むしろ、だれが、あるいは、何かが『する』のではなく、自然に『なる』ものだと感じられる。『する』と『なる』とでは、ほとんどきまって『なる』が選ばれるのが、われわれのことばの感覚である。(改行)『どうして彼女はそんなことになったのか』(改行)とすれば、当り前の言い方になって、注目される力はない<sup>16</sup>。」そして無生物主語は、次第に廃れていった。翻訳文のままでは生き残れないのである。翻訳文の日本語化がなされている。西洋語の影響を多分に受けながらも、それを日本語の中に器用に取り入れ、独特の日本語に作り替えている<sup>17</sup>。そしていつの間にか立派な日本語、すなわちごく自然

な、誰が見ても無理のない日本語に仕立て上げている。単なる受入れではなく、新しい日本語を作り出したのである。巧妙な日本文化の形成であると言えよう。

【注】

- 1 以降、歴史的背景については、杉本つとむ『近代日本語』（東京：紀伊國屋書店、1994年）、p.160. 参照。
- 2 同上、p.160.
- 3 飯田晴巳『明治を生きる群像—近代日本語の成立—』（東京：おうふう、2002年）、p.7.
- 4 同上、p.10.
- 5 同上、pp.10-11.
- 6 杉本つとむ『ことばの文化史』（東京：桜楓社、1972年初版）、p.193.
- 7 加藤周一「明治初期の翻訳—何故・何を・如何に訳したか—」加藤周一・丸山真男『翻訳の思想』日本近代思想体系 15（東京：岩波書店、1991年第1刷）、p.342.
- 8 井上正仁・能見善久 編集代表『六法全書』平成 26 年度版 I（東京：有斐閣、2014年）、p.36.
- 9 柳父章『近代日本語の思想 翻訳文体成立事情』（東京：法政大学出版局、2004年初版第1刷、2001年初版第2刷）、p.3.
- 10 同上、p.13.
- 11 この歴史上の説明は、同上、p.18. 及び、すが秀実『日本近代文学の<誕生>言文一致運動とナショナリズム』（東京：太田出版、1995年第1刷）、p.8. 参照。すが氏は本書の中で言文一致運動を「俗語革命」と呼んでいる。なお「すが」は糸偏に「圭」の漢字だが、変換不可能のため仮名表記とする。
- 12 柳父章『近代日本語の思想 翻訳文体成立事情』、p.1.
- 13 谷崎潤一郎『文章読本』、『谷崎潤一郎集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『日本文学全集』第 12 卷所収（東京：河出書房、1966年。初出は 1936年、中央公論社）、p.363. 本書では「努めて」の上にルビがあるが、ここでは省略する。
- 14 同上、p.363. 「鮫人」から一部引用を挙げると「...彼が其の臭ひを気にする間はまだ人間だつたかもしれないのだが、貧乏が彼を墮落させるにつれて、彼は次第に其れを忘れるやうに努め、成るべく <sup>けだもの</sup> 獣 の仲間になる修行をした。」（ルビは本書にある。下線は筆者による。）とあるように、一つの文の中に人称代名詞が 3 回も使われており、一般読者から見ても不自然さが感じられる。この小説を 10 数年後に振り返った谷崎は、同上『文章読本』、p.363. にて次のように述べている。「代名詞の使い方が如何に気紛れであるかを示すために、ここに引用したのであります。...されば、この文章の中にも、『彼は』『彼を』『彼の』等の代名詞が <sup>おびただ</sup> 夥しく使っておりますが、御覧の如くその使い方に必然さがありません。」（ルビは本書にある。）
- 15 外山滋比古『日本語の素顔』（東京：中央公論社、1981年初版、1995年第4版）、pp.18-19.

<sup>16</sup>同上、p.19.

<sup>17</sup>柳父章氏も『近代日本語の思想 翻訳文体成立事情』、p.27. において同様のことを述べている。

#### 4-4-3 外国の影響と茶の湯

上に述べてきた状況は、茶の湯と似ている。「文化」の章で語ったように、植物としての茶も、喫茶の習慣も、茶点でも、すべて中国から伝わった<sup>1)</sup>。宋の時代、粉末の茶に湯を注ぎ、かき混ぜるといふ、いわゆる抹茶の点て方が、鎌倉時代の日本に入ってきた。その後日本では、単に茶を点てて飲むだけではなく、点前や喫し方に作法・精神等様々な要素が加わって、より洗練されていった。もともとは外国起源でありながら、茶の湯はいつの間にか独自の日本文化、しかも今や代表的な伝統文化に発展している。

茶道具においても然りである。この件については後の章で詳述するが、室町時代には唐物一辺倒であった。すなわち中国・朝鮮という外国の器物を使っていた。その後安土桃山時代には南蛮貿易によって南欧、そしてルソン等南方の品々も入ってきた。これも外国からの茶道具である。しかしそれのみでは終わらせず、和物も取り入れ、外国と日本の両方のよさを活かしつつ、わび茶という独特の茶文化を作り上げていった。他国の文化をいつの間にか巧妙に自文化に取り込んでいる。茶の湯と日本語には共通する部分がある。

茶道具は茶席における重要な要素であり、亭主の意図を伝えるコミュニケーションの担い手とも言える存在である。その担い手である茶道具に唐物があり、南欧の物があり、南方の品があり、そして和物が加わるとなると、亭主が客に伝えたいこと、すなわちコミュニケーションの内容も、それだけ豊かなものとなる。一つの文化のみではなく、様々な文化圏の所産が茶席を彩ることになる。結局外国の影響は、茶の湯のコミュニケーションにも大きく影響していることになるのではなかろうか。

日本に限らず、すべての国の文化が他国の影響を受けている。これはごく自然な、と言うよりも当然のことである。ただ日本の場合、特筆すべきことは、どのようなものが、時にはそれまでの日本には全くない、異質な要素が入ってきたとしても、適切に取捨選択し、器用に取り込み、いつの間にか日本文化として立派に通用するレベルにまで仕立て上げているということである。日本語の文字と翻訳の状況がそうであり、茶の湯も然りである。本論文の「文化」の章で挙げた熊倉功夫氏の指摘が甦ってくる。「何か日本的というべき“鑄型”があつて、どんな種類の文化が海外から流れこんできても、その“鑄型”に入ってしまったら、あとは大変従来の文化となじみやすい型に変えられて出てくる。そんな仕掛けが日本の文化の構造のなかにあるような気がする<sup>2)</sup>。」鑄型とは、適切な取捨選択に基づく器用で巧妙な取り込みと作り替えを指す、と筆者は解釈するが、日本語にも茶の湯にも、この「鑄型論」が働いているのではなかろうか。

伝え合うという意味でのコミュニケーションならば、もちろん日本のみならず、全世界のすべての人々の間で、常時行われていることである。しかし茶の湯におけるコミュニケ

ーションは、本章で述べてきた省略・緩和表現・外国の影響という日本語の特徴と共通する要素を宿した、極めて独特のものであると言えよう。日本ならでは、茶の湯ならではのコミュニケーションを、過去の茶人たちは目指してきた。そして現代のわれわれも成立させようとしているのではないか。

#### 【注】

<sup>1</sup>熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』教育社歴史新書<日本史>81（東京：教育社、1977年第1刷、1991年新装第7刷）、pp.183-189. 及び神津朝夫『茶の湯の歴史』角川選書455（東京：角川書店、2009年）、pp.30-31、pp.64-65. 参照。

<sup>2</sup>熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』、p.14.

#### 4-5 むすび

日本語の特徴として、筆者は特に省略・緩和表現・外国の影響の3点を挙げる。まず省略についてであるが、省略には主題・述語の省略があり、また人が表れない表現も日本語には多く、英語の場合、これらは必ず明記するため、両者を比較すると相違が一層際立つ。送り手すなわち話し手または書き手と、受け手すなわち聞き手または読み手が同調し、共にその状況にいる。すなわち「その中に入って」おり、あるいは人と人とが親密な「関係体」の中にいるという言い方もできる。省略することによって、却って送り手の気持ちがよく表出される。受け手の「察し」の能力が問われ、言わなくても、書かなくても、受け手が察して通じるならば、省略が可能となる。話さないこと、言葉が少ないことは奥ゆかしく、余韻を生み出し、すなわち美となり、このことが、少ない言葉でも広い世界・深い心を詠む和歌の発達にも通じている。この点にも、長詩の伝統を誇る西洋文学との違いが表れている。

省略は茶の湯にも通じる。書院台子茶からわび茶への変遷には正に省略の美が表れている。また亭主は自分の意図を言葉なしに表し、すなわち言葉の省略が働き、しかしながら心映えのある客ならば、亭主の意図は確かに伝わる。これが茶の湯のコミュニケーションである。言葉のないことが却って深い趣に繋がり、茶席に余韻をもたらす。美が生まれる。言葉の省略は、足りない、不十分だ、なくてよくないというマイナス効果ではなく、むしろプラス効果を生み出し、後に述べる「わび」の思想とも深く関わる。

言葉の省略が可能なのは、人と人との関係が密なハイ・コンテクスト文化であるが故であり、それは茶の湯にも通じる。そこでは人と人との和、平和な人間関係が重んじられる。

緩和表現も日本語の特徴であり、相手を傷つけないようにとの配慮があって、人との和を重んじるが故に、日本語では明確に述べることを避ける傾向がある。あからさまでないことをよしとし、この考え方は曖昧さにも通じる。曖昧さも美となっている。また、あからさまでないこと・曖昧さといった言語行為のみならず、ジャパニーズ・スマイルという非言語行為にも緩和は表れ、そこにも人との和の概念が働いている。

利休が好んだと言われる「利休ねずみ」という色は曖昧な色である。ねずみ色は白とも言えず黒とも言えず、その中間色である。『色名事典』等に拠ると、「利休ねずみ」という色は現在の灰色・鼠色・グレイ・とよく似ているが、これらにはない緑色が微かに入っている。利休型の黒楽茶碗の色だという説もある。現在の色彩関係の文献で提示されている「利休ねずみ」と利休が好んだとされる「利休ねずみ」が同色であったとは言い切れない。しかし筆者が指摘したいことは、利休が好んだこの色は白・黒といった明確な色ではなく、その間にある色、いわば曖昧な色、緩和された色調ではないかということである。利休の緩和の美意識が感じられる。緩和された色を好む利休、その利休が大成した茶の湯、そのように考え合わせると、茶の湯にも緩和の要素が働いていることが推察できる。

茶の湯自体もまた緩和表現の文化ではないか。亭主は茶席におけるテーマや季節感を様々な趣向・所作を通して、さりげなく非言語で伝える。わざとらしさ・仰々しさを避け、すなわちあからさまでなく、逆に控えめに、自然に、さりげなく、換言するならば緩和された行為・緩和された美しい演出を以て伝えるのが茶の湯のコミュニケーションなのではあるまいか。こうした緩和表現による茶の湯の根底にあるものは、やはり人と人との和、和やかな人間関係である。主客はもちろん話をする。言語を使う。しかし歓待の意、茶席のテーマや季節感、様々な所作に込められた意味という、いわゆる重要部分は、むしろ非言語を通じてなされているのではあるまいか。

日本語の特徴として、外国の影響について指摘する。日本語には他国の影響が大であるが、そこから独自の日本語を作り上げてきたと言える。漢字・アラビア数字・ローマ数字はすべて外国起源である。ローマ字も、外国人である宣教師が考案した文字である。ひらがな・カタカナは日本ならではの文字であるが、他国の文字である漢字を基に創作された。このように日本で使用されている文字は皆、外国に端を発しており、またかようにも多数の異なった体系の文字を使用している言語は、世界で日本語が唯一であると言われる。様々な文字体系の混ざった日本語の表記を美しいとする見方もある。

明治時代に入って日本語の近代化が図られる。西洋語の翻訳が、かつてない規模で盛んに行われ、当然のことながら、西洋語は日本語に非常に大きい影響を与えた。しかしながら主語・人称代名詞・無生物主語といった西洋語の使用は日本語には定着しなかった。単なる受入れではなく、西洋語に学びながらも、日本人は日本語を独特の言語に作り替えた。巧妙な日本文化の形成であると解釈される。

同様のことが茶の湯についても言える。植物としての茶・喫茶の習慣・茶点てはすべて中国、すなわち外国から伝わった。茶道具についても室町時代までは中国・朝鮮、安土桃山時代には南欧・南方という、いずれも他国の品が多く取り入れられた。さらに和物も使われるようになり、それだけ茶の湯のコミュニケーションで伝えられる内容も豊かになったと言えよう。外国の影響は結局、茶の湯のコミュニケーションにも深く関係していることになる。日本人は、外国から入ってきたものを適切に取捨選択し、器用に取り込み、いつの間にか日本文化に仕立て上げる、そのような興味深い現象が、日本語においても茶の湯においても起こっている。

伝え合うという意味での、すなわち一般的な意味でのコミュニケーションならば、日本

のみならず、全世界のすべての人々の間で、常時行われていることである。しかし茶の湯におけるコミュニケーションは、本章で述べてきた省略・緩和表現という日本語の特徴と共通した、美を感じさせるという点でも共通した、極めて独特のものである。日本ならではの、茶の湯ならではのコミュニケーションを、茶人たちは成立させようとしているのではなかろうか。

もちろん日本語の特徴は、省略・緩和表現・外国の影響だけではない。しかし少なくともこの三つの項目のすべてに、茶の湯との共通性、茶の湯に繋がる要素が見られよう。



## 第5章

# 戦争を背景としての 茶席におけるコミュニケーション — 非言語の重要性

## 5-1 はじめに

室町時代から安土桃山時代にかけて、茶の湯は大いなる発展を遂げる。発展の理由として、茶と政治との結び付きが考えられる。本章では、両者の結び付きを中核とする茶の湯の発展の背景をまず述べる。為政者と堺の豪商茶人との関わり、武士の懐柔策、教養を高めること、これらの事項と茶の湯は密接な関係にあり、「文化」の章において指摘した、文化の美しい面と、その逆の面とがまた浮かび上がってくる。

主君が部下の活躍を褒める、密談をする、茶の湯は戦時中であるが故のこうした活動の場でもあったのではないか。実際に言葉を使うので、言語コミュニケーションである。しかし茶の湯において、より重要なのは、心の平和がもたらされることであり、戦時中の茶、書簡に見られる茶への言及を通して、戦争なのに茶、ではなく、戦争だからこそ茶であった実状を探る。実際に行われる茶は非言語コミュニケーション、書簡は言語コミュニケーションであることを述べる。また名物茶器・茶室といった非言語コミュニケーション要素も見逃せない。為政者はこうした非言語要素を用いて何を伝えたかったのか。

本章は、戦争が背景にあればこそ、すなわち戦国時代であればこそその言語コミュニケーション、また非言語コミュニケーションについて考察する章である。

## 5-2 東山文化と茶の湯

茶の湯の発展を考える際、室町時代から安土桃山時代が重要となってくる。茶の湯が生活文化に繋がっていることを考えると、特にそう言える。作家であり歴史研究家でもある司馬遼太郎氏も述べている。「日本文化というのは、平安時代からスタートさせることがもちろん常識ですけど、じっさいいまのわれわれにつながっている生活文化を中心に、建築とか、ものの考え方とかをみても、起源はたいてい室町からですね。お茶、お花がそうですし、能狂言もそうでしょう。それから鑑賞に堪えうる舞踊ができ上がっていくのもこの時代、室町時代からですし、ものごとを記録するというくせが、庶民や無学な侍たちのあいだでさえ身につくようになったのも、どうやら室町末期くらいかららしい！」日本文化における室町時代の重要性が浮かび上がってくる。

その室町時代は、東山文化を抜きに語ることはできない。東山文化の代表的存在である足利義政は、初めは武の精神に満ちた将軍であった。このことは「劍こそ国を治むる宝なれ 神のしるしと今ぞうけつぐ<sup>2)</sup>」という歌を残していることから窺い知れる。しかし応仁の乱は義政を大きく変えたようである。この戦いは足利将軍家及び管領家の相続問題をきっかけとして、東軍細川勝元と西軍山名宗全とがそれぞれ諸大名を引き入れた、10年にも亘る大乱である。「汝や知ル 都ハ野辺ノ夕雲雀アガルヲ見テモ落ル涙ハ (『応仁記』洛中大焼之事)<sup>3)</sup>」の歌の如く京都は戦乱の巷となり、幕府の権威は全く地に落ち、社会・文化を含めて時代の一大画期となった。大変大きい、また実に悲惨な戦争であったことが容易に窺い知れる。

この戦いを機に義政の人生観は変わった、すなわち強く戦う心よりも和の精神、穏やかで和やかな心を大切にするようになった、と僧侶であり茶道研究者でもある伊藤古鑑氏は語る<sup>4</sup>。義政の東山文化の中に茶の湯も含まれる。義政が同朋の能阿弥に意見を仰いで始めた、それが書院台子茶であり、能阿弥を介して珠光が紹介した、それがわび茶であると言われることが多い。義政が能阿弥に向かって何か面白い遊びはないかと尋ねた時、能阿弥は、奈良に珠光という者がいて、茶の湯に志も深く、儒仏の教えをも体得していると言って珠光を推薦したという。そこで義政は「珠光ヲ被召出、茶湯ノ師匠ト定給ヒ<sup>5</sup>」と、利休高弟である山上宗二は書いている。しかしこの茶書『山上宗二記』にも他の文献にも、珠光の出生や経歴に関する記述はなく、わび茶・珠光・義政の関係が立証されているとは言えない。また、将軍職にある義政が素性も明確でない珠光と知己を得たとは、考えにくいことだとも言える<sup>6</sup>。

一方、義政については上とは異なった解釈もある。日本文学・文化史研究者、ドナルド・キーン氏は、義政は不可解な人物だと評した上で、次のように述べている。「義政は、銀閣寺を建てる前、花の御所にいたとき、私にはどうも想像できないような生活をしていましたね。そのころ応仁の乱（1467-1477）のいちばん激しい戦闘がどこにあったかといえば、花の御所の見えるところでした。義政は平気で恋愛をし、深酒の宴を日ごと夜ごと催して遊んでいた。まあ、われわれの知っている例で、ローマ皇帝のネロが、ローマの燃える焰を見ながらバイオリンを弾いていたという伝説がありますけれども、これは嘘でしょう。しかし事実として義政公は、花の御所でいろいろ風流の遊びをしつづけていた。そのごく近いところで、多くの人々が死んでいった。…これはちょっと想像できないようなことです。」また次のような記述もある。「74年（文明6）細川政元・山名政豊が講和するちょうど1月前の3月3日、義政は戦争中も造営に努めていた。小川の新邸に移り、『公方は大御酒、諸大名は犬笠懸』にふけていた<sup>8</sup>。」戦争の真ただ中、民衆の苦しみをよそに立派な建物を建て、遊芸を楽しんでいたというこれらの記述を読むと、義政は将軍職にありながら、国民の不幸に非常に無頓着で無責任な人物との印象を受ける。もともと当時の政治家とはそんなものだ、民衆の苦境など考えていないという見方もあろう。

父、義教の暗殺、後を継いだ兄、義勝も幼少で病死し、わずか8歳で将軍となった義政は、28歳という若さで将軍職を引退し、その後は東山文化にいそしんでいる<sup>9</sup>。戦乱の世の無常観にあまりにも強く打ちのめされたのか、政治に無能であったのか、文化を愛する心が強かったのか、義政がいかような人物だったのかは結論しかねる。その生い立ち、上に述べてきた諸説を踏まえると、このいずれの側面も義政にはあったと筆者は考える。無責任さ・無頓着さは確かにあるが、一方で茶器を含む東山文化は高く評価されている。そして政治家——引退した政治家である——と茶の結び付きが見て取れる。この結び付きが、次の安土桃山時代になると、より顕著に、否、決定的なものとなる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』（東京：中央公論社、1972年初版、1998年第40版）、両氏の対談に基づく書籍、p.44.

- <sup>2</sup>伊藤古鑑『茶と禅』（東京：春秋社、2004年新装第1刷）、p.30.にて、義政が1472（応仁6）年『独吟百韻』に詠んだ、この連歌が挙げられている。
- <sup>3</sup>細川氏の近臣、飯尾彦六左衛門が応仁の乱による都の荒廃を嘆いて読んだ歌。上記『日本人と日本文化』p.46.にてドナルド・キーン氏が引用している。氏は「都は～」から引用しているが、「汝や知ル」の句がその前にある。本文に挙げた歌は永島福太郎『応仁の乱』日本歴史新書（東京：至文堂、1968年）、p.2.より引用したものである。永島氏は「ましく帝都消滅の挽歌」（同上、p.2.）と評している。『老人雑話』ではこの歌は「住馴し都ハ野邊の夕雲雀あかるを見てもおつる涙よ」となっている。『老人雑話』近藤瓶城編『改訂 史籍集覧』第10冊所収（京都：三星社、1983年復刻版、1990年第2刷）、p.32.
- <sup>4</sup>伊藤古鑑『茶と禅』、p.30.において、応仁の乱に因る足利義政の心境の変化を述べている。
- <sup>5</sup>『山上宗二記』千宗室編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.52.
- <sup>6</sup>竹本千鶴氏も『織豊期の茶会と政治』（京都：思文閣出版、2006年）、p.125において「將軍をとりまく武家社会において義政と村田珠光とに接点があるはずがない。」と述べている。また珠光は一休和尚に禅の教えを受けたと言われるが、この参禅の資料は存在しないことを、筒井紘一氏が『茶の湯名言集』（京都：淡交社、2006年）、p.206.において指摘しており、珠光の素性は明確でない部分が多い。
- <sup>7</sup>司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』、pp.45-46.
- <sup>8</sup>鈴木良一『応仁の乱』（東京：岩波書店、1973年第1刷、1991年第8刷）、p.106.
- <sup>9</sup>時代背景は永井路子・赤松俊秀「足利義政」、海音寺潮五郎著者代表『日本史探訪』第14集（東京：角川書店、1975年初版、1986年第14版）、pp.165-177. 参照。

### 5-3 安土桃山という時代

安土桃山時代をどの期間と考えるかについては諸説があり、芸術学者・茶道研究者、芳賀幸四郎氏は、織田信長が室町時代最後の將軍足利義昭を奉じての上洛（1568年）から関ヶ原の戦い（1600年）までの32年間としている<sup>1</sup>。氏は諸説があることを受けつつ、安土桃山時代を1番長く捉えたとしても、せいぜい信長の上洛から大坂落城（1616年）までの48年間に過ぎず、南北朝時代（1336-1392）の56年間に比べてもさらに短く、日本歴史上最も短い時代であることをまず指摘している。さらに、その異例の短さにも関わらず一つの時代と見做されているのはなぜか、その理由を2点挙げている。1点目は、中世封建体制が終わり、近世封建体制へ移行する重大な意義を持った時代であるということである。2点目は日本民族の民族生命力が逞しく奔騰し、活躍の対象とする視野・世界観が大幅に広がったということである。それまでの東亜的世界を超えて、南方や西欧にまで拡大した。

安土桃山時代の歴史をひもとくと、1543年にポルトガル商船が種子島に漂着、1549年フランシスコ・ザビエルが鹿児島へ来てキリスト教の布教を始めている。1570年信長は朝

鮮に国交回復交渉の使節を派遣、1579年同じく信長は明への通商仲介・貿易船の増加等を交渉させる使節を派遣している。1587年豊臣秀吉は宣教師追放令を發布したが、貿易の方は引き続き勧奨している。当時はイスパニアと呼ばれていたスペイン、そしてポルトガルの両者を併せて南蛮と称するが、南蛮貿易が始まったことがわかり、それまでの日本経済史上、最も注目すべき時代であると芳賀氏は評している。

戦争で重要となる刀剣・鉄砲・火薬が海外から伝わり、戦国時代の統治者には多大な意味を持つことになる。現代の私たちにもお馴染みの品々が、この時代に輸入されている。ポルトガルからビロード・更紗・羅紗・襦袢・ボタン・有平糖が、スペインからはパン・ビスケット・カステラ・金平糖が入ってくる。コペルニクスの地動説また西洋医学が伝えられ、朝鮮から活字印刷技術が取り入れられる<sup>2</sup>。

キリスト教が驚異的に広まり、千利休高弟である利休七哲<sup>3</sup>の中の、高山右近・蒲生氏郷・牧村兵部・瀬田掃部、また利休七哲ではないが信長の弟である織田有楽はキリシタンであったという。織田有楽は「ジョアン」という洗礼名を持ち、それを漢字表記にした「如庵」は有楽の茶室として名高く、国宝となっている。やはり利休七哲の一人である古田織部については確証されてはいないが、織部好みの鐘楼や茶碗にクルス文と呼ばれる十字架が見られることから、彼もまたキリシタンだったのではないかという説もある<sup>4</sup>。いずれにせよ、経済のみならず宗教の分野でも海外の影響は多大であった。

そしてもちろん、茶文化においても然りである。刀剣・鉄砲と同じく金属工業である茶釜とその製作法がヨーロッパより伝わる。南方よりルソン壺が取り入れられ、茶葉を入れる壺として使われるようになった。もともとルソンの人々が水瓶として使用していたものだが、信長・秀吉も好んで自慢の種にしていたと伝えられ、名器として三日月・松島・四拾石・松花等の日本語による銘がつけられ、床の間に荘られたという。茶の湯形成の頃は中国からの品々が伝わったのとは違って、安土桃山時代には、南蛮・南方の品が日本へ多々もたらされ、茶道具に加わったことがわかる。これらは単によそ者(物)、珍しい物、今までとは違った物として扱われたのではなく、わび茶の中に活かされた。「異国趣味ゆたかであり、『わび』の茶趣にもふさわしい<sup>5</sup>」物であり、こうした器物が日本文化の中に、茶文化の中に、巧みに取り込まれていったのである。

## 【注】

<sup>1</sup> 芳賀幸四郎『安土桃山時代の文化』(東京：至文堂、1964年発行、1965年第2版)、p.1.

以下本章での歴史上の説明も、同書参照。

<sup>2</sup> 英語辞書として極めて信頼性が高いと評されている OED (The Oxford English Dictionary) に日本のことが初出されたのもこの時期である。宣教師ルイス・フロイスは、本国ポルトガルのイエズス会に宛てて、京都で1565年に手紙を書いた。それが1577年にイギリスのロンドンで出版され、そこから OED に採用された。日本が西欧に視野を広げたのと同じく、西欧もまた日本に目を向け始めた、その表れであると受け取られる。

Peter C. Mancall ed. *Travel Narratives from the Age of Discovery An Anthology* (Oxford: Oxford University Press, 2006), pp.156-158. 及び *The Oxford English Dictionary* Vol. V, H-K

(Oxford: Oxford at the Clarendon Press, first published 1933, reprinted 1961, 1970), p.552.

参照。

また活字印刷については、朝鮮の他にヨーロッパからも伝わっている。天正少年使節団が 1590 (天正 18) 年にドイツのグーテンベルク印刷機を持ち帰り、この印刷機により日本語書物の活版印刷が初めて行われた。若桑みどり『クアトロ・ラガッツィー—天正少年使節と世界帝国』(東京:集英社、2003年10月30日第1刷、2003年12月30日第2刷)、p.488. 参照。

<sup>3</sup> 『江岑夏書』、千宗室 編『茶道古典全集』第 10 巻所収 (京都:淡交社、1961年初版、1967年500部限定)、p.71. で、「利休弟子七人衆」いわゆる利休七哲として、蒲生氏郷・高山右近・細川三斎・芝山監物・瀬田掃部・牧村兵部・古田織部を挙げている。『江岑夏書』そのものの説明は本章 p.10. に記す。

<sup>4</sup> 芳賀幸四郎『安土桃山時代の文化』、p.143. にて氏はクルス文について述べている。安西二郎氏は『茶道の心理学』(京都:淡交社、1995年)、p.169. にて「高山右近、細川三斎、古田織部など、あきらかに切支丹宗徒であった。」と述べている。言語学者・英語教育者、山田無庵氏は『キリシタン千利休: 賜死事件の謎を解く』(東京:河出書房、1995年)、pp. 165-173. にて、神戸市立南蛮美術館所蔵の狩野内膳作の南蛮屏風に描かれている老茶人が利休ではないか、またその服装・持ち物・背景の描き方から、利休自身キリシタンであったのではないかと説いている。岡本浩一氏は『茶道を深める』(京都:淡交社、2008年)、p.216. において「利休の室、宗恩や娘のお亀もキリシタンであった可能性がある」とされ、利休自身や利休親族・門下とキリスト教との関係はしばしば論じられている。

<sup>5</sup> 芳賀幸四郎、『安土桃山時代の文化』、p.145.

## 5-4 茶の発展の背景

### 5-4-1 堺の町

海外貿易によって茶道具も豊かになっていく中で、筆者が注目したいのは、時の為政者である織田信長や豊臣秀吉が、茶を政治に利用したことである。このことが結局はコミュニケーション問題に関わってくると捉えられるため、指摘したい。国の統一のために、換言すれば諸国統治者・有力者を抑えるべく戦争で勝つために、信長は当時勢力を持っていた堺の商人たちを利用した<sup>1</sup>。室町時代、及び安土桃山時代、千利休の故郷でもある堺は、繁栄の絶頂期にあった。全国的な動乱をよそに、この町は平和であり、別世界であったという。西の博多と並ぶ貿易船の発着港であり、京都・奈良等の消費都市を背後に控え、新興の豪商が活躍し、諸国の商人も集まり、商業が非常に発展した港町であった。ポルトガル人のイエズス会宣教師、ルイス・フロイスは『日本史』の中で次のように語っている。

「みやこ以外には、日本のヴェネチヤ（ヴェニス）である堺の町以上に重要な所はないと思われた。すなわち、この町は大きく、富裕であり、商業が盛んであるだけでなく、絶えず方々から人びとが寄り集まる諸国相互の市場のような所であった<sup>2</sup>。」よって時の為政者たちも、堺の商人には一目置いていたという。また堺の町民は三十六人衆または会合衆と呼ばれる代表者の合議機関を設立し、司法権と行政権を備えた、世界的にも有名な自治都市であった。36名の会合衆の中で特に有名な納屋十人衆は、自治体の中心となっていた。

このような町、堺と茶の湯の発展について、フロイスと同じくポルトガル人イエズス会宣教師のジョアン・ロドリゲスが述べている次の件がある。ロドリゲスは、通訳として秀吉・家康・秀忠に直接会い、こうした為政者の知遇を得てイエズス会との交渉に関与し、活躍した。またキリシタンの日本語教育においても指導的な役割を果たしたため、外国語教育の分野からも採り上げられる人物である<sup>3</sup>。ロドリゲスは堺、及び茶の湯そのものを実に深く観察している。

数寄 *suky* と呼ばれるこの新しい茶の湯 *chanoyu* の様式は、有名で富裕な堺の都市にはじまった。その都市は日本最大の市場で、最も商取引の盛んな土地であり、きわめて有力なので、以前には、信長 *Nobunanga*<sup>4</sup> および太閤 *Taicō* までの時代には、日本の宮都コルテと同じように、長年の間、外部からの支配を認めない国家のように統治されていて、そこにはすこぶる富裕で生活に不自由しない市民やきわめて高貴な人たちが住んでいる。彼らは相次ぐ戦乱のために各地からそこに逃避して来ていた。その都市で資産を有している者は、大がかりに茶の湯 *chanoyu* に傾倒していた。また日本国中はもとより、さらに国外にまで及んでいた商取引によって、東山殿 *Figaxiyamadono* のものは別として、その都市には茶の湯 *chanoju* [*chanoyu*] の最高の道具があった。また、この地にあった茶の湯 *chanoyu* が市民の間で引き続いて行なわれていたので、そこにはこの芸道に最もすぐれた人々が出た<sup>5</sup>。

戦乱の世にありながら、堺は例外的に平和であったため、安全を求めて京都各地から移り住む公卿・僧侶の文化人も多かったことがわかり、よって文化が流入する。一方で貿易船や密貿易船の出入りも多いため、海外からの新奇な物資や文化も早く伝わり、こうした背景によって堺は国の文化と異国文化の両方を備えた文化都市であった。この富裕・平和・そして自治都市という特権を有した堺であればこそ、茶の湯の発展を見たことがわかる。

#### 【注】

<sup>1</sup>堺についての説明は芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1版第1刷、1989年新装第4刷）、pp.22-27. 及び桑田忠親『茶道の歴史』（東京：講談社、1987年第1刷、1993年第18刷）、pp.60-62. 参照。

- <sup>2</sup>ルイス・フロイス『日本史：キリシタン伝来のころ』第2巻、柳谷武夫 訳（東京：平凡社、1965年初版第1刷、1978年初版第10刷）、p.123. 傍点は本書にある。括弧は筆者による。
- <sup>3</sup>ジョアン・ロドリゲス『日本教会史 上』大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江間務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）に付された「大航海時代叢書 IX 月報9」における「ロドリゲス『日本教会史』の文化史的価値」の中の西山松之助氏による説明、また小川芳男・林大、他編集『日本語教育事典 縮刷版』日本語教育学会編（東京：大修館書店、1982年初版、1987年縮刷版第1刷、1993年縮刷版第8刷）、p.730. の解説を基とする。なお、『日本教会史』では「ロドリゲス」の表記となっているが、多くの文献で「ロドリゲス」としているため、筆者も本論文ではこちらを使用する。
- <sup>4</sup>ママ。“Nobunaga”ではなく“Nobunanga”と最後から3文字目に“n”が入っている。ジョアン・ロドリゲス『日本教会史 上』、p.605.
- <sup>5</sup>同上、pp.605-606. ルビは本書にある。

#### 5-4-2 堺の豪商茶人

政治と茶の結び付きは、為政者と豪商茶人との深い関わりにも表れている。千利休より前の時代の武野紹鷗も含め、好条件を備えた堺の豪商は同時に茶人でもあり、信長は茶の湯を通じて彼らを用いた。大日本茶道学会第4代会長、田中仙翁氏は述べている。「商人たちの心理を熟知していた信長は、政策として茶の湯を利用することを考えた。全国制覇を成し遂げるために、京都と堺の町衆と手を組むことが戦略的にも必要だからである。生野の銀山を手に入れたり新兵器で武装することができたのも、町衆の協力があつたからである。そのために、京都に上るとすぐ茶の湯に関心を示し、茶会を開いたり茶器を収集したりしたのであろう<sup>1</sup>。」武器調達的手段として、商人茶人を利用したのだ。

千利休・津田宗及と共に信長三大御茶頭の一人である今井宗久は、武野紹鷗の娘婿に当たる堺の豪商であるが、大坂の我孫子に鉄砲工場を経営し、火薬を取り扱っていた。1570（元龜元年）年、浅井・朝倉両氏の連合軍と戦った姉川の戦では、信長が宗久より火薬を調達しており、信長の武将である当時木下藤吉郎、すなわち秀吉より宗久に宛てた書状には、「鉄砲薬いかにもよく候を30斤程、並びに煙硝30斤」（『陸前岩淵文書』）を調達するようにと記されている<sup>2</sup>。宗久は信長が得意とした大規模な鉄砲戦術の重要な片腕であり、軍需商人として巨利を博していたという<sup>3</sup>。信長に一方向的に利用されていた訳ではなく、自らも潤っていたのだ。歴史学者・茶道研究家、村井康彦氏が述べているように、「宗久は信長の政商となった<sup>4</sup>。」のである。堺商人の気質が多分に表れている。「『鹿苑日録』の筆者が『堺の商人は父子の間を言わず、互いに利を争い、以てこれを誑かす』と評したように、きわめて利害打算に抜目がなかった<sup>5</sup>。」そのような堺商人の宗久を、信長は自らの三大御茶頭の一人としており、政治と茶の密接な結び付きが見られる。



安土桃山時代には僧侶の勢力も強かった<sup>6</sup>。僧兵として僧侶も参戦していた。特に、一向一揆の本拠としての石山本願寺の存在は大きく、信長はこの寺の勢力減殺を意図していた。本願寺を財源面で支え、また後援していたのは堺の豪商であり、特に経済界に大きい影響力を持っていたのは天王寺屋一族であったという。その天王寺屋当主であり政治力も強い津田宗及を信長は利用した。信長は宗及に、本願寺を後援しないようにと圧力をかけたようである。信長の目論見通り、その後本願寺は滅亡し、僧侶は全く無力となる。信長の後を継承した形の秀吉が、石山本願寺跡に大坂城を築いたことは象徴的なことであると筆者は解する。

僧侶への影響力も含め、有力な豪商であった宗及は、それだけでも、すなわち経済力だけを取っても十分利用価値がある。1568（永禄11）年、三好長逸・三好政康・岩成友通のいわゆる三好三人衆を始めとする信長の部下150名ばかりを自宅に招き、終日宴を催したという。翌1569年には信長の上遣いが堺に赴き、佐久間信勝・柴田勝家といった蒼々たる顔ぶれによる下向であったが、その際にも宗及は100人を超える上使を自宅に招いて、やはり終日もてなしたという<sup>7</sup>。100名・150名もの客人を収容できるだけの大座敷を自宅に持ち、またそれに対応できるだけの召使いを抱えていた訳であるから、桁外れの豪商であり、大変な経済力を誇っていたことがわかる。茶人としても華々しく、「永禄9年から天正13年までの20年間に1,065回の自會を催しまた700回以上の他會の茶席におよんである<sup>8</sup>。」と、哲学者・小説家の唐木順三氏は指摘している。この大富豪を信長は三大御茶頭の一人としており、政治と茶、為政者と茶人との深い結び付きをここにも見ることができる。

宗久と同様、宗及もまた信長とは持ちつ持たれつの関係であり、互いに利益を得ていたのである。「今井宗久、津田宗及が信長に親接するようになったのは、もちろん一つには茶の湯を媒介とするものではあるが、むしろ互いに利用し利用される実利的関係、ないし政治的、経済的紐帯によることの方が大であったといえる。<sup>9</sup>」との評に、筆者も同意する。宗及の動きを「時の権力者への追従と見るか、権力を呑み込む町人のバイタリティと見るか<sup>10</sup>」、解釈は様々であろうが、国の統一に茶が、そしてその立役者である商人茶人が深く関わり、自分も利益を受けつつ、一方で利用もされていたと見ることは難くない。

三大御茶頭の今一人、千利休も堺の有力な商人ではあったが、宗久や宗及ほどではない。むしろ茶の湯の実力によって為政者に高く買われている。しかし商人としての側面も侮れない。例えば日本史学者・茶道研究者、中村修也氏は、利休が茶杓工房を運営していたらしいことを指摘している。この件を裏付けする資料として、氏は表千家第4代宗匠江岑（千宗左、利休の曾孫）の自筆による、江戸初期の茶書『江岑夏書』の箇所を挙げている。「利このミて慶首座茶杓おりためニして、けつり被申候、茶杓ふし中ニ有ハ宗易このミよりの事也、慶首座なおし多候、又ハ利おいニ紹ニト申人在之、これ下けつり多候、西道けつり、其外、内ノもの共けつり申候、尤下直よりノ作在之<sup>11</sup>」慶首座、利休の甥に当たる千紹二、また西道という茶杓の下削りがいたことが記されている。これらの人にまず下削りをさせ、最後に利休が削りを入れて茶杓として完成させていたと解せる。中村氏は茶の湯の流行に連れて、茶杓も「プロの作ったものが欲しくなります。ブランド品があれば、より購買意欲を刺激されるでしょう<sup>12</sup>。」との説明をしている。茶の湯の隆盛という時代の波に上手に

乗り、茶杓工房のようなものを営み、下削り・本削りと効率よく作品——商品を言うべきか——を製作していた利休には、商人としての側面が多分に窺われる。

さらに特筆すべきだと筆者が考えるのは、裏千家秘蔵 1574 (天正 2) 年 9 月 16 日付の、利休に宛てた信長印判状が発見され、信長が越前の一向一揆を討伐するに当たり、利休に命じて鉄砲玉千個を調達させたことが判明していることである<sup>13</sup>。よって利休はいわゆる「死の商人<sup>14</sup>」であったと考えられる。茶人の間では利休は茶聖・茶匠、茶の湯の世界における神のように崇められている趣があるが、一方では商人、しかも戦国時代における商人であることを考えれば、かような側面があったことも理解すべきであろう。またこの例から、茶と政治がかくも深く結び付いていたことを、改めて認識させられる。

信長は堺のみならず、力のある商人に茶を通じて積極的に近づいている。1582 (天正 10) 年 6 月 1 日には上洛中の博多の豪商、神屋宗湛と鳥居宗室を茶会に招いている。安土より持ち込んだ名物にて本能寺のこの茶会でもてなし、明智光秀の大軍が押し寄せたのは、その翌未明のことであったという<sup>15</sup>。信長は堺、またその他の町の豪商をも巧みに牛耳った。

筆者は第 1 章にて文化の考察を行った。そこで T. S. エリオットが、きれいで毒にならず、政治からは分離され得るもの、例えば言語・文学・地方芸術・地方習慣等をのみ文化と捉えるのは危険であると唱えたことを受け<sup>16</sup>、筆者もこの意見に同意すると述べた。政治も含んで文化であると考えべきであると説いたが、正にその例が安土桃山期には表れていよう。茶とは風流な趣向、人との和、心の癒しといった美しく優雅な文化である。しかしその茶が実は、政治というどろどろした側面との結び付きによって大いなる発展を遂げたとは、非常に興味深いことであると筆者は考える。逆説的動きに基づく文化の生成の経緯を見る。美しい面と、そうでない面と、文化は両面から捉えるべきであり、その好例が茶の湯であろう。

「文化は動的な流動体であり、文化的習慣、産物、思考はその歴史的文脈の中で考察されるべきである<sup>17</sup>。」との論に筆者も同意する。茶は利害・懐柔・権力といった政治要素を以て、戦国時代という文脈の中で生まれ、磨かれた「産物」であり、戦争真ただ中でも行われていた「習慣」であり、次の茶会はどうするか、誰を招待すれば得か、戦いに有利であろうか、と常に「思考」が働かされる対象であったと言えよう。茶という美しく優雅な伝統文化は、政治と密着した戦争を背景に大いなる発展を遂げる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 田中仙翁『茶道の美学』（東京：講談社、1996年）、p.112.

<sup>2</sup> 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977年日本放送出版協会より）、p.121. 参照。村井氏は本ページで「羽柴藤吉郎」と記している。しかし1573 (元亀 4) 年 5 月 24 日付で秀吉が「木下藤吉郎」と記した文書が見つかったことを、毎日新聞が 2015 年 7 月 10 日に報じており、姉川の戦での火薬に関する書状を送った時点では、木下藤吉郎と名乗っていたと考えられる。

<sup>3</sup> 芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1刷、1989年新装版第4刷）、p.84. 参照。

- 4 村井康彦『千利休』、p.121.
- 5 芳賀幸四郎『千利休』、p.25.
- 6 芳賀幸四郎『千利休』、pp.91-92. 参照。
- 7 村井康彦『千利休』、pp.120-121. 参照。
- 8 唐木順三『千利休』(東京：筑摩書房、1963年第1刷、1989年第27刷)、p.49.
- 9 芳賀幸四郎『千利休』、p.93.
- 10 村井康彦『千利休』、p.121.
- 11 『江岑夏書』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収(京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定)、p.73.
- 12 中村修也『戦国 茶の湯倶楽部—利休からたどる茶の湯の人々』(東京：大修館書店、2013年)、p.17.
- 13 桑田忠親『千利休研究』(東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版)、p.482. 参照。
- 14 同上、p.482.
- 15 村井康彦『千利休』、p.157 参照。
- 16 T. S. エリオット「文化の定義のための覚書」深瀬基寛 訳『エリオット全集5—文化論』(東京：中央公論社、1960年)、p.335.
- 17 久保田竜子「日本文化を批判的に教える」佐藤慎司・ドーア根理子『文化、ことば、教育』(東京：明石書店、2008年)、p.163. 久保田氏は言語学者である。

#### 5-4-3 武士の懐柔策としての茶の湯

政治と茶の結び付きは、為政者による武士の扱いにも表れている。茶の湯は武士の懐柔策でもあったと考えられる。「茶湯御政道」という表現に象徴されるように、並々の者には茶を行うことが許されていなかった。「茶湯御政道」とは、1582(天正10)年6月2日に本能寺の変で横死した信長を偲び、同じ年の10月18日に秀吉が信長の三男である織田信孝の家老、岡本次郎右衛門尉、及び斎藤玄蕃助に送った手紙の中に見られる表現である。

上様重々預御褒美并御感状ニ、其上但州銀山、御茶湯御政道といへとも、我等をハ被免置、茶湯可仕と被仰出候事、おいて今生後世ニ難有志かたく存候、誰やの人かゆるしものにさせらるへきと存出候へハ、夜昼涙をうかへ、御一類之御事ハ悪敷あだにも不存候事!

解釈としては、「茶湯御政道」とは、茶の湯を政治の基調とする、といった単純なものではなく、信長の許可を得なければ茶会を開くどころか茶の湯を嗜むことすら許されず、むしろ「茶湯禁制」と言うべきであろう<sup>2</sup>。茶湯禁制であるが、私は上様より許された秀吉は大変喜んでいる。この禁制の茶が許されるか否か、すなわち茶を行う許可が得られるか否かは極めて重大であり、茶の湯がその武士の地位に大きく関わっていたことがわかる。

桑田忠親氏も述べている。「名物茶器を所有し、茶の湯を催す資格のあるのは、武略にも長けた武士であらねばならない。と同時に、武略に長けた武士は茶の湯のたしなみがなければならなかったのである<sup>3</sup>。」

秀吉は1581年に吉川経家の鳥取城を攻略して安土に凱旋した際、この許可を信長より得た。「御茶湯を仕、堺方之仕取を慰懸可申旨被成御免候<sup>4</sup>」、堺出身の茶頭を使って茶湯を楽しむがよいとあり、そしてさらに朝倉肩衝<sup>かたつき</sup>を始め8種の名物茶器を賜っている。武士として大変な名誉である。信長は「茶湯御政道」を通じて武士を懐柔していたと解釈される。政治と茶がここでも深く関わっている。

### 【注】

<sup>1</sup>『古今消息集』（内閣文庫所蔵）より。この引用及び斎藤玄蕃助等の説明は、村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977年日本放送出版協会より）、p.152.

<sup>2</sup>村井康彦『千利休』、p.152. 竹本千鶴氏は「茶湯御政道」を『織豊期の茶会と政治』（京都：思文閣出版、2006年）、p.27. において「家臣団統制としての『ゆるし茶湯』」と捉えており、筆者もこの見解に立つ。今日でも茶の分野では、茶を習う者は許状<sup>こんにち</sup>というものを申請し、家元より受領する。これはある点前を会得した、身に付けたということの証明書ではなく、この点前を稽古してもよいという許可証である。安土桃山期の「ゆるし茶湯」の伝統が現代にも息づいていると解釈できよう。

<sup>3</sup>桑田忠親『武将と茶道』（東京：人物往来社、1964年）、p.84.

<sup>4</sup>村井康彦『千利休』、p.153. 秀吉が茶湯御政道を受けたこと、及び名物茶器を賜った一件を pp.153-154. において説明している。

#### 5-4-4 教養としての茶の湯

茶の湯の発展の理由として、上述の政治との結び付きと共に、為政者及び部下たちの教養を高めることも挙げられよう。文化とはきれいで毒にならない、いわば美しい面と、そうでない面と、両方から捉えるべきだとの筆者の見解であるが、教養を高めることは、その美しい面に属するであろう。第1章において筆者が提示した、文化の3分類の中の高等文化、すなわち「精神・物理両面で人間と生活を豊かにする知恵としての文化」に通じる概念でもある。司馬遼太郎氏は、信長のしつけと教養のなさをまず述べ、次のように語る。「室町風のしつけには、まず小笠原流の武家作法がある。大名の礼式としてはじつにうるさい作法で、椀に盛られためしを食うにしても、箸を最初はどこへもって行ってつぎはどこにもってゆくといったぐあいに、わずらわしいことこの上もない。ついで室町風の教養とは、歌学などがそうである。古今、新古今、源氏物語に通じていなければならず、そう

いうひと通りの教養がなければ、公卿たちにまじって連歌の会にも出席することができない。(改行) 信長の織田家は、室町旧体制における正規大名ではない<sup>1</sup>。」

さらに司馬氏は、織田家の武将では明智光秀を除いては、古典的教養は皆無であると語っている<sup>2</sup>。野人の多い織田政権で光秀が異彩を放っていたように聞こえる。そして連歌とは別の芸術として茶の湯が興ったことを氏は述べている<sup>3</sup>。しかし信長の下で極めて重要な存在であった松井友閑、堺奉行を務めながら舞・能・茶・立花等に教養ある人物がいたことも指摘されており<sup>4</sup>、光秀だけが織田政権の文化人であった訳ではない。友閑を重用していたこと自体に、信長に教養を求める姿勢があったのではないかと筆者は解釈する。

「信長は、餓えた犬が肉にとびつくようないきおいで、茶の湯にとびついた<sup>5</sup>。」この表現は誇張だろうが、政治的意図の他に教養を高める手立てとして、信長は茶の湯を行ったと考えられる。芳賀幸四郎氏も、信長は総じて伝統的なものよりも新奇なるものに魅力を感じていたとまず述べ、「旧勢力に対する文化的劣等感を克服し、自らの教養を粉飾するためにも、折から興隆しつつあった茶の湯に異常なまでに執心した<sup>6</sup>。」と語っている。歌を始めとする、それまでの伝統的な教養に代わって、新しい価値を持つ全く新しい教養である茶の湯、信長はそれに惹かれ、受け入れ、向かって行ったのではあるまいか。

秀吉も然りである。足軽の出身で洗練さも教養も十分とは言えない故に、茶の湯に親しむことによって芸術への造詣を深め、文化的姿勢を高めようとしたと解釈される。信長と光秀の差異について多少触れたが、同様のことが秀吉と光秀の間にも見られる。この二人の武将について、明治期に成立した随筆『老人雑話』には次のような記述がある。「筑前守(秀吉)は、信長の手の者(手に入った人物)の様にて、其上磊落の氣質なれば、人に對して辭常にをこれり(言葉が常に驕っていた)、明智は外様のやうにて、其上謹厚の人なれば、詞(言葉遣い)常に慇懃なり<sup>7</sup>。」日本史研究家、染谷光廣氏はこの記述を、「まことに、両者を見事に寸描しているように思います<sup>8</sup>。」と評しているが、言葉遣いには性格と共に教養が表れよう。教養において秀吉は光秀に及ばなかったのではないか。秀吉もまた信長と同様に、教養を求めて、また部下の教養を高めようと、当時の文化の中心であった連歌よりも、むしろ新しい茶の方に向かって行ったのではないかと筆者は考える。

このような背景を以て、茶の湯は発展した。細川幽斎の和歌にもある。

もののふ  
武士の知らぬは恥ぞ馬茶の湯 はちより他に恥はなきもの

歌道歌乱舞茶の湯を嫌ふ人 そだちのほどをしられこそすれ<sup>9</sup>

武士として不可欠な武芸の一つである馬術と同等に、茶の湯を身に付けることの必要性を説き、「恥」という強い言葉を以て、茶を知らないなどとんでもないことだ、茶の湯を嫌う者は教養がないと力説している歌である。武家社会で茶の湯が非常に発展した理由の一つとして、堺の豪商茶人の利用、武士の懐柔策という政治との結び付きの他に、為政者の、またその部下たちの教養を高めることも挙げられる。

信長・秀吉という為政者は、堺の豪商茶人と相互に利益を得る関係を築き、武士を懐柔しつつ彼等とも好ましい間柄を保ち、互いの教養も高めようとした。茶の湯はこれらすべ

ての条件を満たす格好の文化であったと考えられる。特に人とのよき関係、親睦を築く文化としての意味合いは大きかったと言えよう。中村修也氏は、茶の湯の発展に関して次のように述べている。「現代では、商談の前の接待ゴルフや接待麻雀<sup>まーじゃん</sup>といったものがありますが、それと似たようなかたちで、より高尚な装置として茶の湯が用いられたのでしょう<sup>10</sup>。」茶の湯は時代の流れに沿った、為政者のニーズに合った新しい文化、しかも美的価値、癒しの要素、人との和を包容する「高尚な」文化であった。そしてその裏には確実に政治との結び付きがあったと解せる。

### 【注】

- <sup>1</sup> 司馬遼太郎『歴史の中の日本』（東京：中央公論社、1976年初版、2009年改版15刷）、p.56.
- <sup>2</sup> 同上、p.57.
- <sup>3</sup> 同上、p.57.
- <sup>4</sup> 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（京都：思文閣出版、2006年）、p.294.
- <sup>5</sup> 司馬遼太郎『歴史の中の日本』、p.57.
- <sup>6</sup> 芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1版第1刷、1989年新装第4刷）、p.85.
- <sup>7</sup> 『老人雑話』近藤瓶城 編『改訂 史籍集覧』第10冊所収（京都：臨川書店、1983年復刻版、1990年第2刷）、pp.20-21. 括弧は筆者による。この『老人雑話』の著者、江村専斎（1565-1664）は安土桃山・江戸時代前期の儒医で、加藤清正に儒医として仕え、和歌にも通じていて細川幽齋らと交流があった。
- <sup>8</sup> 染谷光廣『秀吉の手紙を読む』（東京：吉川弘文館、2013年第1刷）、p.107.
- <sup>9</sup> 桑田忠親『武将と茶道』（東京：人物往来社、1964年）、p.252. この歌を引用している。
- <sup>10</sup> 中村修也『黄金文化と茶の湯 安土桃山時代』よくわかる伝統文化の歴史③（京都：淡交社、2006年初版）、p.47. ルビは本書にある。

## 5-5 戦争と茶席

### 5-5-1 戦争に関する言語コミュニケーション

このように商人茶人の利用・武士の懐柔・教養を高めるという目的の下、世が戦国時代であったことが大きく影響する中で、茶の湯とコミュニケーションとの結び付きが浮かび上がってくる。「政治、軍事、外交、さまざまなかけひき事も茶のあとに話し交わされたに違ひない!。」と記されている通り、戦乱の世を思えば、戦争等、茶以外の話が茶の湯の場で行われたであろうことは、想像に難くない。これもまたコミュニケーションであり、口頭であるから、言語コミュニケーションである。戦乱のこの時代に、実に多くの茶会が催

されている。戦争と茶の湯は背中合わせとなっている<sup>2</sup>。

秀吉は別所長治のこもる播州三木城を1578年3月に包囲している。10月には三木城に対して構築した付城で、信長の茶頭、津田宗及を客として口切りの朝茶事を行っている。これは秀吉の催した茶会の初見である。三木攻めには秀吉も苦戦した。しかし1580年1月長治を自刃させ、自らの居城長浜に凱旋して2月に茶会を行っている。同じ年1580年6月中旬に秀吉は信長の命を受けて中国征伐に出陣する。翌1581年6月中旬に姫路城で茶会、6月下旬に吉川経家の守る鳥取城を政略し、10月に経家を自刃させて安土に凱旋した。12月に信長からその戦功の賞として茶を行う許可を得、8種の名物茶器を拝領したことは前述の通りであるが、その後すぐに茨木城で茶会を催している。明けて1582年正月に毛利氏討伐のために西下、その1月18日に姫路城で茶会をする。同6月2日日本能寺の変で明智光秀が謀反して信長を憤死させるという大事件が起こる。6月13日に秀吉は光秀を山崎の一戦に破り、主の仇を打ったという功績を背景に帰洛、7月に京都で茶会を開いている。

戦争と茶会が、実に代わる代わる行われていることがわかる。戦争で手柄を立てた部下に対して、主君はその労苦を労い、健闘を称え、褒美を与える。茶席はそのような場でもあったのではないか。茶器が褒美である場合が多く、この事実にも戦争と茶との深い関わりが表れている。『山上宗二記』において茶席で扱ってはいけな話題として、牡丹花肖柏

の狂歌「我佛隣ノ寶賀舅天下ノ軍人の善悪<sup>3</sup>」が挙げられている。この中に「天下ノ軍<sup>いくさ</sup>」とあるが、実際には戦の話は行われていたのではないかと筆者は推察する。

茶席は特に密談の場として好都合である。亭主と客、すなわち茶を行う者だけが茶室に入る訳であり、茶室での話を他の人に聞かれる心配がない。黒田長政の父である黒田如水は、初めは単なる武道の練達者であり、茶の湯の嗜みなどなかったのだが、後に利休の弟子となった。秀吉は、その如水がまだ茶を習い始める前に茶会に招いている。相客はなく、秀吉は茶も点てず、専ら軍議を語る。そして言ったことには「『これが茶の湯の一徳というものだ。この秀吉が若し、茶室以外の場所で貴殿と対座し、このように長時間にわたって密談をかわしたならば、人は必ず、いろいろと疑惑をもつことであろうに。』そこで如水も『なるほど』と思い、それ以来茶の湯の稽古にはげんだ<sup>4</sup>。」という逸話がある。逸話は史実ではないが、このような逸話が残っているからには、それなりの意味があると筆者は考える。ここでの密談とは小田原の役についてであると桑田忠親氏は述べており、正に戦乱の世に茶室が軍義のために使われている。人に怪しまれず、情報漏れもなく、密談には茶会は格好の場である。特に、狭い茶室には客が一人か二人しか入れない訳であるから、初めから密談が目的であっても、少人数の招待客という示しがつく<sup>5</sup>。不自然さがない。

例えば1585（天正13）年2月24日の茶会を採り上げる。秀吉は信長の次男である織田信雄、信長の弟である織田有楽の二人のみを客に招いた。名器を用い、秀吉自ら点前をしたほどの最高のもてなし振りであった訳だが、この茶会には「宗易・宗及御次ニ在<sup>6</sup>」との記述がある。利休と宗及が次の間に控えていたのである。他の人間の出入りは一切許さず、しかも客は二人のみという、いわゆる「密談」であることが推察される<sup>7</sup>。また「何にても茶ヲハきこしめされす候<sup>8</sup>」、すなわち信雄は茶を少しも飲まなかったとの記述から、

かなり緊張した雰囲気茶会であったことが窺われる。いよいよもって密談の色が濃い。

信雄と有楽、信長の死後、秀吉と極めて微妙な関係にあるこの二人と秀吉が単に長時間会っているとなれば「いろいろと疑惑」が持たれるかもしれない。しかし「茶会」という名目があれば二人を招く立派な理由となり、周囲の人間にも説明がつく。戦争という情報を扱う言語コミュニケーションである。そしてこのような密談、すなわち小人数のコミュニケーションが図れたのは、茶室の安全性に因るものであることを、次に述べる。

#### 【注】

- <sup>1</sup>唐木順三『千利休』（東京：筑摩書房、1963年第1刷、1989年第27刷）、p.49.
- <sup>2</sup>芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館。1963年第1版第1刷、1989年新装版第4刷）、pp.113-115. においてこの時代の歴史を述べている。
- <sup>3</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.93.『山上宗二記』以外の文献でも、この狂歌はよく採り上げられている。
- <sup>4</sup>桑田忠親『武将と茶道』（東京：人物往来社、1964）、p.227.
- <sup>5</sup>中村修也氏は『利休切腹』（東京：羊泉社、2015年初版）、p.110. において、外部の招待客ではなく、天下人と家臣との密談を採り上げ、他の家臣の疑心暗鬼を生むことになる恐れがあると指摘している。しかしこれが茶室においてなされるのであれば、疑心暗鬼が皆無とは言えないまでも、不自然さはなくなると語っている。また同ページにおいて、「茶室が密談にもってこいの空間であることは誰もが認めるところであろう。」とも述べている。
- <sup>6</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』千宗室 編『茶道古典全集』第7巻所収（京都：淡交社、1959年初版、1967年500部限定）、p.409.
- <sup>7</sup>竹本千鶴氏もこの茶会の密談性に触れている。『織豊期の茶会と政治』（京都：思文閣出版、2006年）、p.364.
- <sup>8</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』、p.409.

#### 5-5-2 茶室の安全性

前述のように、茶を行っているのであれば、それ自体が立派な理由となり、限られた人が長い時間茶室にいても、他人に怪しまれない。他者を気にする必要がない上に、武器も一切携行せず、よって茶室は安全な場であるとも言える。当時の茶室の入り口には刀掛けと呼ばれる物があり、刀はここに預けて茶室に入る。「その入口からにじりいる前に、まずは自らの身分の象徴である刀を外さなくてはならなかった。たとえ一国の主といえども例外ではなかった！」のである。権力・身分・命の証しを外すことに筆者は感動を覚える。

この刀掛けは利休の考案とされている<sup>2</sup>。芸術学者・茶道研究家、筒井紘一氏は、刀掛け考案の時代背景を説明しているが、書院台子茶の時代から利休が活躍する初期になって



も、茶会では刀は外すが脇差しは携帯したままの茶席入りであった。ある茶会の際に利休は、争い事が生じた時には国のため、主君のために命を捨てて戦うことが武士の嗜みではあるが、そのような争い事が、万一にも小座敷で行われてはならない、また、別心なく同席することの表れでもあると述べ、小座敷の外の壁に竹釘を打って、客の全員に脇差しを外してそこに掛け、無刀での席入りを求めた。「これは茶事に余念なく同席するための定めであります、という利休に、客は皆々、もつとものことと感心したのであった<sup>3</sup>。」その後無刀での席入りの定めが守られ、茶事は盛んになる。利休が高名となったのは、この一件からであろうとの評もある<sup>4</sup>。武器を持たない茶室入りは、実に特筆すべきことである。そしてその後、貴人用として刀掛けの棚が作られた。『源流茶話』に次のような件がある。

「貴人も刀は外の刀掛<sup>サシツヘ</sup>にかけられ、御差添にて座入なされ、御差添は内の刀掛に被掛候、貴人御二かたなれば、刀懸二ツにて、御座をへたて申候<sup>5</sup>」

貴人も、また「たとえ一国の主といえども例外ではなかった。」とあるように、身分の上下を問わず武器は全く持たない。非常に民主的であり、そして何よりも安全である。心理学者、安西二郎氏は刀掛けを「わび茶デモクラシーの自由の鐘<sup>6</sup>」と称している。扇子1本だけで茶室に入る。武士の命とも言える刀が扇子に代わることは画期的である。

## 【注】

<sup>1</sup> 千宗室（裏千家第15代宗匠）による「跋文」より。岡倉天心『茶の本 The Book of Tea』（東京：講談社インターナショナル株式会社、1998年第1刷、2002年第7刷）、p.212.

<sup>2</sup> 以下の刀掛けの説明は筒井紘一『利休の逸話』（京都：淡交社、2013年2月14日初版、2013年7月13日第2版）、pp.59-60. より。

<sup>3</sup> 同上、p.60.

<sup>4</sup> 同上、p.60. 貴人用の刀掛け棚についても本ページより。

<sup>5</sup> 『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.425. ルビは本書にある。

<sup>6</sup> 安西二郎『新版 茶道の心理学』（京都：淡交社、1971年。）、p.91.

## 5-6 心の平和

### 5-6-1 緊迫の茶

歴史が語るように戦争と茶会が背中合わせに行われ、「戦陣中といえども茶の湯を忘れないというのが実情であった<sup>1</sup>。」という理由として、前述のような、茶席での戦争に関するコミュニケーションが考えられる。また、より重要な理由として、心の平和を得るためであったことを筆者は述べたい。しかも今この瞬間の平和を得るといふ、緊迫の茶としての側面がある。戦争には生死が懸かっている。この茶を逃したら、生あるうちに、もう茶

は飲めないかもしれない。いつ果てるともれない命、生きているうちに茶、今だからこそ茶をとという思いがあったと想像される。

小田原の役における伊達政宗の例を挙げる。正宗は秀吉より小田原参戦を再三催促されていた。しかし正宗の重臣の間で意見が割れ、また正宗毒殺未遂事件等のため参陣が大幅に遅れ、出発は1590（天正18）年4月6日と発表したにも拘わらず、実際に小田原に到着したのは6月5日であった。このため秀吉の怒りを買って幽閉される。幽閉中に訪れた前田利家・浅野長政・施薬院全宗等の詰問使に向かって正宗は言った。「死ぬ前に1度でもいいから天下に名だたる千利休のたてた茶を飲んでみたい？」この声が秀吉に伝わり、死を免れたという。

これは利休の茶と具体化されている例であるが、戦争に臨む人、死に迫った人が茶を、生きている今だからこそ茶をとという思いは、正宗に限らず、どの戦国武将の心にもあったと推察される。だからこそ、過密スケジュールを強いてでも、戦争の後には必ず茶会が行われていたのであり、次に述べるように、陣中に道具を運んでまでも茶を行っていたのだ。ここでのコミュニケーションは、いかにも緊迫したものがあつたであろう。瞬時の心の平和を伝える、そのような思いで点てる側は茶を点て、その意を酌むべく客の方は、緊迫・切迫の思いを胸に、その茶を深く味わっていたのではなからうか。これが自分の生涯で最後の1服になるかもしれない、戦国武将の心の中にはこの思いがあつたのではないか。点てる側もそれを感じ取り、緊迫した非言語コミュニケーションが働いていたと想像される。

旅箆筥という茶道具がある。『源流茶話』には、「旅たんすハ、秀吉公御旅行の節、利休好みにて候<sup>3</sup>」とあり、小田原の役に使用したので有名だとの説明もあり<sup>4</sup>、戦争時に考案された、かような器物もある。旅箆筥は、茶入れはもちろん水指まで入るようになっており、柄杓の収まる場所もある。鉤を差し込む方式の蓋なので容易に開かず、持ち運びに便利にできている。このような茶道具をわざわざ運んで殺し合いの場で茶席とは何と優雅なことをと驚きもするが、逆に戦場であるからこそ茶が必要だった。茶を行うことによって心の平和を得ていたと推察される。

この時代「英雄の茶」と言つて、武士が陣中で茶事をするのが流行っていたとの指摘もあるが<sup>5</sup>、単なる「はやり」すなわち一時的な流行などという説明では済まされない。「彼らは常に生死に向き合っているところから、自然に静かな境地を求めて茶を飲んだ<sup>6</sup>。」と考えられる。緊迫した必死の状況だからこそ茶を求めていた。

桑田忠親氏は「加藤清正とか福島政則とかいえば、講談に出てくる荒大名の代表者であつて、槍を揮つて虎狩はやつても、茶の湯などは心得ず...決してそうではない<sup>7</sup>。」とまず述べて、加藤清正の逸話を語る。1593年、明国との和議が起こり、秀吉の命令で清正は京城と開城の間に退き、陣中を慰めるため茶会を催した。風呂釜や水桶等の茶道具を送付してほしいとの書状を部下に送っている。「清正は、異国の陣中においても、なお、茶の心を忘れず、なんの道具はなくとも、将士と共に銘茶をすすつて、相語らわんと欲したことがわかり、その嗜みの深さが、ゆかしく想われる<sup>8</sup>。」と氏は評しており、戦争の最中だからこそ緊迫した中で、心のゆとり、心の平和を茶に求めていた。「戦国時代の大名、殊に信長や秀吉は、茶の湯にすこぶる熱心だった。これは茶の湯というものが、戦乱の日々に、と

かく荒みがちな武人の心を、静かに、落ち着きのあるものにしてくれると、認めたからであらう<sup>9</sup>。」との評には十分頷ける。ほんの1服の茶の持つ意味の重さが感じられる。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 芳賀幸四郎『千利休』、人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館。1963年第1版第1刷、1989年新装版第4刷）、p.115.
- <sup>2</sup> 小和田哲男『戦国武将の手紙を読む』（東京：中央公論社、2010年）、p.118. 小和田氏は「千利休」にルビを付しているが、ここでは省いた。この正宗のいきさつは、同上 p.115-118 参照。
- <sup>3</sup> 『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.407.
- <sup>4</sup> 井口海仙 編『茶道用語集』（京都：淡交社、1962年初版、1991年第19版）、p.134.
- <sup>5</sup> 伊藤古鑑『茶と禅』（東京：春秋社、2004年新装第1刷）、p.60.
- <sup>6</sup> 田中仙翁『茶道の美学』（東京：講談社、1996年）、p.109.
- <sup>7</sup> 桑田忠親『武将と茶道』（東京：人物往来社、1964年）、p.238.
- <sup>8</sup> 同上、p.241. この逸話については本書 p.240. で述べている。
- <sup>9</sup> 同上、p.250.

#### 5-6-2 茶が有する癒しの成分

また植物としての茶自体に癒しの効用がある。茶にはタンニンが含まれ、癌に効く。Lテアニンも含まれており、これは渋みを緩和する $\alpha$ 波を有し、いらいらを抑える<sup>1</sup>。この精神における「鎮静効果は、冷静な判断を生み出すという副次的な効果もあったかもしれない<sup>2</sup>。」との指摘にもある通り、冷静な判断を以て敵を攻める、味方を守るという戦場のリーダーに不可欠な精神力を保つのに、茶は極めて効果的であったと考えられる。茶の渋みはカテキンの作用に因るもので、カテキンには、身体に有害な過酸化脂質の発生を抑える働きがあり、体調を整えることに繋がる。体調の良好は精神の良好でもある。茶にはカフェインも含まれており、カフェインは疲労を回復させ、ストレスを解消する働きがある<sup>3</sup>。植物としての茶自体が心を和らげ、癒す要素を多分に含有していることがわかる。茶がからだによいことは、既に鎌倉時代に栄西が『喫茶養生記』に記している通りである。

そして何よりも、茶の湯の場、その雰囲気、茶の湯の世界というものが、心の平和・癒しを与えてくれることを、戦国の世の人々のみならず、時代を経て現代のわれわれも、深く感じ取っている。茶会や茶事を楽しむわれわれには、戦国武将のような、今生きているうちに、今だからこそその心の平和を、といった緊迫感は少ない。しかしこの機会、これと同じ経験は2度とないのだという、いわゆる一期一会の思いは、生死を懸けて一瞬・一瞬に臨む戦国の武人と通じる部分が十分にある。

## 【注】

- <sup>1</sup>社団法人茶道裏千家淡交会北海道地区学校茶道連絡協議会、第15回学校茶道連絡協議会研修会講演、岡本浩一『心を癒す茶道とは』より。2011年9月3日、於札幌グランドホテル。
- <sup>2</sup>中村修也氏は『利休切腹』（東京：羊泉社、2015年初版）、p.112.において、「茶の湯」の持つ鎮静効果について述べているが、植物としての「茶」自体が有する精神的な鎮静効果をも、筆者は指摘したい。
- <sup>3</sup>茶のカテキン・カフェインの説明は、谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』（京都：淡交社、2005年）、p.31.

### 5-6-3 書簡に表れる心の平和

戦国時代には書簡というコミュニケーション手段もある。話し言葉ではなく、書き言葉による言語コミュニケーションである。当時は現代のようなコンピューターでのメール・携帯電話・スマートフォン等は存在しなかったため、書き言葉のコミュニケーション手段として、手紙の果たす役割は当然大きかった。この時代の書簡には、茶の湯について言及したものがあつた。そこには心の平和をもたらす茶が語られていることを指摘したい。

朝鮮渡海を翌年に控えた秀吉が、名護屋城内にいた1592（文禄元年）年、大坂城の北政所に宛てた次の手紙もある。心の平和をもたらす茶が文面から感じ取られる。「一だんあたたかに候て、寒中のやうにはなく、心やすく候べく候。朝夕、ちやのゆにて、うち暮らし候。かしく！」12月にしたためた書簡であるが、こちらは大変暖かく、寒中とは思えないくらいだから、安心してほしい、朝夕、茶の湯で暮らしている、と妻に知らせている。天下統一を果たした秀吉が、さらに朝鮮にまでも進出しようとし、その大いなる挑みを目前にして、毎朝毎晩、茶に親しんでいる。戦争前の心の平和を茶に求めていると受け取られる。また妻に安心感を、すなわち心の平和を妻へも与えようとする優しさも窺われる。利休自刃翌年の手紙だが、利休を偲びつつ、茶を行っていたのかもしれない。朝鮮のみならず明国との激戦、そして和議の交渉を行つての、この名護屋城滞在期には、茶事が盛んに行われていた<sup>2</sup>。この史実にも「戦争なのに茶」ではなく、「戦争だからこそ茶」であることが窺われ、戦乱期の茶の湯の積極的実施には、心の平和という深いテーマのコミュニケーションが行われていたのではないか。手紙自体は言語コミュニケーションであるが、そこで述べられている茶は、心の平和という非言語テーマを示唆している。

利休の手紙にも、心の平和を思わせるものがある。利休は小田原の役に参戦した弟子、古田織部に「武蔵鑑の文」を送っている<sup>3</sup>。これも手紙という言語コミュニケーションである。天下統一をほぼ遂行していた秀吉は、最後の邪魔者と言うべき北条氏、小田原で勢力を誇っていた、この北条氏政・氏直父子の小田原城を完全に包囲して、長期戦に備えていた。利休は秀吉に従軍して湯本の陣中にいた。一方、織部は浅野長政の一手に加わり武蔵国に進駐していた。その頃二人の間に書簡のやりとりがあつた。小田原の落城も正に目

前と見て取った利休が、武蔵国を引き払って小田原に参戦するのも間近いのではないかと問い合わせている。1590（天正18）年6月20日、利休69歳の時の手紙である。

其方てきのしろとも  
大略済申様に候  
事珍重々々 ...  
小田原も久事候ましく候  
方々内にかけてかきりも  
無之由申候  
旅宿茶一服申度候  
本望にて候摘茶を  
持来候 ...

解釈すると「そなたは、敵の城々を大かた攻め落とされたとのこと、結構至極でござる。...小田原の落城も、はや遠くはあるまい。旅宿ながら、そなたに一服お茶を差し上げたく思っている、京都から摘茶を携行している...<sup>4</sup>。」となる。

飾らない簡潔な表現の中に、却って師匠の愛情が偲ばれる。参戦中の愛弟子の身の上を案じる思いが言葉の裏に感じられる。「利休は...朝夕、富士山を眺め、竹の花筒を削り、また時には、はるか武蔵野のかなたに転戦中の茶湯の愛弟子古田織部の身の上をしのんだものとみえる<sup>5</sup>。」との評もある。生死を懸けた緊張感、無事で、生きて帰って来なさいよ、一緒に茶を、という思いが託されている。誰も愛弟子を戦場になど送りたくはない。この手紙には弟子と心の平和を分かち合いたいという願いが込められてはいまいか。

手紙という言葉コミュニケーションを通じて、心の平和を求めての茶が語られている。

利休が仕えた上様である信長・秀吉は言うに及ばず、高弟である利休七哲も全員武将、しかも大名であり、戦争ともなればリーダーとして責任ある位置に立つ存在である。いつ果てるとも知れない命、そのような緊迫した状況の中で、こうした書簡には茶を通じての心の平和という祈りが表れてはいないか。

#### 【注】

<sup>1</sup> 桑田忠親『太閤の手紙』（東京：講談社、2006年第1刷。1959年文藝春秋刊行『太閤の手紙』を底本とする）、p.210.

<sup>2</sup> 同上、p.211.

<sup>3</sup> 「武蔵鐙の文」の説明は小松茂美『利休の手紙』（東京：小学館、1985年）、pp.389-390. 参照。原文は東京国立博物館所蔵「武蔵鐙の文」であり、上記小松氏の文献、pp.139-141. より記載。小松氏は古筆学者・美術史学者、また利休研究家でもある。

<sup>4</sup> 訳は「...思っている」までが桑田忠親『千利休研究』、p.210より。「京都から摘茶を...」は小松茂美『利休の手紙』、p.390. に拠る。

<sup>5</sup> 桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版）、p.211.

## 5-7 戦争を背景とする非言語コミュニケーション

### 5-7-1 非言語コミュニケーション — 信長

部下の手柄を褒め褒美を与える場、密談としての場、心の平和を伝え合う場、戦争を背景とする茶のコミュニケーションを見てきた。しかしながら、以上とはまた違った意を伝える、戦争中ならではのコミュニケーションもあったことを筆者は指摘したい。それは名物茶器の使用という非言語コミュニケーションである。物言わぬ茶器に、為政者たちは実は多くを語らせていたのではないかということである。初めに名物の定義であるが、名物とは「芸術的素質か歴史的由緒において、あるいは骨とう的価値や、またそれらのすべてにおいて優秀なものの意。転じて古来名ある茶人たちにより名物としての資格具備の物と選定したもの<sup>1)</sup>」である。

そして為政者、信長は自らの判断で名物茶器を厳選する。歴史学者、竹本千鶴氏は、その判断基準として次の3点を挙げている。

1. 茶器自体の価値が知れ渡っているもの
2. 信長自身の好み
3. 由来の伴った名物茶器<sup>2)</sup>

これらの立派な名物茶器を披露することにより、信長は茶席の客を圧倒し、ひいては織田政権への服従へと導いたのではなかろうか。上記3点目では、由来を語り聞かせるという言葉コミュニケーションが働くであろうが、茶器そのものは語らない。しかし語らない茶器こそが、信長の圧倒的な力を何よりも語っているのではないか。自分はこのように立派な名物を所持しているのだ、権力があるのだということを、言葉なしに伝えているのではないか。非言語が言語を超える威力を発揮することがある。

前述したように、秀吉が吉川経家の鳥取城を政略して信長の安土に凱旋した際、いわゆる「茶湯御政道」により茶の湯をすることを許され、朝倉肩衝を始め8種の名物茶器を与えられた。信長より褒め言葉・労いの言、すなわち言語コミュニケーションも多々賜ったであろうが、これらの名物がまた多くを語る。主君から賜った茶器が秀吉に名誉を感じさせ、強く激励したのではないか。非言語コミュニケーションが効を奏したと推察される。

茶人の間ではよく知られている、武将松永久秀と平蜘蛛釜の話がある。この茶器は、山上宗二が多々ある「名物ノ釜」の中でも筆頭に挙げている品である<sup>3)</sup>。それほどの名器であるが故に、信長はこの釜を度々所望していたが、久秀は応じなかった。いよいよ信長に攻め入れられ、もう一卷の終わりだと覚悟した時、久秀は自ら釜を打ち砕き、城に火をかけて自害したという。この件は『老人雑話』にて次のように記されている。「霜臺(久秀)ハ秘蔵の茄子の茶壺平蜘蛛と云釜を打砕きて、其のち自殺す。<sup>4)</sup>久秀の壮烈さ、その行為の劇的さもさることながら、名物茶器というものが人の命に匹敵するほどの価値を持つものだというところを、この話は物語っている<sup>5)</sup>。

また茶の湯の点前の中に、袱紗で古い字体の「国」の字を崩して書く所作があるが、これも茶器が一国と同等の価値を持つことに由来すると言われる。名器は一命にも、一国にも値するほどの物なのだ。よってどれほど人に大きい影響を与えるか、想像に難くない。

信長は1574（天正2）年、東大寺正倉院にある天下の名香「蘭奢待」を利休と宗及に与えている<sup>6</sup>。正倉院御物とは天皇の配下にある明宝である。自分が天皇とも通じている、天皇に信頼されているということ、蘭奢待に語らせているのではないか。この時、信長・利休・宗及の間にどのような会話がなされたのか知る由もないが、非言語要素である蘭奢待自体が多くを語っていたと受け取られる。

名物狩りという風習もあった<sup>7</sup>。風習と言うより政策と呼ぶべきであろうか、この名物狩りにも政治と茶の深い結び付きが表れている。信長は1569（永禄12）年、京都では大文字屋より初花肩衝、祐乗坊の富士茄子、池上如慶の蕪無の花入れ、佐野家からは雁の絵という名物を召し上げている。1570年、堺では津田宗及より趙昌（宋の画家）筆の「菓子絵」、油屋常（浄）祐からは柑子口の花入れ、松永久永からは「遠寺晚鐘の絵」という、いずれも名物を召し上げた。

しかし名物狩りとは、決して強制的な召し上げだけではない。これらの品に対して信長はそれに相応する金銀や領地・米等を与えており、また特筆すべきことは、商人・武士たちはこぞって自分の側からの献上をも行っていることである。1568年今井宗久が松島の茶壺と紹鷗茄子を、松永久秀が秘蔵の茶入れ、銘つくもがみ（九十九髪）を献じ、石山本願寺の頭如上人は1572（元亀3）年、万里江山の絵と白天目茶碗、1575（天正3）年には玉礪（元の画僧<sup>8</sup>）筆の小軸等、3幅を献上している。いずれも大変な名物であり、献上者は堺の町人が多数であった。この意味でも「信長にとって堺衆はドル箱であった<sup>9</sup>。」のだ。

名物狩りも武士の懐柔策の一端であるが、また効果的な非言語コミュニケーションでもあった。召し上げた品々は権力を表す訳で、信長の力を語っている。また献上という行為による名器は忠誠を誓う証しであり、主君と自分の絆を示すことになる。すなわち、献上する側も、物言わぬ茶器に物を言わせているのである。信長に対して忠誠を誓うということ、主従の絆を結ぶということ、実際の言葉よりも強く茶器が語っている。信長が持つ名物茶器は235点、そのうち信長所持確定の物は109点である<sup>10</sup>。秀吉の持つ名物茶器は327点、うち秀吉所持確定の物だけでも260点ある<sup>11</sup>。非言語コミュニケーションの担い手たちが、何と数多く存在したことであろう。この数の多さ、またそのどれもが名物だという事実には、全く驚嘆せざるを得ない。

#### 【注】

<sup>1</sup>井口海仙 編『茶道用語集』（京都：淡交社、1962年初版、1991年19版）、p.248.

<sup>2</sup>竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』（京都：思文閣出版、2006年）、p.278.

<sup>3</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：1958年初版、1967年500部限定）、p.65。「名物ノ釜」の項に「平蜘蛛 松永代ニ失」とある。

<sup>4</sup>『老人雑話』近藤瓶城 編『改訂 史籍集覧』第10冊所収（京都：三星社、1983年復刻版、1990年第2刷）、p.22. 括弧は筆者による。

- <sup>5</sup> 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』、pp.252-253. 参照。
- <sup>6</sup> アメリカの日本文化学者、ヘルベルト・プルチョウ氏は『茶道と天下統一—ニッポンの政治文化と「茶の湯」』（東京：日本経済新聞出版社、2010年）、p.74. にて、足利義政も以前同じことをしたのではないかと行って、正倉院の扉を無理やり開けさせたと言っているが、真偽のほどはわかりかねる。
- <sup>7</sup> 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977年日本放送出版協会より）、pp.121-122. 参照。茶道具の表記も本書に基づく。
- <sup>8</sup> 玉潤の表記もあるが、本論文では「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』千宗室『茶道古典全集』第7巻所収（京都：1959年初版、1967年500部限定）の表記に準じる。
- <sup>9</sup> 村井康彦『千利休』、p.123.
- <sup>10</sup> 竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』、p.127 及び p.166. で述べている。ここで「所持確定の物」とことわっているのは、信長所持と「考えられている物」も、総数に含まれているからである。次の秀吉についての記述も同様である。
- <sup>11</sup> 同上、p.191. 及び p.347. において述べている。

## 5-7-2 非言語コミュニケーション — 秀吉

### 5-7-2-1 茶器を通して

こうした信長の政治と茶における政策は、秀吉においても然りである。秀吉も「茶之湯御政道」を踏襲し、茶の湯を政治に大いに利用した<sup>1</sup>。「豊臣秀吉ほど、茶の湯を政治的に利用しきった戦国大名は少ないであろう？」との評もあり、武士たちにとって秀吉の好意と信頼を得るには、茶の湯の嗜みが深いことが必須であった<sup>3</sup>。立派な武士であることが立派な茶人であることと同格化されており、こうした状況から、「ひとかどの茶人ならば4畳半の茶室と3畳台目以下の小間の二つの茶室をもつのが普通であったよう<sup>4</sup>」である。

商人茶人を活用する信長の政策を、秀吉も踏襲した。信長の三大御茶頭であった今井宗久・津田宗及・千宗易（利休）はそのまま秀吉に継承される。そして本能寺の変すなわち信長の死去（1582年）の後、明智光秀を破った山崎の戦いの後に、茶会を数回催している。特に1583（天正11）年正月5日の会では、今井宗久・津田宗及・千宗易・重宗甫・山上宗二・万代屋宗安という堺の有力な茶人をすべて招き、松花の茶壺・乙御前釜等、信長ゆかりの名器でもてなした<sup>5</sup>。国内のみならず、海外、すなわち朝鮮にも手を広げることを考えていた秀吉は、地理的に朝鮮に近い博多の豪商、神屋宗湛をも、信長に引き続きしばしば茶会に招いている。信長と同様、商人茶人への秀吉の心入れの強さが感じられ、さらに非言語コミュニケーションとの関わりも見られる。上記の1583年正月の茶会では信長ゆかりの名物茶器で有力商人たちをもてなした訳だが、これらの茶器は、信長の後継者は自分だという非言語メッセージを含んでいるのではないかと。

多々ある名物の中でも、特に頻繁に言及される茶入れに初花肩衝がある。この茶器は中



国の南宋または元時代の作とされ、戦国時代に日本に渡来した。「春に先がけする初番の名花に似ている<sup>6)</sup>」ということで、足利義政の命名によると考えられている。伝来は、鳥居引拙(珠光二男)―大文字屋疋田宗観―織田信長―織田信忠―松平念誓―徳川家康―豊臣秀吉―浮田秀家―徳川家康―松平忠直―松平備前守―柳営御物と、多数の茶人・為政者の所有を経ていることから、特筆すべき名器であることがわかり、現在は徳川記念財団が保管する重要文化財となっている<sup>7)</sup>。1583(天正11)年7月2日に秀吉は津田宗及・千宗易を招き大坂城内にて、信長旧蔵の玉礪による「暮鐘御繪」の絵を掛け信長から拝領した紹鷗小霰釜を釣り、初花肩衝を使っている<sup>8)</sup>。宗及はこの名器を「カタノツキヤウ、ナテカタニマルミアリ、一段面白候<sup>9)</sup>」と評している。追って10月7日、瀧川一益と津田宗及を招待し、上と同じく「暮鐘御繪」と紹鷗小霰釜を用い、信長から拝領の茶壺四拾石、そしてまた初花肩衝を使用している<sup>10)</sup>。1585年2月24日には信長の次男である織田信雄及び信長の弟である織田有楽を招いて大坂城内の山里の茶室にて茶会を開いている。これは密談についての箇所筆者が前述した茶会であるが、ここでも床には初花肩衝が荘られている<sup>11)</sup>。再三初花肩衝が使われていることがわかる。

招かれている客にも注目すべきである。宗及・宗易はこの時代の茶人の最高峰とも言うべき存在である。名うての茶人の前で、まず初花肩衝を使っている。また客の一人、信長の旧臣である瀧川一益についてであるが、1582(天正10)年7月の清洲会議、いわば信長の後継者を決めるこの会議以降一益は、信長の三男信孝及び柴田勝家と共に秀吉とは対立していた。一益は勝家と組んで秀吉を倒そうと企てたが、反対に秀吉に攻められて翌年降伏している。1583年3月1日には一益が秀吉を茶会に招いている。3月10日に秀吉は大坂を出発し、4月10日には、織田信雄・徳川家康との長久手の戦いに突入しており、茶会は戦いのわずか40日前である。すなわち秀吉は、一益というたった1年前に敵であった人の茶席に出席、しかも信雄・家康という新たな極めて手ごわい敵との大きい決戦の直前に出席している訳で、この行動については「秀吉も大した人物だし、茶道というものも素晴らしい芸能ではなかろうか。昨日の敵は今日の友という言葉があるが、人間の憎悪や怨恨を超克した絶対法悦の境地が茶の世界ではないか、とも考えられる<sup>12)</sup>。」という意見もある。しかしそのような平和で円満な解釈だけでは済まされないと筆者は考える。信長の家臣としては元同僚だが、その後は敵となった一益のような人物をも懐柔し、自分の傘下に入れようという秀吉の目論見が窺われる。「素晴らしい芸能」である茶の湯は一方で、政治的意味合いが極めて強い。そして秀吉主催の上述の茶会では、信長後継者の体現とも言うべき初花肩衝を見せ、使うことによって、自分こそが信長を継ぐ者だと示している、と受け取られよう<sup>13)</sup>。

1585(天正13)年には織田信雄も客の一人となっているが、信雄は秀吉の下風に立つことを厭い、家康と同盟して1584年には尾張の長久手・小牧及び伊勢で秀吉と衝突した。和議にも難儀したが、翌年上述のように茶会に招かれている。この茶会では「秀吉様御手前也<sup>14)</sup>」とある通り、秀吉自らが点前をしたほどの手厚いもてなしであったことを前述した。さらに注目すべきことは、初花肩衝の使用である。ここでも初花肩衝を用いることによっ

て、信長の後継者は信雄ではなく自分であるということを暗に語らせている。

茶会記を読むと、茶会のみならず御道具揃え、すなわち道具比べも行われていたことがわかる。例えば1583（天正11）年9月16日、秀吉は千宗易・千宗及・松井友閑・荒木道薫・万代屋宗安と御道具揃えを催している。そして信長より拝領した「暮鐘御繪」の絵、同じく松本茄子（紹鷗茄子）、そしてこの時も初花肩衝を取り出している。津田宗及による他会記には、「暮鐘御繪」と初花肩衝については明確に「御物」と記されている<sup>15</sup>。秀吉はこれらの名品に多くを語らせている。こうした行事では言語コミュニケーションも多々なされたであろう。しかし非言語コミュニケーションも看過できず、その主役とも言うべき存在は初花肩衝である。私が信長の後継者であると秀吉が言葉で語るよりも、この肩衝を見せて使うことの方が、遥かに効果的であったと推察される。

信長の跡取りであることに加えて、秀吉が時の有力者たちに伝えたかったことがあるようだ。さらなるメッセージがあったのではないかと筆者は推察する。前述の1583（天正11）年正月5日の茶会では、乙御前釜・松花の茶壺という信長より下賜された名物を使う一方で、三島焼すなわち和物である「芋頭水サシ」、また朝鮮の庶民が生活の中で使用していたという「井戸茶ワン」をも混ぜて取り入れている<sup>16</sup>。この茶会には利休の指示が働いていると考えられ、唐物中心の書院台子茶——大名茶湯と言ってもよい——と、新たに興ってきたわび茶の両方の要素が見られる。わび茶を行うことにより秀吉は、書院台子茶中心の信長と、自分は違っているのだと言いたいのではないか。同年7月7日、大坂城での千宗易・津田宗及・今井宗久・山上宗二・松井友閑・荒木道薫を招いた茶会にも、「信楽水サシ」という和物が用いられている<sup>17</sup>。さらに下って1585年正月19日、石川數正・千宗易・津田宗及を招いた茶会では、庶民の生活の道具である「つるへ」、すなわち釣瓶の水指を使っている<sup>18</sup>。秀吉はこれらの道具に、自分は信長とは違う、否、信長を超えているのだと言わせている<sup>19</sup>。わび茶は千利休の存在、またその利休を秀吉が重用していた故、発展を遂げた。しかし発展の理由はそれだけではなかろう。信長を超えるという秀吉の意図が大きく働いていたと解釈される。そしてその意図を実現する上で、非言語要素である道具が大きい役割を果たしていたと筆者は推察する。

#### 【注】

<sup>1</sup>熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年第1刷）、p.100. において、秀吉は「茶の湯を政治的な道具」としたと述べている。

<sup>2</sup>中村修也『利休切腹』（東京：羊泉社、2015年初版）、p.85.

<sup>3</sup>芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1版第1刷、1989年新装第4刷）、p.182. 氏もこのことを指摘している。

<sup>4</sup>村井康彦『千利休』、p.198. 村田氏作成による茶室の規模の表については後述する。

<sup>5</sup>『今井宗久茶湯日記抜書』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.35.

<sup>6</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、pp.80-81. 「注」。

- <sup>7</sup>伝来については小田栄作 執筆、千宗室 監修『茶道美術全集 5 茶入』（京都：淡交社、1970年初版、1973年改訂初版）、p.116。「珠光二男」とあり、「次」ではなく「二」を記している。
- <sup>8</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』千宗室 編『茶道古典全集』第7巻所収（京都：淡交社、1959年初版、1967年500部限定）、p.394. 道具の表記は本書に準じる。
- <sup>9</sup>同上、pp.396-397. 括弧は本書にある。
- <sup>10</sup>同上、pp.400-401. 絵は7月2日の茶会では「暮鐘繪」、10月7日の茶会では「暮鐘御繪」と記載されているが同じ物と解釈する。同様に、7月2日では「紹鷗あられかま」、10月7日では「こあられ御釜」と宗及は記しているが、両者は同じ「紹鷗小霰釜」であると受け取られる。
- <sup>11</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』、p.409.
- <sup>12</sup>桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年）、p. 89.
- <sup>13</sup>竹本千鶴氏も『織豊期の茶会と政治』、p.359. において同様のことを述べている。また同ページの中で、「秀吉は『初花肩衝』の政治的価値を認識しているかつての同僚瀧川一益に、ことさらにこの茶入を見せ、信長の後継者としての正当性を納得させ、心服させたかったのであろう。」とも述べている。
- <sup>14</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』、p.409.
- <sup>15</sup>同上、p.398.
- <sup>16</sup>『今井宗久茶湯日記抜書』、p.35. 道具の表記は本書にある通りとした。
- <sup>17</sup>同上、p.36.
- <sup>18</sup>「宗及茶湯日記 他会記」『天王寺屋会記』、p.407.
- <sup>19</sup>竹本千鶴氏も『織豊期の茶会と政治』、p.409. において「秀吉の心中に、名実共に信長を凌駕したいという意志があったとするなら、秀吉は、そのために施策のひとつとして、信長によって創出された『大名茶湯』を越えるような趣向を生み出す必要があった。」と述べている。

### 5-7-2-2 茶室を通して

物言わぬ茶器に多くを語らせていたことを上述したが、茶器を配した茶室そのものも、非言語コミュニケーションに大きく関与していた。「安土桃山時代の色は圧倒的に黄金の色であろう。もし日本歴史のなかでこの時代がないとすれば、たとえば濃密な色調がわからない感覚のように、われわれ日本人は、豪華というものを感ずる心の視覚をうしなうのではあるまいか。（改行）その時代の色調をつくりあげてゆく指導者が、信長と秀吉であった<sup>1</sup>。」との評もある。二条城・大坂城等の狩野永徳の筆による屏風、襖や壁の装飾には金箔がふんだんに使われ、豪華絢爛・壮麗であり、金という色は正に時代の色である<sup>2</sup>。

鉱物としての金についても時代背景がある。中国の明から採金術が伝わり、国内各地で鉱山の発掘が行われ、金銀の産出額は古今未曾有の数字を呈した。この結果、天正大判・

小判が鑄造され、大坂城天守閣は金子・銀子で充満し、さらに 1589 年（天正 17）5 月の金銀分配という金配りへと至る<sup>3</sup>。

秀吉の黄金の茶室も、色彩としての金、そして実際の金の産出という時代背景から生まれた、権勢と豪華さの象徴とも言うべきものである。大坂城本丸にあったこの茶室は、部屋の建築機材から茶道具から、すべて金で作られ、それ以前にも以降にも例を見ない。秀吉によってここに招かれた豊後の大名大友宗麟の書状では、次のように記述されている。

其後、<sup>きんおく</sup>金屋之御座敷御見せ候。三畳敷、天井、壁、其他皆金。あかり障子のほね迄も黄金。赤紗にてはり申候。見事さ、結構、不及申。さて、御座敷のカザリ棚、梨地、四ノ柱、上下之板ニ三十。金物ハ黄金。

一、御釜風炉<sup>きりあわせ</sup>黄金切合 円釜

一、御水指<sup>めんつう</sup> 飯桶付、ツチメ、トジブタ 黄金

一、柄杓立<sup>ひしゃくたて</sup> <sup>こうじくち</sup> 柑子口 黄金

一、水こぼし<sup>ごうし</sup> 合子黄金

一、御茶入なつめ 黄金 一、御茶碗二、大に深し 重而被置候。黄金

一、<sup>よほうぼん</sup>四方盆 黄金

一、柄杓竹 一、茶杓 黄金 一、茶筌行 紫竹

一、<sup>ふたおき</sup>蓋置 黄金 一、炭入 ヒウタンナリ黄金

一、火箸 黄金 一、火ふき 黄金

已上<sup>4</sup>

茶器については柄杓と茶筌の他はすべて黄金、さらに天井・壁といった部屋の素材も黄金でできていたことがわかる。全く法外の豪華さであり、しかも組み立て自由で長持ちに納まり、いつでもどこでも披露することができるという便利さを備えている。1586 年（天正 14）正月 16 日に、大坂城内のこの黄金茶室を京都へ運び、禁中にてこれを組み立てて夜会を開き、正親町天皇に献茶をしている<sup>5</sup>。博多の豪商、神屋宗湛も 1592 年（文禄元年）5 月 18 日にここに招かれ、黄金尽くめの描写が記録として残っている<sup>6</sup>。前述の初花肩衝と同様に、秀吉は金でできた器物の一つ一つ、そしてまた金でできた茶室そのものに、自分がいかに力を持っているかということを語らせているのではないか。しかも天皇・大名・豪商という、社会の中の極めて重要な位置にある人々に対してである。見た者を圧倒する

非言語コミュニケーションの威力がある。言葉で語るよりも遥かに効果的であろう。

興味深いことは、この絢爛豪華な黄金の茶室が3畳間という小座敷であったことである。小間であったことは注目に値する。天下統一を成し遂げ、時代の為政者であった秀吉の力を以てすれば、大広間であろうと十分実現できたはずである。しかし黄金の大広間ではなく3畳の小座敷にしたのは、利休の意見によるものであろう<sup>7</sup>。「金色のきらびやかさに対する草庵式侘び住まいの3畳という座敷の狭小さの取合わせ<sup>8</sup>」という見方がある。3畳というわびた要素が加わることによって、すべて金尽くしという贅沢さも一段と引き立ち、生きてくる。金の華やかさだけで終わらせていないところに、茶の湯の深遠さも感じられる。「利休はこれを3畳にすることによって、いわば『侘び茶』と『広間の茶』、つまり『親しみ』と『尊ぶべき距離』との妥協を図ったのではないか<sup>9</sup>。」との評もあり、筆者も同意する。そして絢爛豪華さのみならず、わびという新しい趣をも取り入れた独特の茶風があることもまた、人間ではなく茶室という「物」が語っている。黄金の茶室もまた非言語コミュニケーションの重要な担い手であったと受け取られる。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 司馬遼太郎『歴史の中の日本』（東京：中央公論新社、1976年初版、1994年改版、2009年改版15刷）、p.55.
- <sup>2</sup> 芳賀幸四郎『安土桃山時代の文化』日本歴史新書（東京：至文堂、1964年初版、1965年第2版）、pp.22-24. 参照。
- <sup>3</sup> 桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版）、pp.130-131.
- <sup>4</sup> 同上、p.131. 東京大学史料編纂所にて桑田忠親氏が発見した『大友家文書録』6（写本）より。返り点省略。ルビは『千利休研究』にあるままである。
- <sup>5</sup> 同上、pp.128-129. にて天皇を招待した歴史を述べている。
- <sup>6</sup> 『宗湛日記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収、（京都：淡交社、1959年初版、1967年500部限定）、pp.268-269.
- <sup>7</sup> 芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1版第1刷、1989年新装第4刷）、p.192. 参照。
- <sup>8</sup> 桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年）、p.132.
- <sup>9</sup> ヘルベルト・プルチョウ『茶道と天下統一——ニッポンの政治文化と「茶の湯」』（東京：日本経済新聞出版社、2010年）、p.110.

#### 5-7-3 コミュニケーションの不成立

為政者たちが物言わぬ名物茶器に多くを語らせていたこと、すなわち器物を通じて非言語コミュニケーションが行われていたことを述べてきた。しかしながら、このコミュニケーションが必ずしも成立していない場合もあったことに触れたい。宣教師ジョアン・ロドリゲスによる次の記述がある。

数寄 *suky* に用いるものはすべて粗末で値打ちの少ないものである。たとえば、粗末な古い木材で造られ、乾草と古葺で覆われた家や、出来が悪いというよりはむしろ無造作であって、どこか自然の姿が残っており、なおさら醜く見える

<sup>バーロ</sup>陶土製の壺（茶入れ）や瓶（水差し）、飲むために使う陶土製の磁器（茶碗）、

陶土製の竈（風炉）、古鉄の深鍋すなわち大 <sup>パネーラ</sup>釜、粗末な石の道、同じく石の手洗い鉢、実のならない野生の樹木、苔蒸して<sup>2</sup>古色を帯びた地面のある林、その他すべて粗末で、見たところ官能を楽しませ喜ばせるような光沢のまったくないものである。だから、数寄 *suky* には莫大な費用がかかることと、また領主や富裕で潤沢な人でなければ、厳密にはそれに専念することができない理由について、ここでいくらか述べることは時機を得ていないことではなからう<sup>3</sup>。

少しでも茶を知っている者がこれを読むと、苦笑するしかない。「粗末」という形容が何度もなされており、茶道具・茶室の素材・露地に見られる一つ一つの事物、こうしたすべてが酷評されている。茶を知る者なら深い感動を覚える対象が皆、ここでは古い、貧しい、無価値な物と受け止められており、これらに莫大な費用を投じていること自体が信じられないといった記述である。信長・秀吉が、ことさら政治的価値を見出して珍重していた初花肩衝を含む茶入れについては、「なおさら醜く見える」との極めて否定的描写である。

同じくイエズス会宣教師であるアレッサンドロ・バリニャーノの記述を見てみる。

茶の湯を重んずる故に、それに用いる或る容器も大いに珍重される。…すべてこれらの容器は、ある特別なものである場合に——それは日本人にしか解らない——いかにしても信じられないほど彼等の中で珍重される。我等から見れば、まったく笑い物で、何の価値もない茶釜一個、五徳蓋置一個、茶碗一個、あるいは茶入れ一個で、三千、四千、あるいは六千ドゥカード、さらにそれ以上の価格のものがある。豊後国王（ドン・フランシスコ大友）が陶土製の茶入れ（似たり茄子）を私に見せたことがある。それは実際のところ、我等から見れば、鳥籠に入れて鳥に水を与えること以外には何の役にも立たないものであるが、彼はこれを自ら銀九千 <sup>タエス</sup>両、すなわち約一万四千ドゥカードで購入した。私ならば事実、一、あるいは二マラペディ以上は出さないであろう<sup>4</sup>。

ロドリゲスと同様にヴァリニャーノもまた、茶器のよさを全く認めておらず、無価値なばかばかしい物と捉えている。秀吉も重用していた「豊後国王」すなわち大友宗麟、茶器の「似たり茄子」の名が具体的に記されており、信憑性が高いと解される。『山上宗二記』が茄子茶入れの名器として挙げている似たり茄子<sup>5</sup>、秀吉の数多い茶会の中でも特筆すべき一大行事だと称される北野大茶湯（1587年）において、道具組の筆頭に記されている、か

の似たり茄子<sup>6</sup>に対して、何と鳥に水をやるくらいで、他には役に立たない物であると、かなり手厳しい評が下されている。そしてこのような物に大金をつぎ込む日本人が理解できない、自分たちとは価値観が全く違うと言っている。

同様に宣教師であるルイス・デ・アルメイダは、1565（永禄8）年10月25日付け、イエズス会会員であるイルマン宛の書簡の中で、まず次のように述べている。「此等の道具は我等の間に於ける指輪寶石及び甚だ好きルビー、ダイヤモンドの首飾と同じく、日本の寶玉なり<sup>7</sup>。」この引用の前に観察も細かく、茶碗・建水・蓋置・茶入れ・茶杓・釜・柄杓について言及しており、日本人にとっての茶器はヨーロッパ人にとってのルビー・ダイヤモンドといった宝石に匹敵すると語っている。さらにこの後には次のような記述が見られる。「日本にある高價なる三脚臺の一つにして之を購ふ爲千三十クルサドを支拂ひしが更に多くの價値ありとなせり<sup>8</sup>。」ある蓋置はポルトガル貨幣の1,030クルサドに値するという。さらに次のような記述もある。「都の一人の大神茶の粉末を入るゝ小さき碗の大きさの土器を所有す、其價三萬クルサドなり。彼等の云ふごとき價なしとするも一萬クルサドならば之を買はんと欲する諸侯多数あるべし。此種の器三四五千クルサドの品は多数あり、常に賈買せられる。彼等の間に於ては劔も同一の價格を有するものあり<sup>9</sup>。」ある名士の茶入れは3万クルサドする。1万クルサドなら買おうと思う諸氏は多い。「三四五千クルサド」との記述は、3,000～5,000クルサドのことであると受け取られ、この程度の茶器は多数あって常時売買されていたと述べている。

当時の茶器がどの程度の価格であったのかを見てみたい。アルメイダは、茶器が劔すなわち武士の命とも、武士の魂とも言われる刀と同等の価格であると述べており、この観点から当時の茶器の価格を考えてみる。安土桃山期より時代を遡るが、南北朝時代の名刀と評される「桑名江<sup>くわんご</sup>」という刀がある<sup>10</sup>。藤四郎・相州五郎入道正宗と共に刀の名工「天下三作<sup>11</sup>」と称される江（郷）義弘の作であるが、その後江戸時代に入ってから鑑定では、「代金子300枚」、すなわち金子300枚分の価値があるとの折紙が付けられている<sup>12</sup>。茶器が刀と同等の価格であったとすると、名茶器は名刀と同等であることになり、金子300枚分という、法外な価値があったということになる。

また正に安土桃山期の例として、石田三成の愛刀と伝えられる「名物石田正宗」という名刀がある<sup>13</sup>。この刀は秀吉より三成が拝領したという説もあるが、徳川吉宗の命による名刀リスト『名物帳』に拠ると、関白豊臣秀次家臣の森若狭守が所持していたものを、岡山城主である宇喜多秀家が400貫で買い、三成に贈ったという<sup>14</sup>。前述の大名物「似たり茄子」の価格は100貫であったことを山上宗二が述べている<sup>15</sup>。やはり「天下三作」の一人である相州五郎入道正宗、特に「名刀の代名詞<sup>16</sup>」と言われるほどの正宗の作品の、4分の1にも比する価値が「似たり茄子」にはあったのだ。また文字通り「劔も同一の價格」であるならば、400貫の茶入れも存在したことになる。当時の茶器がいかに高額であったかが推し量られる<sup>17</sup>。アルメイダも「此の如き道具の價に付驚くべからず<sup>18</sup>。」と、本人は驚いていることが推察されるが、ロドリゲスとヴァリニャーノの驚愕振りにはさらに甚だしく、かくもつまらない品々に、かような大金を投ずることが信じられないと語っている。

茶器を通して所持者は自分の力を示していた訳であるから、茶器の価値がわからないということは、それを所持する人の価値・権力・偉大さもまた伝わっていないということになる。ロドリゲスとアルメイダはポルトガル人、ヴァリニャーノはイタリア人であるが、信長・秀吉が茶器を通して名うての茶人・豪商・武士・天皇にまでも示した「自己の大なる力」は、これらの西欧人には少しも伝わっていない。すなわち非言語コミュニケーションが成立していない。このことは「日本人にしか解らない」という表現に、如実に表れている。しかしながら、西欧人か日本人かが問題なのではない。日本人であっても、もし受け入れる側に茶人としての心映えがなければ、コミュニケーションは成立しない。コミュニケーションは相互作用である。送り手だけが努力しても、受け手の側に相応の受け皿がなければ成り立たないのである。これらの西欧人の記述により、コミュニケーションとは正に送り手と受け手が共に、一緒に作り上げるものであることが改めて認識させられる。

本論文は、コミュニケーションの送り手である亭主の側に焦点を当てているため、受け手の客の側についてはほとんど触れていない。ただ、客に受入れの心映えがなければコミュニケーションは成立しないこと、コミュニケーションは両者の相互作用であることを強調したく、本項——コミュニケーションの不成立——を設けた。

#### 【注】

- 1 ママ。「水指」ではなく「水差」と表記されている。ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）、p.611.
- 2 ママ。「苔生して」ではなく「苔蒸して」と表記されている。同上、p.611.
- 3 ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、pp.610-611. ルビは本書にある。
- 4 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ『日本巡察記』東洋文庫 229、松田毅一・佐久間正・近松洋男 訳（東京：平凡社、1973年初版第1刷、1988年初版第9刷）、p.23. ルビは本書にある。
- 5 『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.85. 「九十九茄子」という、珠光が99貫で入手し、後に室町幕府3代将軍足利義満が所有した大名物があるが、ここに挙げている「いたり茄子」は100貫であり99貫に近い、似ているところからこの名があることを宗二は説明している。百貫茄子とも呼ばれている。なお、ここで「大名物」という用語を使っているが、利休以前に選定されたものを大名物、利休時代に選定されたものを名物、古田織部の弟子である小堀遠州が選定したものを中興名物と呼ぶ。この説明は井口海仙 編『茶道用語集』（京都：淡交社、1962年初版、1991年第19版）、p.248. に拠る。
- 6 『北野大茶湯之記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.4. 同茶会において、秀吉の茶道具を荘りつけた三つの場所の「一番」目の場の筆頭に「にたり茄子」が挙げられている。それだけ秀吉も重きを置いていた道具だと解釈できる。
- 7 『耶蘇会士日本通信』上巻、村上直次郎 訳、渡辺世祐 註（東京：雄松堂書店、1927



年初版、1966年改訂復刻版)、p.139. アルメイダは近代西洋医学による医療に努め、イエズス会宣教師として1567年長崎に教会を設立し、また行政にも働きかけて長崎開港の扉も開いた。豊後において飢えと貧困による嬰兒殺しの惨状を救うべく孤児院を建設し、私財のほとんどを投じて「日本ではじめての幻の洋式病院」を開設し、日本社会に大きく貢献した人物である。秀吉も重用していた豊後の大名、大友宗麟との親交も厚かった。「日本ではじめての幻の洋式病院」は東野利夫『南蛮医アルメイダ——戦国時代を生きぬいたポルトガル人』(東京: 柏書房、1993年)、p.225. より。アルメイダの説明も本書に拠る。東野氏は医師・医学史研究家。

<sup>8</sup> 同上、pp.141-142.

<sup>9</sup> 同上、p.142.

<sup>10</sup> 現在京都国立博物館蔵の重要文化財となっている。宮川亨 編集長、田村真義・小林美香 編集『日本刀』、別冊宝島 2288号 (東京: 宝島社、2015年)、p.11.

<sup>11</sup> 歴史に残る刀の名工3名を「天下三作」と呼ぶ。藤四郎は通称で本名は粟田口吉光、相州五郎入道正宗は、刀剣関係の書物中では単に正宗と呼ばれる場合が多い。『日本刀』、pp.6-7.及び小笠原信夫『日本刀の鑑賞基礎知識』(東京: 至文堂、1995年第6版)、p.172.

<sup>12</sup> 1665(寛文5)年2月3日、鑑定士、本阿弥11代光温によってこの折紙が付けられた。『日本刀』、p.11.

<sup>13</sup> 「石田切込正宗」とも呼ばれ、東京国立博物館蔵の重要文化財である。『日本刀の鑑賞基礎知識』、p.184.

<sup>14</sup> 『日本刀の鑑賞基礎知識』、p.184. 『名物帳』は『享保名物帳』とも呼ばれ、徳川幕府8代将軍、徳川吉宗の命による名刀リストで、本阿弥家第13代当主、本阿弥光忠、及び本阿弥一族が編集して幕府に提出した。この中には毛利若狭守と記載されているが、森若狭守の誤りであることが後にわかった。森若狭守は、関白豊臣秀次に仕え、馬廻り組頭を務めていた。『名物帳』の説明は『日本刀』、p.7.

<sup>15</sup> 『山上宗二記』、p.85.

<sup>16</sup> 『日本刀の鑑賞基礎知識』、p.172. 及び『日本刀』、p.8. に正宗作の刀を評して「名刀の代名詞」とある。

<sup>17</sup> 東野利夫『南蛮医アルメイダ——戦国時代を生きぬいたポルトガル人』、p.45. にて、歴史学者、高瀬弘一郎氏の研究に基づくポルトガル貨幣と、安土桃山時代の日本貨幣及び米の価値について述べている。アルメイダは書簡の中で、ポルトガル貨幣に換算しての茶器の価値を語っており、これを東野氏の記述に照らし合わせると、1クルサドは約400レイス、25レイスが約1文であり、米1石(約60kg)は弘治3(1557)年の東福寺文書には新銭1,600文との記録が残っている。よって、1,030クルサドの蓋置は米10.3石(約618kg)、3万クルサドの茶入れは米300石(約18,000kg=18t)という計算になる。米30石(約1,800kg=1.8t)から50石(約3,000kg=3t)の茶器なら普通の売買対象価格であったということになる。ただし、東野氏は米1石を約60kgとしているが、Google検索では米1石は約150kgとあり、これで換算

すると 1,030 クルサドの蓋置は米にして約 1,545 kg、3 万クルサドの茶入れは約 45,000 kg (45 t)、米にして約 4,500 kg (4.5 t) から約 7,500 kg (7.5 t) に相応する茶器なら普通の売買対象価格であったということになる。いずれの計算にせよ、非常に大量の米の量である。しかも東野氏も指摘するように、当時の米は庶民の口に入るような代物ではなく、現在の数十倍以上の高価な食物であった。米の値段も現在と同様に上下様々あったであろう。しかし以上のことをすべて考え合わせてみても、安土桃山期においては「常に買買せられる」、すなわち一般的な茶器、特に名器でない品でも非常に高価であったことがわかる。

<sup>18</sup> 『耶蘇会士日本通信』上巻、p.142.

## 5-8 むすび

室町時代、足利義政において政治家と茶の結び付きが多少見られるが、安土桃山時代に入ると、この結び付きは一層顕著になってくる。安土桃山期には日本人の視野が南方や西欧に拡大し、富裕で平和な自治都市、国内外の物資・人・文化が行きかう堺の町を舞台に、時の為政者である信長と秀吉は茶を政治に利用した。「茶湯御政道」という、茶をする許しを主君から得るといふ制度すらあり、信長は堺の豪商であり優れた茶人でもある今井宗久・津田宗及・千利休を自分の茶頭とし、互いに利益を得つつ時代を促進する。茶は武士の懐柔策でもあり、教養を高めることにも繋がった。信長による茶と政治の結び付きを秀吉も継承し、秀吉は茶をさらに発展させた。

茶とは風流な趣向、人との和、心の癒しといった美しく優雅な文化である。しかしその茶が実は政治との結び付きによって大いなる発展を遂げたとは、非常に興味深いことであると筆者は考える。政治というどろどろした側面もまた文化なのである。美しい面と、そうでない面と、文化は両面から捉えるべきである。その好例が茶の湯であろう。

戦国時代すなわち 16 世紀後半には、戦争と茶会が背中合わせのように行われている。手柄を立てた部下を主君は称え、褒美を与える。茶席はそのような場でもあったのではないか。茶器が褒美の場合が多く、ここにも戦争と茶の結び付きが見られる。密談にも茶は格好の場であった。例えば 1585 (天正 13) 年 2 月 24 日の茶会において、秀吉は信長の次男である織田信雄、信長の弟である織田有楽の二人のみを客に招いた。名器を用い、秀吉自ら点前をしたほどの最高のもてなし振りであった訳だが、信雄は茶を一口も喫しておらず、また次の間には利休と宗及が控えており、他の人間の出入りは一切ない。かなり緊迫した雰囲気であったことが窺われ、密談の色が濃いと言えよう。密談を行うのに茶は便利である。茶を行っているのであれば、それ自体が立派な理由となり、限られた人間が長い時間茶室にいても、他人に怪しまれない。他者を気にする必要がない上に、武器も一切携行しないことになっている茶室は安全でもある。

しかし戦争時に茶が頻繁に行われていた理由は、上述のことよりも、心の平和をもたらすことであり、この理由の方が遥かに重要であると筆者は述べたい。今この時に心を落ち

着させる、緊迫の茶としての側面がある。瞬時の心の平和を伝える、そのような思いで点てる側は茶を点て、その意を酌むべく客の方は、その茶を深く味わっていたと解せる。これが自分の生涯で最後の1服になるかもしれない、戦国武将の心の中には常にこの思いがあったのではないか。点てる側もそれを感じ取り、緊迫した非言語コミュニケーションが働いていたと想像される。茶を行うことによって心を落ち着け、心を癒し、心を安らかにする。「戦争なのに茶」ではなく、「戦争だからこそ茶」なのである。

また植物としての茶自体に科学的に癒しの効用があり、そして何よりも茶の湯の場、その雰囲気、茶の湯の世界というものが、心の平和と癒しを与えてくれることを、戦国の世の人々のみならず、時代を経て現代の茶人も深く感じ取っているであろう。茶会や茶事を楽しむわれわれには、戦国武将のような、生きているうちに、今この時の心の平和を、といった緊迫感は少ない。しかしこの機会、これと同じ経験は2度とないのだという、いわゆる一期一会の思いは、生死を懸けて一瞬・一瞬に臨む戦国の武人と通じる部分がある。

書簡は話し言葉ではなく書き言葉による言語コミュニケーションであるが、秀吉・利休の手紙の中にも、茶を通しての心の平和を表しているものがある。

また、以上とは違う、しかし正に戦争を背景とすればこそその非言語コミュニケーションが行われていたことを、筆者は指摘したい。物言わぬ茶器に、為政者は多くを語らせていたのではないかということである。名物茶器を見せることによって、信長は茶席の客を圧倒し、ひいては織田政権への服従へと導いた。非言語が言語を上回る威力を発揮することがある。秀吉も然りであり、例えば信長拝領の名物、初花肩衝を用いることによって、自分が信長の後継者であるとライバルたちに示し、黄金の茶室を披露して、天皇・大名・豪商・名うての茶人たちに自己の権力を誇示する。言葉で言うよりも、遙かに効果的であったと推察される。信長が持つ名物茶器は235点、そのうち信長所持確定の物は109点である。秀吉の持つ名物茶器は327点、うち秀吉所持確定の物だけでも260点ある。非言語コミュニケーションの担い手たちが、何と数多く存在したことであろう。この数の多さ、またそのどれもが名物だという事実には、全く驚嘆せざるを得ない。

しかしながら、外国人宣教師のように、名物茶器に全く価値を感じない相手もいる。彼らは茶の湯に用いられる物はすべて粗末で値打ちの少ないものだとして述べており、古びていて醜い壺や瓶、全く無価値な茶釜、鳥に水をやるくらいにしか使えない茶入れ等と、極めて酷評である。よってこれらの品に巨額の金をつぎ込む日本人の考え方が理解できないと語っている。こうした評により、受入れの側に心映えがなければ、コミュニケーションは成立しないことがわかる。コミュニケーションは正に、送り手と受け手の間の相互作用なのである。

## 第6章

### 季節と茶事の流れに沿っての 茶席におけるコミュニケーション — 非言語の重要性

## 6-1 はじめに

本章では、前章と同じく茶席におけるコミュニケーションを扱う。茶の湯の非言語についてまず述べ、非言語を数寄の起こりという歴史背景からも見る。そして季節に沿って、また茶事の流れに沿って、言語・非言語コミュニケーションがどのように行われているかを追う。歓待の意、茶席のテーマ、季節感を亭主は客に伝えようとする。そしてそれを客が受け入れることによってコミュニケーションが成立する。非言語コミュニケーションが、言語コミュニケーションより遥かに多いことに気がつく。また無言であることの重要性も浮かび上がってくる。

## 6-2 茶の湯の非言語

### 6-2-1 宗旦道歌

日本文化は西欧文化に比べて言葉が少なく、文字も少ないことを第4章で述べた。話し言葉においてはあまり話さないことをよしとし、書き言葉においても西欧の長詩に比しての日本の和歌のように、文字数が少ないことを見てきた。このことがさらに、言葉が全く関与しない、非言語の文化に繋がっていくと考えられる。茶の湯にもそれが表れているのではないかと。言語よりもむしろ非言語が多くを語る、多くを伝える、すなわち多くをコミュニケーションし、その先に無言の文化が生み出される。

茶の湯と禅との深い結び付きは今さら論じるまでもないが、その禅の思想である「教外別伝」、また「不立文字」は非言語に直接通じる。他の宗派ではそれぞれ独自の経典を有し、それを以て一宗の拠り所としているのに対して、禅宗では仏陀が説いた教え、すなわち経典とはまた別に伝えるものがあるのだという考え方が「教外別伝」である。よって言葉というものをを用いて禅宗の教義を説くことはしないとの思想が「不立文字」である。経典の言葉から離れ、ひたすら座禅することによって釈尊のさとりを直接体験する。そして師の心から弟子の心へと、直にさとりの内容を伝えるのが禅の根本なのである<sup>1</sup>。言葉を使わずに心から心へ伝える、正に非言語コミュニケーションである。

武野紹鷗も「佗の文」の中で、茶の所作を心で深く合点することの重要性を説いた上で、言葉に表してしまうと「あさきに聞え候ものにて候<sup>2</sup>」と述べている。心での理解が大切であって、言語を用いてはいけないのである。

「宗旦道歌ニ云 茶之湯トハ耳ニ伝へて目ニつたへ心ニ伝へ一筆もなし<sup>3</sup>」、まず第一に耳や目で覚えるように、そして心に留めること、しかし書いてはいけない、すなわち言語を使ってはいけないという千家第3代宗匠、宗旦の道歌にも、非言語の表れを見ることが出来る。「耳ニ伝へて」は師匠の説明を聞く、よって言語の行為である。しかし師匠は言葉で説明するよりもむしろ所作で、行動で、すなわち非言語で示すことが多く、またその方が望ましいのである。

さらに茶の湯では、初歩からある程度までの点前については教本で説明されているが、上の方の点前は秘伝・奥伝とされ、教則本はない。公に書かないことになっている<sup>4</sup>。言語化されていないのである。正に宗旦道歌の姿勢である。芸術学研究家、中村静子氏は、宗旦は茶会記や伝書を1冊も残しておらず、「教外別伝」と「不立文字」を旨としていたことを指摘している<sup>5</sup>。宗旦の江戸時代には茶道人口が増大し、聞き書き・覚え書きをもっと確かなものにとという考えから、茶書の出版への動きが生まれた訳であるが、筒井紘一氏は先の宗旦道歌は、茶の湯秘伝をこのように文字化することへの警鐘ではないかと述べている<sup>6</sup>。筆者も宗旦道歌自体に茶の湯の根本姿勢を思い、この意見に同意する。

裏千家第16代宗匠、家元の坐忘斎も「心に刻む」の題の下で述べている。文字化されていない点前について、「点前手続きを稽古後にそれぞれノートに書き備忘録とされるのは結構ですが、ただ記録をしたその事実だけに安心し、心に刻もうとしなければ、単にノートに覚えさせただけのこと。…一瞬一瞬に自分の身体でまるごと立ち向かい、積極的に学ぶ姿勢を持ち続けていただきたいと思います<sup>7</sup>。」文字化することよりも心に刻むように、心が大事だと強調している。言語よりも、心という非言語の方が重きを成すことが、如実に表れているのではないか。「心から心へ」こそが茶の湯のあり方であろう。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 西村恵信『禅語を読む』角川選書 549（東京：角川学芸出版、2014年）、p.21. 参照。
- <sup>2</sup> 「佗の文」西堀一三『日本茶道史』創元選書（東京：創元社、1940年初版、1946年第10版）、p.126。「佗の文」は紹鷗が34歳以前の利休に与えた佗びの真髓の説明とされる。
- <sup>3</sup> 江戸千家茶の湯研究所編『不白筆記』（京都：江戸千家茶の湯研究所、2008年）、p.159.
- <sup>4</sup> 裏千家第13代宗匠円能斎の業躰である田村仙樵が、流儀の否定と秘伝の解放を掲げて裏千家から分かれ、1898（明治31）年、大日本茶道学会を設立した。仙樵は『茶道講義録』3巻と雑誌『茶道学誌』を発刊している。しかしこの時公刊されたのは基本的な点前だけであり、雑誌も2号までしか出版されなかった。神津朝夫『茶の湯の歴史』角川選書 455（東京：角川書店、2009年）、p.264. 参照。
- <sup>5</sup> 中村静子『元伯宗旦の研究』（京都：思文閣出版、2014年）、p.75.
- <sup>6</sup> 筒井紘一『茶書の研究 数寄風流の成立と展開』（京都：淡交社、2003年）、pp.131-132.
- <sup>7</sup> 月刊「淡交タイムス」（京都：淡交社、2014年9月号）、p.3.

#### 6-2-2 数寄の起こりと非言語

茶の湯における非言語の重要性は、茶の湯と極めてなじみの深い「数寄」という言葉の誕生の頃から既に表れている。「お数寄者」、「数寄屋袋」等、現在でも茶の湯の領域ではよく用いられる用語であるが、遡ると長い歴史を持っている。

前にも名を挙げたポルトガル人イエズス会宣教師、ジョアン・ロドリゲスが「数寄」について述べている。ロドリゲスは、「数寄」という言葉は、動詞の「好く」に由来しており、

「ほしがる、愛着を持つ、また、気に入ったものに心を寄せるという意味である！」と記し、この用語の起源を知ることができる。そして結局「数寄」はこの時代の茶の湯を指すのだと説明している。「...特に都 Miyaco や堺 Sacay では、この道に丹精をこめて、その修練に専心した人が多くおり、...あまり重要でないことをいくつか取り除き、また、彼らの考える目的にかなって、都合がよいと思われたことを新しくつけ加えることで、東山殿 Figaxiyamadono の古い形式を部分的に改めて、この茶の湯の様式をますます完成してゆき、その結果、現在流行している数寄 *suky* と呼ばれる別の形式を作り上げた。そしてそれを本職とする人を数寄者 *sukixa*、茶 *châ* に招かれる家を数寄屋、それに用いられる道具を数寄道具 *sukidôgu* と呼ぶ<sup>2</sup>。」東山殿の古い形式から別の形式へ、とは書院台子茶からわび茶への移行であり、数寄は利休に代表されるわび茶を指していることがわかる。

『源流茶話』の中に、ある書物では「文字の雅ならされは、<sup>スキ</sup>須貴と改むべし<sup>3</sup>」と言っているとある。『源流茶話』は藪内家第5代宗匠、藪内紹智（1678-1745）が著し、紹智はロドリゲス（1561-1633）より110年余、後の時代の人物である。安土桃山時代の後、江戸時代に入っても、「数寄」の用語にこのようにこだわりを持っていたことがわかる。

さらに数寄について、村井康彦氏の説明を見てみる。氏は数寄の寄を奇と記しているが、ロドリゲスと同様に、この用語が「好く」ことから起こっていることをまず述べている。「数奇とは好くこと、すなわち対象に執着し心を尽くすことであった<sup>4</sup>。」そして関心が唐物に向けられれば「唐物数奇」であり、数寄はまずこの唐物数奇に始まり、盛んになり、その後わび数奇が芽生え、「豪勢な道具はなくともよしとする見方が現れてきたのである<sup>5</sup>。」と述べている。唐物数寄からわび数寄への変容が語られている。ロドリゲスも、東山殿の古い形式から数寄という新しい形式へ移行してきたことを述べており、前者を「本数寄」または「真の数寄」と呼び、これは村井氏の「唐物数奇」に当たることになる。後者、すなわち新しい形式を、ロドリゲスも同様に「侘数寄」と呼んでいる<sup>6</sup>。

足利義政が行っていた書院台子茶に代わるわび茶というもの、礼法ではない、菓でもない、遊びでもない新しい茶の湯が、千利休の時代——もちろん珠光・紹鷗の流れが背後にある——に京都と共に、利休の出身地である堺において発展したことを、「数寄」の起源と併せて読み取ることができる。

再びロドリゲスの説明に立ち返ると、興味深いことが記されていることに気づく。「茶の湯 *chanoyu* を本職としていた人は、新しく何かを改めたり、付け加えたりした時には、他のものごとにおけると同様に、その事柄自体で理解されるようにして、その変更や追加を行なった理由を言葉では示さなかった。それは、この芸道に堪能な人々は、ある事柄を一定の意図によって行うのに、その理由や原因を言葉では表現しないで、人の行なうのを見ることによって、学ぶ者自身でその理由を悟るようになるように、すべてを弟子たちの施策と論議に委ねて、ただ実践によって示すのが、この芸道の職務だからである<sup>7</sup>。」

言葉を使わない、すなわち非言語への言及がある。口に出して説明するのではなく、所作を見て学び、考えるのであり、書き留めるといふこともしない。正に非言語である。非言語が言語を上回る。前述の「宗旦道歌」に通じるものがある。また「ただ実践によって

示す」という表現は、茶の湯が頭の中、すなわち思索で終わるものではなく、正に行動の芸術、実践の文化であるという、茶の湯の神髄を衝いている。茶の湯を意味する「数寄」が、この用語の誕生期に既に非言語の観念を含んでいたという事実に着目したい。

ロドリゲスは茶事についても鋭い観察を行っており、そこにも非言語への言及を見ることが出来る。茶事において茶室へ席入りをした客について、次のように述べている。「そこに家の主人はいなくて、一同の者のほかには、いくつかの茶 *chá* の道具があるだけである。皆はまったく口をきかないで、そこにあるものを直ちに観照しはじめろ<sup>8</sup>。」亭主は客への歓待の気持ち、その日の茶席のテーマや季節感を表すような道具を使う。道具という非言語要素を通して、これらのことを客に伝えようとするのである。非言語コミュニケーションである。客の側も全く口を利かない。亭主の意図を酌み取る、受け入れ側の非言語コミュニケーションである。無言であることにより、眼前の道具の鑑賞に集中できる。亭主が無言のまま物に意図を託したのと同様に、客もまた無言のまま亭主の意図を受け入れる。思ったことを言葉にしたがる前述の西欧のあり方とは異なる。話すことを重んじない日本文化が、茶の湯を通して映し出されている。

懐石については次の記述がある。「客人たちは、何か必要なことを小声で話し合う以外は、まったく話をすることなく、まことに静かにしている。時折、家の主人が出て来て、汁 *xiro* がもっと必要かどうかを見て、[必要ならば] 取りに行く<sup>9</sup>。」今日の懐石料理の場では美味しい、きれいだ等と話もするが、当時は無言で食していたのだ。無言をよしとする、話すことを重んじない日本文化が、ここでも懐石すなわち茶席の一環を通して浮かび上がってくる。

わび数寄誕生の頃の無言について述べている外国人は、ロドリゲスばかりではない。前章でも名を挙げた、ポルトガル人宣教師のルイス・デ・アルメイダも次のように記している。「給仕秩序清潔及び道具にして、饗應をなすに當り日本に於けるより清潔にして整ひたるものとする能はずと思考す、假令千人食事をなすも給仕は一語も發することなく、秩序整然たるは驚くべきことなり<sup>10</sup>。」利休の時代に西欧人が茶室を、またそこでの集いを目の当たりにして驚嘆している様子が興味深い。清潔さ、整然さ、凜とした雰囲気に対する驚きもさることながら、ここに「一語も發することなく」とあり、給仕が茶室で話をしないということにも驚いている。

給仕が説明をする訳ではない。言葉なくして食事、すなわち食べ物という非言語要素に託されている亭主の趣向を客が酌み取る。具体的な行為として、客はご馳走を見て味わって楽しむ。亭主からのメッセージを受信するのである。確かに非言語コミュニケーションになっている。ここでの給仕の無言は何かを伝えること、すなわちコミュニケーションそのものではない。しかし食事を通して亭主の歓待の意、季節感や茶席のテーマを客が受け入れる非言語コミュニケーションが、給仕の言葉がないことにより、すなわち無言であることによって円滑に行われる訳であるから、無言がコミュニケーションに大きく関与していることになる。またアルメイダのこの驚愕の裏には、自分たちポルトガル人、敷衍すれば西欧人ならば、このような場面では話をするのに日本人はしない、といった文化の違いがあると解釈できよう。



さらに筆者が、ロドリゲスやアルメイダによるこうした記述から、非言語コミュニケーションに加えて興味を抱いたことは、喫茶の風習も植物としての茶も、もともと日本で始まった訳ではなく中国、すなわち外国から入ってきたものであったのと同様に、「数寄」という茶の湯史上極めて重要な用語が、日本人ではなくポルトガル人、すなわち外国人の視点によって明らかにされているという事実、また茶席のあり方が外国人によって冷静に描写されているという事実である。日本伝統文化とは言いながら、そこに働いている外国の力は大きい。他国からの影響、外国人の貢献、それらを抜きに茶の湯を語ることはできないであろう。

もちろん、茶席の無言に関しては、外国人ばかりではなく日本人による記述もある。山上宗二は客人の注意すべき振る舞いとして、次のように述べている。

一客人<sup>(振)</sup>フリ事、

…常ノ茶湯ナリトモ、路地へ入ヨリ出ルマテ、一期ニ一度ノ會ノヤウニ、亭主ヲ可敬畏、世間雑談無用也、夢菴狂譎

我佛隣ノ寶婿舅天下ノ軍人ノ善惡

此歌ニテ可心得、茶湯事、數奇ニ入タル事可語、

一茶ノ建<sup>(てまえ)</sup>前ハ無言<sup>11</sup>

茶席での無言については、西洋・東洋、両方の視点から着目されていることがわかる。平常の茶会であっても路地入りから退席まで、一生に1度限りのことであり、もう2度とない茶会なのだという思いで亭主を畏れ敬い、夢庵の狂歌にあるような世間の雑談は無用、茶席に関する数寄の話をするのはよいが、茶が点つまでは無言でいなければならないと論じている。茶を点てるまでの所作の一つ一つを通して、あなたに美味しい茶をもてなしますという亭主の思い、すなわち非言語メッセージを客は受け入れることが望ましい。無言であるが故に、客にとっては所作の鑑賞に集中できる。また無言であるが故に、亭主にとっては集中を妨げられることがない。すなわち無言であることが、コミュニケーションの成立に大きく関与している<sup>12</sup>。筆者は日本語の特徴の一つとして省略が多いことを指摘した。「無言」はこの「省略」に通じるものであると解されよう。

#### 【注】

<sup>1</sup> ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）、p.602.

<sup>2</sup> 同上、pp.601-602.

<sup>3</sup> 『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収、（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.405. ルビは本書にある。

<sup>4</sup> 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977年日本放送協会より刊行）、p.43.

<sup>5</sup>同上、p.43.

<sup>6</sup>ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、p.611. 及びp.632. に2種類の「数寄」の説明がある。村井氏は「佗」、ロドリゲスの翻訳は「佗」の表記を用いている。筆者は仮名表記とする。

<sup>7</sup>同上、p.602. 下線は筆者による。

<sup>8</sup>同上、p.627. 下線は筆者による。

<sup>9</sup>同上、p.629. 下線は筆者による。

<sup>10</sup>『耶蘇会士日本通信』上巻、村上直次郎 訳、渡辺世祐 注、東京：雄松堂書店、1927 年初版、1966 年改訂復刻版、p.141. 下線は筆者による。

<sup>11</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収、(京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定)、p.93. 括弧は本書にある。下線は筆者による。

<sup>12</sup>アメリカのコミュニケーション学者、マジョリー・F・ヴォーガスは非言語コミュニケーションの要素として、次の9項目を挙げており、「沈黙」が要素の一つとなっている。

1. 人体 (コミュニケーション当事者の遺伝因子に関わるもろもろの身体的特徴の中で、なんらかのメッセージを表わすもの。たとえば性別、年齢、体格、皮膚の色など)

2. 動作 (人体の姿勢や動きで表現されるもの)

3. 目 (「視線の交差」と目つき)

4. 周辺言語 (話しことばに付随する音声上の性状と特徴)

5. 沈黙

6. 身体接触 (相手の身体に接触すること、またはその代替行為による表現)

7. 対人的空間 (コミュニケーションのために人間が利用する空間)

8. 時間 (文化的形態と生理学の二つの次元での時間)

9. 色彩

マジョリー・F・ヴォーガス『非言語コミュニケーション』石丸正 訳 (東京：新潮社、1987年)、p.16. 参照。ルビは本書にある。下線は筆者による。

また竹内一郎氏は次のような7項目による分類法を行っており、やはり「沈黙」が要素の一つとなっている。

1. 外見 (体型、格好、容姿、体毛、肌の色、衣服、アクセサリなど)

2. 動き (姿勢、仕草、立ち居振る舞い、癖など)

3. 表情 (顔の向き、目の動き、アイ・コンタクトなど)

4. 声 (高さ、大きさ、速度、抑揚、間、なまり、沈黙など)

5. 空間 (相手との距離、居心地、アウェイとホームなど)

6. 接触 (撫でる、なめる、手をつなぐ、キスする、愛撫するなど)

7. 色と匂い (信号、保護色、体臭、口臭、生活臭など)

竹内一郎『やっぱり見た目が9割』(東京：新潮社、2013年7月20日発行、2013年7

月 21 日 2 刷)、pp.104-105. 下線は筆者による。

茶の湯においては「沈黙」よりも「無言」の方が適切な用語であると思われる。前述の『山上宗二記』を始め茶の湯関係の文献ではこの語が多く用いられており、筆者も本論文では「無言」を使用するものとする。無言が何かを伝える、すなわちコミュニケーションそのものではないが、コミュニケーションの成立に大きく関与していることを筆者は本論で述べている。

### 6-3 五感に着目して

#### 6-3-1 茶席一般の五感

コミュニケーションに深く関わる、五感について考える。文化現象は大きく分けると、五感で捉えられる文化と捉えられない文化の 2 種類があり、茶の湯にもこの両方が働いている。五感については、点前所作や、道具も含めて茶席の様々な趣向を見る楽しみは、もちろん視覚に関わる。茶室自体がまた芸術品である。

茶筌を振る音・茶杓の茶を払う音・柄杓で水や湯を注ぐ音、静まりかえった茶席のこうした微かな音を聞く楽しみ、茶室の外から聞こえてくる虫の声・鳥のさえずり・風の音等、自然界の音もまた風情があり、これらは聴覚に関わる。釜の蓋を切る音・茶筌通しの音・茶碗に茶杓のあたる音の三つは、特に茶席の「三音」と呼ばれている<sup>1</sup>。湯の沸き具合によって「釜の六音」という表現もある。温度の高い順に、魚眼・蚯音・岸波・遠浪・松風・無音、または魚眼・蟹眼・雀舌・小涛・大涛・無声のそれぞれ 6 種類であり<sup>2</sup>、「松風」がよく使われる用語で、この音がする湯の沸き具合が、茶には最も適切だと言われる。釜の湯だけを取っても、様々な音があることがわかる。教育者・茶道研究家、奥田正造は、松風について述べている。「響の背景として、終始一貫するものは釜の湯の煮える音である。通常之を松風というている。この松風は楽音と違い、旋律の影響を受けていないので、静寂の興趣を一層深らしめ、落ち着いて聞いていると、心を大森林の奥、大幽谷の底までも持って行って仕舞うような心地がする<sup>3</sup>。」回りが静かであるが故に、湯の沸く微かな音が一層生きるのであり、一層趣を添える。釜が客を迎えているのである。幕末の江戸幕府にて大老を務め、すぐれた茶人としても知られる井伊直弼も、茶会での亭主と客の心得を記した『茶湯一会集』の中で、「釜ハ一室の主人公に比し<sup>4</sup>」と述べている。釜は茶席においてそれほどまでも大きい存在であり、亭主が茶室にいない間は亭主に代わってそこにある、いると言っても過言ではない。

釜から湯の沸く音の他にも茶の湯での音について、次のような記述がある。「お茶には種々の響きがある。来着の旨を報ずる板の音<sup>ほん</sup>は、客が主人の心にひびかす第一の響である。

之を聞いた主人が出迎うる<sup>あた</sup>に方って、手水鉢の水を改めんとて、さっとうつす水の音は馳

走の最初の響である。露地の飛石を渡れば下駄の響がする<sup>5</sup>。」聴覚だけを追って行っても様々で、それら種々の音によって茶席には多々おもしろさが醸し出されることがわかる。

焚かれる香や炭の香り、料理・茶の香りは嗅覚であり、懐石料理・菓子・濃茶・薄茶の味わいは味覚である。

道具に触れる楽しみもあり、触覚が関わってくる。触り過ぎてはいけませんが、棗の漆塗りに触れ、茶碗・茶入れの肌に触れることはまた、何とも言えない和みと癒しの感を与えてくれる。亭主が濃茶を練る際に関わるのも触覚と言ってよい。堅過ぎることもなく、またゆる過ぎることもなく、茶の粒が残らないように、練り具合はどうだろうか、お客様に美味しいお茶をと亭主は非常に気を遣う訳だが、この練り具合は茶筌から伝わる感触で判断される。もちろん、目で見ての濃茶の具合すなわち視覚、茶碗から立ち上る香りすなわち嗅覚も関係するが、1番の決め手となるのは茶の練り具合から手に伝わる触覚であろう。直接茶や湯に触っている訳ではないが、間接的に触覚の所作だと言える。濃茶を練る時には、「『手応え』とか『茶の匂い』という非言語的な要素に頼る<sup>6</sup>。」という指摘もある。

以上、茶の湯での視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の順に述べてきたが、このように五感のすべてを快く刺激するのが茶の湯の世界であり、醍醐味である。これら五感の背後にあるものは、各趣向を伝えたいという亭主の思いである。そして見てきた通り、五感の各体験はいずれも非言語要素を通して行われ、これらが客に理解されて初めて、茶の湯のコミュニケーションが成立するのである。

#### 【注】

<sup>1</sup> 井口海仙 編『茶道用語集』（京都：淡交社、1962年初版、1991年第19版）、p.99.

<sup>2</sup> 同上、p.60. ルビは筆者による。

<sup>3</sup> 奥田正造『茶味』（京都：方丈堂出版、1920年初版、2002年第2版）、p.25.

<sup>4</sup> 『茶湯一会集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.355.

<sup>5</sup> 奥田正造『茶味』、p.23. ルビは奥田氏による。

<sup>6</sup> 岡本浩一『心理学者の茶道発見』（京都：淡交社、1999年）、pp.72-73.

#### 6-3-2 季節に沿っての五感

次に季節を追って茶の湯と五感、ひいては非言語との関わりを見てみる。まず11月から4月までの間は炉を切り、寒い季節であるが故に暖かさを醸し出す。炉の重要さについては「部屋に炉の切られているか否かが、書院茶と草庵茶との段階差を示す決定的な指標であった<sup>1</sup>。」と言うことができ、炉はわびの雰囲気醸し出すのに大きく貢献している。『長闇堂記』には次のような記述がある。「宗易ハ秀吉公の御師にして、しかもその才知、世にすくれたる人なれハ...昔の圍爐裡八寸六寸を四寸になをし、ふち壹寸壹分、土段壹寸壹分、土段の内九寸六分にして、釜は九寸の谷と定められし<sup>2</sup>」と、細かい寸法も利休が定めた

と述べている。灰・炭が仕組まれて赤々と火が起こり、釜から湯気が立ち上るのを見ると、屋外の寒さも忘れ、暖かさに包まれた気持ちになる。炭が起こるパチパチという音を聞くことも、暖かさを感じることに繋がる。また事実火を起こすので暖かくなり、五感ではないが、温度感覚を刺激することになる。視覚・聴覚・温度感覚、いずれも非言語要素である。客に暖かさをという亭主の意図が背後に働いていることがわかる。

この温度感覚についてであるが、文学研究家デュフォードとロットが、人間の感覚と詩学について述べている<sup>3</sup>。肉体の持つ7種類の感覚がそれぞれイメージを作り上げ、詩作と関わっていると説き、その7種類の感覚とは視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・筋運動感覚・温度感覚である。五感をさらに細分化し、「七感」としているという見方もできる。この中に温度感覚が含まれているが、茶における温度・気温は極めて大切なことである。湯の温度は直接、茶の美味しさを左右する。また気温、と言うより室温と言うべきだが、茶室の温度は客の心地よさに大きく関わる。四季それぞれに茶室の温度は違い、日によってももちろん違い、同じ日であっても朝・昼・夕・夜、いつ茶会や茶事を行うかによって異なってくる。亭主は客になるべく心地よく過ごしてもらおうと配慮する。また実際の暖かさ・涼しさのみならず、心に感じる温かさ・涼しさの演出が、茶には多々働いている。

炉に関して述べれば、11月に風炉から炉に変わる、開炉すなわち炉開きの時期となる。炉開きの茶席では三つの「べ」が用いられることが望ましいとされる。織部、伊部、ふくべの三つである。この3点を亭主は趣向する。例えば織部の茶碗を使い、伊部すなわち古備前焼の水指を据え、ふくべ、すなわち瓢箪の蒔絵がほどこされている棗を使用する等、工夫を凝らす。工夫と準備には苦勞が伴うが、またこうした茶席を創造する喜びもある。客は楽しみながら三つを探し、鑑賞する喜びがある。宝探しのようなものであり、五感の中の当然、視覚に関わってくる。三つを探し出し、主客共に喜びを分かち合えれば、亭主の意図が客に伝わったことになり、コミュニケーションが立派に成立したことになる。道具等に隠された3要素は物であるから非言語である。言語よりも非言語が重要である。炉開きは季節の変わり目となる大きい行事であり、炉開き自体がテーマで、そのテーマを活かす演出の一端が三つの「べ」である。亭主は三つを考案して用意し、客はそれに気づくべく亭主の意図を受け入れ、三つの「べ」の楽しみに与るのである。

特に寒い2月には、大炉というひととき大きい炉を使う。通常の大炉が42.4 cm (1尺4寸)四方であるところ、大炉は54.5 cm四方もあり、裏千家第11代宗匠、玄々斎の考案による<sup>4</sup>。普通より大きい炉を使ったことによって室温が大幅に上がるという訳ではないが、見た目の大きさによって客に暖かさを感じていただくという非言語でのメッセージがある。また灰を通常より多く使うことも目を楽しませるご馳走、すなわち非言語メッセージである。

3月中旬から4月上旬には自在鉤に釣り釜を用いる。釣り釜自体は実は季節は問わない。いつ用いてもよいのだが<sup>5</sup>、春に使用する例が多い。気候自体が暖かくなってくるので、通常の大炉の釜では暑苦しいとの配慮である。鎖の下で揺れる様もまた風情があり、客に春を感じさせる趣向である。炉に据えられた釜が釣り釜に替わったからといって、室温に大きく影響する訳ではない。多少は違うであろうが、大幅な差ではない。大事なことは、通常の大炉の釜を見せて、客に暑苦しい思いをさせないように、という亭主の配慮である。視

覚を通しての非言語メッセージを送っている。それを客が受け入れたならば、コミュニケーションは成立したことになる。

釣り釜の後には透木釜となる<sup>6</sup>。炉縁に透木を置いてその上に釜を懸けるため、火が見えないことになる。釣り釜の時期よりさらに暖かいので、暑苦しい火を客に見せないようにという配慮からの工夫である。通常より釜の位置が下がり、よって五徳は外すという亭主の作業が必要である。短い期間の使用にも拘わらず、客を思う亭主の手間があり、そして気遣いが働いている。火が見えないからといって通常の炉の釜より涼しくなるという訳ではないが、暑苦しい印象を避けようという非言語メッセージである。

そして5月から風炉になる。炉は閉めてしまい、畳の上に風炉が据えられ、初夏を感じさせる。真夏には洗い茶巾の点前がある。茶碗に十分な水を張り、客の前で茶巾から水を滴らせ、茶巾を絞る。滴り落ちる水は目に見える、音が聞こえる、すなわち五感で伝えられる。しかしそこから客が感じる涼しさは、実際に茶室の温度が下がったからではなく、心的に感じる涼しさであり、客に少しでも涼しい印象を与えようという亭主の非言語メッセージである。言葉なくして、しかし何と風情を感じさせることであろう。夏に行く葉蓋の点前も然りである。水指の蓋として植物の葉を使う。梶の葉が正式だとされるが、他の植物でも構わない。塗り蓋や焼き物の蓋という通常の蓋より軽やかであり、洗い茶巾の点前と同様、涼しさを感じていただくという亭主の非言語メッセージである。

10月初旬より開炉までは中置といって風炉釜を点前畳中央に据え、水指を勝手付、すなわち風炉の左の方に置く。火が通常より客に近くなり、逆に水指が客から遠くなる訳である。10月ともなると寒くなってくる故、暖かい火を近くに、冷たい水を遠くにとという配慮が働いている。風呂釜が多少近くに来て水指が少し遠くなったからといって、客がその分暖かくなる訳ではないが、心的に感じる温かさがある。風呂釜と水指の位置が変わったことは目に見える、すなわち五感に関しているが、精神的に感じる温かさは五感に関わってはいない。いずれにせよ言語は何も使われていない。こうした趣向によって心的温かさを伝えようとする非言語コミュニケーションである。

茶の奥義である「利休七則」の1か条として「夏は涼しく冬は暖かに<sup>7</sup>」がある。以上のような茶の湯の四季、季節の移り変わりに沿っての趣向の中に、五感から心へ、外側から内側へという非言語メッセージが数多く働いていることがわかる。亭主は道具や所作という非言語要素を通して、茶席の実際の温度ではなく、客が心に感じる温かさや涼しさを伝えようとする。客に受入れの心映えがあれば、それが伝わる。茶の湯では非言語要素が圧倒的に重要な役割を果たしていることがわかる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 村井康彦『茶の文化史』（東京：岩波書店、1979年初版、1987年第9刷）、p.103.

<sup>2</sup> 『長闇堂記』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.363.

<sup>3</sup> 文学研究家 Sera deFord と Clarinda Harriss Lott は詩学についての著作 *Forms of Verse*. (New York: Appleton-Century-Criftsm 1971)、p.52. にて、肉体の持つ7種類の感覚を挙げている。

原作の語は次の通りである：visual（視覚）、auditory（聴覚）、olfactory（嗅覚）、gustatory（味覚）、tactile（触覚）、kinesthetic（筋運動感覚）、thermal（温度感覚）。

<sup>4</sup>井口海仙 編『茶道用語集』（京都、淡交社、2000年初版、2004年第5版）、p.130.

<sup>5</sup>同上、p.153.

<sup>6</sup>これは裏千家での順序であるが、表千家では逆で、透木釜の後に釣り釜を用いる。

<sup>7</sup>千宗室・千玄室 監修『裏千家茶道』（京都：財団法人今日庵、2004年第1刷、2008年第3刷）、p.26.

## 6-4 茶事の流れに沿って

### 6-4-1 席入り

茶事としては1番正式な「正午の茶事」という例を通して、言語・非言語がどのように使われているかを見てみる<sup>1</sup>。

茶事に招かれた客は、茶事の場に着くと案内を請うこともなく待合に入る。ここがまず変わっている。この場では亭主は客を迎えないのだ。「茶の湯では、客が到着しても、決して亭主は姿を見せないいきまりになっている<sup>2</sup>。」のであり、既に非言語行為である。通常の生活では客は「ごめんください。」と言うであろうし、家人は玄関に出て「いらっしやいませ。」等と言葉を発する。すなわち言語を以て挨拶することから始まるが、茶の湯では全く違う。客が茶事の場に到着した時ではなく、迎え付けという場面で、亭主と客は初めて顔を合わせるのである。

客が揃うと、揃ったことを亭主に伝える。これは言葉を通じて、すなわち言語コミュニケーションということになるが、もしも板木という音を鳴らす木が吊してあれば、それを人数分だけ打ち、このことが客の集合を伝える。板木を使うならば、非言語を通してのコミュニケーションということになる。亭主は客が揃った知らせを受けて、半東が水屋から白湯か香煎等を運んでもてなす。客は喉が潤され、一息つくことになる。わざわざいらしてくださった客への亭主の思い入れである。ささやかながら、これももてなしである。

客はこの後露地へ出て、腰掛待合で待つ。亭主は席中を掃き清め、香を焚き、躡り口から降りて蹲踞を清め、自分の手と口も清める。蹲踞の水を柄杓でかける音、手桶の水を蹲踞に勢いよく入れる音、このような清々しい音や、また水そのものによって、清潔感が伝えられる。水の音は聴覚に訴えるが言葉ではないので、非言語コミュニケーションである。蹲踞や庭は既に掃除してあるのだが、また客の前で改めて清めることによって、さらなる思い入れを表す意を伝える。これが済むと、亭主は枝折戸を開けて腰掛待合に進み、迎え付けをする。ここで亭主と客は初めて顔を合わせることになる。言葉はない。この無言の迎え付けについては、後述する。

亭主は躡り口から茶室に入り、客も蹲踞での清めの後、順次茶室に入る。まず床の間の軸の拝見がある。時候や茶席のテーマを亭主は客に伝えるべく、それに合った軸を選んで

描ける。文字で書かれているので、言語コミュニケーションである。客が茶事の場に到着してからここまでの間で、言語コミュニケーション要素はこの軸くらいのものである。非言語要素が遥かに多く働いている。軸拝見の後、客は点前座に進んで釜や風炉・炉等を拝見する。先に挙げたロドリゲスの解説において、「皆はまったく口をきかないで、そこにあるものを直ちに観照しはじめる<sup>3</sup>。」と述べられていた場面である。道具という非言語要素を通して亭主の趣向が客に伝えられるコミュニケーションである。

この茶室のしつらえ自体に、亭主の力量が大きく表れる。「どの室内を見てもそこに住む人間の非言語の腕前がうかがわれる<sup>4</sup>。」という指摘があり、筆者も大いに同意する。茶室の場合は亭主が「そこに住む」訳ではないが、亭主が全面的にしつらえを行うのであるから、亭主の創造する世界と言ってよいであろう。しかも非言語の世界である。その部屋に使われている素材の選択、空間の分け方、置かれる物体すなわち茶道具、これらすべてが亭主に代わって多くを語ることになる<sup>5</sup>。非言語要素を以て、亭主の歓待の意、茶席のテーマ、季節感を客に伝えるのである。的確に伝わるか、コミュニケーションが成立するか、亭主は大いに心を砕く。

#### 【注】

<sup>1</sup>以下正午の茶事の流れについては、千宗室『茶事 上』裏千家茶道教科 12（京都：

淡交社、1977年初版、1980年第4版）、「正午の茶事 風炉」pp.14-117. に基づく。

<sup>2</sup>田中仙翁『茶道の美学』（東京：講談社、1996年）、p.190.

<sup>3</sup>ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）、p.627.

<sup>4</sup>マーク・ナップ『人間関係における非言語情報伝達』牧野成一・牧野泰子 訳（東京：東海大学出版会、1979年）、p.27. この箇所は Jurgen Ruesch and Weldon Kees, *Nonverbal Communication – Notes on the Visual Perception of Human Relations*. (Berkley and Los Angeles: University of California Press. 1956), p.135. からの引用である。

<sup>5</sup>同上、*Nonverbal Communication – Notes on the Visual Perception of Human Relations*, p135. 参照。  
“The choice of materials, the distribution of space, the kind of objects...”（素材の選択、空間の分け方（配置）、物体の種類...）（筆者訳）、これらが持ち主の感覚的・知覚的様相について多くを語ると述べている。

#### 6-4-2 懐石

懐石が始まる。味覚・嗅覚という非言語の五感を通して、客は美味しい料理で楽しいひと時をとという亭主の意を酌み取りながら、食事を楽しむ。また食べ物に直接手で触れる訳ではないが、口に含んだ時、歯で噛んだ時のいわゆる食感や口中の触覚に属する。盛り付けという見た目の美しさもあり、視覚も関わってくる。味覚・嗅覚・触覚・視覚という非



言語要素を通して、懐石を楽しむことになる。ロドリゲス、すなわち安土桃山時代の記述では、「客人たちは、何か必要なことを小声で話し合う以外は、まったく話をする事なく、まことに静かにしている<sup>1)</sup>。」とあったが、現在の茶事においては、客同士は料理の感想や感動を述べる等、会話がなされている。言語コミュニケーションとなっている。

客同士の会話はあるが、一方亭主は同席しないのが通常のあり方であり、料理を通して、楽しいひと時をお過ごしくださいという意を客に伝える。また料理のもてなし方自体で意味を伝えている部分がある。例えば飯碗の一等初めは一文字の形に、たった一口か二口分の飯が盛られているだけであるが、これはまだ飯が炊き上がったばかりで十分な食べ頃ではない、よってほんの一口どうぞという亭主の遠慮の気持ちを伝えている。言葉では言わないが、飯の盛り付け方という非言語を通して、主と客とはコミュニケーションを図っているのである。また懐石の間、襖を少し開けておく。亭主は通常、客とは同席しないと述べたが、食事中に客に何か困ったことがあった場合、亭主がすぐに察知し、対処するためである。「何かあったらおっしゃってください。」などと口に出しては言わない。非言語コミュニケーションが働いている。襖を開けておくという行為によって「何かあったら遠慮なくお知らせください。」という非言語メッセージを送っているのである。

受入れの心が深い客であれば、懐石を食しながら、この料理を考え、そして作るのに亭主がどれほど苦勞をしたかに思いを馳せる。その茶席のテーマや季節感に沿って献立を考え、食材を揃え、実際に料理を作る。何日も前から下味をつけておく、下準備をしておくということもある。そして熱い物はなるべく熱く、冷たい物はなるべく冷たくお出しするという気遣いを働かせる。食器の選択や取扱いにも亭主は細かく気を遣う。かような亭主の思い入れが客に伝われば、コミュニケーションも立派に成立したことになる。

料理を食べ終わると、客は一斉に箸を膳の中に落とす。それを聞いて亭主は膳を下げに来る。この音は懐石が済んだことを伝えているので、非言語コミュニケーションである。「ごちそうさまでした。」「お料理をいただき終わりました。」と言葉に出しては言わないが、箸の音がコミュニケーションの手段となっている。

### 【注】

- <sup>1)</sup> ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967）、p.629.

### 6-4-3 初炭

炉では逆となるが、風炉ならば懐石の後、初炭が始まる。炭斗・羽箒・鑊・火箸・灰器・灰匙・釜も含め様々な道具が登場するが、これらの道具に亭主が手をやるごとに、客はその道具の作家や素材は何かを尋ねる。言語コミュニケーションである。茶席のテーマや季節を考えてそれぞれの道具を選んでいる訳であるから、客はそうした意を酌み取るべく、

また客の関心と興味も働いて、各道具を問う。

このコミュニケーションではタイミングが重要である。尋ね忘れがないように、亭主が道具を手にしたらすかさず尋ねる。しかし例えば、亭主が神経を集中させて、力を入れて釜を持ち上げている時等に話しかけるのはよくない。気が散ることになる。どのタイミングで尋ねるか、客の気遣いが問われる。コミュニケーションが効果的に成立するか否かがかかってくる。炉ならば炉中拝見となる。客は炉のそばに寄る。茶室の中で、客が亭主にこれほど接近する場面は他にないと思われる。灰を撒き炭を注いだその姿、そして黒い炭に赤い火が映える景色の美しさは感動的であり、五感の中の視覚に訴える。炉のそばに行くと暖かくなるので、五感ではないが温度感覚にも心地よく訴えることになる。客は亭主のすぐ近くで、こうした視覚への、温度感覚への、亭主からのご馳走に与る訳である。接近しているが故に親近感が生まれ、主客の共生の意識、心的近さも醸し出されよう。最後に香合の拝見があり、その後問答があり、言語コミュニケーションである。亭主は季節またはテーマに合った香合と香を選んでおり、それは何かを客に言葉で伝える。しかし焚かれた香が次第に薫ってきて、客を心地よく刺激するのは五感の中の嗅覚を通してであり、言葉ではない。よって非言語コミュニケーションとなる。

次に主菓子がもてなされる。この菓子にも季節感あるいは茶席のテーマが表れ、こうした亭主の意図を伝えようとする。物を通しての非言語コミュニケーションである。客は視覚と味覚という非言語要素を通して菓子を楽しみ、亭主の意図を受け入れる。

#### 6-4-4 中立ち

主菓子をいただくと、客は茶室から出る。庭に出ると腰掛待合で待つ。その間に亭主は茶席を清め、床を替える。軸を外して花を活け、汚れがあれば掃除をし、清潔感を以てまた新たなしつらえで、客をもてなす。同じ茶室が2度楽しめることになる。茶席が整い、用を足しに行ったかもしれない客の頃合いを見て、亭主は銅鑼を鳴らす。「どうぞお入りください。」「茶室が整いました。」等と言葉では言わないが、この音すなわち非言語要素を通して後座の始まりを告げている。客は聴覚を通して亭主のメッセージを受信する。非言語コミュニケーションである。

#### 6-4-5 濃茶

##### 6-4-5-1 濃茶席の流れ

濃茶席が始まる。茶事全体で1番重きが置かれる部分である。1番改まった場でもあるため、濃茶席では話をしないのがよしとされている。中立ち前の初座では床の軸には字が書かれているので言語コミュニケーションだが、この後座では花に替わる。花は季節を伝

える。また屋内でありながら、外の自然界がここにあることをも伝えている。亭主のこうした趣向が花という非言語コミュニケーション要素を通して、客に伝えられることになる。

点前が始まるとすぐに亭主は蓋置に柄杓を引き、竹の柄杓の合と同じく竹作りの蓋置に当てられ、凜とした音を立てる。次いで柄杓の柄の端、すなわち切留が畳につき、ほのかな音がする。これを合図に総礼となる。言葉は交わさないが、客と亭主がここで心を一つに合わせる。これから一緒に濃茶席を始めましょうという思いが、柄杓の柄が畳に当たる音という非言語合図により、そしてお辞儀というこれも非言語所作によって、主客間に交わされる。非言語コミュニケーションである。棚を据えた際は、家元の花押がない限り竹の蓋置は使わないのがよしとされる。竹に代わって焼き物や金属製の蓋置が使用される。よって柄杓の合と蓋置が音を立てるということはなくなるが、柄の切留が畳に当たる音が非言語要素による合図となることに変わりはない。

亭主は茶入れと茶杓を清める。もちろん、これらの器物は皆水屋できれいにされているのだが、客の前で改めて清める。完璧に清潔な道具でおもてなしをしますという客への敬意が、こうした所作すなわち非言語要素によって伝えられる。茶筌通しは清めの所作のクライマックスとも言える。よって茶筌清めではなくて、これだけは「茶筌通し」という特別の名称が与えられている。茶碗の中の湯で単に清めるのではなく、客の前でわざわざ茶筌を2度持ち上げる。この所作すなわち非言語要素には、清潔であることに加えて、穂先が整っていること、折れていないことを示すべく、完璧な器物であなたにご馳走しますという亭主の意図を表す、非言語コミュニケーションである。

茶碗そして茶筌とすべて清めた後で、亭主は精魂込めて濃茶を練る。茶席のハイライトシーンである。この一碗のために、亭主は前々から趣向を凝らし、実に多くの様々な準備の下に茶席のしつらえを行ってきた。すべてがこの一碗のためなのである。この瞬間はもう2度とないという一期一会の思いで、一心不乱に濃茶を練る。茶席全体を通じての、最大のもてなしの意の表れが濃茶なのである。

客の側は上記のような、亭主の実に様々な配慮と苦労を思いながら、それらすべてが凝縮された形での濃茶をまず香りで楽しみ、舌触りを含めて味を楽しむ。茶の香りは嗅覚、味はもちろん味覚、濃茶のなめらかな舌触りは口中での触覚に訴える。これら五感の機能を通し、すなわち非言語コミュニケーション要素を通して、濃茶を楽しんでくださいという亭主の思いを客は酌み取る。自分のためにこの一碗を練ってくれたのだと味わい、感謝の気持ちを以て、主客間のコミュニケーションが図られることになる。

亭主が茶を練り客がそれを喫するというプロセスには、言語は全く関与していない。しかしその後は言語と非言語の両方のコミュニケーションが見られる。正客が一口喫すると、亭主は「お服加減いかがですか。」、または「不加減で失礼いたしました。」と述べる。言語コミュニケーションである。客同士のコミュニケーションも行われる。出された茶碗を正客は縁内に取り込み、客は全員礼をする。これから皆さんで一緒に濃茶を味わいましょう、楽しみましょうという、客の心が一つになることを表す非言語コミュニケーションである。正客はこの非言語である総礼の後に茶を喫するが、次客以下は次の客に「お先に。」と挨拶する。ここでは言語が使われている。喫し終わった客は次の客に茶碗を渡すが、渡

した客は送り礼、受け取った客はいただき礼をする。これは同時になされるのが望ましく、タイミングの合ったお辞儀という非言語要素によって、それぞれ「ごちそうさまでした。」「これからいただきます。」という意を伝え合うので、非言語コミュニケーションと言える。

茶問答がなされ、正客は茶銘とその話、すなわち茶を製法した茶屋を尋ねる。前席で食した菓子についても尋ねる。主客間の言語コミュニケーションである。茶碗問答も然りである。この茶碗でぜひご馳走して差し上げたいという亭主の思い、またそれに与り感謝する客の気持ちの伝え合いというコミュニケーションがある。

亭主は客に請われなくても自分の方から「お仕舞いにさせていただきます。」と述べ、仕舞いにかかる。そして器物の拝見がかかると、茶入れを客の前で清める。茶点の際に茶入れの口は拭いてあるのだが、袱紗で茶入れを清め、その口も改めて拭く所作には、清潔さを重んじ、客にきれいな器物をご覧いただくという意を伝える非言語コミュニケーションである。亭主が他の道具を水屋に下げ、客は順次拝見する。これらの道具で是非お客様をおもてなししたいという亭主の意図が込められた品々である。そして、かような意を以て誠心誠意、点前を務めたのである。器物を通して意図を伝える非言語コミュニケーションである。客はそうした亭主の思い入れを感じ取りながら、器物を鑑賞する。感じ取れば、コミュニケーションは成立したことになる。

正客と末客は道具を出合いで返す。この二人が前に出る際、別に「それでは。」「お返ししましょう。」等と声を掛け合う訳ではなく、全く非言語の中で、しかしながらタイミングよく同時に躡って前に進む。非言語所作である「目配せ」をする訳でもない。道具を介して「今、この時」を伝え合う非言語コミュニケーションが、客の間で働いているのである。いわゆる「阿吽」の意気である。筆者が以前に外国人に茶席のデモンストレーションを行った際、この「出合い」の瞬間に多数の外国人が写真を撮っていた。物言わず、合図なくして、しかし同時にさっと前に出てくる所作に関心を持ったのではないか。非言語コミュニケーションが興味深かったのかと思われる。

亭主が再び茶席に現れ道具問答が始まる。茶入れの形と窯元、茶杓の作者と銘、仕覆の裂地と仕立てを客が尋ね、亭主が答える。言語コミュニケーションである。ここで初めて客は以上の情報を得る訳だが、席中では目にし、拝見の際に触れ、すなわち視覚と触覚という非言語要素を通じて鑑賞し、亭主はこれらの器物を通して歓待の意、茶席のテーマや季節感を伝えるという非言語コミュニケーションを行っていたのである。

茶入れ・茶杓・茶碗には銘のついている品、しかもその銘が家元や高僧より拝受した等となるとなさらることだが、そうした品を用いると、茶会・茶事も正式さ・格付けを増すことになる。しかしながら、その道具自体を拝見した限りでは、銘が何かわからないことも多い。そのために道具問答があり、ここでは言語を通じて銘が紹介されることになる訳である。拝見している段階では、道具は物なので非言語であるが、問答において言語化され、客に伝わる。非言語から言語コミュニケーションへの移行となる。

茶事ではなく大寄の茶会ならば、道具の箱書きが展示されており、客は席入り前にこれを見る。道具の銘や、銘をつけた家元の花押が紹介される。言語化されている。茶席に入り実際に道具を見たり触れたり、その道具によってもてなされた茶を喫し、すなわち物を

経験する訳であるから非言語の分野となる。道具問答とは逆に、言語から非言語へのコミュニケーションの移行となる。しかし銘が何かを知ること重要だが、見たり触ったりして、素晴らしい道具だと感動し、これに巡り会えて幸せだと感謝することは、より重要である。客の気づき・受入れの心映えが問われる。亭主が心を込めて点てた茶を喫して美味しいと感動し、ここに来てこれを賞味できた自分は幸せだと感謝したなら、非言語コミュニケーションが成立したことになる。

#### 6-4-5-2 客の距離感とコミュニケーション

茶事全体の中で最高の位置を占める濃茶について、コミュニケーションの観点からさらに述べる。以前は一人ずつ一碗で喫していたが、利休の時代より、同じ一碗を皆で賞味する濃茶が始まったことは画期的であると言える。

茶席の流れ全体を考えた時、人と人とが肉体的に接触する場面は全くない。茶席に限らず、日本人は西欧人に比べるとからだの接触は少ない。挨拶の仕方一つを見ても、アメリカ人は握手する、ラテン・アメリカでは抱擁する国もあり、ニュージーランドの原住民マオリの人々はお互いの鼻をつける等、からだは接触している。それに対して日本人はお辞儀をするのでからだの接触はなく、しかもお辞儀をする分、両者の間には多少距離を置くことになる。「挨拶に握手したり接吻したりする社会と、離れておじぎをし合う社会とでは、自意識の領域が違うだろう。おじぎをする人間は、他人が 50 センチ以内の至近距離に近づくと何となく不安を覚える。デパートや展覧会へ行って来ると、へとへとになるのは、人と近づきすぎた疲れもある<sup>1)</sup>。」という指摘もある。直接の接触はしないで、ある程度距離を置くのが日本人の行動の仕方である。

コミュニケーション学者、シドニー・ジェラードの観察によると、喫茶店における夫婦間の1時間当たりの平均接触回数はプエルトリコのサン・ホアンで180回、フランスのパリで110回である<sup>2)</sup>。日本人夫婦ならどうであろう。1時間喫茶店に一緒にいてもこんなに触るということは、まずないのではないか。夫婦により差はあるだろうが、日本人の場合は何回と言うより皆無ではなかろうか。先にも名を挙げたコミュニケーション学者、ディーン・バーランドは、日本とアメリカの大学生を対象とした友人間、及び両親との接触行動を比較調査した結果、日本ではアメリカより接触が遙かに少ないことを検証している<sup>3)</sup>。そしてこの調査は、「人間の相互作用の性格を決定するのに、性別よりも文化の違いがもっと有力な影響を及ぼすことを示唆している<sup>4)</sup>。」これらの調査結果から、西欧人に比べて日本人はからだを接触させることが少ないと言えるであろう。

濃茶を喫する際、からだの接触はないが、手から手へ直接茶碗を受け渡す訳であるから、接触に非常に近いことになる。受け渡しができるくらい、お互いがごく接近して坐していることも事実である。また、同じ器から皆が喫する、皆が同じ経験をするという意味は深い。「同じ器で同じものを一緒に飲み食いすることが、いかに人と人とを強く結び付けるもの<sup>5)</sup>」であることか。ここにも「共に」というコミュニケーションの土台がある。「他人の

ふみ込んではいないタブーの唇の領域に強引にふみ込んだらどうなるのであろうか。最初の反応は拒否であるが、しかし、いったんそれを受け入れてしまったら、互いにもはや他人ではなくなったということになる。夫婦の契りを結ぶ三三九度の盃と同じ<sup>6)</sup>である。同じ食器から飲食するという行為には、人と人との結び付きという意味合いが表れている。

本項の初めでも言及したが、この回し飲みという作法は利休が考案したとされている<sup>7)</sup>。「利休以前の濃茶は天目による各服」であったのだ<sup>8)</sup>。客同士が同じ一碗から濃茶を共に喫することは、身分の上下の別もなく、同じ経験を共に分かち合うことであり、人と人とを結び付けることに繋がる。キリスト教の「万民平等」が茶室ではいち早く取り入れられ、濃茶の回し飲みや躡り口が生まれたという説もある<sup>9)</sup>。これらの事象をキリスト教と結び付けるには一考を要するが、「外国から来た革命的な平等思想を日本文化にはじめて調和させたのは、茶の湯だったのかも知れない<sup>10)</sup>。」と推測することは可能であり、躡り口での窮屈な出入りや濃茶の喫し方も平等の意識、参加者が同じ経験を共有することによる親密感を生み出す。

同じ器で同じものを一緒に食する日本の代表的料理は鍋物であろう。鍋の場合は同じ器「で」と言うより同じ器「から」ということになるが、牧野成一氏は興味深い比較をしている<sup>11)</sup>。日本の鍋物に当たるアメリカ料理はバーベキューであり、皆が一緒に食する料理として非常に似ているとまず述べている。しかし両者の間には相違がある。日本では家の中で食べ、一つの鍋に皆が箸を入れるのに対して、アメリカのバーベキューは屋内ではなく外で食べるのが普通であり、また皆がグリルの回りに一斉に集まる訳ではない。グリルから離れた場所で食べ、皿に物がなくなった時にグリルにそれぞれがやって来て、焼けた食べ物をそこから取るのである。屋内か屋外か、また皆が一つの鍋なりグリルに向かうか否かの相違があり、日本の鍋料理の方がはるかに「求心力が強い<sup>12)</sup>」のである。求心力とは正にコミュニケーションを形成する基礎であり、求心力の強さ、人と人とを結び付ける力の強さが、意外なことではあるが、鍋料理と濃茶に共通している日本らしさと言える。人と人とがごく接近している、同じ一碗の茶を共にする、茶の美味しさに一緒に与り、味わえる喜び・感謝を共にする、伝え合う、心が一つになる。このように客同士のコミュニケーションが如実に表れているのが濃茶である。

#### 【注】

<sup>1)</sup> 外山滋比古『日本語の個性』（東京：中央公論社、1976年初版、1998年第30版）、p.59.

<sup>2)</sup> Sydney Jourard, “An Exploratory Study of Body-Accessibility” *British Journal of Social and Clinical Psychology*, V(1966), pp.221-231. より石井敏氏が述べている。石井敏・岡部朗一・久米昭元『異文化コミュニケーション』古田暁 監修（東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷）、p.97.

<sup>3)</sup> ディーン・バーンランド『日本人の表現構造』西山千・佐藤雅子 訳（東京：サイマル出版、1979年初版、1994年第11版）、pp.109-134. 「非言語的自己表現—しぐさの構造」参照。

<sup>4)</sup> 同上、pp.123-124.

<sup>5</sup>熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年）、p.109.

<sup>6</sup>同上、p.109.

<sup>7</sup>同上、p.110.

<sup>8</sup>岡本浩一『茶道を深める』（京都：淡交社、2008年）、p.217.

<sup>9</sup>岡本浩一『心理学者の茶道発見』（京都：淡交社、1999年）、p.131.

<sup>10</sup>同上、p.131.

<sup>11</sup>牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』NAFL選書12（東京：アルク、1996年）、p.31.

<sup>12</sup>同上、p.31.

#### 6-4-6 後炭

後炭で炭を直す。薄茶のためによりよい火相をとという亭主の配慮が、この後炭という所作に表わされる。炭の関係の道具については初炭の際に聞いてあるので、ここでは尋ねない。初炭では、どの位置にどの炭を注ぐかは決まっているが、ここでは特に定まてはいない。むしろ景色を楽しむ。茶事の中で炭手前が2回あり、炉ならば炉中拝見も2度あることになる。初炭と後炭では炉中は全く違った景色を呈しており、客は2通り楽しめることになる。風炉にしても炉にしても、次の薄茶のためにわざわざ火を直してくれる亭主の心遣いを、客が酌み取る非言語コミュニケーションである。

#### 6-4-7 薄茶

干菓子がもてなされる。季節感やまたその時期の行事をテーマに作られた物もあり、菓子もまた、亭主の趣向を伝える非言語コミュニケーションである。濃茶席では菓子を運んだ後、戸口で「どうぞお菓子をお取り回してください。」と挨拶し、これを受けて客はすぐに菓子を賞味する。薄茶席では戸口ではなく、客の前に運ぶとすぐ「お菓子をどうぞ。」と言う。いずれの席でも菓子を勧める挨拶はある。しかし濃茶席とは異なって、薄茶席では勧められても客はこの時には食せず、実際に賞味するのは点前が始まってからである。ではなぜ運んだ際に「お菓子をどうぞ。」と言うのであろう。筆者はこれを、口ではなく目で見て楽しんでください、視覚への「お菓子をどうぞ。」の意ではないかと解釈する。

薄茶の点前が始まる。濃茶席とは異なって、お喋りをしてよいことになっている。濃茶が緊張感を重んじているのに対して、薄茶席はリラックスをという対比の表れとも受け取られる。濃茶席と同様に、既に清潔な器物を客の前でまた改めて清めるのは、完璧な清潔さをという客への敬意を伝える非言語コミュニケーションである。棗・茶杓・茶筌・茶碗と順次清めていく。亭主は点前の流れの中で「お菓子をどうぞ。」と勧める。席入直後の菓子の勧めとは違い、ここでは実際に食するようにとの意である。前者が視覚に対してで

あったのに比して、ここでは文字通り味覚への菓子の勧めである。

茶を喫する際に、客が自分より前の客に対して「お相伴させていただきます。」と言い、次の客に対しては「お先に。」、亭主に対しては「お点前ちょうだいいたします。」と述べる。客同士の、また主客間のコミュニケーションが言語によって図られている。客同士の気遣い、亭主への感謝の意を言語を通じて表す。

濃茶とは違ってお代わりができるため、正客から「どうぞお仕舞いを。」がかかるまで、亭主は茶を点て続ける。自分の方から仕舞いの挨拶をする濃茶席とは異なる。仕舞いの後、道具の拝見が請われ、道具を改めて清め、客は拝見し、そして道具問答に繋がる過程は濃茶席と同様である。

薄茶の振舞が終わると、茶事のすべての過程は終了したことになる。亭主と客は挨拶をする。客はもてなされたことへの感謝を述べ、亭主はそれを受ける。言語コミュニケーションである。亭主は退室し、客は再び床と点前座の拝見をする。一期一会の思いで各品々を鑑賞する。これらの品に込められた亭主の意図を改めて酌み取る非言語コミュニケーションである。そして躡り口より出る。

その後については後述するが、このように席入りから始まり、懐石・初炭・中立ち・濃茶・後炭・薄茶と茶事の流れを見てくると、茶の湯においては言語コミュニケーションよりも非言語コミュニケーションの占める割合が遥かに多いことがわかる。井伊直弼は『茶湯一会集』で「一會始終、<sup>(ふたとき)</sup>二時に過へからず<sup>ひととき</sup>」と述べている。一時が2時間であるから二時は4時間であり、よって茶事は4時間を過ぎないようにと言っている訳だが、この4時間を追って見てくると、言語よりもむしろ非言語の方が重きを成していると言える。

## 【注】

- <sup>1</sup> 『茶湯一会集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交新社、1961年初版、1967年500部限定）、p.409. ルビは本書にある。

## 6-5 非言語コミュニケーションの極致 — 茶事の始まりと終わり

### 6-5-1 お辞儀の起源

話をしない、言葉を発しない、しかしそれに代わってお辞儀をすることは、日本文化の一環であり、茶の湯でも実に頻繁に見られる動作である。茶会も茶事も、お辞儀に始まりお辞儀に終わると言ってもよい。お辞儀の歴史は古い。民俗学者、新谷尚紀氏によると、お辞儀についての最も古い記録は3世紀末に書かれた『魏志倭人伝』にある。この中に次のような記述が見られる。「<sup>げこ</sup>下戸、<sup>たいじん</sup>大人と道路に相遭えば、<sup>あいあ</sup>逡巡して草に入り、<sup>しゅんじゅん</sup>辞を伝え



事を説くには、あるいは <sup>うずくま</sup> 蹲り、あるいは <sup>ひざまず</sup> 跪き、両手は地<sup>よ</sup>に抛り、これが恭敬を為す<sup>1</sup>。」一般の人が有力者と道で出会った際のとるべき行動について説明しているが、蹲るか跪くかして両手を地につけて、とあるので、いわゆる土下座のような形である。恭敬を表すべくお辞儀をすることが述べられている。日本では既に紀元前3世紀末には、お辞儀という動作がなされていたということになる。

『魏志倭人伝』は魏の時代の陳寿という中国人が記した記録であるが、新谷氏は日本人が著した記録の方が、より確証が強いと述べ、『日本書紀』を挙げている。ここにもお辞儀の例を見ることができ、推古天皇の代12(604)年9月に朝廷の礼法を改めるという次のような <sup>みことのり</sup> 詔<sup>みかど</sup> が発せられている。「凡そ宮門に出で入らむときは、<sup>まか</sup> 両<sup>まい</sup>つの手を以て地を押し、<sup>あし</sup> 両つの脚をもて <sup>ひざまず</sup> 跪きて、<sup>とじきみ</sup> 柵を越えて、立ちて行け<sup>2</sup>。」柵とは宮門の内と外の仕切りのことであるが、宮門に入る時には両手で地を押し、すなわち土下座に近い形をとれ、つまるところ、お辞儀をするようにと述べている。先の『魏志倭人伝』と同様である。紀元前3世紀よりは遙かに新しい記録であるが、少なくとも7世紀初頭には、日本社会においてお辞儀が行われていたことがわかる。このように日本は、お辞儀の長い歴史を宿してきた訳であるが、このことを踏まえた上で、茶事の始まりと終わりを詳しく見てみる。

#### 【注】

<sup>1</sup>新谷尚紀『日本人はなぜそうしてしまうのか』(東京：青春出版社、2012年)、p.65. ルビは本書にある。

<sup>2</sup>同上、p.66. ルビは本書にある。

### 6-5-2 茶事の始まりと終わりの無言

前述の茶事の、特に始まりと終わりに注目したい。亭主と客が初めて顔を合わせるの、客の到着ではなく、迎え付けという場面においてである。ここでもお辞儀をするのみで言葉はない。武者小路千家第15代宗匠、千宗屋が述べているが「茶事はまず無言から始まります。露地に出る...無言で挨拶を交わします。ここで『やあどうも』、『お久しぶり』などと声を発したら台無しです<sup>1</sup>。」現代の宗匠どころか、この無言の顔合わせについての記述は遠く時代を遡り、江戸時代の井伊直弼にも例を見ることができる。「主客とも <sup>(ながこうじょう)</sup> 長口上などいふへからず、互ニ無言の一禮<sup>2</sup>」と述べている。

話をするなど論外のことであり、始まりから非言語の世界である。しかしながら、この無言の一礼の中に、いかに多くの思いが込められていることであろう。亭主の側には、あなたをお待ちしていました、という歓迎の思いがまずある。この日の為に何日も何カ月も

前から趣向を考え、道具の準備をする。前日は庭及び茶室その他の掃除をし、荘りつけをし、買い物に行き、料理の下ごしらえをする。当日はまた料理を作り、炭を起こし、香を焚き、湯を沸かし、茶を掃き、花を活け、水を打ち、数限りない準備がある。そうした苦勞を胸に、しかし表情にも言葉にも少しも出さずに、頭を下げるのみである。

客の側には、ここに何うことをどんなに楽しみにしていたことでしょうか、お招きありがとうございますという、感謝の思いがまずある。そして上述のような亭主の陰の仕事・苦勞を思いやり、そのことへの感謝を胸に一礼をする。言葉は全くない。しかし両者にとって、この無言の一礼がいかにも多くを語っていることであろう。言語を上回る非言語の力がある。よって茶人は、上記のような深い思いを込めてお辞儀をしなければならない。単に形式的に頭を下げるのでは、意は伝わらない。亭主の気持ちと、それを受け入れる客の心映え、両者がそれぞれを十分に心に置きながら一礼することによって、初めてコミュニケーションが成立することになる。

茶事が終わった後も然りである。席入りから始まり初座・中立ち・後座とあり、その間に懐石・初炭・濃茶・後炭・薄茶が行われ、それぞれの場に亭主は数々の趣向と大変な気遣いを以て臨む。客はその一つ一つのもてなしに与る。そしてこの一大イベントが終了する。客は躡り口から退席し、庭に出る。亭主は躡り口に座り、黙礼し、客を見送る。客は振り返り、亭主の礼に応ずべく自らもお辞儀をする。両者共無言である。茶事は大行事でありながら、無言に始まり無言に終わるのである。そしてこの無言の別れに、両者は何と多くを胸の内で語っていることであろう。

亭主の側には、茶事が無事に終わりました、楽しんでいただけましたでしょうか、おもてなしできて本当に嬉しく思います、至らないこともございました、そうした達成感や感謝や反省等、万感の思いが胸に宿っている。この亭主の最後の挨拶を、茶道研究家、鈴木皓詞氏は「慎み深い真摯な黙礼<sup>3)</sup>」と評しており、筆者も同意する。亭主の達成感や感動がある一方で、至らなかった点への反省をも表す一礼である。客の側には、数々のお心入りを本当にありがとうございました、何と楽しかったことでしょうか、素晴らしい時を過ごすことができ幸せです、といった、こちらもまた万感の思いがある。しかし両者共言葉には一つも出さないのである。客が茶室を出る前の挨拶の際に、以上のことを主客共存分に語っているであろう。そこでは十分に言語化されている。しかし、茶事において主客が接する1番最後の場面がこの無言の挨拶であることは、いかにも象徴的ではないか。躡り口で見送る亭主と振り返って亭主に応ずる客の、この無言の数秒間、互いの黙礼に、長い茶事のすべてが凝縮されていると言っても過言ではない。非言語コミュニケーションの極致と言える。

主客両者の胸の内にある万感の思い、それは言葉では伝えられないのではないか。非言語だからこそ相手に伝わる、コミュニケーションできる。『星の王子さま』の中に「大事なことは目には見えない...<sup>4)</sup>」という王子さまの台詞があるが、それと同様に、大切なことは口では言えないのではないか。もし言えないのならば、茶席の始まりと終わりという極めて重要な場面が無言の挨拶、すなわち非言語コミュニケーションによって行われているのは、いかにももったもなしなことだと頷けるのである。

また井伊直弼は、茶事の終わりを次のように著している。「主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れハ、客も露地を出るに、高声ニ咄さす、静ニあと見かへり出行は、亭主ハ猶更のこと、客の見へさるまでも見送る也<sup>5</sup>...」ここに記されている通り、「咄さす、静ニ」なのである。客が見えなくなるまで見送る亭主の胸の内は、言葉なくして何と大きい高まりであることか。言葉がない中に「余情残心」を、思いのすべてを込めているのだ。話さないが故に、むしろ感動も高まる。言葉を越えた伝え合いである。

この茶事の終わりは、第3章で筆者が述べた「余韻」に通じるのではないか。「余情残心」という表現が実際に使われている。話さない、語らない、言葉が少ないハイ・コンテクスト文化を有する日本人が美しさを感じ、感動を覚える「余韻」というものがあることを述べ、『夕鶴』のラストシーンを例に挙げた。鶴となった妻を夫が追って行って何か言うということもなければ、その後、鶴及び夫がどうなったかをナレーターが語る訳でもない。悲しげに飛んで行く鶴を見ながら、夫も悲しげにたたずむ。そこで物語は終わっており、語らないことが却って余韻を生み出し、効果的であることを述べた。茶事と文学を直接結び付けるのは唐突だとしても、茶事の終わりは、この物語の終わりを通じるものがあるだろう。話さない、語らないことがむしろよいことであり、余韻を以て感動を亭主・客両方の心に宿す結果になるのである。ただし、『夕鶴』と茶事の違いは、前者においては悲しい、寂しい余韻であるのに対して、後者は感謝・喜び・慎みに満ちた余韻であるということである。いずれにしても、言葉がない、非言語であることが、よい方向に働いているのである。

一期一会の茶会が終わり一人残された亭主の境地を、井伊直弼はさらに「独座観念」と称して記している。客が去った後の茶席に戻り、炉の前に一人座って、今日の茶事はもう2度とないのだと感慨深く思う。ここで独服するのもよいと述べ、「此時寂寞として、打語ふものとてハ、釜一口のみニシて<sup>6</sup>」とある。亭主である本人は何も語らない。語るものと言え、釜から聞こえる湯の音のみと述べられている。何という静けさ、そしてその中で深い深い感慨に浸る亭主の姿があり、無言が醸し出す究極の心境であると言えよう。

この無言は、自分の中でのコミュニケーションであると筆者は解する。茶事を振り返り、ここは至らなかった、こうすればよかった、この点は功を奏したのではないか、いや、そうでもない等と、自問自答する。問いかける自分があり、それに答える自分があり、自己の中でのコミュニケーションとは考えられないであろうか。それが無言のうちに、すなわち非言語コミュニケーションとして行われている。

茶事の流れに沿って見てきたように、茶事の進行中には挨拶・茶問答・道具問答、また会話自体も行われている。言語の使用はある。しかし言語より非言語コミュニケーションの方が遥かに多かったことは、述べてきた通りである。さらに、茶事の始まりと終わりの非言語部分こそ最も大切ではないかと筆者は考える。主客間になされる動作を多々見てきた訳であるが、非言語の重要性が最も顕著に表れている例が、茶事の始まりの一礼と終わりの無言の別れであろう。いわゆる茶話会や、西歐的ティー・パーティーとは全く異なる日本伝統文化のあり方をここに見ることができる。語り合うのではなく通じ合うのである。言葉なしに伝え合うのである。言語よりも非言語が多くを語り、多くを伝えるのである。

筆者は第2章において、世論調査の結果、コミュニケーションが円滑に図られていない

と感じている国民が多いことを述べた。「自分の言いたいことが相手に伝わらなかった」、「相手の言いたいことが自分に伝わっていなかった」、その両方においてである。パーセンテージの差はあれ、どの年代でもそう感じていることがわかった。一方茶の湯では、言語を用いないにも拘わらず、コミュニケーションは成立し得るのだ。通じ合えるのだ。何と感動的な文化ではないか。言語を用いてもコミュニケーションの成立が難しい現代社会において、言語を用いなくてもそれが成立する世界が、ここには存在するのである。ただしこの成立には、亭主の意図をいかなる非言語要素を以て伝えるか、いかに深い思い入れが必要となるか、そしてそれを受け入れる客の心映え、すなわち「心」のありようが非常に深く問われ、コミュニケーションというものが、そう簡単には成立しない。そこにまた茶の湯の奥深さと難しさがあるのである。

筆者は第3章において、言語のあり方を知ることによって、その国の文化が見えてくるのではないかと述べた。茶の湯は正にその好例だと言えよう。逆説的な言い方ではあるが、言語をあまり使わないという言語のあり方をここに見るのである。非言語がむしろ大きい役割を果たす、そのような文化であることがわかってくる。茶の湯における非言語コミュニケーションのありようを見てくると、茶の湯という文化が確かに浮かび上がってくる。言語と文化は改めて密接に関連している。

#### 【注】

- 1 千宗屋『茶：利休と今をつなぐ』（東京：新潮社、2010年）、p.190.
- 2 『茶湯一会集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交新社、1961年初版、1967年500部限定）、p.367. ルビは本書にある。
- 3 鈴木皓詞 著、筒井紘一 監修『茶の湯のことば』（京都：淡交社、2007年）、p.44.
- 4 アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ、『星の王子さま』池澤夏樹 訳（東京：集英社、2005年第1刷）、p.106.
- 5 『茶湯一会集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交新社、1961年初版、1967年500部限定）、p.414.
- 6 同上、p.414.

#### 6-6 むすび

茶と禅は深く結び付いているが、禅における「教外別伝」、「不立文字」は非言語に通じる。教えを文字化せず心で伝えることを意味しており、この思想は宗旦道歌に詠まれている「茶之湯トハ耳ニ伝へて目ニつたへ心ニ伝へ一筆もなし」と全く同じである。数寄の起こり、すなわちわび茶の始まりは、ジョアン・ロドリゲスによって説明されている。そしてロドリゲスも、茶の湯の教えは言葉を使わないこと、師弟間の非言語コミュニケーションによってなされると述べている。またルイス・デ・アルメイダ、さらには山上宗二も、茶事に関わる人々は言葉を発しないことを語っている。この無言は何かを伝える、すなわ

ち、コミュニケーションそのものではない。しかし無言であるが故に主客共に所作に集中でき、結局コミュニケーション成立に無言が大いに役立つことになる。また茶席での食事は、食べ物という非言語要素を通して亭主の歓待の意、季節感や茶席のテーマを客に伝えるのであるから、給仕の言葉がないこと、すなわち無言であることが結局はコミュニケーションの成立に大きく関与している。筆者は日本語の特徴の一つとして省略が多いことを述べた。「無言」はこの「省略」と相通じるものであると受け取られる。

五感に着目すると、茶席では色々な道具や所作を見る。すなわち視覚が大きく働く。様々な音も聞かれ、すなわち聴覚に訴える。料理・茶・香の香りは嗅覚であり、料理・菓子・茶の味は味覚である。道具に触れる楽しみ、濃茶を練る時の手応えは触覚に属する。これらの五感はいずれも非言語であり、五感を通して亭主は各趣向が伝わるようにする。すなわち非言語メッセージを送る。

季節に沿って五感を追うと、11月から4月までの炉、5月から10月までの風炉の区別があり、夏は涼しく冬は暖かくという亭主の心配りを伝える。実際の室温を変えるのではなく、使う道具や点前の種類を変えることによってである。釜の据え方・風炉の位置・水指の位置も時候に合うよう変える。かような炉と風炉といった茶席のしつらえ、様々な道具、点前所作はすべて非言語メッセージである。

茶事の流れを見ると、席入りから始まって懐石・初炭・中立ち・濃茶・後炭・薄茶と進行する。これらの過程で働いている言語コミュニケーションに着目すると、床の軸読み、席入りの後の挨拶、道具等の問答、席中の「お先に。」等の挨拶、薄茶席での会話、退席前の挨拶程度のものである。その他大多数が非言語行為である。言語コミュニケーションは極めて少なく、非言語の部分が遥かに多いことがわかる。そしてこの非言語要素こそが、亭主の意図を言語よりも的確に伝える働きをする。

このような季節の流れ、そして茶事の流れの中には、そうすることに決まっているという、いわゆる型の美がある。11月から4月までは炉、5月から10月までは風炉を用いること、茶事での中立ちの際に軸から花へ茶室の荘りを替えること、等の例である。しかし決まっていると言っても、そこに働いているもの、根本にあるものは歓待の意・季節感を表そうという亭主の意図である。その意図を非言語によって客に伝えようとするのである。

さらに非言語コミュニケーションの極致とも言うべきものは、茶事の始まりと終わりに見られる。露地での迎え付けの場面で、亭主と客は初めて顔を合わせる。亭主はこの茶事のために数知れぬ準備、そしてそれに伴う苦勞を重ねてきた。また茶事に招くほどの特別な客であるあなたをお待ちしていました、という大いなる歓迎の思いがある。しかし以上のことは一切口にせず、ただ無言の一礼をする。客の方も招かれたことへの感謝、またこの日をどんなに心待ちにしていたか、亭主の準備への労いという深い思いがある訳だが、それも口には出さず、黙礼のみである。しかしながら両者のお辞儀という非言語行為に何と深いコミュニケーションが通い合うことであろう。

茶事の終わりも然りである。茶事の各過程を一つ一つこなして、様々な心遣いと所作を重ねつつ、この一大イベントが終わる。客は露地に出て振り返ると、亭主は躰り口に座って黙礼し、客を見送る。客も応じて礼をする。一言も発しない。亭主には大きい行事を終

了した達成感と至らなかったこともあったとの反省、客への感謝の思いがある。客には楽しさ・感動、そして亭主への感謝の意がある。どちらも万感の思いである。その万感の意をお互いが無言で伝え合う。言語を上回る非言語の威力がある。茶の湯においては非言語コミュニケーションが言語コミュニケーションを遥かに凌ぐのである。言葉は用いないが、伝え合うのである。万感の思いの伝え合いが、コミュニケーションの成立である。

筆者は言語のあり方を知ることによって、その国の文化が見えてくると前述したが、正にそうなのではないか。茶の湯における非言語コミュニケーションのありようをこのように見えてくると、茶の湯という日本文化が確かに浮かび上がってくる。逆説的ではあるが、言語をあまり使わないという言語のあり方がここには見られる。言語よりもむしろ非言語で伝える、そのような文化であることがわかる。

**【注】**

<sup>1</sup>江戸千家茶の湯研究所編『不白筆記』（京都：江戸千家茶の湯研究所、2008年）、p.159.

## 第7章

### 「心」とコミュニケーション成立の要因

## 7-1 はじめに

言葉を使わなくても、亭主の意図があり、そしてそれに気づき受け入れる客の心映えがあることにより、非言語コミュニケーションが成り立つことを述べてきた。また茶の湯においては、言語コミュニケーションよりも非言語コミュニケーションの方が遥かに多く、重きを成していることも見てきた。本章では、茶人が究極の目標とする、深まり高まった「心」について考察する。また茶の湯において行われる所作すなわち「姿」、そして「心」との関係についても述べる。

さらに、この「心」を持つことを目標としつつ、茶の湯のコミュニケーションを成功に導く要因を考える。それは複数の局面の把握と作意であると筆者は捉える。

## 7-2 心の一つかね — 茶人の究極の目標

### 7-2-1 心の茶

亭主も客も、師匠も弟子も、すべてを含めた茶人の大きな目標というものがある。それが「心」の問題である。

茶のあり方は時代と共に変化している。第1章で概観したが、初期の頃の茶、すなわち書院台子茶以前には、鎌倉時代の榮西が著した『喫茶養生記』に例を見る薬用としての茶、鎌倉時代から南北朝時代に行われた闘茶のような、佐々木道誉に代表される遊芸・遊興・遊びとしての茶、建仁寺の「四頭の茶会」に今もその例を留めている礼法としての茶があり、初期の茶は大別して以上の3種あったと考えられる。しかしこれら3種類の茶——薬用・遊芸・礼法——のどれでもない、「道」としての茶、伝統的な歌や書や絵画や能楽と同じように、修行の「道」の意味合いを含むレベルまで茶を引き上げたのは珠光であり、珠光が茶湯開山・茶祖と呼ばれる所以はここにある、と倉澤行洋氏は述べている<sup>1</sup>。もちろん珠光一人の功績ではないが、珠光は「道」のレベルまで茶を高める動きを代表した人である。茶祖とは飲茶の祖ではなく茶道の祖である。修行の「道」とは心を磨くという意味での「道」であり、茶を芸術・芸道のレベルまで向上させたという言い方もできる。

そしてさらに、珠光がわび茶の祖とも呼ばれる理由は、それまでの、すなわち室町時代の書院台子・唐物という「道具本位の茶から『心』に重きをおく茶への転換<sup>2</sup>」を行ったからである。ただ「道具本意」と言っても、その道具自体に権力を語らせていた信長・秀吉の例は多々見てきた訳であるし、茶事の流れの中で、歓待の意、茶席のテーマや季節感を器物を通して客に伝えていることも、述べてきた通りである。道具に亭主の心は多分に表されている。道具を用いての非言語コミュニケーションを、亭主は客に対して多々行っている。これらのことを踏まえた上で、さらに本章で採り上げるのは、茶人が目指す、すなわち目標とする究極の「心」、高尚な「心」である。

権力の表れである「心」も確かに「心」であることに変わりはない。美しい面もその逆



の面も含めて文化であるとの筆者の見解を、第1章にて提示した通りである。本章では文化の美しい面に属する「心」、しかしながら極めて困難さを伴う「心」について論じる。

【注】

<sup>1</sup>倉澤行洋『増補 藝道の哲学 宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増版第3刷）、pp.99-100.

<sup>2</sup>同上、p.171.

7-2-2 深まり高まった心

松尾芭蕉が吉野への旅を綴った「笈の小文」の中で述べている。

<sup>さいぎやう</sup>西行の和歌における、<sup>そうぎ</sup>宗祇の連歌における、<sup>せつしう</sup>雪舟の絵における、

<sup>りきう</sup>利休が茶における、<sup>そのくわんだう</sup>其貫道するものは一なり<sup>1</sup>

わびの境地を表すとして、また広くは日本伝統文化の象徴として、しばしば引かれる一節であるが、ここで芭蕉の言う「貫道するものは一」すなわち道を貫くことは一つ、そしてそれこそが、上述の高尚になった心である。深い心、高まった心、清らかになった心を西行は和歌に詠み、宗祇は連歌に詠じ、雪舟は絵に描き、利休は茶に表したのである。媒体はそれぞれ異なるが、根本にある思想、この4人の偉人が伝えようとしていたものは同じである。わびについては、武野紹鷗が「侘の文」の中で次のように述べている。

侘と云ふこと葉は故人も色々に歌にも詠じけれども、ちかくは正直に  
慎しみ深くおごらぬ様を侘と云ふ<sup>2</sup>

紹鷗が説く前の時代までは和歌の中でも「貧しい」、「足りない」、「無くて淋しい」といった悲観的・否定的な意味しか持たなかった「わび」が、初めて道徳的な、内面の豊かさを意味する語として扱われたのである。ここでは謙虚さ・慎ましさと理想の心として「わび」が語られている。この解釈は、紹鷗が弟子たちに与えた12か条法度の一つ「高慢おゝくいたすまじきこと<sup>3</sup>」とも共通する捉え方である。また、珠光が「心の文」の冒頭で述べている一節にも通じている。

此道、第一<sup>(悪)</sup>わろき事ハ、<sup>(我慢 我執)</sup>こころのかまむか しゃう也<sup>4</sup>

我慢すなわち驕り高ぶることと、我執すなわち自分の考え・やり方に執着することとを悪いことだと諫めており、紹鷗の「慎み深くおごらぬ」ことをよしとする見解と全く同じである。珠光はさらに、この我慢我執を抑えた心のあり方を「心の下地<sup>5</sup>」と呼んでいる。

茶道・華道研究家、西堀一三は心敬の歌「待侘たる様にすればあたゝかなるものなり」

を引いて、わびには不足の状態が当然考えられていたことをまず踏まえた上で、紹鷗においては、単に不足を肯定し、それに耐えることで終わるのではなく、さらにそこから「正直に慎み驕らぬ」心を持つことがわびなのだ<sup>6</sup>と述べている。従来のわびの観念を深め、高めていることがわかる。自らの心を深め、高め、立て直していく。立て直る心こそが紹鷗においてはわびであったのだと受け取られる<sup>7</sup>。ここでまた「道」としての茶の心が問われる。生涯努力して自分を立て直し、律し、磨くという厳しい姿勢が必要とされる。西堀一三の説くように、「紹鷗の侘に於ては、そこに不足の状態が影を消すことになる。寧ろ正直にと云ふ實體があることになる<sup>8</sup>」のだ。わびが実践的・具体的になっていることがわかる。紹鷗は「わび」を肯定的な、よい意味合いを持つ概念に引き上げたのだ。これは画期的なことである。

珠光・紹鷗を踏まえた上でさらに『南方録』を見ると、次のように語られている。

五ツ折六ツノ小ワリヲ修行シテ  
至ルコヽロノーツガネナリ<sup>9</sup>

<sup>かねわり</sup>  
曲尺割というものがあり、これは茶を行うに当たって道具の数を整え、どの道具をどの位置に置くか、どう扱うかという実に詳細なきまり・規矩を言う。「五ツ折六ツノ小ワリ」は陰陽<sup>11</sup>のカネを指すが、懸命に修行し、こうした細かいきまりを十分に会得した上で、結局一番大事なことは「心の一つかね」であると言っている。これは前述の、深まり高まった心を意味する。個々のきまり・法則は点前作法に関するものだが、その根本には「心の法則」というものがあり、「心の一つかね」は正にこれである。一つかねと記述されているが、多々ある中の一つのかねの意ではなく、絶対的な、根源的な、唯一のかねという意味での「一つかね」なのである<sup>10</sup>。「貫道するものは一」と「心の一つかね」は用語の出所は異なるが、意味するところは同じである。芭蕉は日本伝統文化を代表する偉人4人の共通性から語り、利休は茶の湯の曲尺割の観点から語った、それだけの相違である。珠光の曰く我慢我執を抑えた心、紹鷗の説く正直に慎み深く驕らぬさまを踏まえて、究極の、深まり高まった心に繋がるのである。これこそ「わび」である。紹鷗から利休に至って、わびは明確化されたと言えよう。

この深まり高まった心、すなわちわびは、高尚なものであるが故に会得しがたいが、会得した者には一種の優越性をもたらすのではないか。唐木順三氏は「豪奢に対する謙虚でありながら、どこかに優越を感じているというところにわびがある<sup>11</sup>。」と述べているが、これは人に対して自慢するという意味での優越ではないと筆者は考える。「貧しい」、「足りない」、「無くて淋しい」といった否定的な意味合いから「謙虚さ」、「慎ましき」という肯定的で高尚な含みに転じてきたことからくる優越性であろう。

日本語の特徴として筆者は省略を挙げた。それは言葉がなくてよくない、不十分だ、不足だという否定的なものではなく、相手と自分が一体化して「その中に入って<sup>12</sup>」、却って思いが通じるという、また余韻を生み出すという、むしろ肯定的な意味合いを持つことを述べた。また茶の湯のコミュニケーションにおいては、言語よりも非言語が重きを成し、

このこともまた言葉がなくてよくないという否定的な結果ではなく、むしろ非言語が言語よりも効果的に意を伝えるという肯定的な結果をもたらすものであるとも述べた。「わび」もまた、不足、貧しさ、見劣りするといった意味合いではなく、深まり高まった心という肯定的含意を持つのである。ただ「わび」の場合は前者から後者に転じたのである。

禅の教えではこうした高まった心、深まった心を真心・無心、あるいは絶対心と言う用語で言い表す<sup>13</sup>。「茶禅一味」と表される茶と禅との深い結び付きを、ここにも見ることができる訳だが、真心・無心・絶対心に至ることとは、<sup>めざめ</sup>覚、すなわち真の自己に目覚めることである。修行僧の用語を用いるならば、さとりを開くことに当たる。ここに述べる真の自己とは、醜い、よくない部分も含めた本当の自分、人には隠したい貧しい精神の自分という通常の意味ではなく、むしろそれとは逆の、高まり深まった、清らかな心の自分という意味である。「さとり」が英語では“purification”と訳されている著書もある<sup>14</sup>。正に浄化された、清く目覚めた心なのである。

深まり高まった心、わびの心とは、本当の自分に気づいた、目覚めた心を指すと筆者は考える。心のけがれも浄化され、心の内に新たな光が差し、「自性それ自身が覚める<sup>15</sup>」ことである。そこではあらゆる束縛から解放され、脱却し、自由なのである。他の対象に救いを求めたり、他の何かを拝んだり、祈ったり、頼りにするのではなく、すべてが自分の中にあることを認識する。そのことに目覚めるのである。一切を超越した自己というものがあることに気づくのである。何者（物）にも拘る必要がない。この「超越」は後述する「守破離」の観念に通じるものであると筆者は解する。このような、禅の考え方を根本においての目覚めた心を、深まり高まった心、わびの心と捉える。自分は目覚めた、確かに深まり高まった心に到達した、そのような心で茶を行っている、との認識が望まれる。

哲学者・仏教学者・芸術学者、久松真一氏は、禅ではこのような「目覚めた自分」に確かなることができるかと述べている。頭の中での理想や理念ではなく、事実の上で実存し、実証されると説いている<sup>16</sup>。筆者は「深まり高まった心」を茶人の生涯の目標、一生を懸けての修行の目標であると解釈し、コミュニケーションの成立を可能ならしめる根源であると考えた。

茶の四規「和敬清寂」は珠光が初めに用いたと言われており、深まり高まった心、利休の言葉での「心の一つかね」を特殊な形として四つの相に表したものが「和敬清寂」である<sup>17</sup>。この中の「清」は英訳では“purity”とされ、“purification”と同じ接頭辞を持つ類似性の高い単語である<sup>18</sup>。「和敬清寂」の解釈自体が難解であるが、「心の一つかね」よりは具体的であり、分類し整理して説いていると言える。「和敬清寂」が茶の根本を成す概念であることは、茶の世界では常日頃言われるところであり、「和敬清寂」が茶人の究極の目標である「心の一つかね」の具体的表現であるならば、それも当然である。

深まり高まった心は人間形成に繋がる。「珠光・紹鷗・利休、この3人のお茶は宗教的・倫理的な人間形成、それにもとづく文化形成<sup>19</sup>」であり、薬としての茶でもない、遊びと

しての茶でもない、寺院の礼法としての茶でもない、それまでのどの茶とも違う「心」の茶、「心の一つかね」が根底にある茶であり、わび茶の始まりは正に大革命であったと言える。そしてそれを集大成したのは利休なのである。そこに彼の偉大さがある。

『南方録』に次のような記述がある。<sup>〔今井〕</sup>「納屋宗久ハ、手前ナドシタル一體、サリトモ見事ナルコト也、夫ユヘ一度御意ニモ應シテ、宗易ニヲトラズ御賞翫ノコトナリシカドモ、思入レタルコトナキ茶人也、後ニハ淺淺シク被思召シト也<sup>20</sup>」今井宗久は点前を見事に行い、利休に劣らないくらい褒められたが——秀吉に褒められたということであろう——、しかしながら「思い入れたることなき茶人」であったと記されている。この「思い入れ」を西堀一三は「心入の深さ」と表現し、利休が持つこの「心入の深さ」は他の人々のとて及ばない所であったのだと述べている<sup>21</sup>。引用の『南方録』の最後の箇所は、よって点前は上手かもしれないが「心入の深さ」に欠ける宗久は、後に秀吉からの信頼が浅くなったと結ばれている。心入の深さとは、深まり高まった心であると筆者は解する。利休は一切を超越した高みに、「さとり」の領域に至っている。そして珠光において萌芽を見た「心の茶」が、利休において明確な、完成されたものとなったと解釈される。

仏陀と関連付けて、利休のわびについて語った次のような評もある。

茶湯は、もともと、仏に奉仕する僧侶の行跡を俗人が真似する営みであるから、亭主は誠心誠意、招客をもてなし、招客もまた、亭主の心づくしを快く受け、万事つつましやかに、控えめがちに所作する。この心づかいの現われをも、「侘び」と称したのである。また、仏陀の恵みは万人を平等に潤すものだから、茶の道にも、富貴卑賤の差別はない。すべて、人間として平等である。人は、この道を学び、「侘び」の心境に徹することによって、人間生活の真価を感得し、和樂の妙味を享受することができる、というのである。これが、利休の確立させた茶道の理念であったのである<sup>22</sup>。

禅と結び付いて利休の大成した茶は、深まり高まったわびの心と密接に結び付くものである。非常に陰しい道のりであるが、わびの心を以て亭主は茶に臨み、わびの心を以て客は亭主の意図を受け入れる<sup>23</sup>。

#### 【注】

- 1 「笈の小文」井本農一・堀信夫・村松友次 校注・訳『松尾芭蕉集』より、『日本古典文学全集』第41巻（東京：小学館、1972年初版、1985年第15版）、p.311. ルビは本書にある。
- 2 「侘の文」西堀一三『日本茶道史』創元選書（東京：創元社、1940年初版、1946年第10版）、p.125.
- 3 同上、p.137.
- 4 「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：

淡交社、1960年初版、1967年500部限定)、p.3. 括弧は本書にある。「心の文」は「御尋之事」と同様、珠光が弟子の古市播磨法師に宛てた伝書とされている。本書の表記「かしよう」は「がしょう」と発音され「がしゅう」ではない。しかし多くの文献においてこの語に「我執」の漢字表記が当てられ、意味としても適切であると筆者は判断し、よって本論文においても「我執」を使用するものとする。

<sup>5</sup>同上、p.3.

<sup>6</sup>西堀一三『日本茶道史』、pp.127-128.

<sup>7</sup>同上、p.128. において同様のことを述べている。

<sup>8</sup>同上、p.129.

<sup>9</sup>『南方録』「滅後」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収(京都:淡交社、1956年初版、1967年500部限定)、p.319.

<sup>10</sup>「心の法則」については倉澤行洋『増補 藝道の哲学 宗教と藝の相即』(大阪:東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第1刷)、p.54、「唯一のカネ」については同書、p.76.

<sup>11</sup>唐木順三『千利休』(東京:筑摩書房、1963年第1刷、1989年第27刷)、p.228.

<sup>12</sup>大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』(東京:岩波書店、1996年第1刷、1999年第7刷)、p.47. この箇所は河合氏による。

<sup>13</sup>倉澤行洋『増補 藝道の哲学 宗教と藝の相即』、p.74.

<sup>14</sup>*The teaching of Buddha* 『和英対照仏教聖典』, Tokyo: Bukkyo Dendo Kyokai, 1966 (1<sup>st</sup> ed.), 1982 (230<sup>th</sup> ed.), p.229. 「さとりにへの道」は p.228. において “The way of Purification” と訳されている。ただ、「さとりに」は “awakening” の訳が相応しいとも言われる。Kodo Matsunami, *Introducing Buddhism* revised edition, Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1965 (1<sup>st</sup> ed.), 1976 (1<sup>st</sup> Tuttle ed.), p.14. には “Gautama Buddha is said to be the first man who was completely awakened to the reality of life....” とあり、「釈迦牟尼は人生の真実を完全にさとった最初の人間であるといわれている」の意である。“awakened” を「さとった」、「目覚めた」と訳すべきであろう。よって “awakened” (原形は “awaken”) を名詞の形にした “awakening” を「さとりに」と取ることは理に適っている。また Cathy Cantwell, *Buddhism: The Basics*, New York: Routledge, 2010, p.181. では「さとりに」を “Enlightenment or Liberation or Realisation (通常 realization と綴るが、本書では realisation となっている。)” としており、その説明として同ページで次のように述べている。 “The complete ending of Ignorance and craving, and the attainment of wisdom – the final goal in Buddhism” 結局捉え方、解釈の相違によって「さとりに」の訳も異なってくることがわかる。心の内を浄化される、清浄される、きれいにされると捉えれば “purification”、心の内に新たな光が差し、啓発されるのであれば “enlightenment”、本来の自己、真実の生に目覚めることと考えれば “awakening”、今まで知らなかった本来の自己に気づいた、認識した、そう捉えるならば “realization”、あらゆる束縛から解放され、自由になったことに重きを置いた本来の自己と考えれば “liberation” となる。ただし “realization” と “liberation” は「さとりに」の結果であり、「さとりに」そのものではない。

筆者は茶の湯における哲学とも言うべき「和敬清寂」との関わりから“purification”の訳を本文で挙げているが、「さとり」の英訳は以上に述べたように、多々ある。

15 久松真一『増補 久松真一著作集 第3巻 覚と創造』（京都：法藏館、1994年第1刷）、p.20. 傍点は本書にある。

16 久松真一『茶道の哲学』（東京：講談社、1987年第1刷、1994年第12刷）、p.31.

17 同上、p.135.

18 和敬清寂の英訳は harmony、respect、purity、tranquility である。Bartlett, Christy & Kane, Michael ed. *Urasenke CHANOYU Handbook One Soshitsu, Sen XV, Grand Master Urasenke School of Tea editorial supervisor, Kyoto:Urasenke Foundation, 1980 (1<sup>st</sup> ed.), 1993 (4<sup>th</sup> ed.), p.9.*

19 久松真一『藝術と茶の哲学』、倉澤行洋 編（京都：燈影舎、2003年）、pp.226-227.

20 『南方録』「滅後」、p.273. ルビは本書にある。「淺淺シク」の2番目の「淺」は本書では繰り返し記号（く）となっているが、横書きのため同じ漢字を繰り返し記した。

21 西堀一三『日本茶道史』、p.162.

22 桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976初版、1977再版）、p.395.

23 倉澤行洋氏は『東洋と西洋 世界観・茶道観・藝術観』（大阪：東方出版、1992年初版第1刷）、p.119. において、「遊びとしての茶湯」すなわち「東山殿茶湯」に対して、「道としての茶湯」・「茶道」が成立し、それがさらに「侘茶」に繋がったと述べている。ここにも、磨かれ、深く高まった心がわびの心であることが表れている。

### 7-2-3 心と姿

定義に今1度立ち返ると、茶の湯におけるコミュニケーションとは「言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセス」である。定義の中にある「言葉」よりも「所作」、「道具等」といった非言語要素を通して、茶の湯のコミュニケーションがなされる例が多いことを見てきた。「所作」は、より抽象的な用語では「姿」と換言することもできる。非言語の中の極めて重要な要素である「姿」について、ここで述べる。

亭主が行う「姿」は無数にある。茶を行うための趣向をまず考える、これも「姿」である。具体的な準備がある。庭と茶室の掃除、軸・花・道具一切を含む茶室のしつらえ、料理・菓子・茶の準備、そして本番の、茶席そのものの実施に伴う点前作法を始め、種々の動き、そしてその動きが作り出した形・結果はすべて「姿」である。客が帰った後も亭主の「姿」は続く。後片付け、道具の手入れ、茶席への反省、こうしたありとあらゆる亭主の行為・思考とそれがもたらす結果が、茶を行う上での「姿」である。この「姿」、ありようを通して、亭主は客に歓待の意、茶席のテーマ、季節感といった意図を伝える。「意図」は「心」に含まれる訳であるから、「姿」に「心」を託すことになる。そして諸々の「姿」を行う中で、より適切な、よりよい姿を練磨することによって心を深め、高め、磨き、清らかなものとすることを目指すのである。「姿」を通して「心の一つかね」を育てていくの

である。具体的な稽古、修行の道とも言うべき、「姿から心へ」の動きである。

こうなるまでには多大な努力を要する訳であるが、しかしここで安心し、留まるのでは不十分である。持続させる亭主の努力が必要となる。そのためには深く高い心を以て、深く高い姿を行うのである。すなわち「心から姿へ」の動きとなる。「姿から心へ」の段階では、具体的には稽古・修行が問われるのに対して、「心から姿へ」の段階では、具体的な条件として亭主の作意が問われることになる。作意については後述するが、稽古・修行は当然の前提で、それに加えて創意・工夫の働いた茶になっているかどうかの問題となる。

珠光の説く「我慢我執をなくすこと」、すなわち「心の下地」を作ることが「姿から心へ」であり、二つ目の我慢すなわち無我から生まれる作意が「心から姿へ」に相当するとと言える。絶え間ない努力であり、自分を磨く道である。よって「茶の湯」と言うよりも「茶道」と表した方が適切である。「茶道の『道』とは何かと言えば、それは、…『姿（茶）を通して『心』（真心・心ノーツガネ）に至る道であると共に、『心』から『姿』へと働き出る道であると言いたい。つまり『茶道』とは簡単に言えば、姿（茶）から心への、心から姿（茶）への道である。しかしてこの道に終着点はない。すなわち修行は一生終わることがないのである<sup>1</sup>。」一生続く訓練、終わりのない修行であり、茶が奥深いと言われる所以もここにある。深く高まった心を得、それを持続していく修行、さらに高めさらに深める修行、そしてそのそれぞれに姿が伴うことが望ましい。

さらにこうした修行が自分の中だけで終わっているのでは不十分であり、相手に伝わらなければならない。いかに効果的に円滑に伝えるか、コミュニケーションできるか、つまるところ、それが茶の湯のコミュニケーションの真髄である。よって上記の「姿から心へ、心から姿へ」はさらに亭主の心から客の心へ、「心から心へ」に繋がることを望まれる。紹鷗の言葉に「一つとして心はなるる所作はなし<sup>2</sup>」とある通り、すべての所作すなわち「姿」の中に「心」が働いている、否、働いているべきである。心なき姿はあってはならず、また姿なき心もあってはならないのである。

#### 【注】

<sup>1</sup> 倉澤行洋『増補 藝道の哲学—宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第3刷）、p.96.

<sup>2</sup> 西堀一三『日本茶道史』創元選書（東京：創元社、1940年初版、1946年第10版）、p.126.

#### 7-2-3-1 和歌に見る「心と姿」

「心の一つかね」、「わび」を表す歌を挙げる。

見渡せば、花も 紅葉も なかりけり。浦のとまやの 秋の夕ぐれ<sup>1</sup>

『新古今和歌集』撰者の一人、平安末期から鎌倉初期における歌壇の第一人者であった藤

原定家の歌である。春の美を代表する桜の花も、秋の美の代表である紅葉も、そうした美しい、華やかな風景はない、けれども秋の夕暮れ時に見る、浦の苫屋に一層美しさが、趣が、わびが感じられると詠じている。「紹鷗ワビ茶ノ湯ノ心ハ、新古今集ノ中、定家朝臣〔藤原〕ノ哥ニ、…コノ哥の心ニテこそあれと被申し<sup>2</sup>…」、紹鷗が好んだ歌で、わび茶の心はこの歌の心だと述べた、と『南方録』にある。花紅葉を知らながら、見ながら、すなわち経験しながらも、花紅葉が一切除かれた、すべてなくなった浦の苫屋、いわば無の心、わびの心をより高く評価している。これこそが深まった心である。この歌は上述の「姿から心へ」を表していると言える。姿——花紅葉を経験すること——を行って学んで、深い心を得る道である。今一つの歌を挙げる。

花をのみ待らん人に山ざとの 雪間の草の春を見せばや<sup>3</sup>

同じく『新古今和歌集』撰者の一人、藤原家隆の歌である。桜の満開だけを春だと思って待っている人に、そうではない、山里を覆っていた雪が融けて、その融けた間から草が見える、ここにも春があるのだと見せてあげたい、教えてあげたいと詠んでいる。「宗易、今一首見出シタリトテ、常ニ二首ヲ書付、信ゼラレシ也、同集家隆ノ哥ニ、…これ又相加へて得心すべし<sup>4</sup>」、師匠の紹鷗が好んだ上記の花紅葉の歌に加えて、利休がこの歌を愛唱していたことがわかる。豪華な花紅葉も、それを超えて至った浦の苫屋さえをもさらに超えて、雪間の草に行き着いた。雪の間から今はほんの少し見える程度の草であるが、春に向かって芽生えている若芽であり、これから成長し、美しい花が咲き、次々に増えていく。成長・繁殖・生命の可能性・将来性が感じられる歌である。

裏千家第 16 代宗匠坐忘齋が、宗匠になる前の千宗之時代にこの歌を評している。利休は「小さな野原の草が春の生命力をうけて躍動するという枯れた世界からの息吹、新しい活動力を秘めたわびというものを目指したのである<sup>5</sup>。」生命力・活動力を宿したわびである。「外見的には最も貧しくして、しかも内に生命力の最も充実した潜勢の美<sup>6</sup>」という評もある。様々な姿を経験した上での苫屋に象徴される深まった心、その心からさらに高みに至った雪間の草・若芽という姿、可能性・将来性を内包した姿がある。この歌は深まった姿に至る「心から姿へ」を表している。

#### 【注】

<sup>1</sup>『新古今和歌集』谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、山本健吉・池田弥三郎 訳・注『古典詩歌集』より、『日本文学全集』第 6 卷所収、(東京:河出書房、1966 年初版)、p.175.

<sup>2</sup>『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第 4 卷所収(京都:淡交社、1956 年初版、1967 年 500 部限定)、p.16. 括弧は本書にある。

<sup>3</sup>同上、p.16. に挙げられている。



<sup>4</sup>同上、pp.16-17. 括弧は本書にある。

<sup>5</sup>千宗之『まずは一服』（東京：主婦の友社、1987年）、pp.102-103.

<sup>6</sup>芳賀幸四郎『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2版）、p.156.

### 7-2-3-2 禅に見る「心と姿」

「茶事<sup>チャジ</sup>は禅道<sup>ゼンダウ</sup>を宗とする<sup>1</sup>」は、江戸時代の1828（文政11）年に寂庵宗澤が著した『禅茶録』の冒頭であり、茶と禅の深い結び付きを語っているが、ここでは「心と姿」の観点から禅を考えたい。禅では真の自己に目覚め、深まり高まった心を得、そして行動することが問われる。前述の通り、かような崇高な心を禅の用語で真心<sup>しんじん</sup>・無心・絶対心と言う。

そしてここに至る、こうした心に行き着くには段階がある。第1段階は、仏教の言葉で還源<sup>げんげん</sup>または向去<sup>こうこ</sup>と言う。深まり高まった心を得ることである。茶における「姿から心へ」に当たる。次に、この深まり高まった心を以て行動すること、真の自己を持続させ生きていくことが肝要となる。第2段階であるが、これを起動<sup>きやうらい</sup>または却来<sup>きやうらい</sup>と言う<sup>2</sup>。茶における「心から姿へ」に相当する。禅と茶は全く平行しており、改めて「茶禅一味」が感じられる。

倉澤行洋氏が「茶禅一味」と深まり高まった心について述べている。「『茶禅一味』とは、茶を禅の道として行うこと、つまり茶をいれたり飲んだりするを通して深き心に至ることでありまた、深き心からの起動として茶をいれたり飲んだりする仕方を工夫すること、ということになる<sup>3</sup>。」茶と深まり高まった心とは一体化しているべきなのである。茶を行ってかような心を目指し、かような心を以て茶を行う。深まり高まった心への意識が常に働いていなければならない、禅の道、すなわち心の修行が続くことになる。また心と姿は頭で理解するものではない。体験する、実践することが大切であり、茶は正に行動と結び付いた文化なのである。実際に行う、「姿」を見せる、それが茶である。

姿から心へ、心から姿へ、さらに深まり高まった姿から心へ、一層深まり高まった心から姿へと、茶人は歩む。単に円環すると言うよりも螺旋状に進む。心と姿で円を描きながらも、その円は同じ平面上を回っているのではなく、高みへと向かっていく。茶人が生涯を懸けて行う修行の道である。そしてこうした鍛錬・修行が自分の中だけで終わるのではなく、亭主の心から客の心へ、すなわち「心から心へ」に繋がるのが望まれる。

#### 【注】

<sup>1</sup>『禅茶録』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.279. ルビは本書にある。

- <sup>2</sup>芳賀幸四郎『わび茶の研究』、p.85にて、これらの禪の用語について述べている。また、「姿から心へ」、「心から姿へ」の論については、『増補 藝道の哲学—宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第3刷）、pp.70-90. 参照。
- <sup>3</sup>倉澤行洋「藝道の理念と実践」和田修二・倉澤行洋『敵味方をこえて平和を織る』（京都：燈影舎、2010年）、p.158.

### 7-3 コミュニケーションを成功に導く要因 — 複数の局面の把握

深まり高まった心と姿を目指しつつ、コミュニケーションの成功、すなわち亭主の意図が伝わる茶席作りの要因について、ここで考察するものとする。それは複数の局面の把握と作意である。他にもあるであろうが、筆者がこれまでに亭主側として参加した、さらに客として出席した茶会と茶事において、すなわち主客双方から見て特に重要だと判断されるのは、この2点であると考え。第1点目、「複数の局面の把握」の中の「都市と山居」から始める。

#### 7-3-1 都市と山居

「都市と山居」とは茶室における「複数の局面の把握」に関わる。町の中にある茶の湯の場が西欧人から「市中の山居」と評されたことは、茶人の間ではよく知られている。宣教師ジョアン・ロドリゲスが『日本教会史』の中で、日本の茶室、利休の膝元である堺の町の茶室を「市中の山居」と表現している次の件を見てみる。

...茶の湯 chanoyu にふけていた人のすべてが東山殿 Figaxiyamadono の残した形式で、茶の湯 chanoyu の家を造ることはできないという事態が生じていた。

...茶の湯 chanoyu に精通した堺 Sacay のある人たちは、幾本かの小さな樹木をわざわざ植えて、それに囲まれた、前よりも小さい別の形で茶 cha の家を造った。...田園にある一軒家の様式をあらわすか、人里離れて住む隠遁者の草庵を真似るかして、自然の事象やその第一義を観照することに専念していた。...

この都市にあるこれら狭い小家では、たがいに茶 cha に招待し合い、そうすることによって、この都市がその周辺に欠いていた爽やかな隠退の場所の補いをしていた。むしろ、ある点では、彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。というのは、都市そのものの中に隠退所を見出して、楽しんでいたからであって、そのことを彼らの言葉で、シチュウノサンキョ xichû no

sankio といっていた。それは、街辻ブラザの中に見出された隠退の閑居という意味である！。

堺に広まっていた「市中の山居」の様子がよくわかる。また、外国人の目を通しての描写であることが興味深い。村井康彦氏は、「この『市中の山居』の美意識こそ、草庵茶室・茶湯の思想・理念<sup>2</sup>」であると述べており、都会の賑やかさと人里離れた隠遁の場の両方を知っていなければ、この美意識もわからないと筆者は考える。どちらか一方の理解だけでは片手落ちであると思われる。またこのロドリゲスの記述中にある「彼らはこの様式が純粋な隠退よりもまさると考えていた。」という表現は、前述の唐木順三氏による「どこかに優越を感じているというところにわびがある<sup>3</sup>。」との意見に通じるものがある。改めて、わびは肯定的要素なのである。

一方に都市がいかなるものかという理解があればこそ、それとは全く異なった趣の山居、隠遁の場との対比が浮かび上がるのであり、「市中の山居」、いわゆる都市の中における茶室のよさが鑑賞できる。複数の局面が醸し出す美意識が理解でき、そして自ら、都市の中心にあっても、それとは別世界の趣ある茶室のしつらえが演出できることになる。趣ある茶室は茶席の土台であり、コミュニケーション成立、すなわち亭主の意図が伝わる茶席の舞台となる重要な存在である。

#### 【注】

<sup>1</sup> ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）、pp.606-608. ルビは本書にある。

<sup>2</sup> 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年。原本は1977年日本放送出版協会より）、p.57.

<sup>3</sup> 唐木順三『千利休』（東京：筑摩書房、1963年第1刷、1989年第27刷）、p.228.

### 7-3-2 真行草

『南方録』に「茶湯は臺子<sup>(だいす)</sup>を根本とすることなれども、心の至る所は、草の小座敷にしくことなし<sup>1</sup>」とある。「心の至る所」とは深まった心、すなわち「心の一つかね」に至った境地である。珠光の言う「心の下地」であり、わびの心である。唐物・台子を用いての書院での茶が茶の湯の根本ではあるが、「心の一つかね」に至るには、小間の草庵で、わびた道具を用いてのわび茶にはかなわないと述べている。

この考え方は紹鷗にも例を見ることができる。紹鷗は、茶の湯の見解を示した「又十體之事」の中で次のように述べている。「薄茶立る事専なり、是を眞の茶と云ふ、世上に眞の茶と云ふは濃茶の事を云、草の茶なり<sup>2</sup>」。世の中、世間一般で「眞」の茶と呼ばれるのは濃茶であるが、これは実は「草」であって、薄茶こそが本当の意味での「眞」の茶なのだと言っている。一見逆説的な論であるが、初級者の点前と考えられがちな薄茶こそ大事であり、先に引用した『南方録』の利休の言葉に通じている。しかしながらここで利休は、単に書院台子茶を否定し、わび茶を肯定している訳ではない。両方が必要であり、両方踏

まえた上でわびに到達できるのだという含意があろう。書院・台子・唐物の茶、すなわち真の茶を身につけた上で、初めて草庵・わび・平点前すなわち草の茶もわかってくるのだと説いている。

歴史を振り返ると、利休以前には台子には風呂釜も含めて各種の道具が皆納められていた。しかも客の座す座敷とは別の部屋に置かれた。台子はいわば水屋の延長であったのだ。その後、台子の有する水屋棚の性質を切り離し、水屋棚は他の部屋に設け、台子は客のいる座敷に据える。足利義政の時代はこの形式であり、いわゆる書院台子の茶である。さらに台子に置く道具も限るようになり、棚点前が生まれる。台子点前より簡略化されている。そしてさらに、棚すらも据えず、必要最低限の道具、これらがなければ茶は点てられないという極限まで省略して切り詰めたものが平点前である<sup>3</sup>。わびの極致と言ってもよい。

日本語の特徴として省略が多いことを指摘したが、それと通じるものがここにも、すなわち茶の湯にも見られよう。道具と所作が省略されてきている。日本文学は省略の文学であることも前述したが、極力言葉を排してごくごく短く、核となる、最小限度の言葉のみで心を表す和歌のあり方、それは必要最低限の道具と所作によりなされる平手前、草の茶のありようと通じるものがあるのではないか。複雑な台子での点前から、徐々に省略された点前が生まれてきている。しかしそれは簡単にした、楽にした、おろそかにしたという意味ではなく、それぞれの点前にはそれぞれの美がある。なくなってよくない、貧しくなったという意では決してなく、新たなプラス要素を生み出している。

利休が水指を運び出しての平点前、いわゆる最も基本とされるこの点前を普及させたことは、大きい意味を持つ。「運び点前を広めたことこそが利休の行ったもっとも重要な茶の湯点前の改革<sup>4</sup>」であるという評もある。「平点前が一番深く考えられた、洗練されたものであることがわかる。複雑な作法や手続を以てすることは難しいようでも、実はいと易いものである。本当に難しいのは、簡素にして要を尽すことである。一手の間違えさえも許されないし、一寸一分の置き誤りも許されないのが平点前である<sup>5</sup>。」確かにその通りであるが、しかし平点前だけをひたすら行い、平点前における「姿」をのみ磨くことで終わってはならない。その上の点前も修行しつつ、上級者向けも初級者向けも両方経験してこそ、「心」のある「姿」としての、深まった平点前を行うことができるようになるであろう。「心の至る所は、草の小座敷にしくことなし」は、この極致である。

『南方録』には次のような記述も見られる。「花紅葉ヲシラヌ人ノ、初ヨリトマ屋ニハスマレヌゾ、ナガメナガメテコソ、トマヤノサヒスマシタル所ハ見立タレ<sup>6</sup>。」これは、前に挙げた藤原定家の歌「見渡せば、花も 紅葉も なかりけり。浦のとまやの 秋の夕ぐれ<sup>7</sup>」を踏まえての言であるが、花紅葉の豪華さ・よさを十分味わい理解した人こそが、浦の苫屋の無一物のよさ、わびた趣もまた鑑賞できるのだと述べている。両方経験しているという前提、複数の局面の把握が必要なのである。浦の苫屋しか見ていないのであれば、その本当のよさを認識しているとは言えない。「花や紅葉の美しさを知らない人がとま屋に住むと、ただ貧しさのみが先行する<sup>8</sup>。」のである。「わび」はよくないという否定的な意味合いのみで終わってしまう。花紅葉、苫屋、いずれも理解していないことになる。

すべての段階に通じ、心と姿のさらなる高みにいる茶人には、浦の苦屋を目にした時に、その背後にあでやかな花紅葉をも思い浮かべるはずである。その、隠れた背後の花紅葉があってこそ、浦の苦屋の趣も心に沁みるのである。もともと苦屋しか知らないのであれば、花紅葉を心に描くことはできない。ひいては苦屋の本当のよさもわからない。藤原家隆の歌「花をのみ待らん人に山ざとの雪間の草の春をみせばや<sup>9</sup>」に見られる「雪間の草」と茶人の関係も全く同様である。高みにいる茶人には、素朴な「雪間の草」の背後に、豪華な美しい「花」のある春をまた思い描くはずである。初めから雪間の草しか知らないのであれば、豪華な花も思い浮かばない。そして結局は雪間の草の本当の意味での美しさも理解できない。複数の局面の把握が問われる。

前述の『南方録』の「花紅葉ヲシラヌ人ノ...」の件では、花紅葉は書院台子の茶に喩えられており、浦の苦屋はわびでの平点前に当たると解せる。具体的な点前を指している。上の点前も十分会得して、自分のものとした上で、初級の方の点前も深い心で行うことが、そして深い姿としての初級の点前を行うことが可能となるのである。すべての段階の点前に通じていることが必要だということである。草の点前が行えるのも行を知っているからであり、その行の点前が行えるのは真を知ればこそである。複数の局面の把握が必要である。一つの点前を身に付けたからといって満足してはならず、また真行草、三者の相互性の重要さも見逃せない。

裏千家第 16 代宗匠坐忘斎が、基本となる点前、すなわち初歩の点前を繰り返し練習することの重要性を説いている。「基礎ができていなければ、いくら表面を飾りたてたとしても砂上の楼閣。点前でいえば割稽古がしっかりできているかどうかにかかっています。何十年と稽古を重ねると台子や四ヶ伝以上の点前をすることがほとんどで、お薄の運びはもうめったにしないという方もおられるかもしれませんが。しかしやはり 1 番大切な点前は最初にこの道に入った自分が恐る恐る関わった点前、即ち『基本』だと思います<sup>10</sup>。」上の点前ばかり練習するのもよくなく、初歩の点前ばかりもよくないのであり、複数の点前・多数の所作を会得している亭主こそが、意図の伝わる茶事を可能ならしめる。すなわちコミュニケーションを成立させることができると考える。

#### 【注】

- <sup>1</sup>『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第 4 巻所収（京都：淡交社、1956 年初版、1967 年 500 部限定）、p.3. ルビは本書にある。
- <sup>2</sup>『紹鷗遺文』千宗室 編『茶道古典全集』第 3 巻所収（京都：淡交社、1960 年初版、1967 年 500 部限定）、p.27.
- <sup>3</sup>点前の変遷については、中村直勝『茶道聖典 南坊録』（大阪：浪速社、1968 年第 1 刷、1997 年第 3 刷）、pp.8-9. 参照。中村直勝氏は歴史学者である。
- <sup>4</sup>神津朝夫『千利休の「わび」とは何か』（東京：角川書店、2005 年）、p.129.
- <sup>5</sup>中村直勝『茶道聖典 南坊録』、p.9.
- <sup>6</sup>『南方録』「覚書」、p.16. 括弧は本書にある。「ナガメナガメテコソ」は本書では繰り返し記号（く）を用いているが、横書きのため読み易さを考え、単語自体を繰り返した。

- 7 『新古今和歌集』 谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、山本健吉・池田弥三郎 訳・注『古典詩歌集』より、『日本文学全集』第6巻所収（東京：河出書房1966年初版）、p.175.
- 8 筒井紘一『茶の湯名言集』（京都：淡交社、2006年）、p.211.
- 9 『南方録』「覚書」、p.16.
- 10 月刊「淡交タイムス」（京都：淡交社、2016年1月号）、pp.2-3.

### 7-3-3 守破離

茶も含め、芸道の第1段階は稽古である。型を身につけ、心をひたすらそこに向け、熱意を注ぎ、無我の境地を目指す。姿から心への段階であり、禅では還源・向去に当たる。真実の自己になることであり、真心、絶対心を得ることだ。芸道における修行の3段階は「守破離」と呼ばれ、この段階は、その「守」に当たる。次の段階は作意を持つことである。第1段階で留まらずにさらに働きかけ、自分の芸を作っていくことが大事だ。心から姿への段階であり、禅では起動・却来に当たる。新しい我として蘇ることが必要とされ、無我の先を行く無我の我を目指す。修行の第2段階の「破」に当たる。

しかしここで終わったのではまだ不十分である。第3段階では無我の我もまた乗り越え、真の無我、すなわち本当の無我を目指さなければならない。さらなる高みへ向かわなければならない。この段階では、努力して苦勞して稽古に励む、努力して苦勞して作意を見出すといった過程は既に超越しており、ごく自然に芸道ができるのだ。力まなくても、無理しなくても、完全なる自由体で芸に臨んでいる状態である。修行の第3段階の「離」である。珠光も「所作ハ自然と目に立候ハぬ様に有べし<sup>1</sup>。」と述べているが、目立たぬように、自然に所作を行うことが大切である。自然体で絶頂を乗り越え、さらにその向こうまで行くことが芸道の理想とされるのである。型も規律も既に超越している。「すぐれた茶人においては・・・自己否定的に転換して、無作為の作為、態ならぬ態となっている<sup>2</sup>。」のである。さりげなく、自然に、大袈裟でなく、といった姿勢には、前述した日本語の特徴の中の緩和表現、すなわちあからさまでないことをよしとする考え方に通じるものがあると解釈される。また、さりげない茶の湯の点前、さりげない日本語の使い方、その両方に美があることも両者の共通項であろう。

芸道における修行の3段階「守破離」において、目指すべきは最終の「離」である。紀州公家臣横井淡所次太夫が、如心齋宗左（表千家第7代宗匠）に見聞きしたことをまとめ茶の奥義を述べた『茶話抄』にも、「守ハ下手 破ハ上手 離ハ名人<sup>3</sup>」と述べられている。所作が次第に深まり高まっていることがわかる。

利休の点前は次のように記述されている。「利休手前は見取候<sup>そうらわん</sup>半と目を付るに、いつ立  
出<sup>しまい</sup>した仕廻申す、見とめ見覚申さず候、利休手前は凡慮を離れたるよし、常々に語り

と云い伝う<sup>4</sup>。」利休の茶はいつ始まっていつ終わったのかわからない、何ということもない所作であるが、目立たないながら見る者に感動を与える、そのような点前であったのだ。ごく自然に、淡々と、力むこともなく、「凡慮を離れたるよし」とあり、すべてを超越した名人の域が感じられる。仰々しくない、さりげない点前である。利休が卓越した茶人であることが実によくわかる記述であるが、利休は確かに「離」の領域に達している。

「利休百首」の1番最後、すなわち百首目に「規矩作法守りつくして破るとも はなるるとても本を忘るな<sup>5</sup>」とあり、草の茶がもともと真台子の茶より発していることを踏まえた上で、正に守破離を論じている。3段階という複数の局面の把握が問われる。この「利休百首」に記されている「もと」は上に述べた真の無我、芸道の「離」であろう。初めの「もと」、スタート地点にいつまでも留まるという意味ではなく、複数の局面の技量を身に付けてから、さらに修行し進歩して到達した「もと」である。最初から「離」に至るのは不可能である。「守」と「破」の段階を経る、すなわち複数の局面の把握が必要であり、その上で「離」を目指すのである。「守」も「破」も超えた「離」であるが、芸術の道における「超える」ことの重要性は、久松真一氏も指摘している。「芸道ということが、ただ個々の芸の技術とか、個々の芸に携わる人の実践すべき法則とかを意味せずして、個々の芸が単なる個々の芸に止まらず、個々の芸を超えて、およそ人間たるものの履践すべき法則とか、天地宇宙の間に行なわるる根本法則を意味する<sup>6</sup>」と述べており、超越の観念、これは守破離の「離」に通じるものであると解せる。

#### 【注】

- 1 「御尋之事」『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.472. にて珠光が述べている。
- 2 倉澤行洋『増補 藝道の哲学—宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983初版第1刷、1990増補第3刷）、p.234.
- 3 『茶話抄』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、pp.268-269. 『茶話抄』自体の説明はp.270.
- 4 『閑夜茶話』井伊直弼 著、戸田勝久 校注『茶湯一会集・閑夜茶話』所収（東京：岩波書店、2010年）、pp.295-296. ルビは本書にある。
- 5 阿部宗正『利休道歌に学ぶ』（京都：淡交社、2000年初版、2004年第5版）、p.180. 阿部宗正氏は茶道裏千家今日庵、元業躰である。
- 6 久松真一『増補 久松真一著作集 第5巻 禅と芸術』（京都：法藏館、1995年第1刷）、p.81. 下線は筆者による。

#### 7-3-4 道具の扱い

『山上宗二記』「茶湯者覺悟十體」では「上ヲ<sup>(そそう)</sup> 籠相、下ヲ律儀ニ信可在<sup>1</sup>」と述べてい

る。これはまず道具の扱いに関して心に置くべきことである。「匱相に」とは、決して適当に、いい加減に、またぞんざいにといい意ではない。さりげなく、自然に、大袈裟でなく、といった意味である。貴重な品を扱いながらも匱相に見えるように、いかにも大事に扱っていますよというわざとらしさがないように、しかしもちろん大事に扱うという意味である。「一個千金の茶碗や肩衝などをさりげなく『匱相に』扱うこと、総じて内に豊かなものを持ちながら、それをいわばさりげなくほのめかす方向に志向するもの<sup>2)</sup>」である。道具の扱いという「姿」であり、さりげない自然な「姿」で扱うことが大切だ。「下ヲ律儀ニ」はそれほど貴重でない茶器をも丁寧に扱えということである。またこの宗二の記述は道具ばかりでなく、客に対しての亭主の態度をも論している。茶に長けた、茶をよく知っている客に対しては、匱相なもてなしをしたとしても、客の方が適切に対応してくれる。しかしそうでない客の場合は、亭主側から細かく親切に導いてあげるべきだと述べている<sup>3)</sup>。

「重い物は軽く、軽い物は重く。長い物は短く、短い物は長く。」とは、茶の稽古でよく言われることである。上述の『山上宗二記』の道具の扱いに通じるものがある。重い釜等は軽々と持ち、逆に軽い茶杓や茶筌等はいかにも重々しく扱おうと、よい「姿」になるという。長い大きい座筌等をいかにも大袈裟に用いるのではなく、さりげなく使う。逆に短い茶杓を帛紗で清める時等は、端から端まで長い物を扱っているように清めるのが望ましい「姿」である。「利休百首」の中の「点前には重きを軽く軽きをば重く扱ふ味ひをしれ<sup>4)</sup>、また「点前には強みばかりを思ふなよ 強きは弱く軽く重かれ<sup>5)</sup>」に通じ、重軽・強弱と

いう複数の局面への対応が表れている。奥田正造が述べている。「精行とは行に精し<sup>くわ</sup>ということで、一々の動作に心がこもるの意味である。一挙一投足は勿論、一器を扱い一物を動かすにも、心の奥の鏡にかけて余裕のある姿をうつすことである。小さい室も広く胖かに住みなし、細く短い茶杓を拭うても、太く長い物を清むると同じ様な心をやどし、軽い羽筌を動かしても、おもやかなる扱いに心の莊重を表し、重い水指を運んでも易々として従容の心を現す等の習いによって、この精行が修練されるのである。かかる間に小を小とせず、乏しきを乏しとせざる道念が養われ<sup>6)</sup>...」ここに述べられているのは、重い道具と軽い道具、長い品と短い品、複数の物の扱いを経験してこそ把握できる「姿」である。「稽古を本番と思え、本番を稽古と思え。」とは、習い事の世界でよく耳にする訓辞である。複数経験してこそ、それぞれの重要さがわかってくる。どちらか一方だけでは手落ちであ

る。『茶話抄』にある「心ハはりて、業ハ和らかに<sup>やわ</sup> 7)」にも通じる。心の緊張は大切だが、点前所作は緊張せず固くならず和かに行えと述べている。緊張という、ある意味での心の固さと、そして動きの和かさ、複数の局面の把握がここにも働いていよう。

緩急もまた複数の要素であるが、緩急のある点前はよい点前、美しい点前だと評される。例えば亭主が建水を手にとり点前座に向かう時、初めの1歩はゆっくりと、2歩目からは1歩目より若干速く歩を進めると、めりはりが生まれるという。平点前で茶点て前の茶杓清めは3回だが、3回を同じ速さで漫然と行うのではなく2回目の脇を清める時は、1回目・3回目より心持ち速く行う、つまり遅・速・遅という変化をつけるとよいと聞く。茶碗清



めの際に湯を捨てた後、茶碗の内側と外側を茶巾で3回半拭く。最後の「半」は初めの3回より遅めに回すと緩急があってよい。その後、茶碗の内部のみを茶巾で清める際、ひらがなの「い」を書くように内側の側面を、「り」を書くように底を拭くと習うが、「い」は遅め、「り」はそれより若干速く行う。釜から柄杓で湯を汲む時には、茶筌通しや茶碗清めのためならば、釜の上部の方の湯を掬うが、茶点てのための湯は釜に深く柄杓を入れ、深水を汲むべく底の方から掬うのがよしとされる。このように、同じような所作を全く同様に行うのではなく、緩急をつけた方が美しい点前になる。

緩急は静と動という言い方もできる。「緩」を遅めの動きである「静」、「急」を速めの意味の「動」と表現できる。緩と急または静と動という複数の局面が、よりよい点前、美しい点前を演出することになる。深まり高まった心と姿、わびの姿勢を目指す中で、亭主は小さい、些細な一挙一動の中に、「複数の局面」の把握を心に置くべきである。そしてこのことが亭主の意が伝わる茶席作り、すなわち亭主から客へのコミュニケーション成立を、導くことに繋がるのである。

#### 【注】

- <sup>1</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.3. ルビは本書にある。
- <sup>2</sup>芳賀幸四郎『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2版）、p.225.
- <sup>3</sup>筒井紘一『茶の湯名言集』（京都：淡交社、2006年）、p.53 参照。
- <sup>4</sup>阿部宗正『利休道歌に学ぶ』（京都：淡交社、2000年初版、2004年第5版）、p.156.
- <sup>5</sup>同上、p.24.
- <sup>6</sup>奥田正造『茶味』（京都：方丈堂出版、1920年初版、2002年第2版）、p.19. ルビは本書にあり。
- <sup>7</sup>『茶話抄』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.261. ルビは筆者による。

### 7-3-5 道具の選択

複数の局面を心することの重要性については、道具の扱いのみならず、道具そのものの選択についても当てはまる。時代を顧みると、室町時代の足利義政の頃までは、とにかく唐物が主流を占めていた。その後珠光・紹鷗・利休を通じてのわび茶の成立の中で、和物も取り入れられるようになった。秀吉が信長とは異なった茶風を始めようと、和物を使用したことを前述したが、この動きの陰にはやはり利休のわびへの思考が大きく働いていたことは否めないであろう。「草庵茶の非常に大きな功績は、数寄者に和物への目を開かしめたことである！」との評もあり、ここでの「草庵茶」とはわび茶を指している。唐物、そして海外との貿易によって南蛮・南方の品も入り、それに和物が加わって、茶道具において正に複数の局面が生まれた。

珠光の「心の文」に和物への言及がある。ここで珠光は「初心の人躰かひせん物・しからき

物などをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事、言語道斷也<sup>(関)</sup>」と述べ、初心者が備前や信楽の道具を使うなど、もつてのほかであると戒めている。ここには、唐物一辺倒だった茶の世界に和物を活かすという新規性、いわゆる作意が窺われると共に、道具についてよく知らない初心者がこれを使うことはよくないと珠光の厳しい見解が表れている。「花紅葉ヲシラヌ人」に通じる見解である。唐物名物に触れる、味わうという経緯があつてこそ、和物のよさも認識できるのであり、そのような茶人、すなわち複数の局面を会得している人が和物を用いるべきだと珠光は言いたいのである。「唐物の美のよろしさを知り尽くした高度な鑑賞眼で一見粗雑に見える器物の中から生命溢れる造形美を選び出<sup>3)</sup>」すべきなのである。唐物の美と和物の美とを両方知って、さらなる高まりを目指すのである。「姿から心へ」、「心から姿へ」は螺旋状であると前述したが、道具を鑑賞する、選ぶ、扱うという「姿」においても然りである。さらに高度な、高尚な次元、わびへと向かうのである。

『山上宗二記』の中に、珠光の言葉として「藁屋ニ名馬繫タルカヨシ<sup>4)</sup>」とある。草庵の茶室で唐物を扱うことであると解釈されるが、わびた草庵と立派な唐物との対比・対照に焦点を当てている訳ではない。前述の「麁相」に通じるが、この珠光の言葉について芳賀幸四郎氏は「外面的な表現を粗相に、内面を豊かに充実させるべきことを、換言すれば、わびの真精神を説いたものにほかならない<sup>5)</sup>。」と述べており、立派な物とわびた物、両方の理解・鑑賞ができることを前提として茶席が持たれるべきである、と珠光は言いたいのだと解釈される。その結果、藁屋の次元も名馬の次元も超えた、さらなる高まりを、よりよい美を、より高度な趣を生み出すのである。

そしてこの複数の局面の把握から、さらなる高まりへとという動きは、「和漢之さ<sup>(境)</sup>かいを

まきらかす<sup>(紛)</sup>」という珠光の表現に如実に表れている。「漢」のよさも十分味わった人が「和」のよさもまた鑑賞でき、より高まった美、より高度な趣へと向かうのである。「漢」の美しさがわからずして「和」に手を出してはならない。利休についての山上宗二の記述を今一度振り返ってみると「宗易ハ名人ナレハ、山ヲ谷、西ヲ東ト、茶ノ湯ノ法ヲ破リ、自由セラレテモ、面白シ、平人ソレヲ其儘似セタラハ、茶湯ニテハ在ルマシキゾ<sup>7)</sup>」と記されている。利休は名人であるから、一般の常識を破る独創的・革新的な茶の湯を行っても趣がある。しかし名人でもない普通の人単に利休の真似をしたならば、邪道であると述べている。和と漢のような、複数の局面を含めての茶を知り尽くした利休のような人ならば許されることであり、そうでない人はまず和と漢を学ぶところから始めなければならない。

そしてさらに「和漢のさかいを紛らかす」という表現は、複数の局面の把握だけには留まらず、また和と漢とを融合し折衷する、といった単純な解釈では済まされない。日本の物と外国の物を両方取り入れ、両方のよさを活かしてさらなる高み、より高次元へと向かうことを指している。これこそわびへの道である。倉澤行洋氏が「唐風でも和風でもない

高次の風をつくること...唐風とか和風とかいうことにはもはや執しない、もっと自由な、主体的な茶境を『此道の一大事』としているのだ<sup>8)</sup>と述べている通りである。和も漢も超越している。超越の観念、守破離の「離」に通じるものがある。

言語を用いてもコミュニケーションの成立が難しい現代社会において、言語を用いなくてもそれが成立するのが茶の世界であり、何と感動的なことではないかと第6章で述べた。しかしながら、これを実現するためには、複数の局面を把握していることが望まれる。またその先には深まり高まった心、すなわちわびの心を求める姿勢が問われる。極めて厳しい道である。そこにまた茶の湯の奥深さ、生涯を懸けての修行という重みがある。

### 【注】

- <sup>1</sup> 筒井紘一『茶書の研究 数寄風流の成立と展開』（京都：淡交社、2003年）、p.101.
- <sup>2</sup> 「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』千宗室編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.3. 括弧は本書にある。
- <sup>3</sup> 田中仙翁『茶道の美学』（東京：講談社、1996年）、p.231.
- <sup>4</sup> 『山上宗二記』千宗室編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.101.
- <sup>5</sup> 芳賀幸四郎『千利休』、人物叢書 新装版（東京：吉川弘文館、1963年第1刷、1989年新装版第4刷）、pp.56-57.
- <sup>6</sup> 「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』、p.3. 括弧は本書にある。
- <sup>7</sup> 『山上宗二記』、pp.102-103.
- <sup>8</sup> 倉澤行洋『増補 藝道の哲学 宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第3刷）、p.114. 「此道の一大事」は「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』、p.3より。

## 7-4 コミュニケーションを成功に導く要因 — 作意

### 7-4-1 作意の定義

複数の局面の把握に加えて、コミュニケーションを成功に導く要因の第2点目として、作意を挙げたい。

作意は珠光の「我慢」に通じるものである。珠光は「心の文」の冒頭で「此道、第一わろき事ハ、心のかまむかしやう也<sup>1)</sup>。」と述べ、我慢すなわち驕り高ぶること、我執すなわち自分の考え・やり方に執着することを戒めている。しかし後半の方で「かまんなくてもならぬ道也<sup>2)</sup>。」と、一見矛盾する見解を呈している。だがこれは矛盾ではなく、二つの我慢は意味が異なるのである。前半の我慢は作意の方であり、悪しき意味での我慢である。一方後半の我慢は創意・工夫を以て自分らしさを表出するという、よい意味での我慢であり、これこそ「作意」だと定義付けられよう。そのような作意を働かせて亭主は茶席を行

う。前述の禅の教えに即して述べれば、真心・無心・絶対心に至った自己、すなわち高まった心・深まった心を得た自己を無我と言う。自我を否定して生まれる無我、その無我の我慢から生まれるものが作意である。人の心のありようによって、作意か作意かが決まってくる。珠光は、茶人にはこれがなくてはならぬと論じ、作意の重要性を語っているのだ。茶人としてのアイディア・創造性が問われる。谷川徹三氏が「作意とは創意であり、創造的な心の働きである<sup>3</sup>。」と述べている通りである。

珠光より時代が下る山上宗二は茶人の分類を行っている。「目利<sup>(めきき)</sup>ニテ茶湯モ上手、數奇<sup>(すき)</sup>ノ師匠ヲシテ世ヲ渡ルハ<sup>(ちやのゆしや)</sup>茶湯者ト云、一物モ不持、胸ノ覺悟一、作分一、手柄一、此三箇條ノ調タルヲ侘數奇<sup>(わびすき)</sup>ト云々。唐物所持、目利モ茶湯モ上手、此三箇モ調ヒ、一道ニ志深キハ名人ト云也<sup>4</sup>。」この中の「作分」とは作意のことであり<sup>5</sup>、茶の湯においては作意を以て臨むことが、わび數寄、また名人とされる資格の一つとなっているのである。宗二は「作分」ではなく「作意」という用語自体をも別の個所で用いている。「茶湯ノシヤウ習ハ<sup>(仕様)</sup>古ヲ專ニ用ヘシ、作意ハ新キヲ專トス<sup>6</sup>」とある。茶の湯における古いことと新しいことの両方に、宗二は重要さを見出していると筆者は解釈する。『長闇堂記』にも「只浦山敷は目利の人、作意ある人、是數奇の根本たるへし<sup>7</sup>」とある通り、江戸時代においても作意のある人は高く評価されている。茶道研究家、神津朝夫氏は宗二の分類を次のようにまとめている。

茶の湯者：唐物を持ち、目利きで、茶の湯上手、茶の湯の師匠

4 畳半の茶室を持つ（新しい発想があるかは不問）

侘數寄：唐物は持たないが、新しい発想があり、3畳の小間の茶室を持つ

（目利き、茶の湯の上手であるかは不問）

名人：唐物を持ち、目利きであり、茶の湯も上手、しかも

新しい発想があつて志が深く、4畳半の茶室を持つ<sup>8</sup>

神津氏は、目利きとは茶道具だけでなくすべての善悪の鑑定のできることを指すと説明を加え、また作意を「新しい発想」と言い換えている。創意・工夫から生まれる新しさに焦点を当てていることがわかる。だが作意とは単に新しい発想だけを指す訳ではない。新しさだけが問題とされるなら、作意でも構わないからである。

作意においては、単に今までと違ったことをする、新奇さを出ることが大事なのではない。「作意は、個性的独創的であつて、しかも普遍的妥当性を持ったものでなければならぬ<sup>9</sup>。」との評にある通り、多くの人が認めるよき、普遍的な価値を備えていなければならないと筆者は考える。神津朝夫氏は作意を「新しい発想」と表現しているが、意味のある新しい発想であるべきで、単に前のやり方とは異なっている、変化した、斬新だと独

善的に終わったのでは無意味である。「利休は過去の人でありながら、過去の人ではないのである<sup>10</sup>。」との評に、筆者も同意する。利休は過去の人であり、また現代の人でもあるのだ。現代にも生きる趣向を茶において多々残した、すなわち時代を超えた作意を多数働かせているからである。作意は、その場限りの一時的な流行ではない。後の時代でも生きるだけの価値がある創意・工夫であると筆者は解釈する。

後世ということを考えると、作意と伝統との関係も浮かび上がってくる。伝統とは単に古いものを守ることによって伝承されるのではなく、工夫と創意によって常に活性化され、発展しながら伝えられるものであろう<sup>11</sup>。工夫と創意は作意の類義語と受け取られるが、作意に基づいて伝統を息づかせ、そのことによって茶は真に生きたものとなる。時代に生きる茶、時代に順応する茶、時代と共にある茶の湯にこそ意味がある。古きを知り、新しきに挑み、また古きを振り返り、よいものを生み出して、すなわち茶を行う人の作意次第で、無限の可能性が生まれるのだ。単に「古めかしくありがたいもの」で終わらせてはならない。古いものを温め、守り、そこから学び、新しくよいものを生み出していく、この作意の背後には大いなる努力が伴う。

桑田忠親氏は「作意の土台になるものは稽古である。不断の稽古なくして新しい作意は生まれない<sup>12</sup>。」と述べており、改めて「姿から心へ」すなわち稽古・修行の段階、そして「心から姿へ」すなわち作意の段階という、段階を追っての努力が思い起こされる。作意とはその場の思いつきではなく、長い修行の積み重ねの中から育まれてくるものであろう。室町時代の珠光、そして安土桃山時代の山上宗二、江戸時代の『長闇堂記』、そして神津氏・桑田氏という現代の学者の言も辿ってきた訳だが、結局どの時代においても、作意は茶人が心に置くべきものであることがわかる。

作意が後世にも生きる、すなわち伝統に通じるものであり、またそこに多大な努力が必要だとの考え方は、T.S. エリオットによる伝統についての言及と、重なる部分があると筆者は捉える。「それ（伝統）は相続するなどというわけにゆかないもので、もしそれを望むなら、ひじょうな努力をはらって手に入れなければならない<sup>13</sup>。」伝統を守り、存続させていくことは苦行なのである。茶における作意を持つ姿勢と共通している。そしてこの厳しい努力・練磨の先には、常なる目標としてのわびの心があるのである。「本当の茶人とか茶の名匠とかいわれるような人は、佗数寄的に自由な作意をもった人である。…利休が到達した茶の境涯は、佗数寄的に自在に作意するところであるともいえる。…『心の一つかね』といわれるものは、そういう作意であるともいえます<sup>14</sup>。」作意が茶人の生涯の目標である「心の一つかね」、深まり高まった心、わびに繋がる重要な要因であることが示されている。そして、茶の湯のコミュニケーションを成功に導く要因の一つは作意なのだというメッセージも含まれていると筆者は解する。

## 【注】

- <sup>1</sup> 「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.3. 本書では括弧で漢字表記があるが、ここでは省略する。

- <sup>2</sup>同上、p.3.
- <sup>3</sup>谷川徹三『茶の美学』（京都：淡交社、1977年）、p.38.
- <sup>4</sup>『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、pp.53-54. 括弧は本書にある。
- <sup>5</sup>桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、初版1976年、再版1977年）、p.356にて、作分が作意と同義であることを述べている。
- <sup>6</sup>『山上宗二記』、p.94. 括弧は本書にある。
- <sup>7</sup>『長闇堂記』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.380.
- <sup>8</sup>神津朝夫『千利休の「わび」とは何か』（東京：角川書店、2005年）、pp.87-88. に基づく。
- <sup>9</sup>久松真一『茶道の哲学』（東京：講談社、1987年第1刷、1994年第12刷）、p.169.
- <sup>10</sup>同上、p.12.
- <sup>11</sup>岡本浩一『茶道を深める』（京都：淡交社、2008年）、p.50. において同様のことを述べている。
- <sup>12</sup>桑田忠親『千利休研究』、p.394.
- <sup>13</sup>T. S. エリオット『伝統と個人の才能』英米文学論双書12、安田章一郎 訳注（東京：研究社、1967年）、p.7. 括弧は筆者による。
- <sup>14</sup>久松真一『茶道の哲学』、p.181.

#### 7-4-2 茶室・点前・道具の変容に見る作意

茶の湯は長い歴史を経てきた。『南方録』には「四疊半座敷ハ、<sup>(村田)</sup>珠光の作事也 <sup>(しんのざしき)</sup>眞座敷と<sup>(とりのこがみ)</sup>て鳥子 <sup>(しろはりつけ)</sup>紙の白張付、杉板のふちなし天井、小板ぶき、<sup>(ほつぎようづくり)</sup>寶形造、<sup>(いつけんどこ)</sup>一間床也、秘<sup>(圓)</sup>蔵の圓悟の墨跡をかけ、臺子をかざり給ふ、其後、炉を切て、弓臺を<sup>(おきあわせ)</sup>置合られし也、<sup>(おおかた)</sup>大方、書院のかざり物を置れ候へども<sup>(ものかず)</sup>物數なども畧ありし也<sup>1)</sup>とある。足利義政に代表される書院の茶をかなりわびたものとしていることがわかる。この記述は、書院ならば山水画等が描かれた張付床を無地の白紙張にしたこと、書院なら格天井であるところを縁なしの天井としたこと、また本来瓦葺である屋根をこけら葺にしたことを、珠光の工夫だと強調したいのであろう<sup>2)</sup>。荘り物の数も減らしていることがわかる。『南方録』のこの記述のすぐ後には、床の掛け物が三幅対が正式のところを二幅対や一幅にしたとあり、さらに、床前の荘りも簡略化していると述べている<sup>3)</sup>。珠光の作意を見ることができる。

武野紹鷗は「枯カシケテ寒カレ<sup>4)</sup>」という連歌師心敬の歌を愛誦し、この歌の心を実践するごとく、珠光のわびをさらに進めた。紹鷗の時代には4畳半座敷が普及する。『南方録』

には次のようにある。「張付を土壁にし、木格子(ごうし)を竹格子にし、障子の腰板をのけ、床の(塗 縁)ぬりぶちを、うすぬり、又ハ白木にし、これを草の座敷と申されし也<sup>5)</sup>」。珠光よりも簡略化していることがわかる。

そして千利休はさらにわびを進めた。「宗易ハ又草茨の小座敷を専にし、わびを致されし故、紹鷗の座敷も、書院と小座敷の間の物ニ成し也<sup>6)</sup>」とある。茶室の縮小化については後に詳しく述べるが、紹鷗の座敷さえも、書院とわびの小座敷との中間くらいにしか見えないほど、利休はわびを進めたと述べている。紹鷗からさらなる革新がある。日本語の特徴である省略の美がここにも共通しているのではないか。茶室を造る素材が簡素化されたこと、荘り物の数が減ったことは、決して、貧しい、不十分だという意味ではない。そこに新たな美を作り出している。肯定的な意味合いであり、プラス要素をもたらしている。

秀吉の下での新たな茶風、また「複数の局面の把握」の中の「道具の選択」の項でも述べたが、信楽や備前といった和物の花生けや水指を使い始めたことも、利休の作意の表れであると受け取られる。一般の民家にある自在鉤をも使用し、井戸の木地の釣瓶を水指とし、民間の携帯用食器である面桶（木の曲げ物ワツパ）を水こぼしとして使い、これらは皆、武家社会ではなく、一般庶民の日常生活の道具を茶器に応用した例である。鉄製・陶製が主だった蓋置に竹を用い、茶席を非常に庶民化していることがわかる。茶室の素材や荘り物のみならず、茶道具にも一層の革新があり、作意を感じさせる。これらの茶道具は、紹鷗時代にも芽生えが見られたが、利休に至って、さらに頻繁に現れることになる。

茶碗についても、従来为天目茶碗に対して、楽長次郎に焼かせた形の整った、いわゆる「利休型」の重厚な楽茶碗を使うようになる。また江戸時代の『茶話指月集』には次のように、伊豆の菰山での竹花筒の記述がある。『茶話指月集』は、宗旦四天王の一人である藤村庸軒の女壻に当たる久須見疎安の著作とされ、宗旦が庸軒に語った、利休を中心とする

逸話を収めたものである。「此ノ筒菰山竹、小田原カイ歸陣時ノ、千ノ少庵へ土産也<sup>7)</sup>」。小田原の役の帰りに息子少庵への土産として、利休が自分で作っている。竹の花入れは『江岑夏書』に「利初二候<sup>8)</sup>」とある通り、利休が初めて使った。極めて斬新であり、それまでの伝統に対して挑戦的であると筆者は解する。『源流茶話』には竹の花入れについて、さらなる説明がある。「利休に到り、竹にて尺八壹重切・貳重切品々の花生を作意せられ候、今世に賞ぜる園城寺・音曲ランキョク貳度之かけなどのたくひ、皆利休の作ニ而候<sup>9)</sup>」取りも直さず利休の作意の表れであり、事実「作意」と明確に記載されている。竹そのもの、また竹細工職人の減少に因り、今でこそ竹の花入れは高級品であるが、当時のこの地域ならば竹藪はどこにでもあったという。身近な中から茶道具に相応しい素材を巧みに見出し、製作した利休の作意である。

山上宗二も利休について「宗易ハ京ニテ一疊半ヲ始テ作ラレタリ、當時ハ珍敷ケレトモ、是平人ハ無用也、宗易ハ名人ナレハ、山ヲ谷、西ヲ東ト、茶ノ湯ノ法ヲ破リ<sup>10)</sup>」と述べ、

その革新性を衝いている。革新性の根本にあるものは、利休の持つ作意である。第5章において、秀吉が信長とは違った茶風を打ち立てるために、和物や庶民生活の道具を茶に用いたことを述べた。しかしこの違った茶風、すなわちわび茶の展開は、利休の存在があればこそ可能になったのである。「茶ノ湯ノ法ヲ破」ったのは利休であり、従来見られなかった茶道具のアイデアを表したのも、利休である。

山上宗二にも作意があった。井戸茶碗の採用である。「是天下一ノ高麗茶碗、山上宗二見出テ名物二十<sup>ニナル</sup>」とある。朝鮮では民衆が飯、どぶろくを盛るのに使っていた食器を宗二が高く評価し、名物になった井戸茶碗の説明である<sup>12</sup>。つややかな滑りのよい天目茶碗の触感とは正反対の、ざらついた手触り、一般民衆の日常生活の食器という出所、従来の道具とは全く違ったところに着目し、価値を見出した宗二には作意が見られる。

珠光・紹鷗・利休へと作意の例を追ってきたが、現代でもその例を挙げるができる。伝統的な点前の一方で、歴代の宗匠は新しい点前をも作り出している。例えば明治時代に裏千家第11代宗匠玄々斎が、立礼という新たな点前を考案した。京都での万国博覧会(1872年)の際、外国人にも椅子に座って茶の湯を楽しんでもらおうとの考えからである。畳の上で座って行う茶が伝統的だが、このようにテーブルと椅子を使うことも可能である。

茶の湯の初心者が1番初めに学ぶ点前である盆略点前も、作意の表れと受け取られる。これは「立礼式と共に裏千家独特の点前<sup>13</sup>」であり、第13代宗匠圓能斎の創案による。他の多くの点前と著しく異なっている点は、柄杓を使わなくてもよいことである。鉄瓶と呼ばれる薬缶に相当する物を用い、鉄瓶がなければ事実薬缶でもよい。火鉢に鉄瓶を乗せるのが好ましいが、火鉢がなければ釜敷か何かの上に単に置いてもよい。丸盆の中に棗、中に茶巾・茶筌・茶杓を仕組んだ茶碗を乗せ、他に用意する物は建水、それだけである。

またこの点前を行う場所であるが、畳の上でなくてもよい。一般的な家庭のリビングルームやオフィスでも気軽に、手軽に楽しめる。しかしながら点前の内容を見ると、基本的な所作と流れは十分に含んでおり、立派な一点前となっている。畳の茶室でなくても、柄杓を使わなくても、十分に茶の湯は可能であることを示した、圓能斎の作意が窺われる。

茶道具にもまた伝統を重んじる一方で、新しい作品が生まれている。例えば裏千家第16代宗匠坐忘斎は和親棚という新たな棚を考案した。三つの棚が入れ子式になっており、茶の湯の点前をする棚でありながら、デスクとして、またインテリアとして洋間でも十分活きる。三つをそれぞれ個別に使うこともできるし、コンパクトに入れ子として収めることもできる。棚について言えば、多くの宗匠がそれぞれ好みの棚を考案しており、枚挙にいとまがないが、ここで筆者が特に和親棚を例に挙げたのは、洋間にも合う棚だからである。和にも洋にも活用できる応用性・柔軟性を備えている。畳敷きの、いわゆる和室が急激に減少し、逆に洋間が家屋の中心となってきた現在の、洋間にも適用できる棚が考案されたことの意味合いは大きく、家元の作意が窺われる。茶室、点前、そして道具の変遷の中に、各家元の作意の例が見られる。作意を働かせることが茶席の趣向を生み、亭主の意図が伝わる茶席作り、すなわちコミュニケーションの成立に繋がると言えよう。



## 【注】

- 1 『南方録』「棚」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定）、p.52. 括弧は本書にある。ただし「寶形造」のルビは「ほつぎやうづくり」とあり、2番目の仮名は「つ」と記載されているが正しくは「う」かもしれない。この冒頭に珠光が4畳半を始めたとあるが、それより以前の1483（文明15）年、足利義政が慈照寺（銀閣）を建て、その東北の東求堂に4畳半座敷、同仁齋を設け、これが茶室の始まりであるとされている。よって、この冒頭の記述は正しくないとされる。
- 2 熊倉功夫『南方録を読む』（京都：淡交社、1983年初版、1991年第5版）、pp.149-150. 参照。
- 3 『南方録』「棚」、p.52.
- 4 『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.97. にて心敬のこの歌を記している。
- 5 『南方録』「棚」、p.52. 括弧は本書にある。
- 6 『南方録』「棚」、pp.52-53.
- 7 『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.206. ルビは本書にある。『茶話指月集』の説明は、本書pp.247-248. 参照。
- 8 『江岑夏書』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.73.
- 9 『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、pp.416-417. ルビは本書にある。
- 10 『山上宗二記』、p.102.
- 11 同上、p.64. ルビは本書にある。
- 12 井口海仙 編『茶道用語集』（京都：淡交社、1962年初版、1991年第19版）、p.18. では井戸茶碗の説明として朝鮮の「飯茶碗」であったとの記述だが、芳賀幸四郎『安土桃山の文化』日本歴史新書（東京：至文堂、1964年初版、1965年第2版）、p.174. では「どぶろく茶碗」とされている。
- 13 千宗室（裏千家第15代宗匠）『初歩の茶道 割稽古』裏千家茶道教科1（京都：淡交社、1976年）、p.81.

### 7-4-3 茶室の広さの変容とコミュニケーション

茶室の広さの変容にも作意が働いていると考えられ、またこの変容が言語・非言語の両コミュニケーションにも深く関わっていることをここで述べる。平安時代の代表的建築様式は寝殿造であった<sup>1</sup>。部屋の仕切りはなく、板敷きで畳もまだない。単にがらんとした広い空間であったと想像される。その後鎌倉・南北朝・室町時代初期にかけて書院造が発

達した。玄関・床の間・襖等があり、減少してはいるが現在でも見られる和式住宅の様式である。床の間には押板床・書院・違い棚があり、部屋は板敷きに代わって畳が敷かれる。書院造の完成は桃山時代とされている。部屋が仕切られることになり、寝殿造のただっ広い空間とは違って、人と人とが同じ場所にいるという意識が生まれることになる。

茶の観点から見ると、南北朝時代には今日のような茶室はまだなく、書院造の建物の中に「会所」と呼ばれる部屋があった。会所は接客の場であると共に和歌・連歌の会が持たれ、また畳を上げて猿楽能が行なわれることもある諸文芸・芸能共通の場であって、茶会もそこで催された<sup>2</sup>。この会所の中で点前がなされることはなく、茶の振る舞い方は、今日で言う点て出しである。廊下に茶釜が置かれ、そこで点てて会所に運んでくる。しかし室町時代に入ると点茶所と喫茶所が結合し始める。台子を据えて同じ部屋の中で点茶も喫茶も行う。前の時代よりも亭主と客が近くなった訳であり、客は亭主の姿を眼前で見ることが出来る。客同士も仕切りのない部屋よりは遙かに親近感があり、お互いの顔が見えて話もし易く、すなわち言葉によるコミュニケーションも容易になったと想像される。

上記の変遷を経て足利義政の室町時代、大広間での書院台子による茶の湯が発達した。

「<sup>ここのま</sup>九間すなわち 18 畳敷、<sup>むま</sup>六間すなわち 12 畳敷<sup>3</sup>」という広い一室である。しかし一方で、これらよりも格段に狭い、4 畳半での茶が始まった。珠光のわび茶である<sup>4</sup>。その影響として、茶を少数の親しい人々による心温まる集いに転化させたと見ることが出来る<sup>5</sup>。

珠光から武野紹鷗を経て千利休の時代になると、3 畳、2 畳、1 と 4 分の 3 畳 (1 畳台目) と、さらに茶室は狭くなる。この安土桃山時代には、屋敷の中の一部としての茶室ではなく、それ自体が独立した建物としての茶室が生まれた。現存している代表的な 2 畳間は京都の山崎にある妙喜庵待庵で国宝に指定されているが、その作者は利休である<sup>6</sup>。利休が活躍する前の茶会では、4 畳半に客は一人か二人の割合であったところが、利休が最も活躍した北野大茶湯の 1587 (天正 15) 年から没する 1591 (天正 19) 年の間に急激に茶室は狭くなり、一人当たりほぼ半畳になった<sup>7</sup>。短期間での大きい変化である。

この茶室の縮小化をわびへの変遷と見るのは一般的な解釈であるが、なぜ狭くしたのかと考える時、コミュニケーションの観点が浮かび上がってくる。狭くなれば、より親近感が生まれる。「狭いお茶室ですと、それこそ、膝と膝とが近づき合うと同時に、心と心もかよい合う。… 肝胆相照らしまして、仲がよくなる。… 狭い茶室でやるということはですね、何も物好きで茶室を狭くしたんじゃないんです。人間の心と心とをぴったり触れ合うように、狭い所でやる工夫をしたわけです<sup>8</sup>。」狭くしたことには相応の理由があるのだ。人と人とが近くなり、ただっ広い部屋より遙かにコミュニケーションが図り易くなる。相手の顔を見て話す言語コミュニケーションである。通常茶会はもとより、前述の密談のような場においても、狭い茶室の方が他者を排しての話し合いに適していたと思われる。

利休は茶の湯の空間を小さくすることによって、皆が近くに寄り、すなわち寄合性が生み出され、ひいては主客間の直心の交わりがもたらされると考えたのではないか<sup>9</sup>。近くにいれば親近感が増す。意を伝え易い。「主客トモニ直心ノ交ナレバ<sup>10</sup>」とは『南方録』にある表現だが、心を伝え合い心を交える、正にコミュニケーションに他ならない。利休は

革新的である。「1種でも唐物をもっている者はみな4畳半座敷を造った。しかし利休だけは唐物を使う茶室にも3畳座敷や2畳半の小座敷を造った<sup>11)</sup>。」という。道具に拘泥せず、道具よりも人が集うということを大事にしたと考えられる。また利休は自分が関わる茶室だけを小さくした訳ではない。『山上宗二記』には「関白様御代ニ當テ十ヶ年ノ内、上下トモ三疊敷、二疊半敷ヲ用<sup>12)</sup>」いるようになったとある。これは利休が秀吉の茶頭となった1582(天正10)年の記録であるが、その頃より3畳敷・2畳半敷の小間の茶室が、利休の影響を受けて上下を風靡するようになったと述べている。秀吉に仕える自分の管轄だけではなく、より広い範囲に茶室の縮小化をもたらしたのだ。

また、ごく近い位置から人に見詰められると、自分の振る舞いを美しく丁寧にしよう意識するのではないか<sup>13)</sup>。客のすぐ近くで点前をすとなれば、適度な緊張感が生まれ、美的な所作で美味しい茶を差し上げようとの思いが高まる。このことは、歓待の意を美しい所作と美味しい茶という非言語要素を通して客に伝えようという亭主のメッセージ、すなわち非言語コミュニケーションに繋がる。茶室の縮小化は言語コミュニケーションのみならず、非言語コミュニケーションにも大きく寄与していることになる。狭いが故に亭主に近くなる客の側にも、また緊張感が生まれる。芸術学研究者、岡本文音氏が述べている。「利休は人と人のかかわりに、緊張感のある親密さを求めたといえる。そして、利休によって茶室が狭小化されるにしたがって、膝を突き合わせるように主客の距離は縮まり、より一層親密さが増すとともに、緊張感も増したであろう。…利休の侘数寄においては、緊張はけっして負の材料ではなかったと考えられる<sup>14)</sup>。」筆者もこの論に賛成する。主客は狭い茶室、すなわち近い距離間に位置し、相互の親密さと相まって適度の緊張感がよい方向に働いていたと考えられる。

畳の発達も重要である。部屋全体に畳が敷き詰められ、板敷で各自が円座に座る寝殿造の部屋に比べれば遥かにくつろげることになり、そのことが「一座建立」にも繋がったのではないか<sup>15)</sup>。円座を使用していた時には、それぞれの円座に一人ずつ座る訳であるから、個々となる。場の共有という感覚は少ない。しかし畳ならば一つの部屋に敷き詰められているので、個々の畳という訳ではなく、同じ床を皆が共有しているという意識も生まれる。

畳がもたらした文化への影響は非常に大きい。茶の湯はもちろん、生け花や書道も、畳あればこそ発達した文化である。また寝殿造から書院造への変化は、椅子による唐風茶礼から畳に座る倭風茶礼への変化でもある<sup>16)</sup>。単なる借用文化ではない日本の独自性・個性も、畳の使用に表れている。畳の発達は文化史の上で画期的なことであったと言えよう。

畳の長さについては、その短辺は京間ならば約95cm、江戸間では約86cmである。この距離は、人間が相対した時に目を合わせなければ生理的に興奮しなくて済むぎりぎりの距離である、と社会心理学者、岡本浩一氏は説いている<sup>17)</sup>。これ以上接近すれば圧迫感を感じるのだ。コミュニケーションにも支障を来すことになろう。氏の社会心理学的観点からしても、畳は合理的に、コミュニケーションに適するように作られていることがわかる。

本章末に、村井康彦氏による茶室の規模の表を挙げる<sup>18)</sup>。この表は、『松屋会記』(天正以後)と『宗湛日記』に基づく茶室の所有者・亭主と茶室の広さを提示している。『松屋会記』では総計82の茶室が挙げられている。そのうち台目・半畳も含め——例えば1畳と言

った時、純粋な1畳間の他に1畳台目・1畳半も含めて数えるものとし、以降の記述もこのように行う——1畳の茶室は4室、2畳は29室、3畳は22室、4畳は24室、5畳が1室、6畳が2室である。2畳が29室と1番多く、全体の35%を占めている。2畳から4畳が総計75室で、全体の9割以上である。5畳・6畳は極めて少なく、4畳半以下が圧倒的に多い。茶室の狭小化が表れている。

『宗湛日記』には総計123の茶室が記載されている。1畳はなく、1畳半が1番小さい。その1畳半が5室、2畳が29室、3畳が58室、4畳が30室、5畳が1室である。『松屋会記』におけるのと同様に、2畳から4畳の間に集中しているが、『松屋会記』とは違って3畳の58室がずば抜けて多く、全体の5割弱を占めている。

また、山里2畳、山里4畳半、黄金3畳、5畳と、他に例を見ない変わった茶室を所有していたのは、為政者の秀吉である。利休が近くに仕えていたことを考えると、このような工夫ももっともかと頷けるが、『宗湛日記』にある96名というかなりの数の茶人の中で、かような変わった茶室を持っているのは秀吉のみである。いずれの会記からも、こじんまりとした茶室が多いことがわかり、5畳間・6畳間は例外的存在と言ってよい。コミュニケーションという観点から、茶の空間の変容による効果を見ることができる。また筆者が指摘したいのは、徐々に狭くなっていく茶室の変容の陰に、珠光・紹鷗・利休、特に利休の深い作意を感じ取ることができるのではないかということである。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 村井康彦『茶の文化史』（東京：岩波書店、1979年初版、1987第9刷）、p.89. 参照。
- <sup>2</sup> 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977日本放送出版協会より刊行）、p.30 参照。以下の茶のあり方については本書 pp.30-31. 参照。
- <sup>3</sup> 芳賀幸四郎『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年）、p.150. ルビは芳賀氏による。
- <sup>4</sup> 本論文 7-4-2、注1で指摘したように、珠光より以前から4畳半座敷はあった。
- <sup>5</sup> 芳賀幸四郎『千利休』人物叢書、日本歴史学会編集（東京：吉川弘文館、1963年第1版第1刷、1989年新装第4刷）、p.52. 参照。
- <sup>6</sup> 村井康彦『千利休』、p.253. で待庵の作者は「利休以外に考えられない。」と述べている。
- <sup>7</sup> 熊倉功夫『茶の湯—わび茶のこころとかたち』、教育者歴史新書<日本史>81（東京：教育社、1977年第1刷、1991年新装第7刷）、p.74.
- <sup>8</sup> 桑田忠親『茶道の歴史』（東京：講談社、1987年第1刷、1993年第18刷）、p.53.
- <sup>9</sup> 村井康彦『茶の文化史』、p.191.
- <sup>10</sup> 『南方録』「滅後」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交会、1956年初版、1967年500部限定）、p.264.
- <sup>11</sup> 成川武夫『千利休茶の美学』（東京：玉川大学出版部、1992年）、p.137. 成川武夫氏は哲学者である。
- <sup>12</sup> 『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交会、1956年初版、1967年500部限定）、p.101.
- <sup>13</sup> 熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年第1刷）、

p.60. 参照。

<sup>14</sup>岡本文音『茶の湯と音楽』（京都：思文閣出版、2012年）、p.335.

<sup>15</sup>村井康彦『茶の文化史』、p.93. 参照。

<sup>16</sup>同上、p.94.

<sup>17</sup>岡本浩一『心理学者の茶道発見：癒しと自己の探求』（京都：淡交社、1999年）、p.53.

<sup>18</sup>村井康彦『千利休』、pp.196-197.

#### 7-4-4 躡り口

茶室に欠かせない躡り口もまた、利休の作意の表れとしてここに挙げる。安土桃山時代になると、本屋敷とは別の、独立した茶室が見られるようになる訳だが、ここではその茶室の躡り口について述べたい。躡り口は千利休が河内、枚方の舟の入り口からヒントを得て考案したという熊倉功夫氏による説がある<sup>1</sup>。この説は『茶道四祖伝書』にある「大坂ひらかたノ舟付ニ、くゞりにて出入りを侘て面白とて、小座シキをくゞリニ易仕始るなり<sup>2</sup>」という記述に基づいている。川舟の入り口が小さいため、人々が頭を低く下げて出入りする様子わびた風情であると利休が興味を持ち、茶室に採用したとのことである。舟の板1枚の下は水底である。船にまつわる呉越同舟という言葉がある。小寄せの茶会や茶事であれば、犬猿の仲の二人を敢えて招くということはしないであろうが、茶室にひと度入れば、そこが別世界であることは事実である。仮に呉越の関係だとしても、俗世から離れた全く別の世界に共におり、同じ船の中にいる運命共同体のような意識も生まれよう<sup>3</sup>。茶に参加する者の共生が感じられる。

上と同じく発祥の地は河内、枚方ではあるが、躡り口は舟ではなく、漁夫の棲み家の小さい戸口から利休が思いついたという桑田忠親氏の説もある<sup>4</sup>。利休が活躍する前は、高貴な招客は貴人口から、お供の下人は躡り口から出入りしていた。しかし利休が信奉する仏教的無差別人生観に基づき、人間の身分の上下に関係なく、すべての招客が躡り口から一様に入出入りすることになったとの説がある<sup>5</sup>。仏教観に由来するか否かは判断しかねるが、茶に参加する者の共生は確かに表れていると筆者は解する。

これら熊倉氏・桑田氏の利休説に対して、村井康彦氏は躡り口を利休の創案とする確証はないと述べている<sup>6</sup>。しかしながら、氏も躡り口が「利休によって意識的に用いられ茶室の構成上不可欠の要素とされたことはまず間違いない<sup>7</sup>。」と結んでいる。いずれの説が正しいにせよ、利休によって躡り口の使用が意識化され、その後茶室に必須の存在として、400年以上経った現代においても生き続けている訳であるから、すなわちよき物としての評価が続いている訳であるから、作意の例と考えてよい。作意とは、思いつきによる一時的な流行ではなく、後にも生きる価値を持つものであることを前述した。

茶室が次第に縮小化されていったことを先般指摘したが、躡り口は狭小に変化したのではなく、もともと小さく造られている。茶席に招かれた客は、からだの大小に拘わらず一様に、この非常に小さい口から出入りする。頭を打たないように注意しながら皆が同じよ

うに身を低くし、いわば不自然な苦しい姿勢を客の全員が経験するのである。またこの狭い出入り口にかがんで、自分が露地を歩くのに履いてきた草履を次の客の邪魔にならないように脇によけるのも、窮屈な所作である。かような少々辛い姿勢での同じ経験を通じて、客は心的に近くなり、自分たちは一緒なのだ、仲間なのだという心の繋がりが生まれるであろう。しかも身分の上下を問わず、前述の刀掛けに刀は預け、一切武器は持たない。心を許した、安全性を持った、この茶の湯独特の入室の仕方は、仲間意識を生み出すことになり、その後に行われる茶席の客同士の円滑なコミュニケーションの前座となる行為であるとも言えよう。もし躡り口というものがなく、茶室の出入り口が通常の部屋の出入り口と同じ大きさだとする。身をかがめることもなく、無理のある窮屈な姿勢をとることもなく、茶室に全く楽に出入りできるとしたら、現在のわれわれだって、席入り及び退席の際の仲間意識・親密性は、それほど感じないに違いない。躡り口を用いる意義は非常に大きいと考えられる。

茶室の縮小化に躡り口が加わり、なお一層親近感・仲間意識が強まり、客の間での意の伝え合い、すなわちコミュニケーションを図り易くすることに繋がっていたと考えられる。そして考案は利休か否か確定できないとしても、躡り口使用を意識化させたこと自体に、利休の作意が働いていると言えよう。

#### 【注】

<sup>1</sup>熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化（東京：左右社、2009年）、p.121.

<sup>2</sup>同上、p.121.

<sup>3</sup>同上、pp.121-122. 参照。

<sup>4</sup>桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版）、p.392.

<sup>5</sup>同上、p.392. 参照。

<sup>6</sup>村井康彦氏『茶の文化史』（東京：岩波書店、1979年初版、1987年第9刷）、p.191. 参照。

<sup>7</sup>同上、p.191.

### 7-4-5 利休の逸話に見る作意

#### 7-4-5-1 <sup>へちかん</sup>ノ観の落とし穴<sup>1</sup>

千利休にまつわる逸話は多々あるが、非言語コミュニケーションの観点から逸話を見てみることもできる。山科のノ観という変わった茶人がいた。武野紹鷗門下であり、手取釜一つを持ち、それで雑炊を煮て、その後同じ釜で茶を楽しむという徹底したわび茶人である。「ノの字人の字の偏はかり也、人に及ハぬと云意とそ？」と『老人雑話』にあるように、「ノ」は「人」の字の偏、すなわち半分でしかなくすべてではない、よって人に及ばないという意味であり、奇行に富んだいわゆるすね者である。しかし北野大茶湯では、「一間半の大傘を朱塗ぬりにし、柄を七尺計にして、二尺程間をおき、よしかきにてかこひし、照

日にかの朱傘かゝやきわたり、人の眼をおとろかせり<sup>3)</sup>と『長闇堂記』に記され、すなわち経堂の東の原に直径約 2.7m の朱塗の大傘を立て、周囲をふき垣で囲んで釜を懸け、この趣向が皆を驚嘆させ、秀吉の称賛をも受けたという。

このノ観が利休を茶事に招いた際の逸話は、茶人の間ではよく知られている。招かれた利休がノ観の家に行くと、露地のくぐり戸の前に簀の子が敷いてあり、その上に不自然に土が盛り上がっている。利休はノ観が悪戯でも仕組んだのであろうと思いつつも、その土の上に敢えて乗った。簀の子の下は落とし穴であり、穴の底は泥水で、その中に利休は落ち込んだ。からだも着物も当然汚れ、驚いた顔をしたノ観が家から出てくる。準備してあった風呂に利休を案内し、新しい着物に着替えさせ、茶室で茶をもてなした。利休は快く茶席を楽しんだ。この話を聞いた人が、穴があることを知りながらどうして落ちたのかと利休に尋ねる。すると利休は、穴に落ちなかったら亭主の心づくしを無にすることになると答えたという。

この逸話は亭主の作意、それによって始まった主客のコミュニケーションが、見事に成功した例である。落とし穴を作り、風呂の準備をするという亭主ノ観の作意がある。またそれを客の利休がよく酌み取っている。利休はノ観に向かって、なぜ落とし穴などを掘ったのかと言葉で尋ねてはおらず、穴があったことは初めから知っていたとも言っていない。言語行為は何もなく、黙って穴に落ちたという非言語行為により、亭主の意に添っている。茶事に風呂や新しい着物は全く無関係であり、しかしながら、どうして風呂が沸かしてあるのかとも、新しい着物が用意されているのかとも、利休は亭主に問うていない。非言語のまま、すなわち黙って受け入れている。結果としては主客共に楽しみ、興味深い茶事となった。言語より非言語が重きを成し、その背後に働いているものは、亭主の工夫すなわち作意である。作意がコミュニケーションを成功に導いている。「賓主ともに應ぜざれば

茶の道にあらず<sup>4)</sup>」という表現に、亭主と客、両者で共に作り上げるコミュニケーションの神髄が表れている。

## 【注】

- <sup>びょう</sup>『雲萍雑誌』、柳沢淇園 著、森銑三 校訂（東京：岩波書店、1936 年第 1 刷、1997 年第 8 刷）、p.72.
- 『老人雑話』巻下、近藤瓶城 編『改訂 史籍集覧』第 10 冊所収（京都：三星社、1983 年復刻版、1990 年第 2 刷）、p.40.
- 『長闇堂記』千宗室 編『茶道古典全集』第 3 巻所収（京都：淡交社、1960 年初版、1967 年 500 部限定）、p.360.
- 『雲萍雑誌』、p.72. ルビは本書にある。

#### 7-4-5-2 朝顔の花<sup>1</sup>

茶人の間ではよく知られた逸話である。利休屋敷の庭の朝顔が見事だという噂を聞いて、秀吉が朝の茶事に招かれ、見に行った。しかし朝顔は一つもない。機嫌が悪くなった秀吉が茶室に入ると、床の間にただ1輪の朝顔が活けられている。色鮮やかな1輪がぱっと目に入り、秀吉の機嫌は直り、利休の趣向を称賛したという。「小座敷へ御入あれハ、色あさやかなる一輪床にいけたり、太閤をはしめ、召つれられし人々、目さむる心ちし給ひ、はなはた御褒美にあつかる<sup>2</sup>」と『茶話指月集』にある。庭中に咲き誇った満開の花々よりもたったの1輪、多々ある、にぎにぎしい花よりも、茶室に楚々として微笑むただ1輪を選んだ利休の作意が表れている。その作意が秀吉に伝わっており、亭主と客とのコミュニケーションが立派に成功している。「目さむる心ち」という最高の効果を導いた。

庭の朝顔を前日すべて切り取ったことも、茶室に1輪だけ残した、だからそれをお楽しみに等ということも、利休は一切言っていない。非言語である。しかしたった1輪の朝顔という非言語要素がすべてを語っているのだ。そこに込められた亭主の意図、それを酌み取った客、非言語を通じてのコミュニケーションが立派に成立しており、その背後に働いている亭主の心入りは、作意からくるものである。

#### 【注】

<sup>1</sup>『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500限定）、pp.444-445。及び『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500限定）、p.211-212。

<sup>2</sup>『茶話指月集』、p.211。ルビは本書にある。

#### 7-4-5-3 森口の茶人<sup>1</sup>

作意が作爲に終わることもある。摂津の国の森口の茶人の話である。利休と以前から旧知の仲であった森口の茶人を、利休が予告もせず夜明け前に訪れた。掃除も行き届き、趣のあるたたずまいの中から、突然の訪問に亭主が驚いて出迎える。茶室に入った利休は物音に気づき覗いてみると、亭主自ら庭に出て、まだ暗い中を行灯と竹竿を持ち出して柚子の木から実を落としていた。柚子味噌の料理かと利休は思い、その通りに柚子味噌お膳でもてなされて喜んだ。しかし酒一献過ぎると亭主が、前日大坂から到来したというかまぼこを持ち出してきた。当時のかまぼこは非常に珍しく高価なものであったにも拘わらず、利休は興ざめがした。この訪問を亭主は予め知っており、すべてが作り物であったのだ。よって掃除も済ませ、趣向も調べておいた。驚いて出迎え、またわざわざ庭の柚子の木から実を落としたことも、すべて芝居であったことを知った利休は、急用と称してすぐ退席



したという。「始めわさとならぬ躰ミせつるハ、作りものよと興さめて<sup>2)</sup>」という表現に、利休の落胆ぶりが表れている。

このもてなしは作意からではなく、悪い意味での作為である。『源流茶話』にある「利休の云、さひたるハよし、さはしたるハあし<sup>3)</sup>。」に照らすならば、この茶人は「さばしたる」行為をしている。初めから計画された、作為によるもてなしに成り下がっている。桑田忠親氏は「茶事に作意は欠くべからざるものだが、それは、わざとらしくなく、いかにも自然らしく表現されねばならぬ<sup>4)</sup>。」と述べ、また作意を「目立たぬ風体で行われなくてはならぬ。それでないと、茶味をそこなう恐れがある<sup>5)</sup>。」とも警告しているが、森口の茶人の行為はわざとらしく、茶味を損なっている。この逸話は作意が適切に働いておらず、作為に終わったために、コミュニケーションが失敗した例である。

### 【注】

<sup>1)</sup>『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.205.

<sup>2)</sup>同上、p.205.

<sup>3)</sup>『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.428.

<sup>4)</sup>桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、初版1976年、再版1977年）、p.359.

<sup>5)</sup>同上、p.358.

## 7-4-6 作意の中の「不完全の美」

### 7-4-6-1 日本文化における「不完全の美」

茶の湯のコミュニケーションを成功させる要因としての作意の中でも、特に重要だと考えられる「不完全の美」について述べる。不完全をよしとすること、そのような美意識は、早くも鎌倉時代に例を見ることができる。吉田兼好の『徒然草』137段を挙げる。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、  
たれこめて春の行方知らぬもなほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、  
散りしをれたる庭などこそ見所多けれ<sup>1)</sup>。

完璧でないこと、欠けていること、多少遠慮がちのありようがむしろ称賛されていることがわかる。冒頭の1行は佐藤春夫氏の訳によると「花は満開を月は明澄なのをばかり賞すべきものではあるまい<sup>2)</sup>。」となっている。兼好と同じこの考えを珠光も抱いていたことは、よく指摘されるところである。「月も雲間のなきはいやにて候<sup>3)</sup>」円満でないこと、不完全

をよしとする詩的な表現であり、珠光の美への思想が明確に表れている。

この思想は兼好のみならず、珠光と同じ室町時代の連歌師、心敬とも共通することを、神津朝夫氏が指摘している。氏は珠光の美意識「雲間の月」は、「『心敬僧都庭訓』にある『雲間の月を見るごとくなる句がおもしろく候』という言葉とまったく一致したもので、珠光の美意識が連歌師のそれと共通していたことを示している<sup>4</sup>。」と述べている。珠光が心敬の弟子の宗祇と親しく、よって「珠光が心敬・宗祇から得たところのものを自身の数奇論に吸収したろうことは、まず間違いのないところである<sup>5</sup>。」との指摘もある<sup>6</sup>。不完全さをよいものとする姿勢は歌道にも、すなわち日本の芸道において鎌倉・室町を経て生きているのである。そしてもちろん、茶の湯の根本思想に自然に巧みに取り込まれ、わび茶を育んだのである。わび茶の道具の取り合わせは、完全ではなく不足のある方が好ましいのである。不完全であることこそが、わび茶の美ということになる<sup>7</sup>。『南方録』にも「よろづ事たらぬがよし<sup>8</sup>」とあり、足りないことを肯定的に捉えていることがわかる。

ジョアン・ロドリゲスの記述にも「不完全の美」が見られる。数寄についてロドリゲスは次のように述べている。「...服装にしても、さらに彼らの使う手廻りの品物にしても、堅固で、頑丈で、虚飾がないようにし、万事にわたって常に節度を保って、自己の伎倆や力量を誇示することなく、そして、あり余るよりも、むしろ足りない方を望むのである<sup>9</sup>。」外国人宣教師も不足をよきものとする、完全よりも不完全をよしとするこの考え方を、数寄すなわちわび茶の萌芽期に的確に捉えている。わび茶の根本を成す思想である。さらにこの安土桃山期の後、江戸時代にも、不完全を肯定する記述が見られる。『茶話指月集』にある「不具なるこそよけれ<sup>10</sup>」が、その例である。同じく江戸時代の『禅茶録』にも次のような件がある。「佗<sup>ワビ</sup>の意と字訓<sup>クン</sup>とを見れば、其不自由<sup>ジイウ</sup>なるも、不自由なりとおもふ念<sup>ネン</sup>を

不生、不足も不足の念<sup>ネン</sup>を起さず、不調<sup>トウノハ</sup>も不調の念<sup>イダ</sup>を抱かぬを、佗なりと心得<sup>ウ</sup>べきなり<sup>11</sup>」不自由・不足・不調、正に不完全さを採り上げ、不自由は不自由ではない、不足は不足ではなく、不調も実は不調ではない、そうした考え方こそがわびなのだ」と述べている。そしてそこから育まれたのがわび茶である。

わび茶を久松真一氏は「わびの宗教」、「佗茶の宗教」と呼んでいる<sup>12</sup>。「『わびの宗教』というものも無の宗教であります。...いわゆる本来無一物の宗教であります。...有の否定を通して新たな有へ...つまり無いことが生かされる宗教であります。無いが故に自由になる宗教であります<sup>13</sup>。」ないことは自分の視野や世界を狭めるのではなく逆に広げ、積極性と自由をもたらすよいものであると解いている。

不完全とはできそこない、すなわち完全な物に仕上げることができず、不完全なままで終わってしまったという意味では決してない。完全な物にすることは可能だ、しかし敢えて、故意に、不完全にしているのである。正に作意からくるものである。完全を超えた不完全と言ってよい。超越すること、守破離の「離」の観念をここにも見ることができる。

久松真一氏は「不均斉」を茶道文化の性格の一つとして挙げており、これは「不完全の美」に通じる部分が大いにある。

不均齊とは釣合つりあいのとれていないことである。そのことについて1番手取り早くわかるのは、たとえば茶道で使う茶碗というものをとってみよう。茶碗は無論均齊のとれたものも沢山ある。しかし茶道の茶碗として真に茶にふさわしいものには、均齊のとれていないものが多い。崩れた形をして左右がいびつであつたり、いわゆるシンメトリーでない、あるいは表面が凸凹していたり高台が歪ゆがんでおつたり、釉うわぐすりが完全にかかかっておらなかつたりする。しかしかえってそこに均齊のとれた形の正しいものより面白味があり味わいどころがある。…正直なものは面白くない。均齊のとれないところにある味わい、面白味を、茶道文化の特色としてあげることができる<sup>14</sup>。

完全な物を作る能力がなくて、いびつな、歪んだ茶碗しか作れないという意味ではない。意図的にそのように作成し、逆に美を生み出しているのである。

吉田兼好の鎌倉時代から室町・安土桃山・江戸時代に亘って「不完全の美」を辿ってきたが、この考え方は時代を遙かに下って現代にも立派に生きているのである。「不完全の美」は時代を超えた普遍性を有していることがわかる。谷晃氏は日本芸術の特質として次の4点を挙げているが、そこにも「不完全」が含まれている。

1. 島国の特徴 — 地域的条件
2. 不完全を求める — 表現形態
3. 自然や文学を好む — 表現内容
4. 飾るより使うを第一に — 制作動機<sup>15</sup>

2点目に「不完全」が挙げられており、次のような説明がある。「厳密な幾何学構成や、形のうえで破綻をみせない完全さより、自由で不均衡な、動きのある表現を好む傾向にあります。例えば黄金分割より歪みを、シンメトリーより非対称を、ちみつを避け余白を残すといったように<sup>16</sup>。」不完全は完全であるよりも却って伸びやかさ・ダイナミックさ・可能性を含んでいる。縛られず、自由である。限界・制約を超えることができる。超越の意味合いがあり、守破離の「離」に通じる。不足の部分があることをむしろよしとする、完全よりも不完全を好む、不完全であることによって美を生み出す、作り出すという、いわば逆説的美学は、茶の湯に必須のわびに通じる。よって不完全さを意識した、不完全さを活かす趣向——道具の選択、茶室のしつらえ等すべてにおいて——を行うことが、趣ある茶席作りに繋がる。そのような茶席を演出することが、主客間のコミュニケーション、すなわち亭主の意図が伝わる茶席を成立させる要因となると筆者は考える<sup>17</sup>。「不完全の美」をいかに演出するか、そこに亭主の作意が問われる。

日本語の特徴として、筆者は省略を挙げた。これもまた言語上の作意なのかもしれない。

言えないのではなく、敢えて言わない、意図的に、故意に省略しているのである。省略せずに文を最後まで言うことを完全と取るならば、省略は不完全である。しかしそこには余韻という美しさが生まれることも前述したが、これも「不完全の美」と解せる。茶の湯と日本語の共通性がここにも見られる。

【注】

- 1 『徒然草』137段『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』より、神田秀夫・永積安明・安良岡康作 校注・訳『日本古典文学全集』第27巻所収（東京：小学館、1971年初版、1985年第17版）、p.200. ルビは本書にある。
- 2 『徒然草』137段、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、井上靖 訳者代表『王朝日記随筆集』より、『日本文学全集』第3巻所収（東京：河出書房、1965年）、p.412.
- 3 室町時代の能役者であった金春禅鳳の見聞等を弟子の中村藤右衛門が記した『禅鳳雑談』に、珠光がこう物語ったとある。『金春古伝書集成』（東京：わんや書店、1969年）、p.432.
- 4 神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』（東京：角川書店、2005年）、p.220.
- 5 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、原本は1977年日本放送出版協会より刊行）、p.44.
- 6 金春禅鳳の義甥である堺の能太夫、宮王三郎（三入）に利休は能（謡）を習っており、宮王の妻が後の利休の後妻の宗恩である。宮王の曾祖母である金春禅竹の妻は世阿弥の娘に当たる。宮王と宗恩の間に千家2代目少庵が生まれたので、少庵は世阿弥の血を引いていることになる。こうした親族関係を、神津朝夫氏は『千利休の「わび」とはなにか』、pp.220-221. にて述べている。後に少庵の父となる利休が宮王に歌を習っていたこと、珠光と心敬・宗祇との繋がりを考えると、茶と歌道との結び付きが改めて浮かび上がってくる。
- 7 筒井紘一『茶の湯名言集』（京都：淡交社、2006年）、p.163. において同様のことを述べている。
- 8 『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定）、p.10.
- 9 ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』上巻、大航海時代叢書IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳（東京：岩波書店、1967年）、p.610. 下線は筆者による。
- 10 『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.220.
- 11 『禅茶録』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.297. ルビは本書にある。返り点、送り仮名は省略した。
- 12 倉澤行洋氏は『東洋と西洋 世界観・茶道観・藝術観』（大阪：東方出版、1992年初版第1刷）、p.123. にて久松真一氏が「佗茶」を「わびの宗教」、「佗茶の宗教」と呼ん

だことを指摘している。

<sup>13</sup>久松真一『茶道の哲学』（東京：講談社、1987年第1刷、1994年第12刷）、pp.23-24.

<sup>14</sup>同上、pp.55-56. ルビ・傍点は本書にある。

<sup>15</sup>谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』（京都：淡交社、2005年）、p.84.

<sup>16</sup>同上、p.85.

<sup>17</sup>芳賀幸四郎氏も『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2刷）、pp.124-126.「不完全・不均衡の美への開眼」の章において、その重要性を述べている。

## 7-4-6-2 利休の逸話に見る「不完全の美」

### 7-4-6-2-1 庭の落ち葉<sup>1</sup>

利休が武野紹鷗の弟子で、まだ与四郎と名乗っていた頃、師より庭の掃除をするように言われた。茶席の前の庭は既に掃除されており、塵一つなく完璧にきれいになっていたのだが、紹鷗は敢えて掃除を言いつけた。利休は1本の木を揺さぶって葉を落とし、その落ち葉が却って風情を添えた。紹鷗は感心し秘伝をすべて伝え、逸話は「利休得宗匠名始于此<sup>2</sup>」と結ばれている。利休が天下に名を轟かすようになったのは、このできごとから始まったのだ。きれいに、手のつけようもなく掃き清められた庭すなわち完全よりも、多少落ち葉が散った庭すなわち不完全の中に、なお一層の美を見ることができる。この逸話は与四郎が19歳の時のことであったと言われるが<sup>3</sup>、そのようにごく若い時から、あるいはそれ以前から、利休には「不完全の美」を大切にすることがあったと解釈される。

この逸話について、筒井紘一氏は次のように述べている。「露地の掃除とは、木の葉をきれいにとりさってしまうだけではない。表面に見える美だけでは、草庵茶でいう真の美にはならない<sup>4</sup>。」表面の美の奥に真の美がある。不完全の奥に美がある。心眼、すなわちものごとの本当の姿を明確に見抜く心の働きも問われる。言語はもちろんなく、ここでは五感の中の視覚が問題になっている訳だが、それも実際の目ではなく心の目で見て理解することが要求されている。この逸話は茶席の中での主客間に直接関するものではないが、庭の掃除も立派に亭主の行う「姿」の一つである。掃除も結局は茶席のしつらえに繋がる行為であり、よって茶会がこの後実際に行われるならば、主客間のコミュニケーションが問われることになる。茶会に来た客が庭を歩いた時、落ち葉に目を留め、風情を感じるであろうか。もしそうであるならば、主客間のコミュニケーションは成立したことになる。

『南方録』の中に「カナフハヨシ、カナイタガルハアシ<sup>5</sup>」という言がある。自ずから相手の心にかなうのはよいが、相手の心にかなおうという心が見えてはいけぬ、の意であり、この逸話における利休の計らいは、紹鷗の心に自然にかなっている。「不完全の美」という考え方が背後にあるが故に、利休から紹鷗へのコミュニケーションが成立した例であると言える。作意を以て不完全を美に、よりよいものに変えている。

## 【注】

- 1 『近古史談 全注釈』若林力 注釈（東京：大修館書店、2001年）、pp.123-124.
- 2 同上、p.123.
- 3 村井康彦『千利休』（東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷、初出原本は1977年日本放送出版協会より刊行）、p.89において、この逸話時の利休の年齢を記している。
- 4 筒井紘一『茶の湯名言集』（京都：淡交社、2006年）、p.50.
- 5 『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収（京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定）、p.5

### 7-4-6-2-2 園城寺の竹花入れ<sup>1</sup>

利休が「園城寺」の銘の竹花入を床に掛けたが、竹筒にひびが入っているため、そこから水が滴り畳が濡れていた。客がこれはいかがなものかと尋ねたのに対して、利休は「此水のもり候か<sup>(いのち)</sup>命なりといふ<sup>2</sup>」、すなわち水の漏ることこそこの花入の命なのだ、1番大事なことなのだとやったという。

この花入れは前述の、小田原の役の際に菰山の竹で利休が作った花入れである。竹の花入れなど以前にはなかったので、かなり斬新な試みであった訳だが、割れ目が入っているというのはさらに珍しいことである。割れ目などない、いわば健全な花入を完全だとすると、「園城寺」は不完全な品である。しかし割れ目があつて水の滴ることこそがこの花入れの命、よいところ、特筆すべき美点だと捉える利休は、「不完全の美」を見出していたと考えられる。

利休の説明を聞いた客がどう反応したかまでは、逸話では語られていない。もし利休の言に同意し、割れ目から水が漏るのをいいことだと受け入れたならば、主客間のコミュニケーションは成立したことになる。「不完全の美」を客も理解したと言える。

## 【注】

- 1 『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.206. 括弧は本書にある。
- 2 同上、p.206.

### 7-4-6-2-3 洲蓋の茶入れ<sup>1</sup>

利休は口広の茶入れを持っていたが、口が広いため象牙蓋の白さが素気なく見えたという。そこで、少しひびや疵がある象牙を作ったらどうかと細川三斎に相談したところ、三斎も賛同した。それ以降、大蓋にはひびや疵のある象牙を用いるようになったという。

このような蓋は茶道具として洲蓋と呼ばれており、筒井紘一氏が注を付けている<sup>2</sup>。「窠<sup>す</sup>

は虫食いを意味し、「洲」は美称、すなわち当て字ということになる。虫食いや疵は、通常はよくないものと判断される。「当時は、現代と異なって、唐物茶入の蓋は無疵でなければ使用しないのが慣例であった<sup>3</sup>。」との説明がある。無疵の蓋が完全であるのに対して、このような蓋は不完全である。しかしそこにむしろ趣・景色のよさを考えた利休は、「不完全の美」を見出している<sup>4</sup>。

現在でもわれわれは洲蓋の道具に接すると、通常の蓋にはない感動を覚え洲の部分を中心に熱心に鑑賞する。利休が愛でた「不完全の美」は時代を超えた普遍性を持っている。

#### 【注】

<sup>1</sup> 筒井紘一『利休の逸話』（京都：淡交社、2013年2月14日初版、2013年7月13日2版）、p.115. 出典『三斎公御物語』

<sup>2</sup> 同上、p.116.

<sup>3</sup> 同上、p.117.

<sup>4</sup> なお、この逸話に関しては、さらに続きがある（出典は『松風雑話』。筒井氏の同上、p.331. で言及）。この洲蓋の茶入れを用いて利休は茶会をし、古田織部が客であった。利休は点前の際に、洲は勝手口の方に向け、つまみの外、客の織部の側すなわち洲のない方に、茶杓を乗せた。織部は利休に頼んでこの茶入れを持ち帰り、後日利休を客に招いて茶会を催した。その際、師の点前とは違って洲を客の利休方に向けて置き、つまみより内の方に茶杓をかけた。客に向けて、客の近くに洲があるようにして、洲を鑑賞してもらおうと織部は考えたと受け取られる。利休はこの工夫をととても褒めたという。筆者は不完全の美の例として初めの方の逸話を挙げたが、さらに二つの逸話を並べてみると、利休・織部それぞれの作意が興味深く浮かび上がってくる。

#### 7-4-6-2-4 雲山肩衝<sup>1</sup>

堺のある茶人が、所持していた茶入れを逸品だと自信を持って利休を招いた。しかし利休は一向に気に入らない様子だった。茶人は怒り、利休に好まれぬ品など面白くないと考え、茶入れを五徳に打ち付けて割ってしまった。傍でこれを見ていた人が砕かれた破片をもらって帰り、繕って茶会をし、利休を招いた。すると利休は「此れでこそ茶入見事なれとて、ことの外稱美す<sup>2</sup>」と、この度は大変気に入ったという。

完全である茶器は欠かされて、不完全な物になった。しかしそのばらばらの破片を繕って、以前とは違った茶入れが作られた。完全である時には見られなかった、新たな美が生まれている。利休はそこに着眼したのだ。

## 【注】

<sup>1</sup>『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収（京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定）、p.219.

<sup>2</sup>同上、p.219.

### 7-4-6-3 茶席の所作における「不完全の美」

茶席の点前そのものにも、「不完全の美」は多分に表れている。陰陽五行説が茶の湯に深く働いていることは改めて述べるまでもないが、特に陰陽二元については「陰と陽が交合し、感応してはじめて万物の生成が可能となる<sup>1</sup>。」、すなわち万物生成の根本原理である。茶はこの説を根底に据えており、「不完全の美」とも関わっている。例えば丸い棗は「陽」であり「完全」なものと受け取られる。これを手にする際に、手のひら全体をかけるのではなく、半月の形に手をかけることは「陰」であり、「不完全」な形を見せることと解釈できる。完全な満月に対して半月は不完全だと言えるだろう。丸い棗に手のひら全体をかけたとすると、完全に完全を被せるようなものである。そうはせず、敢えて半月という形を持ってくることによって、却ってそこに美を醸し出す。

点前所作に関してさらに述べると、丸い棚は陽、角形の棚は陰であるとされる。ここに柄杓を荘る際、丸い棚であれば合を伏せて、角形の棚であれば上に向ける。丸い棚の上に、さらに柄杓の合を上向けにして乗せたとすると、完全に完全を重ねるようなものだ。合を伏せることを「不完全」と評すると過言かもしれないが、上向けが「完全」であることに対しては、やはり「不完全」であると言える。そして丸い棚には合を伏せて、角形の棚であれば上に向ける荘り方は、その逆よりも趣を感じさせる。陽に陽では完全で、面白みがない。満開の花・明澄な月と同じである。陽のものに故意に陰を加える、働かせることによって、不完全さが生まれ、そのことが却って美に繋がるのである。

以上に挙げた所作は亭主の工夫ではなく、初めからこうすることに決まっている、いわゆる型の美であるから、作意とは言えないが、「不完全の美」が功を奏している。また、決まった所作、いわゆる型の美であっても、「不完全の美」であるという意識を持って、それを心に掛けて点前をするかしないかでは、客に伝わるものが異なってくるであろう。点前所作は正しいが、いわば事務的に、ただ次々と所作が進行するだけで、見ていて感動のない点前というものもある。客に何も伝わってこない。すなわちコミュニケーションがないということになる。「心」を入れて所作を行うことが非常に大切かと思われる。改めて「心」と「姿」である。

客の側にも「不完全の美」を意識した所作がある。茶を喫する時、茶碗の正面は外して口をつける。正面は1番大事な部分であるから避けるべきだとの説明もある。また茶碗の正面が「完全」であるとする、正面を外す行為は「不完全」を示すこととなる。絵柄のある茶碗ならば特に、確かに正面が1番美しく、整った絵柄、全体の図が楽しめる訳であるから、正面を外して茶碗を見ると、「不完全」な全体像となる。



点前所作ばかりではない。着物の着付けにしても、ポイント柄の帯を締める場合、その柄はからだの中央すなわち真ん前ではなく、中央から少々外れた位置に表れるのが好ましい着付けであるとされている。真ん中、正面は完全の場と考えられ、そこを外す訳であるから、この例にも「不完全の美」が表れていることになる。「不完全」が数多く茶席に働いていることがわかる。

#### 【注】

<sup>1</sup> 関根宗中『茶の湯と易と陰陽五行』（京都：淡交社、2006年第1刷、2008年第3刷）、p.9.

#### 7-4-6-4 道具に見る「不完全の美」

「不完全の美」は茶道具にも表れている。貴族的であり端正で典雅な器物を上手物<sup>じょうてももの</sup>というのに対して、民間的で泥臭くくすんだ器物を下手物<sup>げてももの</sup>と呼ぶ<sup>1</sup>。例えば珠光の愛用した「投頭巾の茶入れ」や珠光青磁の茶碗はもともと中国産の下手物であったという<sup>2</sup>。言うなれば完全な上手物に対して、不完全な下手物である。しかし珠光は後者の方にむしろ美を見出していたと受け取られる。「珠光が愛用し、あるいは目ききした茶道具はみな、…舶載のものではあったが、しかしそれらは総じて端正ないわゆる上手物ではなく、下手物の部類に属するものであった<sup>3</sup>。」のである。

時代が下って利休は損傷のある物、漆で接いだ茶器を使うこともあった。前述の園城寺の花入れ・洲蓋・雲山肩衝にも通じ、「小座敷の道具ハ、よろづ事たらぬがよし、少の損シも嫌ふ人あり、一向不得心の事也、今やきなどのわれひゞきたるハ用ひがたし、唐の茶入などやうのしかるべき道具ハ、うるしつぎ<sup>(漆 継ぎ)</sup>しても一段用ひ来り候也<sup>4</sup>」との記録が『南方録』にはある。ひびの入った物、欠けた物は不完全である。しかしこうした器物を故意に使い、逆に趣が増す。完全であった場合には見られなかった新たな美が生まれる。

先般作意についての項で、山上宗二が井戸茶碗を茶道具として見出したことを、作意であると評した。当時用いられていた、艶がよく滑りのよい天目茶碗が「完全」だとすると、一般民衆がどぶろくや飯を盛る食器として使い、ざらついている井戸茶碗は「不完全」な物だと解釈できる。下手物の部類になる。しかしこの不完全な品の中に、却って価値が見出されたのである。

かような見方は西欧人にも通じるようである。ドナルド・キーン氏が述べている。「何がいったい＜日本的＞であるか。日本独自のものは何か。これはなかなか言えませんね。たとえば陶器のなかで何が日本的かと聞かれた場合、もちろん私の意見は、おおかたの人と同じような意見になります。柿右衛門のようなものじゃなくて、志野とか、織部とか、そ

ういうものがいちばん日本的であると思うのです。ある意味ではひじょうに粗末に見えるようなもの、もちろん、わざと粗末さを出すために努力したのですけれども、きれいな伊万里焼とか柿右衛門焼よりも、あのほうがどうしても日本的だと私は思う<sup>5</sup>。」氏は日本文化、特に古典文学の専門家であるから、日本人のものの見方をかなり備えているかもしれない。しかしこの陳述の中での「おおかたの人」とは、西欧人を含めてのことと受け取られる。「きれいな」伊万里焼や柿右衛門、よりも「粗末に見える」志野や織部に日本的要素を見出されるのは、「不完全の美」の表れであると解釈できる。また氏の陳述の中に、「わざと粗末さを出すために努力したのですけれども」とあり、この表現は正に、完全にする能力がなくて不完全な作品しか製作できなかったのではなく、故意に、意図的に、不完全さを作り出すという作意の妙を表している。

キーン氏も挙げている織部であるが、その古田織部は歪んだ茶碗、すなわち杓形茶碗等のいわゆる織部焼を好み、次のように言ったという。「全き茶わんハぬるきもの也とて、かき或ハつくるひなどして被用しと也<sup>6</sup>。」完全な茶碗は「ぬるい」として好まず、これを欠かしたり繕ったりして、正に「不完全の美」を演出するのである。利休もまたハタノソリタル茶碗、いわゆる歪な茶碗を使っていた。ハタノソリタル茶碗には「不完全の美」の意識が表れ、織部焼に通じるものがある。その後、楽長次郎に焼かせた、形の整った端正な「利休型」に到る訳だが、「不完全の美」の過程を経ていることがわかる。茶席の趣向において、点前において、茶室において、道具において、「不完全の美」の例は多々見られるが、言葉を通してではない。いずれも物である。非言語である。そして「不完全の美」を巧妙に取り入れ、活かした茶席のしつらえを亭主が行い、それを酌み取る客の心映えがあった時に、コミュニケーションは成立する。不完全ゆえに美があると亭主が考える趣向、そしてその不完全さに確かに美があると客が気づき、鑑賞までに至ることがコミュニケーションである。「不完全の美」はコミュニケーションを成立させる重要な要因なのである。

日本語の特徴として、筆者は緩和表現も挙げた。茶の湯においては歓待の意、茶事のテーマ、季節感を、亭主は茶席のしつらえ・道具・点前といった非言語要素を通じて客に伝えようとする場合が多い。客の側に心映え・鑑識眼がなければうっかり見逃してしまいそうな、ささやかな工夫もある。仰々しくこうですよ、こういう意味を表していますといった、いわゆるあからさまなやり方ではなく、いわば緩和された演出でもてなす。つつましくやかに、控えめに、さりげなく行うことが、茶の湯ではよしとされている。あからさまに、明確に表すことが完全であるとすれば、こうした緩和された趣向や振る舞いは不完全であると言えるかもしれない。しかしそれが却ってよしとされ、客に美を感じさせるのであれば、ここにも「不完全の美」が働いていることになる。日本の代表的な伝統文化である茶の湯、そして日本人の言語、日本人に不可欠な日本語の間には、実に共通性が多い。

#### 【注】

<sup>1</sup> 芳賀幸四郎『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2版）、p.195.  
に上手物と下手物の説明がある。

<sup>2</sup> 芳賀幸四郎『安土桃山時代の文化』日本歴史新書（東京：至文堂、1964年初版、

1965 第 2 版)、p.173.

<sup>3</sup>芳賀幸四郎『千利休』人物叢書 新装版 (東京:吉川弘文館、1963 年第 1 刷、1989 年新装版第 4 刷)、p.55.

<sup>4</sup>『南方録』「墨引」千宗室 編『茶道古典全集』第 4 卷所収 (京都:淡交社、1956 年初版、1967 年 500 部限定)、p.10. 括弧は本書にある。

<sup>5</sup>司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』(東京:中央公論社、1972 年初版、1998 年第 40 版)、p.59.

<sup>6</sup>『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第 3 卷所収 (京都:淡交社、1960 年初版、1967 年 500 部限定)、p.469. 同じ内容が『茶話指月集』千宗室 編『茶道古典全集』第 10 卷所収 (京都:淡交社、196 年初版、1967 年 500 部限定)、p.220. では次のように述べられている。「全き茶碗はぬるき物とて、わさと缺て用<sup>カキ</sup>みられしことあり」ルビは本書にある。茶碗は茶碗と表記している。

## 7-5 むすび

茶人が目指す、すなわち心に置く目標は、深まり高まった心、磨かれ清らかになった心である。これは「わび」とも呼ぶことができ、利休の言葉では「心の一つかね」である。珠光の説く「我慢我執を抑えた心」、また紹鷗の語る「慎み深く驕ぬ」ことを踏まえた上での高尚な心であり、かような心に基づく「心の茶」を集大成したのは利休である。この深まり高まった心は、禅の教えでは真心、無心、または絶対心と言う。

深まり高まった心、わびの心とは、本当の自分に気づいた、目覚めた心を指すと筆者は考える。心のけがれも浄化され、心の内に新たな光が差し、自分自身が目覚めることである。そこではあらゆる束縛から解放され、脱却し、自由なのである。他の対象に救いを求めたり、他の何かを拝んだり、祈ったり、頼りにするのではなく、すべてが自分の中にあることを認識する。そのことに目覚めるのである。一切を超越した自己というものがあることに気づくのである。「守破離」の「離」の觀念に通じるものであると解せる。このような、禅の考え方を根本においての目覚めた心を、筆者は深まり高まった心、わびの心と捉える。自分は目覚めた、確かに深まり高まった心に到達した、そのような心で茶を行っている、と認識できることが望ましい。筆者は「深まり高まった心」を茶人の生涯の目標、一生を懸けての修行の目標であると解釈する。この目標を心に据えて、亭主はコミュニケーションの成立に努めることが望ましいと考える。

亭主が行う様々な所作、そして所作がもたらす結果は「姿」と換言できるが、「姿」の背後に亭主の「心」があり、よって「姿」に「心」を託すことになる。「姿から心へ」という修行の第 1 段階であり、具体的には稽古をすることを指す。しかしここで留まるのではなく、持続させる努力がさらに必要となる。前よりも深く高い心で、深く高い姿を行う。「心から姿へ」という修行の第 2 段階であり、第 1 段階の稽古に対して、ここでは亭主の作意

が問われることになる。心と姿との関係は和歌にも、また禅の教えにも表れている。姿から心へ、心から姿へ、さらに深まり高まった姿から心へ、一層深まり高まった心から姿へと、茶人は歩む。単に円環すると言うよりも螺旋状に進む。心と姿で円を描きながらも、その円は同じ平面上を回っているのではなく、高みへと向かっていく。そしてこうした鍛錬・修行が自分の中だけで終わるのではなく、亭主の心から客の心へ、すなわち「心から心へ」に繋がるのが望まれる。

この深まり高まった、いわゆるわびの心と、それに伴った姿を目指しつつ、茶の湯のコミュニケーションを成功に導く要因、すなわち亭主の意図が伝わる茶席を作り上げる要因として、筆者は複数の局面の把握と作意の2点を挙げる。複数の局面の把握とは、例えば都市の賑やかさと人里離れた隠遁の場の両方を知ってこそ、市中の山居の美意識も理解できることを指す。その理解は、都市の中心にあっても、それとは別世界の趣ある茶室のしつらえが演出できることに繋がる。両者を知ってこそ可能になるのである。

「真行草」に代表される、上の点前と初歩の点前、その間に存在する、多数の点前を身に付けて初めて、よい茶席作りが行える亭主となることができる。複数の局面の把握が必要である。「守破離」もまた複数の局面を表す用語である。稽古に励む「姿から心へ」、これが「守」に当たり、作意が問われる「心から姿へ」、これが「破」と受け取られる。そしてさらに、苦勞して稽古を、努力して作意を、といった段階も超越した、ごく自然に自由体で茶に臨める「離」の極致へと向かう。目指すべきは「離」であるが、「守」と「破」という複数の局面を把握し、経た上で初めて「離」が可能となるのである。複数の局面の把握は、道具の扱い、また道具の選択にも深く関わる。

作意は創意・工夫を以て自分らしさを表出することであり、珠光が「驕り執着する」と戒める、否定的な意味での「我慢」の後にくる、肯定的な意の「我慢」である。作意は単に新しいことを指すのではなく、多くの人が認めるよさを備えていなければならない。また作意は思いつきによる一時的な流行ではなく、後にも生きる趣向であることが望ましいと筆者は考える。

茶室・点前・道具の変容の中に、歴代の茶人の作意が働いている。例えば珠光・紹鷗・利休の流れにおいて、茶室の素材が簡素化され、荘り物の数も減少した。名物唐物茶器ばかりでなく、和物も使い、一般庶民の日常生活道具である自在鉤・釣瓶・面桶を茶器に転用した。天目茶碗に対して楽茶碗を使い、竹道具も取り入れる。利休の逸話、現代の宗匠にも作意の例は多々見ることができる。

茶室の縮小化を図ったという作意は、言語・非言語両方のコミュニケーションに大きく寄与したと考えられる。足利義政の室町時代には18畳・12畳という大広間での書院台子茶が発達した。一方で、これらよりも格段に狭い4畳半での、珠光によるわび茶が始まった。その後紹鷗を経て利休の時代になると、3畳、2畳、1畳台目と、さらに縮小化する。利休以前は4畳半に客は一人か二人であったところが、利休が最も活躍した北野大茶湯の1587（天正15）年から没する1591（天正19）年の間に急激に茶室は狭くなり、一人当たりほぼ半畳になった。狭くなれば、人と人とが近くなって、より親近感が増し、言語コミュニケーションの円滑さに繋がる。また、ごく近い位置から人に見詰められると、適度な

緊張感が生まれ、美的な所作で美味しい茶を差し上げようとの思いが高まる。これは深い歓待の意であり、美しい所作と美味な茶という非言語要素を通じて客に伝えようとする非言語コミュニケーションである。茶室の縮小化は言語・非言語両方のコミュニケーションに大きく寄与しており、意義ある作意の例として挙げることができよう。

作意の中でも「不完全の美」は特に重要であると考えられる。「不完全の美」は鎌倉時代の吉田兼好に早くも表れ、室町時代の珠光も愛でている。安土桃山期の『南方録』や宣教師による数寄の記述にも見られ、江戸時代の茶書でも採り上げられており、さらに遠く現代にも通じる日本文化の特徴とも言える美意識である。不完全とはできそこない、すなわち完全な物に仕上げることができず、不完全なままで終わってしまったという意味では決してない。完全な物にすることは可能なのだが、意図的に、故意に、不完全にしているのである。正に作意からくるものであり、完全を超えた不完全と言ってよい。不完全は完全であるよりも却って伸びやかさ・ダイナミックさ・可能性を含んでいる。縛られず、自由である。限界・制約を超えることができる。超越すること、守破離の「離」の観念がここにも見られる。

完全よりも不完全を好む、不足の部分があることをむしろよしとする、不完全であることによって却って美が生まれるのである。正にわびに通じる。「不完全の美」は陰陽の捉え方等の点前所作や利休の逸話にも表れている。

道具についても、貴族的であり端正で典雅な上手物に対して、民間的で泥臭くくすんだ下手物の使用には、「不完全の美」の意があろう。茶席における所作・道具・しつらえに「不完全の美」を意識し、演出することが、亭主の意図を伝えるコミュニケーション成立に大きく関わってくる。客がこうした美を感じ得たならば、コミュニケーションは成立したことになる。「不完全の美」を働かせた茶室の演出、それは亭主の作意からくるものである。

「真行草」と次第に茶の湯の点前が簡略化されていったこと、珠光・紹鷗・利休と徐々に茶室の素材や荘り付けが簡素化されていったこと、そして「不完全の美」、こうした動きには、日本語の特徴である省略と通じるものがある。また「守破離」の項で述べたさりげなく、自然な、大袈裟でない所作は、あからさまを避ける日本語の緩和表現に共通するものがある。さらにこれら省略と緩和が、茶の湯においても日本語においても、美をもたらしている、プラスの結果に繋がっていることも両者の共通項である。日本の代表的な伝統文化である茶の湯、そして日本人の言語、日本人に不可欠な日本語の間には、実に共通性が多い。

【松原会記】(天正以後)

地名	所有者・亭主	広さ	会記の年月日
郡山	筒井顯庵	四三	天正12.1.16
郡山	クワノキ道二	四三	12.14
奈良	二井	半	13.6.20
堺	中坊井上頼五	半	7.6
堺	中坊井上頼五	半	12.21
堺	本定松嶋	二ツ	4.21
堺	木江屋茶徳	二ツ	4.22
堺	定松嶋	二ツ	4.23
堺	中坊井上頼五	二ツ	4.24
堺	中坊井上頼五	二ツ	4.25
郡山	中坊井上頼五	半	10.13
郡山	羽田伊左衛門	半	10.20
奈良	羽田伊左衛門	半	15.1.24
奈良	羽田伊左衛門	半	8.20
奈良	羽田伊左衛門	半	12.21
奈良	羽田伊左衛門	半	16.1.27
奈良	羽田伊左衛門	半	2.4
奈良	羽田伊左衛門	半	10.16
郡山	峯崎春介	半	11.14
奈良	中坊井上頼五	半	17.1.27
奈良	中坊井上頼五	半	9.26
奈良	中坊井上頼五	半	11.22
奈良	中坊井上頼五	半	18.8.9
奈良	中坊井上頼五	半	11.13
奈良	中坊井上頼五	半	11.16
奈良	中坊井上頼五	半	12.5
奈良	中坊井上頼五	半	19.2.15
奈良	中坊井上頼五	半	19.2.25
奈良	中坊井上頼五	半	3.2.6
奈良	中坊井上頼五	半	8.19
奈良	中坊井上頼五	半	10.12
奈良	中坊井上頼五	半	4.11.4
奈良	中坊井上頼五	半	5.3.8
奈良	中坊井上頼五	半	6.11.21
奈良	中坊井上頼五	半	11.1.17
奈良	中坊井上頼五	半	4.14
奈良	中坊井上頼五	半	13.2.25
奈良	中坊井上頼五	半	3.22
奈良	中坊井上頼五	半	3.24
奈良	中坊井上頼五	半	4.9
奈良	中坊井上頼五	半	14.12.12
奈良	中坊井上頼五	半	14.12.12
奈良	中坊井上頼五	半	2.6.5
奈良	中坊井上頼五	半	3.6.4
奈良	中坊井上頼五	半	4.5.19

茶会記に所見する茶室の規模

地名	所有者・亭主	広さ	茶会の年月日
奈良	中坊下親守	台	元和8.1.22
郡山	松平左衛門	台	12.4
堺	智願寺安楽庵	台	寛永6.1.4
堺	頂妙寺宗右衛門	台	6.5
堺	上五郎右衛門	台	11.11
堺	上五郎右衛門	台	11.12
堺	上五郎右衛門	台	11.13
堺	上五郎右衛門	台	11.14
堺	上五郎右衛門	台	11.15
堺	上五郎右衛門	台	8.10.30
堺	上五郎右衛門	台	9.9.9
堺	上五郎右衛門	台	11.1.17
堺	上五郎右衛門	台	3.22
堺	上五郎右衛門	台	3.25
堺	上五郎右衛門	台	12.4.2
堺	上五郎右衛門	台	4.7
堺	上五郎右衛門	台	14.10.5
堺	上五郎右衛門	台	10.23
堺	上五郎右衛門	台	15.1.28
堺	上五郎右衛門	台	10.20
堺	上五郎右衛門	台	17.2.24
堺	上五郎右衛門	台	18.1.10
堺	上五郎右衛門	台	6.29
堺	上五郎右衛門	台	1.1.6
堺	上五郎右衛門	台	1.1.13
堺	上五郎右衛門	台	3.12.22
堺	上五郎右衛門	台	4.4.3
堺	上五郎右衛門	台	5.3.25
堺	上五郎右衛門	台	2.2.4.5

【茶誦日記】

地名	所有者・亭主	広さ	茶会の年月日
京都	大文字屋宗清	三三	天正14.11.24
京都	宗宗	三三	11.27
堺	宗宗	三三	12.5
堺	宗宗	三三	12.7
堺	宗宗	三三	12.8
堺	宗宗	三三	12.15
堺	宗宗	三三	12.17
堺	宗宗	三三	12.19
堺	宗宗	三三	12.20
堺	宗宗	三三	12.21
堺	宗宗	三三	12.24
堺	宗宗	三三	12.25
堺	宗宗	三三	12.26
堺	宗宗	三三	12.27
堺	宗宗	三三	15.1.6

地名	所有者・亭主	広さ	茶会の年月日
大坂	伊藤宗子	三三	天正15.1.9
大坂	伊藤宗子	三三	1.10
大坂	伊藤宗子	三三	1.11
大坂	伊藤宗子	三三	1.12
大坂	伊藤宗子	三三	1.14
大坂	伊藤宗子	三三	1.15
大坂	伊藤宗子	三三	1.16
大坂	伊藤宗子	三三	1.17
大坂	伊藤宗子	三三	1.18
大坂	伊藤宗子	三三	1.19
大坂	伊藤宗子	三三	1.20
大坂	伊藤宗子	三三	1.21
大坂	伊藤宗子	三三	1.22
大坂	伊藤宗子	三三	1.23
大坂	伊藤宗子	三三	1.24
大坂	伊藤宗子	三三	1.25
大坂	伊藤宗子	三三	1.26
大坂	伊藤宗子	三三	1.27
大坂	伊藤宗子	三三	1.28
大坂	伊藤宗子	三三	1.29
大坂	伊藤宗子	三三	1.30
大坂	伊藤宗子	三三	2.1
大坂	伊藤宗子	三三	2.2
大坂	伊藤宗子	三三	2.3
大坂	伊藤宗子	三三	2.4
大坂	伊藤宗子	三三	2.5
大坂	伊藤宗子	三三	2.6
大坂	伊藤宗子	三三	2.7
大坂	伊藤宗子	三三	2.8
大坂	伊藤宗子	三三	2.9
大坂	伊藤宗子	三三	2.10
大坂	伊藤宗子	三三	2.11
大坂	伊藤宗子	三三	2.12
大坂	伊藤宗子	三三	2.13
大坂	伊藤宗子	三三	2.14
大坂	伊藤宗子	三三	2.15
大坂	伊藤宗子	三三	2.16
大坂	伊藤宗子	三三	2.17
大坂	伊藤宗子	三三	2.18
大坂	伊藤宗子	三三	2.19
大坂	伊藤宗子	三三	2.20
大坂	伊藤宗子	三三	2.21
大坂	伊藤宗子	三三	2.22
大坂	伊藤宗子	三三	2.23
大坂	伊藤宗子	三三	2.24
大坂	伊藤宗子	三三	2.25
大坂	伊藤宗子	三三	2.26
大坂	伊藤宗子	三三	2.27
大坂	伊藤宗子	三三	2.28
大坂	伊藤宗子	三三	2.29
大坂	伊藤宗子	三三	2.30
大坂	伊藤宗子	三三	3.1
大坂	伊藤宗子	三三	3.2
大坂	伊藤宗子	三三	3.3
大坂	伊藤宗子	三三	3.4
大坂	伊藤宗子	三三	3.5
大坂	伊藤宗子	三三	3.6
大坂	伊藤宗子	三三	3.7
大坂	伊藤宗子	三三	3.8
大坂	伊藤宗子	三三	3.9
大坂	伊藤宗子	三三	3.10
大坂	伊藤宗子	三三	3.11
大坂	伊藤宗子	三三	3.12
大坂	伊藤宗子	三三	3.13
大坂	伊藤宗子	三三	3.14
大坂	伊藤宗子	三三	3.15
大坂	伊藤宗子	三三	3.16
大坂	伊藤宗子	三三	3.17
大坂	伊藤宗子	三三	3.18
大坂	伊藤宗子	三三	3.19
大坂	伊藤宗子	三三	3.20
大坂	伊藤宗子	三三	3.21
大坂	伊藤宗子	三三	3.22
大坂	伊藤宗子	三三	3.23
大坂	伊藤宗子	三三	3.24
大坂	伊藤宗子	三三	3.25
大坂	伊藤宗子	三三	3.26
大坂	伊藤宗子	三三	3.27
大坂	伊藤宗子	三三	3.28
大坂	伊藤宗子	三三	3.29
大坂	伊藤宗子	三三	3.30
大坂	伊藤宗子	三三	4.1
大坂	伊藤宗子	三三	4.2
大坂	伊藤宗子	三三	4.3
大坂	伊藤宗子	三三	4.4
大坂	伊藤宗子	三三	4.5
大坂	伊藤宗子	三三	4.6
大坂	伊藤宗子	三三	4.7
大坂	伊藤宗子	三三	4.8
大坂	伊藤宗子	三三	4.9
大坂	伊藤宗子	三三	4.10
大坂	伊藤宗子	三三	4.11
大坂	伊藤宗子	三三	4.12
大坂	伊藤宗子	三三	4.13
大坂	伊藤宗子	三三	4.14
大坂	伊藤宗子	三三	4.15
大坂	伊藤宗子	三三	4.16
大坂	伊藤宗子	三三	4.17
大坂	伊藤宗子	三三	4.18
大坂	伊藤宗子	三三	4.19
大坂	伊藤宗子	三三	4.20
大坂	伊藤宗子	三三	4.21
大坂	伊藤宗子	三三	4.22
大坂	伊藤宗子	三三	4.23
大坂	伊藤宗子	三三	4.24
大坂	伊藤宗子	三三	4.25
大坂	伊藤宗子	三三	4.26
大坂	伊藤宗子	三三	4.27
大坂	伊藤宗子	三三	4.28
大坂	伊藤宗子	三三	4.29
大坂	伊藤宗子	三三	4.30
大坂	伊藤宗子	三三	5.1
大坂	伊藤宗子	三三	5.2
大坂	伊藤宗子	三三	5.3
大坂	伊藤宗子	三三	5.4
大坂	伊藤宗子	三三	5.5
大坂	伊藤宗子	三三	5.6
大坂	伊藤宗子	三三	5.7
大坂	伊藤宗子	三三	5.8
大坂	伊藤宗子	三三	5.9
大坂	伊藤宗子	三三	5.10
大坂	伊藤宗子	三三	5.11
大坂	伊藤宗子	三三	5.12
大坂	伊藤宗子	三三	5.13
大坂	伊藤宗子	三三	5.14
大坂	伊藤宗子	三三	5.15
大坂	伊藤宗子	三三	5.16
大坂	伊藤宗子	三三	5.17
大坂	伊藤宗子	三三	5.18
大坂	伊藤宗子	三三	5.19
大坂	伊藤宗子	三三	5.20
大坂	伊藤宗子	三三	5.21
大坂	伊藤宗子	三三	5.22
大坂	伊藤宗子	三三	5.23
大坂	伊藤宗子	三三	5.24
大坂	伊藤宗子	三三	5.25
大坂	伊藤宗子	三三	5.26
大坂	伊藤宗子	三三	5.27
大坂	伊藤宗子	三三	5.28
大坂	伊藤宗子	三三	5.29
大坂	伊藤宗子	三三	5.30
大坂	伊藤宗子	三三	6.1
大坂	伊藤宗子	三三	6.2
大坂	伊藤宗子	三三	6.3
大坂	伊藤宗子	三三	6.4
大坂	伊藤宗子	三三	6.5
大坂	伊藤宗子	三三	6.6
大坂	伊藤宗子	三三	6.7
大坂	伊藤宗子	三三	6.8
大坂	伊藤宗子	三三	6.9
大坂	伊藤宗子	三三	6.10
大坂	伊藤宗子	三三	6.11
大坂	伊藤宗子	三三	6.12
大坂	伊藤宗子	三三	6.13
大坂	伊藤宗子	三三	6.14
大坂	伊藤宗子	三三	6.15
大坂	伊藤宗子	三三	6.16

地名	所有者・亭主	広さ	茶会の年月日
京都	大和宗子	三三	天正18.10.20
京都	大和宗子	三三	10.22
京都	大和宗子	三三	10.24
京都	大和宗子	三三	10.28
京都	大和宗子	三三	11.1
京都	大和宗子	三三	20.5.26
京都	大和宗子	三三	5.28
京都	大和宗子	三三	10.梅日
京都	大和宗子	三三	11.9
京都	大和宗子	三三	11.10
京都	大和宗子	三三	11.12
京都	大和宗子	三三	11.15
京都	大和宗子	三三	11.17
京都	大和宗子	三三	11.20
京都	大和宗子	三三	11.21
京都	大和宗子	三三	12.17
京都	大和宗子	三三	12.19
京都	大和宗子	三三	12.26
京都	大和宗子	三三	1.17
京都	大和宗子	三三	1.22
京都	大和宗子	三三	3.11
京都	大和宗子	三三	3.29
京都	大和宗子	三三	4.6
京都	大和宗子	三三	4.9
京都	大和宗子	三三	11.17
京都	大和宗子	三三	11.24
京都	大和宗子	三三	2.24

## 第8章 共生の世界

## 8-1 はじめに

深まり高まった心、わびの心を持つことを目指しつつ、亭主は意図を伝え、客はそれを受け入れるという、茶の湯における非言語コミュニケーションが結果的にもたらすものは何か。共生ということを筆者は提示する。本章では、自然との、道具との、そして人との共生について考察し、第1章で採り上げた「文化」を振り返り、また改めて「心」の問題に立ち返る。

## 8-2 自然との共生

### 8-2-1 自然との共生 — 自然と人との一体感

亭主は意図を伝え、客はそれを受け入れるという非言語コミュニケーション成立によって、亭主と客は茶の湯という場に共生すると考えられる。この共生はまた、人との間のみならず、人と自然との間にも起こり得ると考える。

第6章にて五感の聴覚に関して奥田正造からの引用を行ったが、今一度それを見してみる。「(松風を) 落ち着いて聞いていると、心を大森林の奥、大幽谷の底までも持って行って仕舞うような心地がする<sup>1</sup>。」大森林の奥・大幽谷の底まで心を持っていく。人が大自然に吸い込まれる。すなわち人と自然が一緒になる、共生すると述べている。

「日本人は古くから人間と自然を対立させて考えるのではなく、自らもその構成要素の一つであると考えて暮らしてきました。そのため自然を手なづけるというよりは、自然があるがままの中に溶け込んでその恵みを受けるという考え方をしてきました<sup>2</sup>。」という指摘もある。人と自然が一体化していると考えるのが日本人の自然観である。裏千家第15代宗匠鵬雲斎がアメリカにて、日本人の自然に対する考え方について講演した際のアメリカ人聴衆の反応を、次のように語っている。「自然の中にとけこもうとする生活が、日本人の心であることを発見した彼らの喜びようは、尋常一様ではありませんでした。自然を征服することが文化なり、と伝えてきた西欧流の思考に対する一撃だったのです<sup>3</sup>。」自然との一体感は日本のみならず中国の思想にもあるとは聞くが、とにかく西欧とは異なっているようである。

倉澤行洋氏も登山家、槇有恒氏の例を挙げて同様のことを述べている。槇氏は1956年、ヒマラヤ山脈のマナスル(8,163メートル、標高世界第8位)の登山に成功するという快挙を挙げる。この偉業を祝した歓迎会について、槇氏は次のように記している。「カトマンズでは、ネパール官民の盛大な歓迎を受けた。その会合で私は、マナスルを征服して来たのではない。この壮麗な山との親しみの交わりを深めて帰ったのであると述べた<sup>4</sup>。」西欧人は自然を征服する対象として考える。しかし日本人である槇氏は、親しんで交わる相手として考えている。槇氏のこの挨拶は、ジャーナリストも含め、欧米の列席者たちの意表をつく発言であったことが指摘されている。山は生きものであり、呼吸をしている。登山家



もその山と一緒に息をする。山という大自然の中に溶け込み、山と人が一つの呼吸を共に行うのである。そこに登山の喜びがあり、山を征服する登山と、山と一つになる登山との違いは大きい<sup>5</sup>。自然の捉え方が、西欧と東洋では全く異なっている。自分と「対する」ものとして見るのか、「一緒」として見るのかの相違である。「欧米の人たちにとっては、山だけでなく、自然の万物が、人間が征服すべき対象なのです。東洋の人にとってはそうではありません。人間は、大自然と共に呼吸し、生きている。人は大自然の一部なのです<sup>6</sup>。」川端康成も、「月の歌人」と呼ばれるほど月を詠む歌に秀でた明恵上人を例に挙げ、上人は「月を友とする」と言うよりも、月と非常に親しくなり、「月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一してゐます<sup>7</sup>。」と評している。登山と文学とは全く異なる分野であるが、にも拘わらず共通性があるということは、人は自然と共にあるという考え方が、日本人の自然観の根本に宿っているからであろう。自然の中に人が入っている。包摂されている。この見方は、話し手と聞き手が一体化する、河合隼雄の説く「その中に入って<sup>8</sup>」、または佐々木瑞枝氏の言う「関係体<sup>9</sup>」に共通するものであると考えられる。そして茶の湯においても同様である。松風の音に大自然を感じる時、茶人はその自然と一体化しているのだ。同じ世界に共生しているのである。

そもそもわび茶の成立期から、自然は茶に大きく関係していた。武野紹鷗は「侘の文」の中で「侘と云ふこと葉は故人も色々に歌にも詠じけれども、ちかくは正直に慎み深くおごらぬ様を侘と云ふ<sup>10</sup>。」と言っている。紹鷗が述べていることは、珠光の説く「我慢我執のない心」、深まり高まった心、禅における真心に通じる「わび」の心であることは前章にて語った通りであるが、ここでは「正直」に注目したい。いわゆる正しく素直なこと、偽りのないことという文字通りの意味以上のものが含まれている。紹鷗は「正直」を説明すべく、藤原定家の次の歌を挙げている。

いつはりのなき世なりけり神無月 誰かまことより時雨そめけむ<sup>11</sup>

偽りのない世界であったことだなあ、10月。神々がいないのに、誰の誠から時雨れが降り始めたのだろう、と疑問の形で終わっている。神々が皆出雲大社に集まっているので出雲以外の地には神はいない。それなのにどうして時を間違えることもなく、雨が降るのか、誰が降らせたのか。大自然からということになる。倉澤行洋氏は「天理」という用語のもとに紹鷗の言を説明しているが<sup>12</sup>、天理はすなわち天然の道理であり、人の力ではない。万物を支配している筋道、天のことわりである。人間など遙かに超えた自然の道理である。「正直に」は天理に正直であれ、自然に正直に、大自然と一体にという意であり、自然との共生という考え方は日本人の根底にある。そしてわび茶の根本にもあるのである。

茶の四規と呼ばれる「和敬清寂」の「和」は人々の和、すなわち人と人との繋がりであるとはよく言われるところであるが、人と自然との和、ハーモニーというものをも含んでいる。人と自然とが茶の湯という世界を共有し、茶の湯という場において共生している。

茶における人と自然との共生の背後には、禅の思想がある。「天地と同根、万物と一体<sup>13</sup>」となることが禅の根本であるという指摘がある。「大自然のなかに、人間本来の精神が

活かされ、小座敷のなかに茶をたて、大自然と合一するのが目的であって、禪の境地を茶の精神の上に活かしたものが、利休の茶の完成と見てよかろう<sup>14</sup>。」との見解に筆者も賛同するが、禪の思想にもある、人と自然との共生というものが、茶の湯の中に生きている。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 奥田正造『茶味』（京都：方丈堂出版、1920年初版、2002年第2版）、p.25. 括弧は筆者による。
- <sup>2</sup> 谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』（京都：淡交社、2005年）、p.38.
- <sup>3</sup> 千宗室『茶のすがた』（東京：PHP研究所、1978年4月第1刷、1978年11月第4刷）、pp.237-238. アメリカ、ニュー・ジャージー州、シートンホール大学での講演について述べている。
- <sup>4</sup> 槇有恒『わたしの山旅』（東京：岩波書店、1968年第1刷、1973年第6刷）、pp.191-192.
- <sup>5</sup> 倉澤行洋「閉会あいさつ『大隠の茶』『心茶』別冊（京都：心茶会心茶編集部、1998年）、p.31. 参照。
- <sup>6</sup> 同上、p.32.
- <sup>7</sup> 川端康成『美しい日本の私 その序説』（東京：講談社、1969年第1刷、1977年第35刷）、p.9. 「月を友とする」の表現も、ここにある。
- <sup>8</sup> 大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』（東京：岩波書店1996年第1刷、1999年第7刷）、p.47. この箇所は河合氏による。
- <sup>9</sup> 佐々木瑞枝「比較基準としての言語の問題」浜口恵俊 編『日本文化は異質か』（東京：日本放送出版協会、1996年第1刷、1998年第3刷）、p.97.
- <sup>10</sup> 「侘の文」西堀一三『日本茶道史』創元選書（東京：創元社、1940年初版、1946年第10版）、p.125.
- <sup>11</sup> 同上、p.125.
- <sup>12</sup> 倉澤行洋「特別寄稿・日本茶道における『侘び茶』の哲学」、茶学の会十周年記念『お茶と私』、(株式会社エムクリエーション、2009年10月)、pp.123-125. にて紹鷗の説く「正直」について説明している。
- <sup>13</sup> 伊藤古鑑『茶と禪』（東京：春秋社、1966年第1刷、2004年新装第1刷）、p.6.
- <sup>14</sup> 同上、p.69.

#### 8-2-2 自然との共生 — 茶花を通して

茶席を設ける際、床に花を活ける。「花は野にあるごとく」は利休七則の一つであるが、自然に、と言いたいのであろう。しかし野の花をそのまま花入れに挿す訳ではない。なるべく美しく見えるように活けようと亭主は苦勞する。水切りをする、水揚げをする、余分な葉を取り除く、長い茎は切る等、実に様々な手を加える。大輪の花や香りの強いものは使わない等、茶花のきまりもある。2種の花や、花と葉類を組み合わせで活けることもあ

るので、両者の調和・釣り合いも考えなければならず、いよいよもって野にあるままでは済まされないことになる。

生け花の心得を示した草月会による『草風五十則』の〔入門〕第1則に「花が美しいからといって、いけばなのどれもが、美しいとは限らない<sup>1</sup>。」とあり、その説明として「野山にあるときより美しくいけられないなら、いけばなとしての価値はありません<sup>2</sup>。」と記されている。この「美しく」の意味は難解である。野山にあった時よりもよく見えるということか。その花の特徴や魅力、例えば可憐さであるとか清楚さであるとか、それが生け花にすることによって、より一層際立つという意味かと筆者は解する。もちろん、生け花と茶花は違う。生け花ではかなり手を加え、技巧を凝らすのに対して、茶花には「野にあるごとく」、自然であることが問われる。茶席の花は花屋から買ってくるのではなく、本来は、亭主自らが野山を歩いて見繕うものだ<sup>3</sup>とされている。野山に咲く草花、文字通り自然の中にある草花が、茶室という場に来る。亭主は花を活け、客はそれを鑑賞する。そうすることによって、人は花の出所、花を育んだ自然を体験することになる。茶人は茶席に花と共に生きるのである。

#### 【注】

<sup>1</sup> 勅使河原蒼風『草風五十則』（東京：草月文化事業出版部、2004年）、pp.8-9.

<sup>2</sup> 同上、P.9.

### 8-2-3 自然との共生 — 懐石料理・菓子を通して

茶席に欠かせない菓子や料理にも自然が表れている。懐石料理にはなるべく季節のもの、自然界の産物を取り入れる。また一方では、手を尽くし技を感じさせる、凝った料理や菓子を多々目にする。技巧の賜である。そしてその技巧によって、季節感や自然界の事物、すなわち自然を演出している。西欧のケーキ類は素材で季節感を表わす。春には苺のケーキを、秋には栗・かぼちゃ・りんごのパイを焼く。日本にもこのような例、つまり季節の素材を活かした菓子は多々ある。

しかしむしろ注目すべき例は、素材よりも色や形で季節を表す菓子である。「水」という菓子は、その色と形と線とで、あたかも本当に水が流れているかのように見える。初夏には青梅そっくりの薄緑色の菓子、秋には柿の実によく似た橙色の菓子がある。見た人は皆、技術の高さに感服する。素材は餡や粉類であり、青梅の果汁や柿の果実を実際に使っている訳ではないが、自然の産物である青梅や柿を再現している。料理でも、南瓜をくり抜いて木の葉の形にする、大根を菊の形にあしらった菊花大根等、枚挙にいとまがない。

また本物に酷似した例とは別に、自然の生物や植物を見立てて作った菓子もある。新年の初釜・初点てに賞味される菱はなびら餅は、白い餅に紅色の菱餅を置いて、甘煮にしたふくさごぼうと味噌餡を挟んでおり、白地に薄い紅色が透けて見える風雅な菓子だ。この菓子の原形は宮中の正月食、菱はなびらであり、ごぼうは新年の歯固めの祝いに使う押鮎

を見立てており、紅色は梅の花を表わすという<sup>1</sup>。自然界の生物である鮎をごぼうで作り、春の花である梅を菱餅で表現している。

亥の子餅は、猪に見立てて黒味がかかった白、店によっては薄茶色に作る。丸い饅頭型もあり、猪の体型に似せてずんぐりと長丸に作ったものもある。陰暦10月の最初の亥の日、亥の刻を祝ってこれを食べると万病を払い長寿を保つという中国の風習を踏まえ、また猪は多産でもあるので、子孫繁栄の願いも込められている。茶の湯では、この日に炉を開くと火災の厄から逃れられると言われていることから、開炉の際この菓子を賞味する<sup>2</sup>。自然界の生物を見立てた菓子の例である。

菓子や料理の中に人が自然を作り出す。これも人と自然との共生の表れであると解せる。亭主は懐石料理と菓子を用意する。客はこれを鑑賞し、賞味する。主客共に料理や菓子上に表現されている自然を体験することになる。茶席において、人は自然と共にある。

### 【注】

<sup>1</sup>鈴木宗康・白石かずこ・江後迪子・山口高志『和菓子の楽しみ方』（東京：新潮社、1995年）、p.5.

<sup>2</sup>同上、p.49.

## 8-3 道具との共生

人と道具との一体感の例も多々ある。茶の湯におけるコミュニケーションの定義に戻ると、「言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセス」であるが、道具を介して主客がコミュニケーションを図る例はこれまでも述べてきた。そして崇高な茶人であれば、道具と本人がまるで一体のようになるのである。「茶杓をとり茶入から茶をすくい茶碗にいれる場合には、そのことだけに正念をそそぐ...茶入を置き終わったら茶入から心を放ち、ついで茶杓を置きはたら茶杓を忘れ、心は自然に柄杓で釜の湯を茶碗に汲み入れることに移り、柄杓を置き終わったら柄杓を忘れて心はよどみなく茶筌に移る<sup>1</sup>。」見事な点前とは正にこのような点前を指すのであろうが、この茶境に達するならば、道具を使って茶を行うと言うよりも、道具と人とが一体化していると表した方が適切である。人が道具であり、道具が人である。

この考えは茶のみならず、他の芸道にも通じる。例えば剣道の名人であった山岡鉄舟は、大刀を用いながらも自らの一流を無刀流と称したという。「これは刀をもってしかも刀を意識せず、刀と自己と一如という意味である。また真の書家は筆をもってしかも筆を忘れるという。これは物我不二ということ<sup>2</sup>...」刀の名手は刀と自己とが一体に、書の名手は筆と自己が一体に、茶に長けた人は茶道具と自己が一体になる。道具を大事に、丁寧に扱えとはよく言われることだが、道具と人とが一体であるならば、道具を大切にとは、結局は自分を大切にすることになる。道具はそれを使う人の分身となる。

茶筌供養という行事がある。まず茶筌というものが、他の茶道具とは違う、別格である

ことを述べるが、茶席の流れの説明の際に、道具清めという所作があることを挙げた。茶入れ・茶杓・茶碗を清める所作については単に「～を清める」という言い方をするのに対して、茶筌にだけは「茶筌通し」という特別の用語が与えられており、他の道具とは別格だという感がある。また茶点てそのものを考えた時にも、他の道具は代用が効くかもしれないが、茶筌だけは無理である。茶杓がなければスプーンでも、趣はないが用は足りる。抹茶用の茶碗がなくても、食器としての小どんぶりを代わりに用いることはできる。しかし茶筌だけは他の物を代わりにすることはできず、またこれがなければ茶を点てることは不可能だ。よって茶筌は古くなってもむげに捨てることはせず、供養するのである。僧侶が経を上げ、参列者は茶筌を火に入れ拝む。灰となった茶筌は茶筌塚という、いわゆる茶筌の墓に入れられる。茶道界の支部によっては、この茶筌供養の後に茶席を設けているところもある。茶筌供養とはいわば茶筌の葬式であり、あたかも人間のように扱われている。茶筌を含め、茶道具は亭主にとって自分の分身のような存在となり得る。自分のからだの一部のように道具を扱い、人と道具が一体化する。茶の湯の場に共生するのである。

#### 【注】

<sup>1</sup> 芳賀幸四郎『わび茶の研究』（京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2刷）、p.402.

<sup>2</sup> 同上、p.402.

### 8-4 人と人との共生

人と自然との共生、人と道具との共生について述べてきたが、やはり1番大事なのは、人間同士が共生することである。それが正にコミュニケーションの行き着くところである。

「共生」とは異文化コミュニケーションの分野では、生の形式を異にする人々、すなわち異文化同士の人々、換言すれば外国人同士が、互いに自己実現を支え得る関係を創り出す、そのプロセスを指して言うが<sup>1</sup>、異文化に限らず茶席でのコミュニケーションにも十分当てはまる。茶席の参加者は、生の形式を異にする外国人同士ではないが——もちろん、外国人が参加することもある——、どの二人を取っても同じということは絶対になく、個人個人は当然異なる。しかしながら、その異なった人たちが茶の湯の場で、同じもてなしに与り、人と人とが和を以て結ばれ、そのよき経験がそれぞれの人の人生に刻まれていくなれば、十分に「互いに自己実現を支え得る関係」と言えるであろう。

桑田忠親氏は語っている。「茶の道とは、抹茶を飲む法則とか、閑寂な心境とか、美の鑑賞とかいうような、独善的なことではなくて、茶という飲み物を媒介として行われる人と人との交渉なのである。主客相互の作法にこもる、心の問題である。それが、正しく解決されるところに、初めて道の存生が認識され、自覚される。正しく解決されるとは、何か。人の心と心が真心をもって結ばれ合うことである。主客の心の共感であり、共鳴である。これなくして、茶の道は成り立たない<sup>2</sup>。」喫茶・作法・雰囲気等、茶においては皆、重要な要素であるが、しかしこれらすべてを踏まえて最も重視されるべき点は、「共に」と

いう姿勢、人と人との心の結び付きであるという氏の考えに筆者も同意する。筆者が述べてきた茶の湯のコミュニケーションは、最終的にはここに行き着く、また行き着くのが望ましいと考える。

桑田氏の引用では共感・共鳴という用語が使われている。「共感」は言語学者である牧野成一氏曰く、自分に関わる空間と外の空間とを繋ぐ概念である。「共感 (empathy) ...は、ソトに属する人間、動植物をウチの中に組み入れたい、留めたいという非常に大事な一般心理概念です<sup>3</sup>。」“empathy”は心理学の分野でも扱われる用語であるが<sup>4</sup>、「未練」という日本語独特の語と関連付けると、「共感」の概念が理解し易い。自分にとって過去になってしまった人や物、または過去になるべき人や物を、しかしそれが嫌で、現在に取り戻そうと、今の自分と関わる人や物にしておきたいという心理、それが未練であろう。「未練」においては過去・現在という時間が重要となるが、時間も含め、より敷衍して、ソトの人や物をウチ、自分の側に引き込みたい、引き付けたいという心理が「共感」である<sup>5</sup>。同じ空間、同じ世界の中に「一緒に」、「共に」いるという意味合いがある。

この考え方は本論文第4章で佐々木瑞枝氏が述べていた「関係体<sup>6</sup>」に通じ、河合隼雄氏の提示する「その中に入って<sup>7</sup>」にも繋がる。心の中に「関係体」の概念があるが故に、言葉を省略しても話し手の言いたいことが聞き手に伝わるのであり、童謡「ぞうさん」においても、やはり省略は問題にならない。「ぞうさん、ぞうさん、誰が好きなの。」の問いかけに対して、子どもの象が「あのね、母さんが好きなのよ。」と答える。「母さん」はこの文の主語ではなく目的語であるが、「私は母さんが好きなのよ。」の意であることを、問いかけた側も歌の聴き手も十分理解している。相手の中に自分が「入って」いる、一体化している。「その中に入って」は、すなわち「相手の中に入って」であり、その根本に「共感」がある。和を重んじる茶の湯と日本語は共通している。

裏千家第16代宗匠、坐忘齋が、「平成27年度・28年度家元指導方針<sup>8</sup>」の五つの項目の一つに、「同門一体感の高揚」を挙げている。説明として「茶の湯を学ぶ人々の一体感を高揚し、社中の帰属意識の啓発につなげよう」と述べている。一体感、帰属意識、これらの表現は共生に直に繋がる。家元による指導方針の一つに挙げられていること自体に、重い

概念であることが改めて認識させられる。『雲萍雑誌』にある「賓主ともに應ぜざれば茶の道にあらず<sup>9</sup>」であり、筆者はこの言に深く同意する。主客「共に」であり、それがなければ茶の道ではないのだ。共生の世界を築き上げることこそが茶なのである。

さらにこの共生を、茶において的確に表した表現が「一座建立」である。『山上宗二記』

に「客人<sup>(振)</sup>フリ事、在一座ノ建立ニ<sup>10</sup>」と記されており、客の心得は一座建立にあると述べている。世阿弥にも遡る長い歴史を持つ用語であるが<sup>11</sup>、茶席の亭主と招かれる客との相互の心遣いが一体となって、一座の茶席が成立することが「一座建立」であり、茶席の根本原理である<sup>12</sup>。亭主の意図、そしてそれを受け入れる客の心映えという、いわば「心」が結ばれて「一座建立」という極致に至る。倉澤行洋氏は「一座建立」を「主は客に集中

し客は主に集中する、主は客の心を我が心とし客は主の心を我が心とする<sup>13)</sup>と説明しており、正に「その中に入って」である。主客は同じ心を持ち、一つになる。

第2章にて「国語に関する世論調査」を扱った。その中で、コミュニケーションが円滑に行われていないと感じている国民が非常に多いことを見た。「相手の言いたかったことと自分の受け取ったこととが食い違っていた」、またその逆の、「自分の言いたかったことが相手にうまく伝わらなかった」の2点両方においてである。言語を用いてもコミュニケーションの成立は難しいのである。しかし言語を用いなくてもそれが可能となる世界があるのだ。それこそが茶の湯であり、何と感動的なことではないか。しかしながら、これを実現するためには、亭主は非言語要素である所作・道具等に意味を込め、心を込めなければならない。さらに客の側もそれを受け入れて初めてコミュニケーションが可能となる。コミュニケーションがそう容易に成立する訳では決してない。茶の湯のコミュニケーションは奥深く、またハードルが高いと言わなければならない。

さらに、世論調査で明らかにされたもう一つの問題がある。「コミュニケーションにおいて、難しいと感じること」に対して4割の人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答し、「コミュニケーションにおいて、重視すること」の設問に対しても6割台半ばの人が、同じく「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答している。いずれの設問においても、人間関係の重要視は「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を遥かに上回っており、日本国民の多くはコミュニケーションの明快さや論理性よりも、平和な対人関係、円滑な人間関係を大切に考えていることがわかった。人と人との和をいかに重んじていることか。これも茶の湯に通じる。しかしながら、ここでも心に留めなければならないことがある。単に主客が仲良く、波風立たず、平和に茶を行えばよいということではない。それだけで終わるものではない。茶の湯のコミュニケーションは1歩奥に踏み込んでいる。深まり高まった心、わびの心を亭主も客も持つことが望まれるからである。この目標に向かっての一生の修行が問われる。茶を点てる、茶を喫するという生活の延長、別に特別でもない日常的な所作の先には、心を磨くという深遠な目標が存在していることは前述の通りである。

#### 【注】

<sup>1</sup>石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔・江草忠敬『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書（東京：有斐閣、1997年初版第1刷、2000年初版第4刷）、p.230.

<sup>2</sup>桑田忠親『千利休研究』（東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版）、p.380.

<sup>3</sup>牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』NAFL選書12（東京：アルク、1996年）、p.47.

<sup>4</sup>心理学者マーティン・L・ホフマンは『共感と道德性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで』菊池章夫・二宮克己訳（東京：川島書店、2001年第1刷）、p.5.において、「共感とは自分自身よりも他人の置かれた状況に適した感情的反応」と定義している。すなわち他者の立場に自分を置いた際の心的反応ということであ

り、筆者は「共感」を、相手が自分と一緒に、共に同じ世界に生きるという意味合いの「共生」に類似した観念であると捉える。

- 5 牧野成一『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る—』、p.24. 参照。牧野氏は「共感」を説明するために「未練」の定義を行っている。また筆者がここで「日本語独特の言葉」と記しているのは、牧野氏が「未練」という単語は中国語にも韓国語にも存在するが、よく練れていない、すなわち、まだ下手だという意味であり、日本語の「未練」は特殊かもしれないとの説明に基づく。
- 6 佐々木瑞枝「比較基準としての言語の問題」浜口恵俊 編『日本文化は異質か』（東京：日本放送出版協会、1996年第1刷、1998年第3刷）、p.97.
- 7 大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』（東京：岩波書店 1996年第1刷、1999年第7刷）、p.47. この箇所は河合氏による。
- 8 筆者が本論文執筆中の2016年近辺の月刊「淡交タイムス」（京都：淡交社）、他多数の出版物において掲げられている。
- 9 『雲萍雑誌』、柳沢淇園 著、森銑三 校訂（東京：岩波書店、1936年第1刷、1997年第8刷）、p.72. ルビは本書にある。
- 10 『山上宗二記』千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収（京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定）、p.93. 括弧は本書にある。
- 11 熊倉功夫 校注『山上宗二記 付 茶話指月集』（東京：岩波書店、2006年）、p.94. にて「世阿弥『風姿花伝』に『この芸とは、衆人愛敬をもて、一座建立の寿福とせり』とある。」と注を付している。また神津朝夫氏は「一座建立」という言葉が「能を興行し<sup>こうぎょう</sup>生活の糧を稼ぐ観世の『座』が人気を得、繁栄していくことの重要性を表現したものだ。」と述べている。『利休の「わび」とはなにか』、p.223. ルビは本書にある。
- 12 桑田忠親『千利休研究』、p.395. において、利休が「一座建立」を茶事の根本原理と見做していたことを述べている。
- 13 倉澤行洋「茶の湯とは」「茶の湯文化学会会報 No.65」より。（京都：茶の湯文化学会、2009年10月24日、静岡例会）。

## 8-5 文化の再考察

筆者は第1章にて文化の分類を行ったが、今一度そこに立ち返る。

1. 高等文化 — 精神・物理両面で人間と生活を豊かにする知恵としての文化
2. 伝統文化 — 伝統芸術としての文化
3. 生活文化 — 共同体の思考・生活様式全体としての文化

茶の湯はこの中の伝統文化に分類されるが、高等文化・生活文化とも深く関わっているこ



とを「文化」の章で述べた。特に高等文化との結び付きは、深まり高まったわびの心と共生を考えた時、さらに顕著になってくる。

裏千家茶道では「道・学・実」を茶道の実践としている。茶の湯と言うよりも茶道、すなわち修行の意味合いを込めて示された3点が「道・学・実」である。「道」は精神的な修養を意味し、「学」は茶道に関するあらゆる学問を指し、「実」は実技すなわち点前を行うの意である。この三位一体が茶道の実践である<sup>1</sup>。上の文化分類の1の高等文化は、この中の「道」及び「学」と関わりが深い。「学」は茶道に関する学問を指すが、茶の分野に限らず広く学問と捉えると、学問を身につける、教養を高める、知識豊かな人間になる、ということで「知恵」を謳う1の高等文化に通じる。

また特に「道」は精神的な修養を通して人間として立派であること、洗練されていること、人格者であること、すなわち人間完成を目指すことを指す<sup>2</sup>。第1章において紹介した、レイモンド・ウィリアムズによる文化の分類の中の、「普遍的価値の観点から見た人間完成へ導く文化<sup>3</sup>」とも多分に通じる。修行としての茶を通して心を磨く、清める、そうした心に目覚める、深まり高まった心、わびの心を育む。あらゆる束縛から解放され、脱却し、自由になった自己、一切を超越した自己を発見する。他の何かに頼るのではなく、すべてが自分の中にあることを認識する。そのような心を目指して姿から心へ、心から姿へ、深まり高まった姿から心へ、一層深まり高まった心から姿への、絶え間ない修行の道を歩む。そして深まり高まった心を目指して人が集い、共生することが望ましい。わびの心と共生を考えると、伝統文化である茶の湯が高等文化とも極めて密接であることが、一層明らかになってくる。伝統文化と生活文化が「～としての文化」と定義付けられているのに対して、高等文化は「～としての文化」の前に「豊かにする」が入っており、他二つが「～である文化」で納まるのに比して、高等文化だけは「～にする文化」なのである。その背後には、深まり高まった心を目指す、目標とする、そして豊かな人間を、豊かな生活を作る、育む、そうした姿勢が含まれている。

結局、茶において重要視されるべきことは「心」であり、本論文のやはり重要な要素である「言語」、その言語と心について今一度、次に考察する。

#### 【注】

<sup>1</sup> 千宗室・千玄室 監修：『裏千家茶道』（京都：財団法人今日庵、2004年第1刷、2008年第3刷）、p.16.

<sup>2</sup> 谷川徹三氏は『茶の美学』（京都：淡交社、1977年）、pp.43-91. において、茶の湯を「芸術としての茶」、「社交としての茶」、「儀式としての茶」、「修行としての茶」の四つに分類している。この中の「修行としての茶」は裏千家茶道の示す「道・学・実」の「道」そのものであり、筆者による文化分類1の「高等文化」の中の「精神」に通じる。

<sup>3</sup> レイモンド・ウィリアムズ『長い革命』若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭 訳（京都：ミネルヴァ書房、1983年）、p.43. 久松真一氏も『茶道の哲学』（東京：講談社、1987年第1刷、1994年第12刷）、p.46. において、「茶道の第1の目的は人間形成であった。そして、このような人間形成が茶道文化を生んだのであります。」と述べている。

## 8-6 ことばと心<sup>1</sup>

言語と非言語について述べた第3章において、筆者は先行研究を基に、言語を「人間による、音声または文字を用いて意思と情報を伝達する手段」と定義した。意志だけでなく心情・感情をも含むため意思の表記を用いているが、茶の湯を考える上でも、こうした人間の内面、すなわち「心」の問題は非常に重要であることは再三述べてきた。ここでは、言語と言うより一つ一つの言葉、すなわち単語——歌論では「詞」とも表記される——、その言葉と心について考える。「心」は歌論用語であり、意味は広い。まず感情・意志・感動・着想・発想の意がある。平安時代の『古今和歌集』の初めにある「仮名序」と呼ばれる部分の冒頭で、同歌集の撰者、紀貫之が語っている。

やまとうたは、人の心を種<sup>たね</sup>として、万<sup>よろづ</sup>の言の葉とぞなれりける<sup>こと</sup>。

ここでの「心」は純粹に感情・感動の意味である。やまとうたとは、人が抱く感情、経験した感動を種とし、その種から生まれて口に出た、多数の葉のようなものだと言っている。「心」と「言の葉」が直接結び付いており、それが正にやまとうただと述べている。一方、同序の次の記述を見てみる。

ちはやぶる神代には、歌の文字もさだまらず、  
素直<sup>すなほ</sup>にして、言<sup>こと</sup>の心わきがたかりけらし<sup>3</sup>。

この中での「心」は感情ではなく意味内容を指している。この引用のすぐ前にスサノオノミコトへの言及があるが、そのような神様の時代には歌の文字も一定しておらず、素直に、ありのままに詠んだので、詠んでいる意味内容がわかりにくかったと述べている。ここでもやはり「心」と「言」が同時に使われている。また、同序には次のような表現もある。

花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心・言葉多く、  
さまざまになりける<sup>4</sup>。

この中にある「心」は、感情とも受け取られ、また発想とも解釈できる。花・鳥・霞・露、それらに接しての感情、またはそれらから湧く発想は多数の言葉を通して詠まれ、歌は様々なものとなったと言っている。ここでも「心」は直接「言葉」に通じており、両者の密な繋がりが見て取れる。

同じく「仮名序」には「在原業平は、その心余りて、詞<sup>ことば</sup>たらず<sup>5</sup>」とある。業平の歌は感情、すなわち情熱が強すぎて言葉が不十分だ、十分に表現しきれていないとの評であ

るが、ここでも「心」と「詞」が相互に深く関連していることがわかる。以上の歌に如実に表れているように、「心」は平安時代初期というごく早い時期から、「言葉（詞）」と対で論じられることが多い。心詞論は歌論の中心課題となっていた<sup>6</sup>。藤原定家も「心詞の二は、鳥の左右の翅のごとくなるべきにこそとぞ思給侍ける<sup>7</sup>」と述べ、歌は心と詞の二つによって成り立つものであり、両者の調和の大切さを説いている。詞が花で心が実であるように、と喩えるのは平安時代の流行であったという<sup>8</sup>。

紀貫之が平安という遠い昔に語っていることは、現代までも十分に通じる真理であろう。大和歌ばかりではなく、私たちは「心」を「言葉」によって今もなお伝えているのであり、言葉を使つてのコミュニケーションは、最も基本的な形でのコミュニケーションである。また言葉、ひいては単語・文・文法範疇をも含めた「言語」は心を伝える、茶の湯も心を伝える、と考える時、言語と茶の湯の共通性がまた一層明確なものとなる。

筆者はこれまでに言語と茶の湯、また日本語と茶の湯の共通性を挙げてきた。茶の湯も言語もコミュニケーションに深く関わっていることを述べた。そこにまず共通性があり、本論文はこのことに端を発している。ただ両者の相違を厳密に述べれば、茶の湯自体がコミュニケーションそのものであるのに対して、言語はコミュニケーションそのものを指すのではなく、その手段であるということである。嗜好品としての茶を飲むこと、言語を使うことは人間のみがすることであり、他の動物には見られない。喫茶と言語使用は人間である証しである。そこにも茶と言語の共通性があることを指摘した。そしてさらに、言語は心を伝える、茶の湯も心を伝える、その点が両者の最大の、最も強調すべき共通性であろう。「姿から心へ」、「心から姿へ」、という亭主の修行たる努力の過程を説明したが、主客間では「心から心へ」であろう。亭主の心を客の心へと伝え、客は亭主の心に応える、それこそが茶の湯のコミュニケーションであると言えよう。

#### 【注】

<sup>1</sup> 丸谷才一、他『ことば読本 やまとことば』（東京：河出書房、1989年）、p.207. 注参照。

及び『古今和歌集』小沢正夫 校注・訳『日本古典全集』第7巻所収（東京：小学館、1971年初版、1985年第17版）、pp.49-51. 注参照。

<sup>2</sup> 『古今和歌集』、p.49. ルビは本書にある。

<sup>3</sup> 同上、p.50. ルビは本書にある。

<sup>4</sup> 同上、p.51.

<sup>5</sup> 同上、p.57. ルビは本書にある。

<sup>6</sup> 丸谷才一、他『ことば読本 やまとことば』、p.207.

<sup>7</sup> 『毎月抄』久松潜一 編『中世歌論集』所収（東京：岩波書店、1985年）、pp.176-177.

<sup>8</sup> 倉澤行洋『増補 藝道の哲学 宗教と藝の相即』（大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第3刷）、p.10.

## 8-7 全人類・全世界における共生

わびの心、深まり高まった心を目指しつつ、人と人との共生を行う、思えばこれは茶に限ったことではない。茶に如実に表れているだけで、実は全人類・全世界に通じる重要事であろう。わびの心を以て茶に臨む、そのような「心の茶」は、珠光に萌芽を見るが、本格的に始まったのは利休においてであり、400年以上も前の話である。しかし400年以上経った今も、そして茶人のみならずすべての人間、日本のみならずすべての国において望まれることではなかろうか。われわれは深まり高まった心を持つことを目指し、そのことによって、単に表面的に波風立たない対人関係ではなく、真の意味での平和な人間関係、円滑な対人関係、すなわち人間間の共生にんげんかんが生まれると考えられる。茶の湯におけるコミュニケーションとは「言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセス」と定義したが、茶の湯に限らず人間は、言葉・行為・物を介して、お互いの心を理解し合う、伝え合う、通じ合うことを望んでいるであろう。

裏千家茶道に「ことば」というものがある。茶人が心に置くべき4か条を示しており、茶の行事において参加者は、この「ことば」を唱和する。4か条の1番最後は「豊かな心で、人々に交わり、世の中が明るく暮らせるように<sup>1</sup>」である。「豊かな心」はわびの心に通じる。この第4条は茶を超えて、すべての人々が、全世界で有すべき姿勢である。茶は結局、茶という領域に留まらず、理想的なこの世を映し出している。人と人との和で結び付いた世界を凝縮し、具体的な文化という形にしたのが茶の湯であると言えよう。

### 【注】

<sup>1</sup> 千宗室・千玄室 監修『裏千家茶道』（京都：財団法人今日庵、2004年第1刷、2008年第3刷）、p.3.

## 8-8 感応道交

「感応道交」という仏教用語がある。これは鎌倉時代の代表的禅僧である、曹洞宗の道元が『宝慶記』に記した用語である。宝慶とは中国の南宋の年号であり、『宝慶記』は在宋して学んだ道元が、宝慶年間（1225-1227年）に天童景德寺の住持、如浄の教えを受けて

記した記録である<sup>1</sup>。この中に「能礼所礼性空寂 感応道交難思議<sup>2</sup>」とある。現代語訳では「礼拝する者も礼拝される者も、その本姓は空寂であるが、感応道交することは思議しがたいことである<sup>3</sup>」となる。まずは空寂の段階がある。空寂とは、執着・欲望等の煩惱を消し去った悟りの境地である。そしてその後感応道交の段階に至る。仏教学者、伊藤秀憲氏の解説によると、感応道交とは、礼拝する者が仏による教化、善への導きを受容し、仏がこれに応え、両者が一体となり、通い交わることであるという<sup>4</sup>。『宝慶記』の

この件では、能礼と所礼、具体的には道元と如浄が感応道交したことを指していると考えられる<sup>5</sup>。

茶事の始まり、迎え付けの場面においては、亭主は茶事前の一連の大変な苦労を心から消し去り、執着せず深々と無言の一礼をする。空寂の段階である。そしてまた、あなたをお待ちしていましたという、客への歓待の意が同じ礼に含まれている。感応道交の段階の礼である。客は招待されたことへの感謝、亭主への労いを伝えようと一礼をする。伝え合おうとする感応道交の礼である。茶事の終わり、亭主が躡り口に座る場面においては、茶事中の一切の苦労・思いをまず心から消し去り、執着せず無言の一礼をする。やはり空寂の段階がある。そして一大行事を終えたという達成感、反省、客への感謝といった万感の思いが、同じ礼に含まれている。感応道交の段階の礼である。客は茶事の感動、亭主への感謝を伝えようと一礼をする。互いに伝えようとする、感応道交の礼である。

仏と人間の気持ちを通じ合う、人が仏法を聞いて心が動き出し、仏もそれに気づいて応化し、相互が通じて融合する。「感応道交」とは、いわば仏と人とのコミュニケーションである。本来は仏と人間の間を指し、また師匠と弟子、教える者と教えられる者等といった、立場の違った二者の間に用いる用語だが、広義では、身近な人と理解し合うことを指して言う場合もある。相手の思いを感受し、これに応え、両者の思いが交わり、両者が一体となる。茶の湯におけるコミュニケーションは、この「感応道交」と共通している。語り合うのではなく通じ合うのである。何の無理もなく自然に通じ合う、心が通い合うのである。

「感応道交」は「以心伝心」とも類似している。一般的に使われている語の「以心伝心」は、何も言わなくても気持ちが相手に通じること、暗黙の了解を意味する。しかし禅宗の用語の「以心伝心」は、心から心へ伝えること、言葉は使わず私の心を直接あなたの心へと伝えることを意味する。両者が通じ合うことであり、「感応道交」との類似性が高い。

「感応道交」は前章で論じた「守破離」に通じるものがある。苦労して力んで相手に心を伝えるのではなく、そのような段階は超越して、自ずから伝わる。客もまた努力して苦しみながらではなく、自然に亭主の意図を解する。無理なくスムーズに入ってくる。練磨して稽古を重ね、型を身に付け、相手に伝える「守」、そこに作意が加わり、型から脱皮していく「破」、そしてさらに「破」をも遥かに凌ぎ、力まなくても相手に伝わる、伝えるのではなく伝わる、型を超えた「離」、その極致がある。『南方録』にある「カナフハヨシ、カナイタガルハアシ」<sup>6</sup>の概念そのものである。相手にかなおうと力む、無理をするのではなく、自然とかなう、通じるのである。

茶の湯と日本語との共通性がまた浮かび上がってくるが、前述した「する」ではなく「なる」の領域である。「結婚することにしました。」という表現ではなく「結婚することになりました。」が多く使われ、「『する』と『なる』とでは、ほとんできまって『なる』が選ばれるのが、われわれのことばの感覚である<sup>7</sup>。」と前に述べたように、心を伝えることをするのではなく、伝わることになるのだ。コミュニケーションをするのではなく、コミュニケーションになるのである。そこでは言語ももちろん使われるが、むしろ非言語を通じて多くを語り、多くを伝え、多くを受け入れ、すなわち通じ合って、主客は同じ世界に共生することになる。

コミュニケーション学の用語であり、それを受けて筆者も茶の湯のコミュニケーションの定義に用いた「共有」、言語学、また心理学の分野でも提示されている「共感」、茶道研究家が説いている「共鳴」、異文化コミュニケーション学が唱える「共生」、学問分野はそれぞれ異なるが、すべて同じ考え方が根本にある。これらのキーワードに共通しているのは「共」である。

コミュニケーションという用語が、「共に」を意味するラテン語の“communis”、または「共有する」を意味する“communicare”に起源を発しているということが、茶の湯を考えると心から納得できるのである。

### 【注】

- 1 『宝慶記』伊藤秀憲・東隆眞 訳注、『宝慶記・正法眼蔵随聞記』より、原文対照現代語訳『道元禅師全集』第16巻所収（東京：春秋社、2003年）、p.309. 参照。
- 2 同上、p.15. ルビは本書にある。
- 3 同上、p.15. 本書には「感応道交」の上にルビがあるが、ここでは省略する。
- 4 同上、p.65. 参照。
- 5 同上、p.65. 参照。
- 6 『南方録』「覚書」千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収、京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定、p.5.
- 7 外山滋比古『日本語の素顔』（東京：中央公論社、1981年初版、1995年第4刷）、p.19.

## 8-9 むすび

茶席では人と自然との共生が起り得る。自然を支配する、征服するという西欧の考え方とは異なり、日本人は人と自然とが一緒になると考える。こうした自然の捉え方はわび茶の成立期から既に見られた。武野紹鷗の言「侘と云ふこと葉は故人も色々に歌にも詠じけれども、ちかくは正直に慎み深くおごらぬ様を侘と云ふ！」の中の「正直」という語には、万物を支配する天のことわりがあつて、それは人間の力など遥かに超えた自然の道理であり、自然に正直であれ、人は大自然に心身共に任せ一体になれとの含みがある。

茶席には花を活ける。すなわち自然を持ち込むことになる。亭主は花を活け、客はそれを鑑賞する。そうすることによって、人は花の出所、花を育んだ自然を体験することになる。そして人は茶席で、花と共に生きるのである。茶席でもてなされる懐石料理・菓子も季節の素材を使う、また自然界の風物を形や色彩で表すことにより、自然を表現する。自然を作り出す。亭主は料理や菓子を用意する。客はそれを鑑賞し、賞味する。主客共に料理や菓子に表現されている自然を体験する。人は自然と共にある。茶席には道具と人との一体感も見られる。磨かれた点前では流れるように所作が進行し、自然な動きとなり、人と道具がまるで一体化したように茶席が進む。道具は亭主の分身的な存在になり、人と道具とが共生する。

しかし何と言っても1番強調すべき共生は、人間同士のそれである。茶の湯は茶という飲み物を通しての人同士の触れ合い・結び付きであり、相手を思いやり、相手の中に自分が入っていくかのようになる。茶の湯の共生は「一座建立」にも通じる。「国語に関する世論調査」では、コミュニケーションの難しさが浮き彫りにされた。言語を使ってでさえも困難だが、茶の湯では言語を用いなくてもコミュニケーションが成立し得る。これは感動的なことである。しかしそのためには、亭主の側は自分の意図、それを言葉もさることながら所作・道具といったむしろ非言語要素によって表し、客に伝える。客の方にもそれを受け入れるだけの心映えが問われることになる。茶の湯のコミュニケーションは奥深く、ハードルが高い。コミュニケーションは、そう簡単に成立するものではない。

またもう1点、世論調査からわかったことは、コミュニケーションの明快さや論理性よりも、平和な対人関係、円滑な人間関係を大切に考えているということである。人と人との和を重んじており、これも茶の湯に通じる。しかし単に主客が仲良く、波風立たず、平和に茶を行えばよいということではない。茶の湯のコミュニケーションは、やはり1歩奥に踏み込んでいる。深く高まった心、わびの心を目指すという高い目標があるからである。

深まり高まった心、すなわちわびの心、また共生の考え方を踏まえて文化の分類に再び立ち返る。筆者は第1章で文化を高等文化・伝統文化・生活文化の三つに分類し、茶の湯は伝統文化に位置付けられる。裏千家茶道で示された「道・学・実」の中の「道」は精神的な修養を通して人間として立派であること、洗練されていること、人格者であること、すなわち人間完成を目指すことを指す。修行としての茶を通して心を磨く、清める、そうした心に目覚める、深まり高まった心、わびの心を育む。あらゆる束縛から解放され、脱却し、自由になった自己、一切を超越した自己を発見する。他の何かに頼るのではなく、すべてが自分の中にあることを認識する。そのような心を目指して姿から心へ、心から姿へ、深まり高まった姿から心へ、一層深まり高まった心から姿への、絶え間ない修行の道を歩む。そして深まり高まった心を目指して人が集い、共生することが望ましい。わびの心と共生を考えると、伝統文化である茶の湯が高等文化とも極めて密接であることが、一層明らかになってくる。茶の湯はそれだけ広く、また深い文化なのである。

結局、茶において重要視されるべきことは「心」であり、本論文のもう一つの重要な要素である「言語」、それと「心」との関係に今一度目を向ける。言語と言うより言葉・詞という言い方をした方がここでは適切であるが、歌論において、歌は心と詞の二つによって成り立つものであり、両者の調和の大切さ、表裏一体であることが平安という遠い昔から語られていた。これは現代までも通じる真理であろう。平安の大和歌ばかりではなく、私たちは「心」を「言葉」によって今もなお伝えているのであり、言葉を使ってのコミュニケーションは、最も基本的な形でのコミュニケーションである。また個々の言葉も含めた「言語」は心を伝える、茶の湯も心を伝える、と考える時、言語と茶の湯の共通性がまた一層明確なものとなってくる。

筆者はこれまでに言語と茶の湯、また日本語と茶の湯の共通性を多々挙げてきた。まず茶の湯も言語もコミュニケーションに深く関わっており、本論文はこのことに端を発している。ただ両者の相違を厳密に述べれば、茶の湯自体がコミュニケーションそのものであ

るのに対して、言語はコミュニケーションそのものを指すのではなく、その手段であるということである。嗜好品としての茶を飲むこと、言語を使うことは、人間である証しである。そこにも共通性がある。そしてさらに、言語は心を伝える、茶の湯も心を伝える、その点が両者の最大の、最も強調すべき共通性であろう。「姿から心へ」、「心から姿へ」、という亭主の修行を前述したが、主客間では「心から心へ」である。亭主の心を客の心へと伝え、客は亭主の心に応える、それこそが茶の湯のコミュニケーションであると言えよう。

こう考えてくると、茶の湯は茶の湯という限られた枠組みに留まらず、全人類・全世界を表していると筆者は解する。人と人とが結び合った、心を伝え合う、理想的なこの世を映し出している。そのような世界を凝縮し、具体的な文化という形にしたのが茶の湯であると言えよう。

「感応道交」という仏教用語がある。相手の思いを感受し、これに応え、両者の思いが交わり、両者が一体となる。茶の湯におけるコミュニケーションは、この「感応道交」と共通している。「感応道交」は「守破離」に通じるものがある。苦勞して力んで相手に心を伝えるのではなく、そのような段階は超越して、自ずから伝わる。客もまた努力して苦しみながらではなく、自然に亭主の意図を解する。無理なくスムーズに入ってくる。練磨して稽古を重ね、型を身に付け、相手に伝える「守」、そこに作意が加わり、型から脱皮していく「破」、そしてさらに「破」をも遥かに凌ぎ、力まなくても相手に伝わる、伝えるのではなく伝わる、型を超えた「離」、その極致がある。語り合うのではなく、そのような段階は既に超越して、通じ合うのである。そこでは言語よりも非言語が物を言う。非言語が多くを語り、多くを表し、多くを受け入れ、通じ合って、主客は同じ世界、茶の世界に共生することになる。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 「侘の文」西堀一三『日本茶道史』創元選書（東京：創元社、1940年初版、1946年第10版）、p.125.



## 終章

本研究は茶の湯におけるコミュニケーションをテーマとしているが、筆者はこれを次のように定義する。

茶の湯のコミュニケーションとは、言葉・所作・道具等を介して、主客間で意味を共有するプロセスである

また筆者は言語を「人間による、音声または文字を用いて意思と情報を伝達する手段」と定義する。文化と言語が極めて密接な関係にあることは、日本語や英語、また極めてマイナーな言語であるイヌイット語、ネイティブ・アメリカンのホープ語からさえも言えることから、その国の言語のあり方を知ることにより、文化もまた熟知できると考えられる。日本人の言語すなわち日本語を考察することにより、日本文化である茶の湯も理解できることになる。この方法論に基づいて日本人の言語のあり方を探ると、ハイ・コンテクスト文化に属する。言語の使用が少なく、人と人々が密接に関わり、察しが重んじられる文化であり、正に茶の湯に当てはまるとの発見があった。

日本語の特徴として、省略・緩和表現・外国の影響という3点を挙げたが、同じことが茶の湯にも見られるとの指摘は、本研究の一つの成果であろう。日本語では主題・述語の省略があり、また人が表れない表現も多い。茶の湯では亭主は自分の意図を言葉なしに表し、すなわち言葉の省略が働くが、心映えのある客ならば、亭主の意図は伝わる。

緩和表現も日本語の特徴である。日本語では明確に述べることを避け、あからさまでないことをよしとする傾向がある。茶の湯もまた緩和表現の文化であると解せる。仰々しくではなく、自然に、わざとらしくではなく、すなわちあからさまではなく、換言するならば緩和された演出でもてなすことが望ましい。

日本語には外国の影響が大であるが、そこから独自の日本語を作り上げてきたと言える。漢字は中国から入ってきた。その漢字を使う一方で、漢字を基にひらがな・カタカナという、日本独自の文字を創作した。宣教師が考案したローマ字も、日本語の文字の1種となっている。宣教師すなわち外国人がもともと作り出した訳だが、日本語の中に取り入れている。明治時代に日本語の近代化が図られ、西洋語の翻訳が盛んになされたため、日本語への西洋語の影響は非常に大きい。しかしながら主語・人称代名詞・無生物主語といった西洋語の使用は日本語には定着しなかった。単なる受入れではなく、西洋語に学びながらも、日本人は日本語を独特の言語に作り替えた。巧妙に日本文化を形成したのである。

同様のことが茶の湯についても言える。植物としての茶も、喫茶の風習、茶点でも、外国である中国から伝わった。茶道具も初期の頃は朝鮮・中国より、安土桃山期には南蛮・南方より入り、そこに和物も取り混ぜて茶席を演出する。外国のものを適切に取捨選択し、器用に取り込み、いつの間にか立派な日本文化に仕立て上げている。そのような興味深い日本文化の現象が、日本語と茶の湯に共通していることが、研究を通じて明らかになった。

戦国時代すなわち16世紀後半には、戦争と茶の湯が背中合わせのように行われていた。茶席は凱旋の場、密談の場という言語コミュニケーションの場であったと考えられる。しかし、物言わぬ名物茶器に、為政者である信長・秀吉は多くを語らせていたのではないか。

すなわち自分の権力を誇示し、服従へと導いた。茶席は非言語コミュニケーションの場でもあったと考えられる。戦国時代と非言語コミュニケーションの結び付きは、本研究による新たな指摘であると言えよう。

季節に沿って、及び茶事に沿って茶の湯を見てみると、言語を使うよりも非言語に託されている部分が遥かに多いことが、研究を通じて明らかになった。言語ではなく点前の所作や道具という非言語を通して、亭主は季節を表現し、茶事のテーマを示し、それぞれの場面における意味を客に伝えようとする。亭主と客はもちろん話をする。しかし重要な部分は、むしろ所作や道具という非言語要素に表されている。筆者はその国の言語のあり方を知ることにより、文化が理解できるのではないかと述べたが、正にそうであると言えよう。逆説的ではあるが、言語をあまり使わないという言語のあり方が、茶の湯において見られる。言語よりも非言語で伝える、それが茶の湯という文化であると考えられる。

亭主は心を磨く。深まり高まった心、すなわちわびの心を目指しつつ、茶の湯のコミュニケーションを行う訳であるが、コミュニケーションの成立、すなわち亭主の意図が伝わる茶席作りを可能にする要因として、筆者は複数の局面の理解と作意の2点を挙げた。作意の中でも「不完全の美」は特に重要であると筆者は考える。「不完全の美」は鎌倉時代の吉田兼好に早くも表れ、遠く現代にも通じる日本文化の美意識である。完全であるよりもむしろ整っていない、不足であることをよしとし、「不完全の美」は結局わびに通じる。なくて淋しい、貧しい、よくない、という意味ではなく、逆に望ましいのである。日本語の特徴として省略を挙げたが、言葉が足りないこと、または全くないことが、むしろ奥ゆかしさ・美しさといったプラスの効果を生み出すと述べた。日本語の特徴が、茶の湯のコミュニケーション成立の要因にも共通していることが、研究により明らかになった。

序章において、筆者は本研究のねらいを次の通り提示した。茶の湯と言語、ひいては茶の湯と日本語に共通する部分があることを探求しつつ、茶の湯のコミュニケーションがどのように行われているか、成立の要因は何か、その結果築き上げられるものは何か、そしてコミュニケーションを行う上で、常に目標とするものは何かを明らかにすること、それがねらいである。論文の終盤に当たる本章において、研究のねらいをまとめてみたい。茶の湯のコミュニケーションがどのように行われているかと言えば、そこでは言語ももちろん使われるが、むしろ非言語が重きを成している。コミュニケーション成立の要因としては、複数の局面の把握と作意が挙げられる。コミュニケーションの結果築き上げられるもの、それは主客の共生の世界である。そして亭主が常に目標とするものは、深く高まった、わびの心であり、それを目指した一生を懸けての修行が、茶の道であると言えよう。

茶の湯と言語は両方共コミュニケーションに深く関わっている。ここにまず共通性がある。文化の飲み物である茶を喫すること、言語を使うこと、これらは他の動物にはない、人間のみのものである。ここにも言語と茶の共通性がある。茶の湯と日本語には省略・緩和表現という共通性があり、両方共そこに美があることも共通している。また両者共、外国の影響を多分に受けており、しかしながら日本独自の文化としての茶の湯、日本独自の言語としての日本語を自ら築き上げた点も共通項である。

そしてさらに、言語は心を伝える、茶の湯も心を伝える、それが両者の最大の共通性で

あると言えよう。「姿から心へ」、「心から姿へ」のさらに先にある「心から心へ」である。亭主の心を客の心へと伝え、客は亭主の心に応える、これこそが茶の湯のコミュニケーションである。亭主と客とが、相手と自分が、心を合わせて、心が結ばれて、一つの世界に共生する。「その中に入って」——相手の中に自分が入って——である。相手と自分が感応道交し、一体であるかのようにになる。一緒に、共に生きるのである。コミュニケーションという用語が、「共に」を意味するラテン語の“communis”、または「共有する」を意味する“communicare”に起源を発しているということが、茶の湯を考えると心から納得できる。茶の湯も言語も、「共に」に行き着くべく、根本に据えているものは心であろう。言語も茶の湯も心の世界であることを、本研究を通じて強調したい。

#### 【注】

<sup>1</sup>大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』（京都：岩波書店、1996年第1刷、1999年第7刷）、p.47. この箇所は河合氏による。

#### 謝 辞

論文作成に当たって、宝塚大学大学院教授で指導教官の倉澤行洋先生、同大学院教授のホルスト・S・ヘンネマン先生から、平素より懇切なご指導、貴重なご指摘、ご意見を多々賜ったことに、深甚よりお礼を申し上げます。

## 参考文献

- 『今井宗久茶湯日記抜書』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 『雲萍雑誌』、柳沢淇園 伝、森銑三 校訂、東京：岩波書店、1936年第1刷、1997年第8刷。
- 「笈の小文」、井本農一・堀信夫・村松友次 校注・訳『松尾芭蕉集』、『日本古典全集』第41巻所収、東京：小学館、1972年初版、1985年第15版。
- 『奥の細道』、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『古典詩歌集』、『日本文学全集』第6巻所収、東京：河出書房、1966年。
- 「御尋之事」『源流茶話』千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収（京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定）、p.472。
- 『閑夜茶話』、井伊直弼 著、戸田勝久 校注『茶湯一会集・閑夜茶話』所収、東京：岩波書店、2010年。
- 『北野大茶湯之記』、千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収、京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定
- 『喫茶往来』、千宗室 編『茶道古典全集』第2巻所収、京都：淡交社、1962年初版、1967年500部限定。
- 『喫茶養生記』、千宗室 編『茶道古典全集』第2巻所収、京都：淡交社、1962年初版、1967年500部限定。
- 『近古史談 全注釈』、若林力 注釈、東京：大修館書店、2001年。  
『源流茶話』、千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収、京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定。
- 『江岑夏書』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 『古今詩歌集』、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、山本健吉・池田弥三郎 訳・注『古典詩歌集』より、『日本文学全集』第6巻所収、東京：河出書房、1966年。
- 『古今和歌集』、小沢正夫 校注・訳『日本古典全集』第7巻所収、東京：小学館、1971年初版、1985年第17版。
- 『金春古伝書集成』、東京：わんや書店、1969年。
- 「心の文」『珠光古市播磨法師宛一紙』、千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収、京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定。
- 『紹鷗遺文』、千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収、京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定。
- 『新古今和歌集』谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、山本健吉・池田弥三郎 訳・注『古典詩歌集』より、『日本文学全集』第6巻所収、東京：河出書房、1966年。

- 『聖書』(小形7ポイント活字口語聖書) 日本聖書協会、東京：三省堂、1955年。
- 『禪茶録』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 「宗及茶湯日記 他会記」、『天王寺屋会記』より、千宗室 編『茶道古典全集』第7巻所収、京都：淡交社、1957年初版、1967年500部限定。
- 『宗湛日記』、千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収、京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定。
- 『茶経』、千宗室 編『茶道古典全集』第1巻所収、京都：淡交社、1957年初版、1967年500部限定。
- 『茶湯一会集』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 『茶話指月集』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 『茶話抄』、千宗室 編『茶道古典全集』第10巻所収、京都：淡交社、1961年初版、1967年500部限定。
- 『徒然草』、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、井上靖 訳者代表『王朝日記随筆集』より、『日本文学全集』第3巻所収、東京：河出書房、1965年。
- 『徒然草』、神田英夫・永積安明・安良岡康作 校注・訳『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』より、『日本古典全集』第27巻所収、東京：小学館、1971年初版、1985年第17版。
- 『長闇堂記』、千宗室 編『茶道古典全集』第3巻所収、京都：淡交社、1960年初版、1967年500部限定。
- 『南方録』、千宗室 編『茶道古典全集』第4巻所収、京都：淡交社、1956年初版、1967年500部限定。
- 『不白筆記』、江戸千家茶の湯研究所編、京都：江戸千家茶の湯研究所、2008年。
- 『宝慶記』、伊藤秀憲・東隆眞 訳注、『宝慶記・正法眼蔵随聞記』より、原文対照現代語訳『道元禅師全集』第16巻所収、東京：春秋社、2003年。
- 『毎月抄』、久松潜一 編『中世歌論集』所収、東京：岩波書店、1985年。
- 『耶蘇会士日本通信』上巻、村上直次郎 訳、渡辺世祐 注、東京：雄松堂書店、1927年初版、1966年改訂復刻版。
- 『山上宗二記』、千宗室 編『茶道古典全集』第6巻所収、京都：淡交社、1958年初版、1967年500部限定。
- 『山上宗二記 付 茶話指月集』、熊倉功夫 校注、東京：岩波書店、2006年。
- 『老人雑話』巻下、近藤瓶城 編『改訂 史籍集覧』第10冊所収(京都：臨川書店、1983年復刻版、1990年第2刷)。
- 「佗の文」、西堀一三『日本茶道史』、東京：創元社、1940年初版、1946年第10版。

## 文献その他

### 日本人による著作等 著者の五十音順とする

#### 書籍

- 阿部宗正『利休道歌に学ぶ』、京都：淡交社、2000年初版、2004年第5版。
- 安西二郎『新版 茶道の心理学』、京都：淡交社、1971年。
- 飯田晴巳『明治を生きる群像—近代日本語の成立—』、東京：おうふう、2002年。
- 池上嘉彦『記号学への招待』、東京：岩波書店、1984年第1刷、1999年第33刷。
- 井口海仙 編『茶道用語集』、京都：淡交社、1962年初版、1991年第19版。
- 石井敏・岡部朗一・久米昭元 著、古田暁 監修『異文化コミュニケーション [改訂版]』、有斐閣選書、東京：有斐閣、1987年初版第1刷、2000年改訂版第9刷。
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔『異文化コミュニケーション・ハンドブック』、有斐閣選書、東京：有斐閣、1997年初版第1刷、2000年初版第4刷。
- 石田英一郎『文化人類学入門』、東京：講談社、1976年第1刷、1988年第12刷。
- 伊藤古鑑『茶と禅』、東京：春秋社、1966年第1刷、2004年新装第1刷。
- 井上史雄『日本語は生き残れるか—経済言語学の視点から』、東京：PHP研究所、2001年第1版第1刷
- 井上正仁・能見善久 編集代表『六法全書』平成26年度版I、東京：有斐閣、2014年。
- 江副隆秀『日本語を外国人に教える日本語の本』、東京：創拓社、1985年初版第1刷、1987年第12刷。
- 大井義雄・川崎秀昭『カラーコーディネーター入門 色彩』、監修：財団法人日本色彩研究所、東京：日本色研事業株式会社、1996年。
- 大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』、東京：岩波書店、1996年第1刷、1999年第7刷。
- 大久保喬樹『川端康成一美しい日本の私』、ミネルヴァ日本評伝選、東京：ミネルヴァ書房、2004年初版第1刷。
- 大野晋『日本語練習帳』、東京：岩波書店、1999年1月第1刷、1999年7月第20刷。
- 小笠原信夫『日本刀の鑑賞基礎知識』、東京：至文堂、1995年第6版。
- 小川芳男・林大、他編集『日本語教育事典』、日本語教育学会編、東京：大修館書店、1982年初版、1993年縮刷版第8刷。
- 小澤俊夫『昔話のコスモロジー』、東京：講談社、1994年。
- 小田栄作 執筆、千宗室（裏千家第15代宗匠）監修『茶道美術全集5 茶入』、京都：淡交社、1970年初版、1973年改訂初版。
- 小和田哲男『戦国武将の手紙を読む』、東京：中央公論社、2010年。
- 岡本文音『茶の湯と音楽』、京都：思文閣、2012年。
- 岡本浩一『心理学者の茶道発見：癒しと自己の探求』、京都：淡交社、1999年。



岡本浩一『茶道を深める』、京都：淡交社、2008年。

奥田正造『茶味』、京都：方丈堂出版、1920年初版、2002年第2版。

風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学』、東京：東京大学出版会、1993年初版、1994年第3版。

加藤周一 編集長『世界大百科事典』第9巻、東京：平凡社、1988年初版、2007年改訂新版。

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智『漢字 1000Plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』VOL.1、東京：凡人社、1993年初版第1刷、2005年改訂版第1刷。

河合隼雄『日本人の心』、東京：潮出版社、2001年。

川端康成『美しい日本の私 その序説』、東京：講談社、1969年第1刷、1977年第35刷。

唐木順三『千利休』、東京：筑摩書房、1963第1刷、1989第27刷。

木下順二「夕鶴」『夕鶴・彦一ばなし 他二篇』、木下順二戯曲選Ⅱ、東京：岩波書店、1982年第1刷、1998年第3刷。

北原白秋『北原白秋詩集』(下)、安藤元雄 編、東京：岩波書店、2007年第1刷。

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』第1巻、小池藤五郎 校訂、東京：岩波書店、1990年第1刷。

金田一春彦『日本語の特質』、東京：日本放送協会、1991年第1刷、1992年第6刷。

金田一春彦『日本語 新版(上)』、東京：岩波書店、1988年第1刷、1994年第20刷。

金田一春彦『日本語 新版(下)』、東京：岩波書店、1988年第1刷、1994年第18刷。

熊倉功夫『茶の湯—わび茶の心とかたち』、教育社歴史新書<日本史>81、東京：教育社、1977年第1刷、1991年新装第7刷。

熊倉功夫『南方録を読む』、京都：淡交社、1983年初版、1991年第5版。

熊倉功夫『茶の湯の歴史 千利休まで』朝日選書404、東京：朝日新聞社、1990年第1刷、1991年第3刷。

熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』日本の生活文化、東京：左右社、2009年。

倉澤行洋『『増補 対極 桃山の美』、京都：淡交社、1983年初版、1992年増補初版。

倉澤行洋『増補 藝道の哲学—宗教と藝の相即』、大阪：東方出版、1983年初版第1刷、1990年増補第3刷。

倉澤行洋『東洋と西洋 世界観・茶道観・藝術観』、大阪：東方出版、1992年初版第1刷。

倉澤行洋『珠光：茶道形成期の精神』、京都：淡交社、2002年。

黒川五郎『新しい茶道のすすめ』、京都：現代書林、2009年。

桑田忠親『太閤の手紙』、東京：講談社、2006年第1刷。1959年文藝春秋刊行『太閤の手紙』を底本とする。

桑田忠親『武将と茶道』、東京：人物往来社、1964年。

桑田忠親『千利休研究』、東京：東京堂出版、1976年初版、1977年再版。

桑田忠親『茶道の歴史』、東京：講談社、1987年第1刷、1993年第18刷。

神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』、東京：角川書店、2005年。

神津朝夫『茶の湯の歴史』、角川選書455、東京：角川書店、2009年。

小島義郎『日本語の意味 英語の意味』、東京：南雲堂、1988年第1刷、1994年第6刷。

小松茂美『利休の手紙』、東京：小学館、1985年初版、1986年増補版。

司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』、東京：中央公論社、1972年初版、1998年第40版。

司馬遼太郎『歴史の中の日本』、東京：中央公論社、1976年初版、2009年改版第15版。

新谷尚紀『日本人はなぜそうしてしまうのか』、東京：青春出版社、2012年。

末田清子・福田浩子『コミュニケーション学 その展望と視点 増補版』、東京：松柏社、2011年。

すが秀実『日本近代文学の〈誕生〉言文一致運動とナショナリズム』、東京：太田出版、1995年第1刷。「すが」は糸偏に「圭」の漢字。変換不可能のためかな表記とする。

杉村つとむ『ことばの文化史』、東京：桜楓社、1972年初版。

杉村つとむ『近代日本語』、東京：紀伊國屋書店、1994年。

鈴木皓詞 著、筒井紘一 監修、『茶の湯のことば』、京都：淡交社、2007年。

鈴木孝夫『閉された言語・日本語の世界』、東京：新潮社、1975年発行、1993年第34刷。

鈴木孝夫『ことばと文化』、東京：岩波書店、1973年第1刷、1988年第26刷。

鈴木宗康、白石かずこ、江後迪子、山口高志『和菓子の楽しみ方』、新潮社、1995年。

鈴木良一『応仁の乱』、東京：岩波書店、1973年第1刷、1991年第8刷。

清野恒介・島森功『色名事典』、東京：新紀元社、2005年初版。

関根宗中『茶の湯と易と陰陽五行』、京都：淡交社、2006年第1刷、2008年第3刷。

千宗室（裏千家第15代宗匠）『初歩の茶道 割稽古』裏千家茶道教科1、京都：淡交社、1976年。

千宗室（裏千家第15代宗匠）『茶事 上』裏千家茶道教科12、京都：淡交社、1977年初版、1980年第4版。

千宗室（裏千家第15代宗匠）『茶のすがた』、PHP研究所、1978年4月第1刷、1978年11月第4刷。

千宗室（裏千家第16代宗匠）・千玄室 監修『裏千家茶道』、京都：財団法人今日庵、2004年第1刷、2008年第3刷。

千宗之『まずは一服』主婦の友社、1987年。

千宗屋（武者小路千家第15代宗匠）『茶：利休と今をつなぐ』東京：講談社、2010年。

染谷光廣『秀吉の手紙を読む』、東京：吉川弘文館、2013年第1刷。

戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』、東京：明石書店、1999年。

竹内一郎『人は見た目が9割』、東京：新潮社、2005年10月20日発行、2005年11月20日第5刷。

竹内一郎『やっぱり見た目が9割』、東京：新潮社、2013年7月20日発行、2013年7月21日第2刷。

竹内一郎『なぜ私たちは他人の目を気にしてしまうのか』、東京：三笠書房、2014年第1刷。

竹本千鶴『織豊期の茶会と政治』、東京：思文閣出版、2006年。

田中克彦『言語学とは何か』、東京：岩波書店、1993年第1刷、1994年第3刷。

田中仙翁『茶道の美学』、東京：講談社、1996年。

田中望『外国人に日本語を教える本』、東京：明日香出版社、1988年。

田中春美・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時広『言語学入門』、東京：大修館書店、1975年初版、1999年第33版。

田中春美・樋口時広・家村睦夫・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・下宮忠雄『言語学演習』、東京：大修館書店、1982年初版、1998年第12刷。

谷晃『わかりやすい茶の湯の文化』、京都：淡交社、2005年。

谷川徹三『茶の美学』、京都：淡交社、1977年。

谷崎潤一郎『文章読本』、『谷崎潤一郎集』より、谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修『日本文学全集』第12巻所収、東京：河出書房、1966年。

筒井紘一『茶書の研究 数寄風流の成立と展開』、京都：淡交社、2003年。

筒井紘一『茶の湯名言集』、京都：淡交社、2006年。

筒井紘一『利休の逸話』、京都：淡交社、2013年2月14日初版、2013年7月13日第2版。

勅使河原蒼風『草風五十則』、東京：草月文化事業出版部、2004年。

角山栄『茶の世界史：緑茶の文化と紅茶の社会』、中央公論社、1980年第1刷、2001年第26刷。

土居健郎『「甘え」の構造』、東京：弘文堂、1971年初版第1刷、1988年第2版第20刷。

土居健郎『表と裏』、東京：弘文堂、1985年初版第1刷。

東野利夫『南蛮医アルメイダ——戦国時代を生きぬいたポルトガル人』、東京：柏書房、1993年。

富田隆行・眞田和子『新 表記』教師用日本語教育ハンドブック②、著作権者 国際交流基金、東京：凡人社、1994年第1版第1刷。

外山滋比古『日本語の個性』、東京：中央公論社、1976年初版、1998年第30版。

外山滋比古『日本語の素顔』、東京：中央公論社、1981年初版、1995年第4版。

中島文雄『日本語の構造』、東京：岩波書店、1987年5月第1刷、1987年7月第3刷。

中島文雄『英語の時代に生きて』、東京：研究社、1989年初版。

中村静子『元伯宗旦の研究』、京都：思文閣出版、2014年。

中村直勝『茶道聖典 南坊録』、大阪：浪速社、1968年第1刷、1997年第3刷。

中村修也『黄金文化と茶の湯 安土桃山時代』よくわかる伝統文化の歴史③、京都：淡交社、2006年初版。

中村修也『戦国 茶の湯倶楽部—利休からたどる茶の湯の人々』、東京：大修館書店、2013年初版第1刷。

中村修也『利休切腹』、東京：羊泉社、2015年初版。

永島福太郎『応仁の乱』日本歴史新書、東京：至文堂、1968年。

成川武夫『千利休茶の美学』、東京：玉川大学出版部、1992年。

財団法人日本ホテル教育センター編『世界・お茶の基本』、プラザ出版、2007年。

新村出 編『広辞苑 第6版』、東京：岩波書店、1995年第1版第1刷、2008年第6版

第1刷。

西堀一三『日本茶道史』、東京：創元社、1940年初版、1946年第10版。

西村恵信『禅語を読む』角川選書549、東京：角川学芸出版、2014年。

芳賀幸四郎『千利休』、人物叢書 新装版、東京：吉川弘文館、1963年第1刷、1989年新装版第4刷。

芳賀幸四郎『安土桃山時代の文化』、日本歴史新書、東京：至文堂、1964年初版、1965年第2版。

芳賀幸四郎『わび茶の研究』、京都：淡交社、1978年2月初版、1978年4月第2刷。

芳賀綏『日本人の表現心理』、東京：中央公論社、1979年。

林大 編集代表『日本語教育ハンドブック』、東京：大修館書店、1990年初版、1993年第3版。

原岡一馬『人間とコミュニケーション』、京都：ナカニシヤ出版、1990年。

久松真一『茶道の哲学』、東京：講談社、1987年第1刷、1994年第12刷。倉

久松真一『増補 久松真一著作集 第3巻 覚と創造』、京都：法藏館、1994年第1刷。

久松真一『増補 久松真一著作集 第5巻 禅と芸術』、京都：法藏館、1995年第1刷。

久松真一『藝術と茶の哲学』、倉澤行洋編、京都：燈影舎、2003年。

福田邦夫『新版 色の名前507』、東京：主婦の友社、2012年。

藤田紘一郎『癒す水・飲む水—世界の水と病氣—』、東京：日本放送出版協会、1996年第1刷。

藤田紘一郎『知られざる水の「超」能力 新しい「科学的」水の飲み方入門』、講談社+α 新書325-1B、東京：講談社、2006年第1刷。

古田東朔・山口明穂・鈴木英夫『新国語概説』、東京：くろしお出版、1980年第1刷、1994年第17刷。

槇有恒『わたしの山旅』、東京：岩波書店、1968年第1刷、1973年第6刷。

牧野成一『ウチとソトの言語文化—文法を文化で切る—』NAFL 選書12、東京：アルク、1996年。

町田健・靱山洋介『よくわかる言語学入門』日本語教師トレーニングマニュアル③、東京：バベル・プレス、1995年初版第1刷、2000年初版第7刷。

町田健『日本語の正体』、東京：研究社、2008年初版。

松村明 編『大辞林 第3版』、東京：三省堂、1988年初版、2006年第1刷。

丸谷才一・井上ひさし、他『やまとことば』、東京：河出書房新社、1989年。

宮川亨 編集長、田村真義・小林美香 編集『日本刀』、別冊宝島2288号、東京：宝島社、2015年。

村井康彦『千利休』、東京：講談社、2004年第1刷、2011年第5刷。原本は1977年日本放送出版協会より刊行。

村井康彦『茶の文化史』、東京：岩波書店、1979年第1刷、1987年第9刷。

村井康彦『千利休追跡』角川選書195、東京：角川書店、1990年初版。

森鷗外「最後の一句」谷崎潤一郎・武者小路実篤・志賀直哉・川端康成 監修、『森鷗外集』より、『日本文学全集』第7巻所収、東京：河出書房、1967年。  
森田良行『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想—』、東京：創拓社、1995年。  
森本哲郎『日本語 表と裏』、東京、新潮社、1988年発行、1995年第20刷。  
守屋毅『喫茶の文明史』、淡交社、1992年。  
柳宗悦『茶と美』、東京：講談社、2000年。  
柳父章『近代日本語の思想 翻訳文体成立事情』、法政大学出版局、2004年初版第1刷、2011年第2刷。  
山田無庵『キリシタン千利休：賜死事件の謎を解く』、河出書房新社、1995年  
吉田弥寿夫 編『Japanese for Today』、東京：学習研究社、1973年。  
若桑みどり『クアトロ・ラガッツィー—天正少年使節と世界帝国』、東京：集英社、2003年10月30日第1刷、2003年12月30日第2刷。

## 書籍の中の一部

池上嘉彦「学術文庫版へのまえがき」、ウォーフ、B. L.『言語・思考・現実』池上嘉彦 訳、東京：講談社、1993年第1刷、1994年第4刷。原作は1956年没後刊行。  
大江健三郎「回路を閉じた日本人でなく」、『あいまいな日本の私』、東京：岩波書店、1995年1月第1刷、1995年2月第5刷。  
大屋幸恵「現代茶道修練者の意識 その社会学的考察」、熊倉功夫・田中秀隆 編『茶道文化論』、茶道学体系第1巻、京都：淡交社、1999年。  
加藤周一「明治初期の翻訳—何故・何を・如何に訳したか—」、加藤周一・丸山真男『翻訳の思想』日本近代思想体系15、東京：岩波書店、1991年第1刷。  
鎌田かをり「日本人の謙虚さという仮面」、北海道大学留学生センター年報第5号、札幌：北海道大学、1996年。  
久保田竜子「日本文化を批判的に教える」、佐藤慎司・ドーア根理子『文化、ことば、教育』、東京：明石書店、2008年。  
黒川紀章「江戸文化と現代」、『日本文化を探る』、東京：講談社、1985年。  
倉澤行洋「特別寄稿・日本茶道における『侘び茶』の哲学」、茶学の会十周年記念『お茶と私』、株式会社エムクリエーション、2009年。  
倉澤行洋「藝道の理念と実践」和田修二・倉澤行洋『敵味方をこえて平和を織る』京都：燈影舎、2010年。  
桑山敬己「人類学のキーコンセプト 文化」、山下晋司 編『文化人類学入門—古典と現代をつなぐ20のモデル』、東京：弘文堂、2005年。  
小森陽一「まえがき」、小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵頭裕己・松浦寿輝 編集『モダンとポストモダン』岩波講座 文学12、東京：岩波書店、2003年。  
佐々木瑞枝「比較基準としての言語の問題」、濱口恵俊 編『日本文化は異質か』、東京：日本放送出版協会、1996年第1刷、1998年第3刷。

千宗室（裏千家第15代宗匠）「跋文」、岡倉天心『茶の本 The Book of Tea』、東京：講談社インターナショナル株式会社、1998年第1刷、2002年第7刷。

永井路子・赤松俊秀「足利義政」、海音寺潮五郎 著者代表『日本史探訪』第14集、東京：角川書店、1975年初版、1986年第14版。

田崎勝也「異文化コミュニケーション」岡野雅雄 編『わかりやすいコミュニケーション学 改訂版』、東京：三和書籍、2004年初版、2008年改訂版。

## 雑誌

月刊「淡交タイムス」（京都：淡交社、2014年9月号）。

同上、(2016年1月号)。

倉澤行洋「閉会あいさつ『大隠の茶』」「心茶」別冊より。（京都：心茶会心茶編集部、1998年10月）。

倉澤行洋「創刊にあたって」「国際伝統芸術研究第1号」より。（宝塚：国際伝統芸術研究会、2012年3月）。

倉澤行洋「茶の湯とは」「茶の湯文化学会会報 No.65」より。（京都：茶の湯文化学会、2009年10月24日静岡例会）。

西山松之助「ロドリゲス『日本教会史』の文化史的価値」、『日本教会史 上』大航海時代叢書 IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修（東京：岩波書店、1967年）に付された「大航海時代叢書 IX 月報9」に記載。

## 講演

岡本浩一「心を癒す茶道とは」社団法人茶道裏千家淡交会北海道地区学校茶道連絡協議会、第15回学校茶道連絡協議会研修会講演、2011年9月3日、於札幌グランドホテル。

牧野成一「文化能力はどうやって測るか」第9回 OPI (Oral Proficiency Interview) 国際シンポジウム基調講演、2013年11月2日、於香港中文大学。

## 調査書

平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁）。

平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁）。

平成25年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁）。

平成26年度「国語に関する世論調査」の結果の概要（文化庁）。

## 外国人による著作、または日本人著者だが外国語で書かれている著作

著者のアルファベット順とする

- バーンランド、ディーン C. 『日本人の表現構造』 西山千・佐野雅子 訳、東京：サイマル出版社、1979年初版、1994年11版。
- バフチン、ミハイル 『言語と文化の記号論』、『ミハイル・バフチン著作集』④所収、北岡誠司 訳、東京：新時代社、1980年第1版、1990年第1版第4刷。
- イーグルトン、テリー 『文化とは何か』 大橋洋一 訳、東京：松柏社、1998年。
- エリオット、T. S. 「文化の定義のための覚書」 深瀬基寛 訳 『エリオット全集5—文化論』、東京：中央公論社、1960年
- エリオット、T. S. 『伝統と個人の才能』 英米文学論双書12、安田章一郎 訳注、東京：研究社、1967年。
- フリッシュ、カール・フォン 『ミツバチの不思議』〔第2版〕、伊藤智夫 訳、東京：法政大学出版社出版局、1953年初版第1刷、1986年第2版第1刷、2005年改装版第1刷。
- フロイス、ルイス 『日本史：キリシタン伝来のころ』第2巻、柳谷武夫 訳、東京：平凡社、1965年初版第1刷、1978年初版第10刷。
- ホール、エドワード T. 『かくれた次元』 日高敏隆・佐藤信行 訳、東京：みすず書房、1979年第1刷、1989年第22刷。
- ホール、エドワード T. 『新装版 文化を超えて』 岩田慶治・谷泰 訳、東京：TBSブリタニカ、1993年。
- ホフマン、マーティン L. 『共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで』 菊池章夫・二宮克美 訳、東京：川島書店、2001年、第1刷。
- ホメーロス 『イーリアス』 『オデュッセイア』 呉茂一 訳、『世界文学全集』第1巻所収、東京：河出書房、1969年。
- フンボルト、ウィルヘルム 『言語と精神』 亀山健吉 訳、東京：法政大学出版社出版局、1984年。
- ナップ、マーク T. 『人間関係における非言語情報伝達』 牧野成一・牧野泰子 訳、東京：東海大学出版会、1979年。
- リービ英雄 『我的日本語』 筑摩選書0006、東京：筑摩書房、2010年初版第1刷。
- マレービアン、アルバート 『非言語コミュニケーション』 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫 訳、東京：聖文社、1986年、初版第1刷。
- ピカート、マックス 『沈黙の世界』 佐野利勝 訳、東京：みすず書房、1974年。
- プルチョウ、ヘルベルト 『茶道と天下統一 — ニッポンの政治文化と「茶の湯」』 篠田綾子 訳、東京：日本経済新聞出版社、2010年。
- ロドリーゲス、ジョアン 『日本教会史 上』 大航海時代叢書IX、会田由・飯塚浩二・井沢実・泉靖一・岩生成一 監修、江馬務・佐野泰彦・土井忠生・浜口乃二雄 訳、東京：岩波書店、1967年。

- サンテグジュペリ、アントワーヌ・ド『星の王子さま』池澤夏樹 訳、東京：集英社、2005年 第1刷。
- シェークスピア、ウィリアム『リア王』小田島雄志 訳、『シェークスピア全集』、白水Uブックス 28、東京：白水社、1983年 第1刷、1997年 第14刷。
- ヴァリニャーノ、アレッサンドロ『日本巡察記』東洋文庫 229、松田毅一・佐久間正・近松洋男 訳、東京：平凡社、1973年 初版第1刷、1988年 初版第9刷。
- ヴォーガス、マジョリー・F.『非言語コミュニケーション』石丸正 訳、東京：新潮社、1987年。
- ウィリアムズ、レイモンド『文化と社会 1780-1950』若松繁信・長谷川光昭 訳、京都：ミネルヴァ書房、1976年。
- ウィリアムズ、レイモンド『長い革命』若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭 訳、京都：ミネルヴァ書房、1983年。
- ウォーフ、B.L.『言語・思考・現実』池上嘉彦 訳、東京：講談社、1993年 第1刷、1994年 第4刷。原作は1956年 没後刊行。
- Birdwhistell, Ray. *Kinesics and Context*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1970.
- Boas, Franz. *The Mind of Primitive Man*. New York, Boston, Chicago, Dallas, Atlanta, San Francisco: The Macmillan Company, 1911.
- deFord, Sara & Lott, Clarinda Harriss. *Forms of Verse*. New York: Appleton-Century-Crofts, 1971.
- Cantwell, Cathy. *Buddhism: The Basics*. New York: Routledge, 2010.
- Hall, Edward.T. *The Silent Language*. New York: Doubleday & Company, Inc., 1959.
- Makino, Seiichi and Tsutsui, Michio. *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times, 1989.
- Malinowski, Bronislaw. "The Problem of Meaning in Primitive Languages," *The Meaning of Meaning*. (Ogden, C.K. & Richards, I.A., 1923) Supplement I.
- Mancall, Peter C. ed. *Travel Narratives from the Age of Discovery An Anthology*. Oxford: Oxford University Press, 2006.
- Matsumura, Kodo. *Introducing Buddhism*. revised edition. Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1965 (1<sup>st</sup> ed.), 1976 (1<sup>st</sup> Tuttle ed.).
- O'Sullivan, T., Hartley, J., Saunders, D., Montgomery, M., & Fiske, J. *Key concepts in communication and cultural studies* (2<sup>nd</sup> ed.). London: Routledge, 1994.
- Porter, R.E., & Samovar, L.A. An introduction to intercultural communication. In L. A. Samovar & R.E. Porter (eds.) *Intercultural communication: A reader* (8<sup>th</sup> ed.), pp. 5-12. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company, 1997.
- Ruesch, Jurgen and Kees, Weldon. *Nonverbal Communication – Notes on the Visual Perception of Human Relations*, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1956.
- Sen, Soshitsu XV, Grand Master Urasenke School of Tea supervised, *Urasenke CHANOYU Handbook One*, Kyoto: Urasenke Foundation, 1980 (1<sup>st</sup> ed.), 1993 (4<sup>th</sup> ed.) .
- Shakespeare, William. *King Lear*. In *Shakespeare Complete Works*. W.J.Craig ed., Oxford: Oxford



- University Press, 1978. First published in 1906.
- Stempleski, Susan, Morgan, James R., and Douglas, Nancy. *World Link Book 1*, Second Edition. Boston: Heinle Cengage Learning, 2005, 2011.
- Tylor, Edward B. *The Origins of Culture*, Part 1 of “Primitive Culture”. New York: Evanston, London: Harper Torchbooks. The Cloister Library. Harper & Row, Publishers, 1958. Originally published in New York, J.P. Putnam’s Sons, 1871.
- Watzlawick, P., Beavin, J.H., & Jackson, D.D. *Pragmatics of Human Communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company, Inc. 1967.
- The Oxford English Dictionary* Vol. V, H-K. Oxford: Oxford at the Clarendon Press, first published 1933, reprinted 1961, 1970.
- The teaching of Buddha* 『和英対照仏教聖典』, Tokyo: Bukkyo Dendo Kyokai, 1966 (1<sup>st</sup> ed.), 1982 (230<sup>th</sup> ed.).

# 資 料

平成 26・25・24・23 年度「国語に関する世論調査」の結果と概要を、表紙、目次、及び本論文に必要な箇所のみここに挙げる。

## 平成 26 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

### 調査目的・方法等

調査目的	文化庁が平成 7 年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。	
調査対象	全国 16 歳以上の男女	
調査時期	平成 27 年 1 月～2 月	
調査方法	一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施	
調査結果	調査対象総数	3, 493 人
	有効回答数(率)	1, 942 人(55.6%)

# 目 次

## 1 社会や家庭における言葉遣いについて

- ◆ 今の国語は乱れていると思うか。……………<問 1>… 4
- ◆ 家庭で言葉遣いについて注意されたか。……………<問 2>… 4
- ◆ 言葉遣いを誰から注意されたか。……………<問 2 付>… 4
- ◆ 家庭で受けた言葉のしつけについて、現在どう思うか。……………<問 3>… 5
- ◆ 中学生・高校生の話を聞いて、言葉遣いが乱れていると感じるか。……………<問 4>… 5
- ◆ 小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は誰だと思うか。……………<問 5>… 5
- ◆ 子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うか。……………<問 6>… 6

## 2 外国人に対する日本語教育について

- ◆ 日本に在住する外国人は、どの程度日本語の会話ができるといいと思うか。また、どの程度日本語の読み書きができるといいと思うか。……………<問 9, 10>… 7
- ◆ 日本に在住する外国人が日本語能力を身に付けるために、どのような取組が必要だと思うか。……………<問 11>… 7

## 3 手書き文字の字形と印刷文字の字形について

- ◆ 日常生活において、文字を手書きする機会があるか。…………… <問 14>… 8
- ◆ 年賀状などにおいて、印刷されたものと手書きが加えられたものとはどちらが良いと思うか。……………<問 15>… 8
- ◆ 文字を手書きする習慣をこれからの時代も大切にすべきであると思うか。……………<問 16>… 8
- ◆ 手書き文字の漢字の違いについてどう感じるか。……………<問 17>… 9
- ◆ 手書き文字の漢字の正誤についてどう考えるか。……………<問 19>… 11
- ◆ 印刷文字と手書き文字の形の違いを知っているか。……………<問 20>… 12
- ◆ 手書きする際に、印刷文字の形のとおりによく書く必要がないことを知っているか。……………<問 21>… 12

## 4 言い方の使用頻度について

- ◆ 使うことのある言い方が。……………<問 22>… 13

## 5 新しい複合語、省略語について

- ◆ 聞いたことのある言い方が、また使うことのある言い方が。……………<問 23>… 16

## 6 慣用句等の意味・言い方について

- ◆ どちらの意味だと思うか。……………<問 24>…18
- ◆ どちらの言い方だと思うか。……………<問 25>…20

備 考 百分比は各問いの回答者数を100%として算出し、小数点第2位を四捨五入したため、百分比の合計が100%にならない場合がある。また、百分比の差を示す「ポイント」については、小数点第1位を四捨五入して示した。

## 1 社会や家庭における言葉遣いについて

\*報告書のページを表す。

今の国語は乱れていると思うか。〈問1〉(P3\*)

—「乱れていると思う(計)」と、7割以上が回答。—



〔全体・過去の調査との比較〕

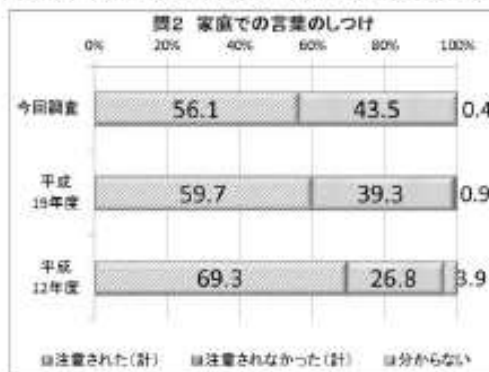
ふだんの生活の中で接している言葉から考えて、今の国語は乱れていると思うか、それとも、乱れていないと思うかを尋ねた。

「乱れていると思う(計)」の割合は73.2%となっている。一方、「乱れていないと思う(計)」の割合は、23.5%となっている。

過去の調査結果(平成11、14、19年度)と比較すると、「乱れていると思う(計)」は減少傾向にあり、「乱れていないと思う(計)」は増加傾向にある。

家庭で言葉遣いについて注意されたか。〈問2〉(P9)

—「注意されなかった(計)」は増加傾向にあり、今回調査では4割以上。—



〔全体・過去の調査との比較〕

小さい時から小学生ぐらいまでの頃に、家庭で言葉遣いについて注意されたか、それとも、注意されなかったかを尋ねた。

「注意された(計)」(56.1%)の割合は、「注意されなかった(計)」(43.5%)の割合を13ポイント上回っている。

過去の調査結果(平成12、19年度)と比較すると、「注意された(計)」は減少傾向にあり、「注意されなかった(計)」は増加傾向にある。

言葉遣いを誰から注意されたか。〈問2付〉(P9)

—「母親」が最も高く61.6%、次いで「父親」が27.4%。—

(数字は%)

母親	女性		男性		父親	女性		男性		祖母	女性		男性		祖父	女性		男性	
	女性	男性	女性	男性		女性	男性	女性	男性		女性	男性	女性	男性		女性	男性		
61.6	64.7	57.8	27.4	24.3	31.3	6.0	6.4	5.4	2.6	2.8	2.3								

〔全体・性別〕

家庭で言葉遣いを「注意された」と答え

た人(全体の56.1%)に、主に誰に注意されたかを尋ねた。

「母親」が61.6%で最も高く、次いで「父親」(27.4%)、祖母(6.0%)、祖父(2.6%)となっている。

性別を見ると、「母親」に注意されたと回答した女性(64.7%)は、男性(57.8)を7ポイント上回っている。また、「父親」に注意されたと回答した男性(31.3%)は、女性(24.3%)を7ポイント上回っている。

家庭で受けた言葉のしつけについて、現在どう思うか。〈問3〉(P13)

—「適切にしつけられたと思う」の割合は、増加傾向。—



〔全体・過去の調査との比較〕

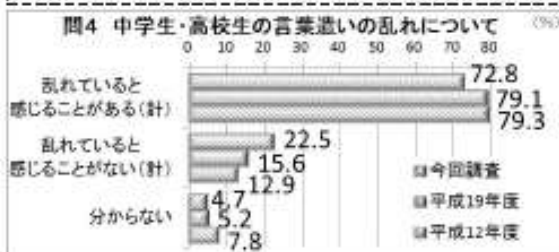
自分が家庭で受けた言葉のしつけについて、現在どう思っているかを尋ねた。(自分の気持ちに近いものを一つ回答。)

「適切にしつけられたと思う」が61.2%、「もっときちんとしつけてくれれば良かったと思う」が12.9%となっている。

過去の調査結果(平成12、19年度)と比較すると、「適切にしつけられたと思う」は増加傾向にある。「もっときちんとしつけてくれれば良かったと思う」は平成12年度から19年度に3ポイント増加したが、今回調査では5ポイント減少している。

中学生・高校生の話を聞いて、言葉遣いが乱れていると感じるか。〈問4〉(P15)

—「乱れていると感じることがない(計)」の割合は、増加傾向。—



〔全体・過去の調査との比較〕

周りにいる中学生や高校生の話を聞いて、言葉遣いが乱れていると感じることがあるか、それとも、感じることがないかを尋ねた。

言葉遣いが「乱れていると感じることがある(計)」は、72.8%となっている。一方、言葉遣いが「乱れていると感じることがない(計)」は、22.5%となっている。

過去の調査結果(平成12、19年度)と比較すると、「乱れていると感じることがある(計)」は減少傾向にあり、「乱れていると感じることがない(計)」は増加傾向にある。

小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は誰だと思うか。〈問5〉(P20)

—「父親・母親」が最も高く、次いで「学級担任の先生」。—



〔全体・過去の調査との比較〕

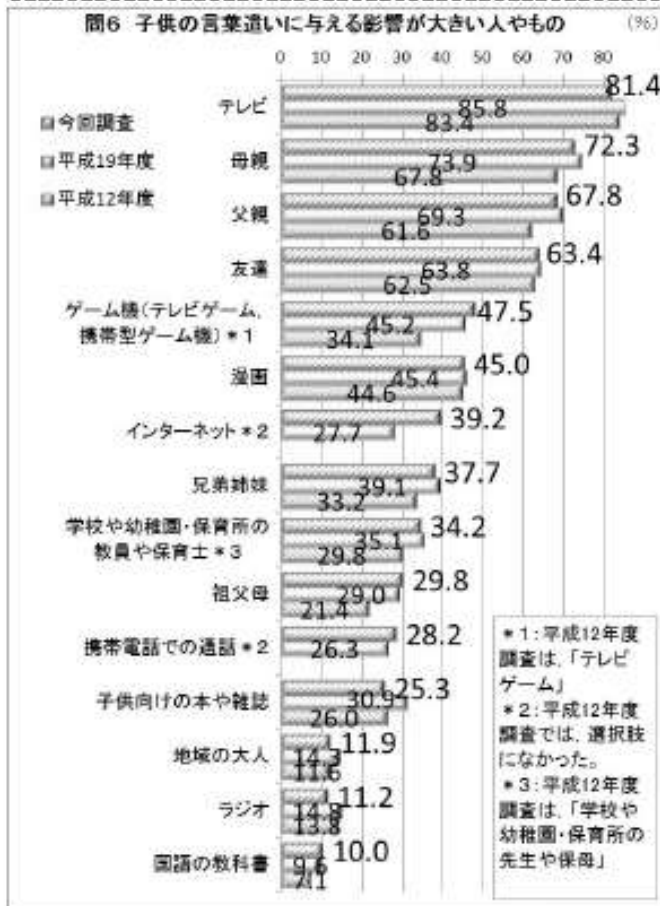
近くにいる小学生が友達に対して乱暴で聞き苦しい言葉遣いをしているとき、その子と様々な関係にある人が注意を与えるべきだと思うか、それともその必要はないと思うかをそれぞれ尋ねた。

「注意すべきだ」の割合は、「(1) 父親・母親」が96.4%で最も高く、次いで「(7) 学級担任の先生」(91.2%)、「(8) その子の学校の、学級担任以外の先生」(81.2%)となっている。

過去の調査結果(平成12、19年度)と比較すると、「注意すべきだ」の割合は、「(5) おじ・おば」、「(8) その子の学校の、学級担任以外の先生」、「(9) その子を知っている近所の大人」については平成19年度から今回調査で5~7ポイント減少している。

子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うか。〈問6〉(P24)

—「テレビ」が最も高く、次いで「母親」、「父親」と続く。—



〔全体・過去の調査との比較〕

子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うかを尋ねた。(選択肢の中から幾つでも回答。)

「テレビ」が81.4%で最も高く、次いで「母親」(72.3%)となっている。「父親」(67.8%)、「友達」(63.4%)が6割台と続いている。以下、「ゲーム機(テレビゲーム、携帯型ゲーム機)」(47.5%)、「漫画」(45.0%)が4割台、「インターネット」(39.2%)、「兄弟姉妹」(37.7%)、「学校や幼稚園・保育所の教員や保育士」(34.2%)が3割台、「祖父母」(29.8%)、「携帯電話での通話」(28.2%)、「子供向けの本や雑誌」(25.3%)が2割台となっている。

過去の調査結果(平成12、19年度)と比較すると、平成19年度から今回調査では、「インターネット」が12ポイント増加し、「子供向けの本や雑誌」が6ポイント、「テレビ」が4ポイント減少している。

\*1:平成12年度調査は、「テレビゲーム」  
\*2:平成12年度調査では、選択肢になかった。  
\*3:平成12年度調査は、「学校や幼稚園・保育所の先生や保育士」



## 平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

### 調査目的・方法等

調査目的	文化庁が平成 7 年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。	
調査対象	全国 16 歳以上の男女	
調査時期	平成 26 年 3 月	
調査方法	一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施	
調査結果	調査対象総数	3,473 人
	有効回答数 (率)	2,028 人 ( 58.4% )

# 目 次

## 1 社会全体の言葉や言葉の使い方について

- ◆ 言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心は、どうなっていると思うか。……<問1>…4
- ◆ 言葉や言葉の使い方に関する社会全体の知識や能力は、どうなっていると思うか。<問2>…4
- ◆ 言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものは何か。……<問3>…5

## 2 人とのコミュニケーションについて

- ◆ 初めて会った人とでも早く打ち解ける方が、時間が掛かる方が。……<問4>…6
- ◆ 相手から、どのように接してほしいか。……<問5>…6
- ◆ 相手に対して、どのような気持ちで接するか。……<問6>…7
- ◆ 相手から、どのように接してほしいか。<問5>/  
相手に対して、どのような気持ちで接するか。<問6>……【比較】…7
- ◆ 人間関係を築くために、相手の個人的なことを知る必要があると思うか。……<問7>…8
- ◆ 人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方が。……<問8>…9
- ◆ 相手や場面に合わせて態度を変える人と、  
同じ態度でいる人のどちらが好ましいか。……<問9>…9

## 3 読書について

- ◆ 1か月に読む本の冊数について。……<問10>…10
- ◆ 人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか。……<問11>…10
- ◆ 読書量は以前に比べて減っているか、増えているか。……<問12・問12付>…11
- ◆ 読書をする事の良いところは何だと思うか。……<問13>…11
- ◆ 自分の読書量を増やしたいと思うか。……<問14>…12
- ◆ 1か月に読む本の冊数、及び今後の読書量について。<問10・問14> …【質問間クロス】…12
- ◆ 電子書籍（雑誌や漫画も含む）を利用しているか。……<問15>…13
- ◆ 電子書籍と紙の本・雑誌・漫画と、どちらを多く利用するか。……<問15付>…13

#### 4 敬語について

- ◆ 今後とも敬語は必要だと思うか。……………<問 16>…14
- ◆ 敬語をどのような機会に身に付けてきたと思うか。……………<問 17>…14
- ◆ 気になる言い方か。……………<問 18>…14
- ◆ 気になる言葉の使い方か。……………<問 19>…16

#### 5 漢字を用いた語と外来語の意味・使い分けについて

- ◆ 同じ意味の言葉だと思うか。それとも、使い分けのできる言葉だと思うか。……………<問 20>…17
- ◆ 不特定多数の人に宛てた文書等に用いる言葉として、  
どちらの言葉を使う方がいいと思うか。…………… <問 20 付>…17

#### 6 「～る」「～する」形の動詞について

- ◆ 「～る」「～する」の言い方を聞いたことがあるか、また使うことがあるか。……………<問 21>…18

#### 7 慣用句等の意味について

- ◆ どちらの意味だと思うか。……………<問 22>…19

備 考	百分比は各問いの回答者数を 100%として算出し、小数点第 2 位を四捨五入したため、百分比の合計が 100%にならない場合がある。また、百分比の差を示す「ポイント」については、小数点第 1 位を四捨五入して示した。
-----	--

# 1 社会全体の言葉や言葉の使い方について

\* 報告書のページを表す。

言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心は、どうなっていると思うか。〈問1〉(P3\*)

— 「以前よりも低くなっていると思う」が、30代~60代で、5割台前半。 —

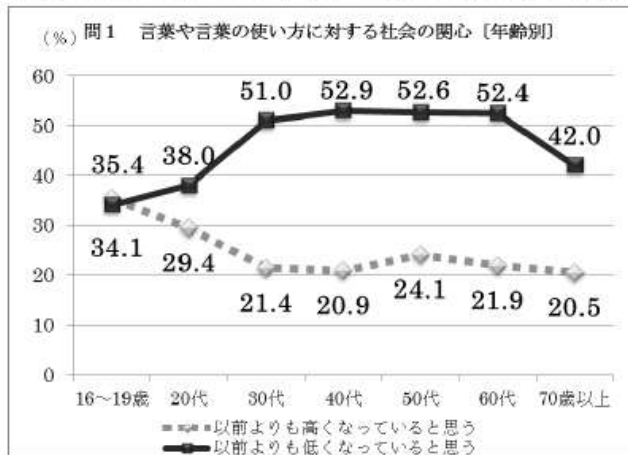
(数字は%)

以前よりも高くなっていると思う	以前よりも低くなっていると思う	以前と変わらないと思う	分からない
22.8	48.2	25.6	3.4

## 〔全体〕

言葉や言葉の使い方に対する社会全体の関心が、以前よりも高くなっていると思うか、低くなっていると思うか、以前と変わらないと思うかを尋ねた。

「以前よりも低くなっていると思う」(48.2%)の割合が、「以前よりも高くなっていると思う」(22.8%)を25ポイント上回っている。「以前と変わらないと思う」の割合は25.6%となっている。



## 〔年齢別〕

年齢別に見ると、「以前よりも低くなっていると思う」の割合は、30代~60代で5割を超えている。「以前よりも高くなっていると思う」の割合は、30代~70歳以上では2割台前半となっている。

一方、16~19歳では、「以前よりも高くなっていると思う」(35.4%)の割合が、「以前よりも低くなっていると思う」(34.1%)を上回っている。

言葉や言葉の使い方に関する社会全体の知識や能力は、どうなっていると思うか。〈問2〉(P5)

— 「以前よりも低くなっていると思う」が、20代~50代で、6割以上。 —

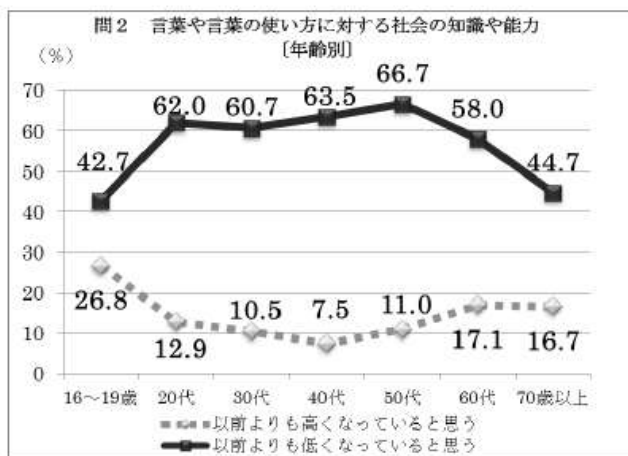
(数字は%)

以前よりも高くなっていると思う	以前よりも低くなっていると思う	以前と変わらないと思う	分からない
13.7	57.3	25.0	3.9

## 〔全体〕

言葉や言葉の使い方に関する社会全体の知識や能力が、以前よりも高くなっていると思うか、低くなっていると思うか、以前と変わらないと思うかを尋ねた。

「以前よりも低くなっていると思う」(57.3%)の割合が、「以前よりも高くなっていると思う」(13.7%)を44ポイント上回っている。「以前と変わらないと思う」の割合は25.0%となっている。



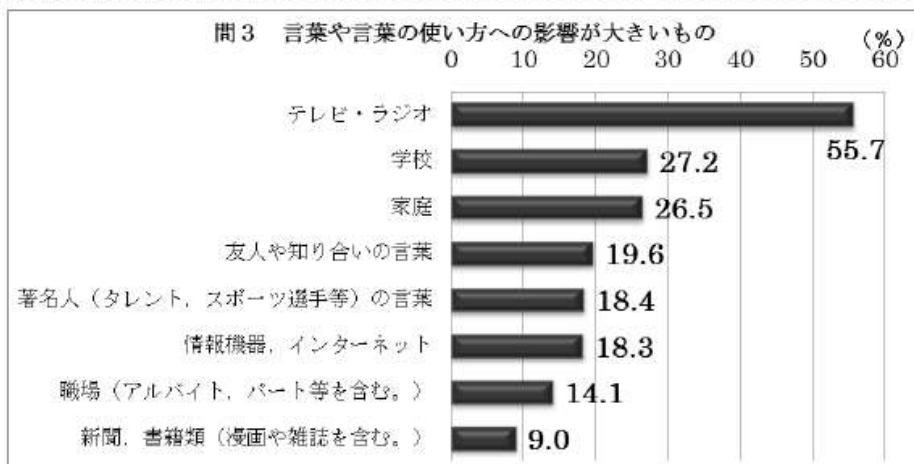
## 〔年齢別〕

年齢別に見ると、「以前よりも低くなっていると思う」の割合は、20代~50代で6割台となっている。また、「以前よりも高くなっていると思う」の割合は、同じく20代~50代で1割前後となっている。

一方、16歳~19歳では「以前よりも高くなっていると思う」(26.8%)の割合が他の年代より高く、2割台半ばとなっている。

言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものは何か。〈問3〉（P7）

—「テレビ・ラジオ」と5割台半ば、「学校」、「家庭」と2割台後半が回答。—

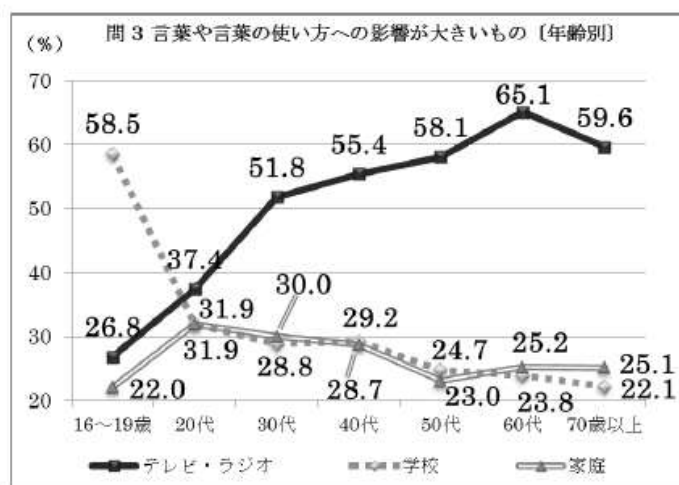


〔全体〕

社会全体の言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものを尋ねた。(選択肢の中から二つまで回答。)

「テレビ・ラジオ」(55.7%)が選択肢の中で唯一5割を超え、次いで「学校」(27.2%)、「家庭」

(26.5%)が2割台後半となっている。以下、「友人や知り合いの言葉」(19.6%)、「著名人(タレント, スポーツ選手等)の言葉」(18.4%)、「情報機器, インターネット」(18.3%)、「職場(アルバイト, パート等を含む。)」(14.1%)、「新聞, 書籍等(漫画や雑誌を含む。)」(9.0%)となっている。



〔年齢別〕

年齢別に「テレビ・ラジオ」、「学校」、「家庭」を見ると、言葉や言葉の使い方への影響が大きいと思うものに「テレビ・ラジオ」と回答している割合は、30代以上で5割を超え、60代では65.1%と最も高くなっている。一方、16~19歳では2割台半ば、20代では3割台後半にとどまっている。

「学校」は16~19歳で他の年代より高く6割弱となっている。

また、「学校」と「家庭」とを比較すると、20代以上では両者の割合が近くなっているが、16~19歳では「学校」(58.5%)

の割合が「家庭」(22.0%)を37ポイント上回っている。

## 平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

### 調査目的・方法等

調査目的：文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査対象：全国16歳以上の男女

調査時期：平成25年3月

調査方法：一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施

回収結果：調査対象総数 3,523 人  
有効回収数(率) 2,153 人(61.1%)

## 目 次

1. 人とのコミュニケーションについて	
誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったこととが食い違っていたという経験があるか、ないか <問1> .....	3
【「ある(計)」へ】相手の言いたいことを理解できなかった理由 <問1付> .....	3
誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか <問2> .....	4
【「ある(計)」へ】自分の言いたいことが伝わらなかった理由 <問2付> .....	4
人とのコミュニケーションにおいて、難しいと感じること <問3> .....	5
人とのコミュニケーションにおいて、重視すること <問4> .....	6
誰かと話をするとき、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか <問5> .....	7
2. 外来語や外国語などのカタカナ語の使用について	
日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に、外来語や外国語などのカタカナ語を使っている場合が多いと感じるか <問6> .....	8
日頃、読んだり聞いたりする言葉の中に出てくる外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか <問7> .....	9
日常生活の中で、外来語や外国語などのカタカナ語を交えて話したり書いたりしていることを好ましいと感じるか <問8> .....	9
3. 国語に関わる知識や能力についての課題	
社会全般の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問9> .....	10
自分自身の国語に関わる知識や能力には、どのような課題があるか <問10> .....	10
4. 文字の手書きについて	
ふだん、手書きで文字を書く方か <問11> .....	11
5. 手紙の作法について	
今後、手紙の作法はどうあるべきだと思うか <問12> .....	12
6. 言葉の意味や使い方が分からないときにどうするか	
言葉遣いに迷ったり、言葉の意味や使い方が分からなかったりしたときに、どのようにしているか <問13> .....	14
7. 同訓の漢字の使い方について	
文章を書くときに、漢字の選び方で迷うことがあるか、それとも、ないか <問14> .....	15
漢字に直すとしたらどれを使うか <問15> .....	15
8. 五つの言い方の認知と使用	
「きんきんに冷えた」「サクサク動く」など五つの言い方を聞いたことがあるか、また、使うことがあるか <問16及び問16付> .....	17
9. 言葉の意味	
どちらの意味だと思うか <問17> .....	19
10. 慣用句の言い方	
どちらの言い方を使うか <問18> .....	22

## 1. 人とのコミュニケーションについて

誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったことが食い違っていたという経験があるか、ないか <問1> (P.3\*)

— 6割台半ばの人が「ある(計)」と回答 —

\*報告書のページを表す。

### 【全体・年齢別】

誰かの話を聞いていて、その人の言いたかったことと、自分の受け取ったことが食い違っていたという経験があるか、それとも、ないかを尋ねた。

「よくある」と「時々ある」を選んだ人を合わせた「ある(計)」は66.5%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は33.3%であった。

年齢別に見ると、「ある(計)」の割合は、20代以下で8割前後となっている。また、30～50代では7割前後、60歳以上では、約6割となっている。

(数字は%)

	よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
全体	9.2	57.2	66.5	26.8	6.5	33.3	0.2
16～19歳	6.8	74.3	81.1	14.9	4.1	18.9	—
20代	12.6	65.1	77.7	20.6	1.7	22.3	—
30代	5.8	65.3	71.1	26.1	2.7	28.9	—
40代	4.6	64.5	69.1	26.6	4.0	30.6	0.3
50代	10.5	59.8	70.3	24.8	5.0	29.7	—
60歳以上	11.0	48.7	59.7	29.8	10.1	39.9	0.4

相手の言いたいことを理解できなかった理由 <問1付> (P.3)

— 20代以下の年代で「自分の聞き方に問題がある」と考える人が他の年代より多い —

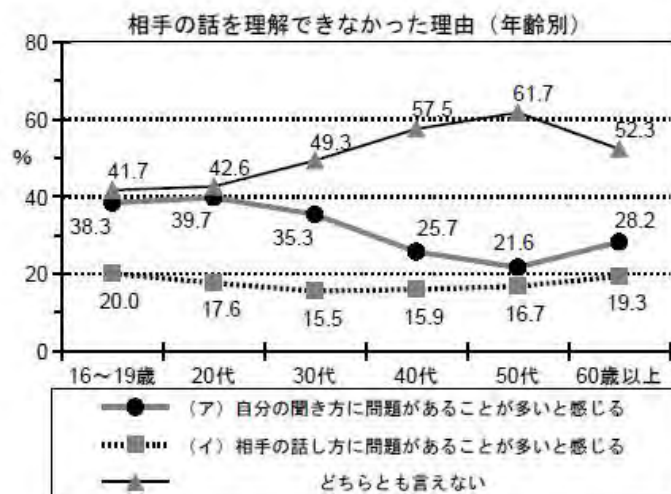
### 【全体】

問1で「ある(計)」を選択した人(66.5%)に、食い違った理由を尋ねた。結果は以下のとおり。

- ・どちらかと言えば、自分の聞き方に問題があることが多いと感じる…29.3%
- ・どちらかと言えば、相手の話し方に問題があることが多いと感じる…17.7%
- ・どちらとも言えない…52.8%
- ・分からない…0.2%

### 【年齢別】

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で、「どちらとも言えない」と回答した人の割合が最も高い。20代以下の年代では、「どちらかと言えば、自分の聞き方に問題があることが多いと感じる」と回答した人が4割弱となっており、他の年代に比べて高くなっている。





誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、ないか <問2> (P.7)

— 6割以上の人が「ある(計)」と回答 —

〔全体・年齢別〕

誰かに話をしている、自分の言いたかったことが、相手にうまく伝わらなかったという経験があるか、それとも、ないかを尋ねた。

「よくある」と「時々ある」を選んだ人を合わせた「ある(計)」は63.4%、「余りない」と「ない」を合わせた「ない(計)」は36.3%であった。

年齢別に見ると、「ある(計)」の割合は、16歳から50代までは、6割台半ばから7割前後となっている。また、60歳以上では、5割台半ばとなっている。

(数字は%)

	よくある	時々ある	ある(計)	余りない	ない	ない(計)	分からない
全体	11.7	51.8	63.4	28.9	7.4	36.3	0.2
16~19歳	18.9	50.0	68.9	27.0	4.1	31.1	—
20代	15.4	54.9	70.3	24.6	5.1	29.7	—
30代	13.4	57.7	71.1	26.1	2.7	28.9	—
40代	7.3	59.3	66.7	29.4	4.0	33.3	—
50代	10.5	58.2	68.7	25.4	5.9	31.3	—
60歳以上	11.7	44.9	56.6	31.8	11.1	42.9	0.5

自分の言いたいことが伝わらなかった理由 <問2付> (P.7)

— 「自分の話し方に問題がある」と考える人の割合は、若い年代で高い傾向 —

〔全体〕

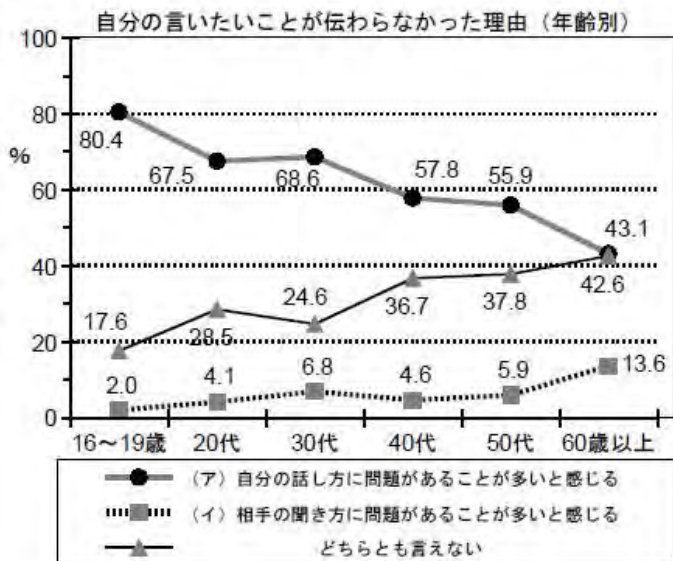
問2で「ある(計)」を選択した人(63.4%)に、伝わらなかった理由を尋ねた。結果は以下のとおり。

- ・どちらかと言えば、自分の話し方に問題があることが多いと感じる…55.0%
- ・どちらかと言えば、相手の聞き方に問題があることが多いと感じる…8.6%
- ・どちらとも言えない…35.9%
- ・分からない…0.5%

〔年齢別〕

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で、「どちらかと言えば、自分の話し方に問題があることが多いと感じる」と回答した人の割合が最も高くなっている。中でも、16~19歳では8割、20~30代では6割台後半となっており、40代以上に比べて高くなっている。

一方、「どちらかと言えば、相手の聞き方に問題があることが多いと感じる」と回答した人は、60歳以上を除く全ての年代で1割に達していない。



人とのコミュニケーションにおいて、難しいと感じること <問3> (P.11)

— 4割の人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答 —

【全体】

人とのコミュニケーションにおいて、「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」のどちらが難しいと感じるかを尋ねた。

「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答した人が4割強、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」と回答した人が3割台半ばという結果であった。また、「相手や状況によって異なるので、どちらとも言えない」と回答した人が1割台後半であった。

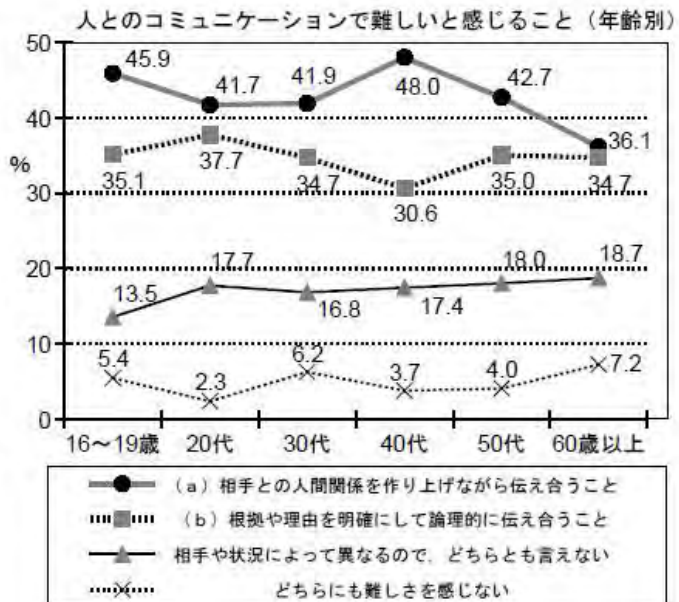
- ・「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の方が難しい…………… 40.5%
- ・「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」の方が難しい…………… 34.4%
- ・相手や状況によって異なるので、どちらとも言えない…………… 17.9%
- ・どちらにも難しさを感じない…………… 5.6%
- ・分からない…………… 1.7%

【年齢別】

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を難しいと感じる人の割合が高くなっている。特に、40代では4割台後半となっており、他の年代に比べ高い。一方、60歳以上では、3割台半ばとなっており、他の年代に比べ低くなっている。

また、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を難しいと感じる人の割合は、全ての年代で3割台となっている。

なお、「どちらにも難しさを感じない」を選んだ人の割合は、どの年代でも1割に達していないが、中でも20代では2.3%と、他の年代に比べて低くなっている。



【性別】

性別に見ると、左のグラフのとおり。男女間で、大きな差はない。



人とのコミュニケーションにおいて、重視すること <問4> (P.13)

— 6割台半ばの人が「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答 —

【全体】

人とのコミュニケーションにおいて、「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」のどちらを重視するかを尋ねた。

「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」と回答した人が6割台半ば、「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」と回答した人が1割台半ばという結果であった。また、「相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない」と回答した人も1割台半ばであった。

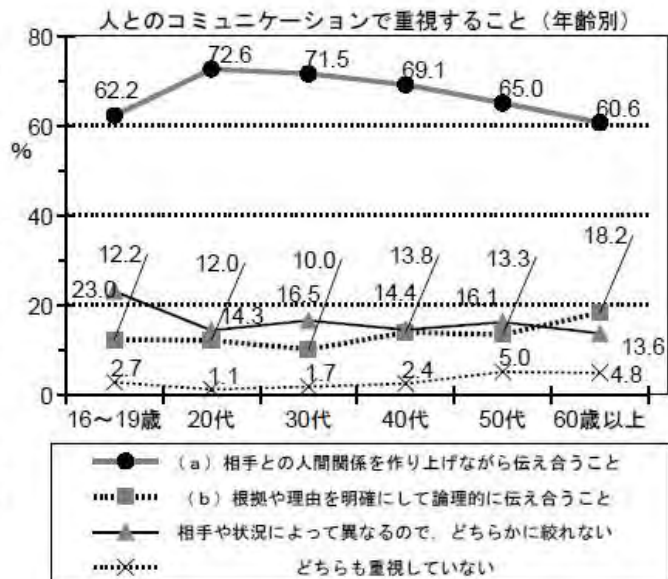
- ・「相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」の方を重視する…………… 65.1%
- ・「根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」の方を重視する…………… 15.0%
- ・相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない…………… 14.9%
- ・どちらも重視していない…………… 3.7%
- ・分からない…………… 1.4%

【年齢別】

年齢別に見ると、右のグラフのとおり。全ての年代で「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を重視すると答えた人の割合が高くなっており、特に、20代から40代では7割前後となっており、他の年代に比べて高い。

また、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を重視していると答えた人の割合はどの年代でも1割台となっている。そのうち、60歳以上では、18.2%となっており、他の年代に比べて高い。

なお「相手や状況によって異なるので、どちらか一つには絞れない」と回答した人の割合は、16～19歳で2割台前半となっており、他の年代に比べて高い。



人とのコミュニケーションで重視すること (性別)



【性別】

性別に見ると、左のグラフのとおり。

「(a) 相手との人間関係を作り上げながら伝え合うこと」を選んだ人の割合は、女性(70.3%)の方が男性(58.8%)より12ポイント高い。

一方、「(b) 根拠や理由を明確にして論理的に伝え合うこと」を選んだ人の割合は、男性(20.2%)の方が女性(10.6%)より10ポイント高い。

誰かと話をするときに、相手から不快感を覚えるのはどのようなことか <問5> (P.15)

— 男性は「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」、女性は「相手ばかりが話している」が多い —

【全体・性別】

誰かと話をするときに、相手から不快感を覚えるのはどのようなことかを尋ねた（選択肢の中から三つまで選択）。

全体では、「話したり聞いたりするときの態度が悪い」（32.3%）、「話が理解されず会話がかみ合わない」（32.2%）、「相手ばかりが話している」（31.0%）を選んだ人の割合が3割を超え、他に比べて高い。続いて「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」（29.8%）「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」（28.5%）が3割弱となっている。

性別に見ると、男性で最も割合の高かったのは「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」（33.5%）、女性では「相手ばかりが話している」（33.1%）であった。また、男性の方が女性よりも「話の組立てや流れに問題がある」で8ポイント、「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」で7ポイント高くなっており、女性の方が男性よりも「相手ばかりが話している」と「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」で5ポイント高くなっている。

	全 体	男 性	女 性
・話したり聞いたりするときの態度が悪い……………	32.3%	32.9%	31.8%
・話が理解されず会話がかみ合わない……………	32.2%	31.4%	32.9%
・相手ばかりが話している……………	31.0%	28.6%	33.1%
・敬語の使い方など言葉遣いに問題がある……………	29.8%	33.5%	26.7%
・言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる……………	28.5%	25.9%	30.7%
・話の内容に問題がある……………	21.3%	23.0%	20.0%
・視線を合わせようとしめない……………	17.9%	17.1%	18.6%
・話の組立てや流れに問題がある……………	13.7%	18.0%	10.0%
・話す速さに問題がある……………	12.4%	14.5%	10.7%
・声の質や大きさに問題がある……………	10.5%	10.0%	10.9%
・相手が余り話さない……………	9.0%	8.3%	9.6%
・不快に感じることはほとんどない……………	8.5%	6.9%	9.9%

【年齢別】

年齢別に見て、年代間の差が比較的大きい5項目について見ると、右のグラフのとおり。

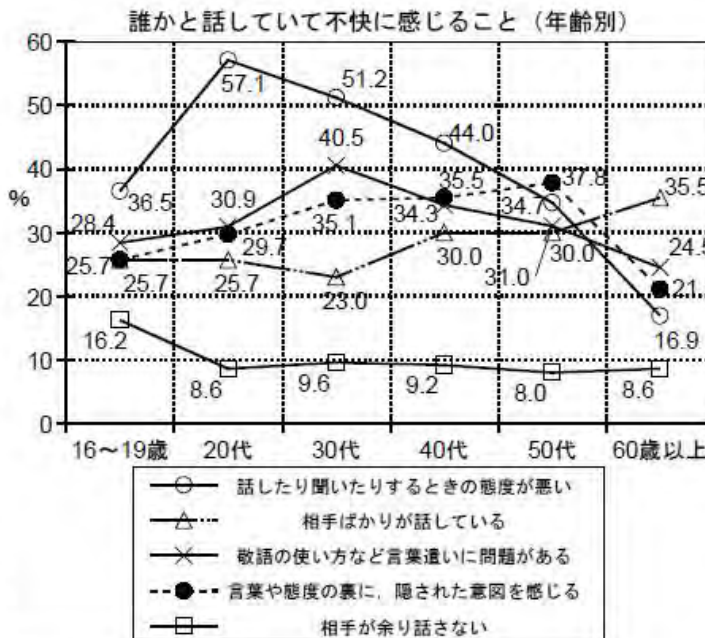
「話したり聞いたりするときの態度が悪い」は、20代から40代で選択した人の割合が4割台半ばから5割台後半と、他の年代と比べて高いが、一方、60歳以上では1割台半ばとなっている。

「相手ばかりが話している」は60歳以上で3割台半ばと、他の年代に比べて高い。

「敬語の使い方など言葉遣いに問題がある」は30代で4割、40代で3割台半ばと、他の年代に比べて高い。

「言葉や態度の裏に、隠された意図を感じる」は、30代から50代で3割台半ばから3割台後半と、他の年代に比べて高いが、一方、60歳以上では2割強となっている。

「相手が余り話さない」は16～19歳で1割台半ばと、他の年代に比べて高い。



## 平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

### 調査目的・方法等

調査目的：文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査対象：全国16歳以上の男女

調査時期：平成24年2～3月

調査方法：一般社団法人中央調査社に委託し個別面接調査を実施

回収結果：調査対象総数 3,474 人  
有効回収数(率) 2,069 人(59.6%)

## 目 次

1. 言葉の使い方について	
自分自身の言葉の使い方について、どの程度気を使っているか <問1> .....	3
ほかの人の言葉遣いなどが気になるか、気にならないか <問2> .....	4
日頃、言葉遣いで心掛けているのはどんなことか <問3> .....	5
2. 日本人の日本語能力について	
日本人の日本語能力が低下しているという意見について、どう思うか <問4> .....	6
3. 多様化する情報交換手段の日常生活への影響について	
情報交換手段の多様化が、日常生活にどのような影響を与えているか <問6> .....	7
4. 人とのコミュニケーションについて	
初めて会った人と話をする事について、どのように感じるか <問7> .....	8
【得意である(計)に対して】 初めて会った人と話をするときに重視すること<問7付1> .....	9
【苦手である(計)に対して】 初めて会った人と話をするときに難しいと感じること<問7付2> .....	9
日常生活で、どの程度敬語を使っているか <問9> .....	10
敬語を使うことに関して、どのような考えを持っているか <問10> .....	10
敬語を使うのは、どんなときか <問11> .....	11
状況に応じて、周囲の人にどのような行動をとるか <問13> .....	12
気配りなどを表す言葉のうち、使うことがあると思う言い方はどれか <問14> .....	13
5. 句読点等の使い方について	
句読点等の使い方に関して、何か困っていることがあるか<問15> .....	14
【「困っていることがある」へ】句読点の使い方に関して、どのようなことで困っているか<問15付> .....	14
句読点など、文書を書くときに用いる符号の使い方についてどのように思うか<問16> .....	14
6. 異字同訓の漢字の使い分けについて	
五つの異字同訓の漢字の使い分けについて、難しいと感じるか<問17> .....	15
異字同訓の漢字の使い分けについてどのように思うか<問18> .....	15
7. ふだんの言い方について	
「すごい速い」「がっつり食べよう」など、12の言い方をすることがあるか<問19> .....	16
8. 印刷文字と手書き文字の字形の違いについて	
印刷文字と手書き文字との字の形の違いが気になるか<問20> .....	17
9. 言葉の意味	
どちらの意味だと思うか <問22> .....	18
10. 慣用句等の認識と使用	
どちらの言い方を使うか <問23> .....	21

## 2. 日本人の日本語能力について

日本人の日本語能力が低下しているという意見について、どう思うか <問4> (P.10)  
 —「低下していると思う(計)」と考える人が、「読む力」「書く力」「話す力」「聞く力」の全てで多数 —

### 〔全体・過去の調査との比較〕

最近、日本人の日本語能力が低下しているという意見があるが、そのことについてそう思うか、それともそう思わないかを「読む力」「書く力」「話す力」「聞く力」のそれぞれについて尋ねた。

「低下していると思う(計)」は、「書く力」で87.0%、「読む力」で78.4%と特に高く、また、「話す力」「聞く力」もそれぞれ6割以上となっている。

過去の調査結果(平成13年度調査)と比較すると、「書く力」を除く全ての力で「低下していると思う(計)」の割合が増加しており、中でも「読む力」は10ポイント増となっている。

#### (1) 読む力

(数字は%)

低下していると思う(計)	変わっていないと思う	むしろ向上していると思う	分からない
78.4【68.8】	16.6 【25.4】	1.3 【1.4】	3.7 【4.4】
非常に低下していると思う 20.2【17.6】			
やや低下していると思う 58.2【51.2】			

#### (2) 書く力

低下していると思う(計)	変わっていないと思う	むしろ向上していると思う	分からない
87.0【88.1】	8.9 【7.7】	1.0 【0.6】	3.1 【3.6】
非常に低下していると思う 36.8【37.5】			
やや低下していると思う 50.2【50.6】			

#### (3) 話す力

低下していると思う(計)	変わっていないと思う	むしろ向上していると思う	分からない
69.9【59.2】	23.9 【33.1】	3.2 【3.9】	2.9 【3.9】
非常に低下していると思う 19.5【16.7】			
やや低下していると思う 50.5【42.5】			

#### (4) 聞く力

低下していると思う(計)	変わっていないと思う	むしろ向上していると思う	分からない
62.1【57.0】	33.1 【35.9】	1.8 【2.9】	3.1 【4.2】
非常に低下していると思う 13.2【14.2】			
やや低下していると思う 48.8【42.8】			

【 】内は平成13年度調査

### 3. 多様化する情報交換手段の日常生活への影響について

情報交換手段の多様化が、日常生活にどのような影響を与えているか <問6> (P. 22)

— 「漢字を正確に書く力が衰えた」を選択した人が平成13年度調査から25ポイント増加 —

#### 〔全体・過去の調査との比較〕

携帯電話や電子メールなどの普及による情報交換手段の多様化が、日常生活に影響を与えているという意見があるが、そのような影響の例として思い当たることがあるかを尋ねた（選択肢の中から幾つでも選択）。

「漢字を正確に書く力が衰えた」（66.5%）、「手紙やはがきは余り利用しないようになった」（57.2%）が過半数の人に選択されている。続いて、「手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった」（42.0%）「口頭で言えば済むことでも、メールを使うようになった」（29.5%）

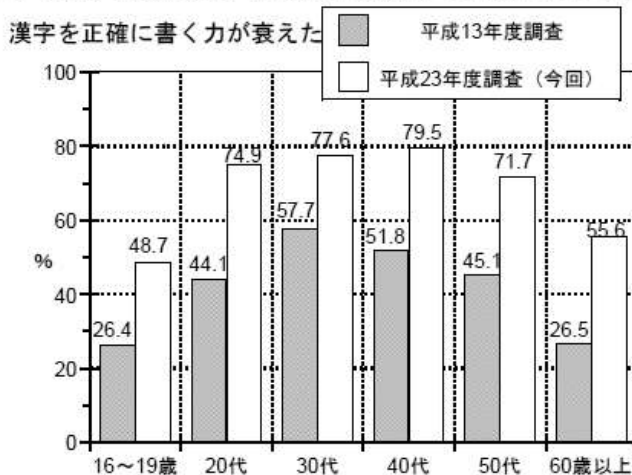
過去の調査結果（平成13年度調査）と比較すると、多くの項目で選択する人の割合が増加している。特に「漢字を正確に書く力が衰えた」を選択した人は25ポイント、「手紙やはがきは余り利用しないようになった」を選択した人は16ポイント、それぞれ増加している。また、「電車の中など公共の場所でも、自分だけの世界を作れるようになった」を選択した人の割合は、前回から約2.5倍に増加した。

一方、「特に思い当たることはない」を選択した人の割合は7.7%で、前回の21.4%から14ポイント減少している。

		【平13年度】
・漢字を正確に書く力が衰えた	66.5%	41.3%
・手紙やはがきは余り利用しないようになった	57.2%	41.6%
・手で字を書くことが面倒くさく感じるようになった	42.0%	31.9%
・口頭で言えば済むことでも、メールを使うようになった	29.5%	17.2%
・携帯メールの着信が気になって度々確認するようになった	22.2%	16.5%
・直接人と会って話すことが面倒くさく感じるようになった	18.6%	11.3%
・大した用もないのに携帯電話を掛けるようになった	18.1%	17.3%
・電車の中など公共の場所でも、自分だけの世界を作れるようになった	16.6%	6.7%
・友人と常に携帯電話で連絡を取り合わないではいられないようになった	7.9%	7.5%
・メールだと悪筆であることも関係ないので、まめに発信するようになった	7.9%	6.7%
・漢字を多く使うようになった	4.3%	4.3%
・特に思い当たることはない	7.7%	21.4%

#### 〔「漢字を正確に書く力が衰えた」年齢別・過去の調査との比較〕

今回の調査で、選択した人の割合が最も高かった「漢字を正確に書く力が衰えた」について、年齢別に見ると、また、過去の調査（平成13年度調査）の結果と比較すると、グラフのとおり。



今回の調査では、20代～50代で「漢字を正確に書く力が衰えた」と感じている人は7割台となっており、平成13年度には2割台だった16～19歳と60歳以上でも、それぞれ、5割弱と5割台半ばとなっている。

また、全ての年代で平成13年度調査の結果よりも今回の調査結果の割合の方が高くなっており、最も差の小さい30代で20ポイント、最も差の大きい20代では、31ポイントの差となっている。





